# 仮面ライダーxスーパー戦隊xプリキュア

穴山銀次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーｘスーパー戦隊ｘプリキュア

【Ｎコード】
Ｎ１５４７Ｔ

【作者名】
穴山銀次郎

【あらすじ】
仮面ライダー、スーパー戦隊、プリキュア。
３大戦士が力を合わせる時、新たな未来を掴み取る！

# キャラクター設定

星守健一（ほしもりけんいち）
年齢　１７歳
東宝学園高等部２年Ｂ組
髪型は紅渡と同じ髪型で黒
実家でパン屋を営んでいる。

仮面ライダーセイバー
遠い星、惑星テテュスから来た仮面ライダー。
エイリアンが地球の悪と手を組み、全世界を征服を企んでいる事を知り、地球へ飛び立った。
しかし、地球上では本来の力を出すことが出来ない為、星守健一と出会い、同化する。
宇宙空間を移動できるだけでなく、異世界へ行くこともできる。
設定は仮面ライダーセイバー　スペースフォームにて。

仮面ライダーセイバー　スペースフォーム
星守健一が変身した姿。
外見は仮面ライダークウガタイタンフォームのボディがウルトラマンティガのプロテクターのラインを加え、そのラインを赤、青、紫をカラーリング。
頭部はアギトのクロスホーンが開いた状態で複眼部は黄色。
腕の部分はウルトラマンネクサスのアームド・ネクサスをモチーフにした『セイヴ・ザ・スター』という手甲を装着している。
足の部分はクウガアルティメットフォームをモチーフし、白をカラーリング。
ベルトは『セイヴ・ザ・コア』というアギトのオルタリングと似ているが、左右のアクションスイッチの周りにハンドルレバーがあり、

右のハンドルレバーを回すとベルトの中心が赤に、左のハンドルレバーを回すと青に、両方回すと紫に変色する。
必殺技は太陽の光でエネルギーを増幅させて蹴りだす『サンシャイン・ノア』。
名乗り口上は「我が名は救世主、仮面ライダーセイバー！」

仮面ライダーセイバー　マグマフォーム
『セイヴ・ザ・コア』の右のハンドルレバーを回し、ベルトの中心が赤くなった後、アクションスイッチを押すとボディ、脚部、複眼部が赤になる。
スピードが劣化しているが、パワーがスペースフォームの倍になる。
必殺技は片腕を引いてエネルギーを溜めたあと突き出す、『プロミネンス・クラッシュ』。

仮面ライダーセイバー　アクアフォーム
『セイヴ・ザ・コア』の左のハンドルレバーを回し、ベルトの中心が青くなった後、アクションスイッチを押すとボディ、脚部、複眼部が青になる。
パワーが劣化するが、スピードがスペースフォームの倍になる。
必殺技は『セイヴ・ザ・スター』にエネルギーを溜めて敵を切り裂く、『オーシャンズ・サーベル』。

仮面ライダーセイバー　サイキックフォーム
『セイヴ・ザ・コア』の両方のハンドルレバーを回し、ベルトの中心が紫になった後、アクションスイッチを押すとボディ、脚部、複眼部が紫になる。
パワーとスピードはスペースフォームと変わらないが、飛翔能力や念動力を付加している。
『セイバーサイコキネシス』で物体を動かせる。
必殺技は『セイヴ・ザ・スター』のエネルギーを放って敵を動きを

止めた後、上空から急降下して蹴りだす、『グラビティ・デスブレイク』。

焔翔一（ほむらしょういち）
年齢　１４歳
東宝学園中等部２年Ｂ組
髪型は漢堂ジャンと同じ髪型。
サッカーやバスケットが得意でハンバーグが好き。

波川瑞穂（なみかわみずほ）
年齢　１４歳
東宝学園中等部２年Ｂ組
髪型はアイム・ド・ファミーユと同じ。
水泳やバレーが得意でカレーが好き。

神代天馬（かみしろてんま）
年齢　１５歳
東宝学園中等部３年Ａ組
髪型はヒカルと同じ髪型。
成績は優秀で、探検家の息子。

新生戦隊　シンセイジャー
ニューフォースの力は妖海人・ダイオキシーに封印されたが、３人の少年少女により封印が解かれ、ダイヤル付きのブレスレット『シンセイチェンジャー』となる。
変身時、「シンセイチェンジ！」と叫ぶ。

シンセイレッド
焔翔一が変身した姿。
マスクに鷹の姿を、ボディに炎のラインを持つ戦士。

空を飛ぶことができ、炎を操れる。
『フレイムソード』が武器。
必殺技は炎を纏って急降下して切り裂く、『バーニングエアスラッシュ』。
名乗り口上は「翔ける炎の戦士、シンセイレッド！」

シンセイブルー
波川瑞穂が変身した姿。
シャチのマスクをし、水のラインを持つ戦士。
水中戦が出来るようになり、水を操れる。
『スプラッシュマグナム』が武器。
必殺技は水の力を溜め込んで撃つ、『ハイドロプレッシャー』。
名乗り口上は「流れる水の戦士、シンセイブルー！」

シンセイイエロー
神代天馬が変身した姿。
ユニコーンの顔をモチーフにしたマスクと、雷のラインを持つ戦士。
軽快な動きをすることができ、雷を操れる。
『ボルテックランス』が武器。
必殺技は『ボルテックランス』で電気の力を溜め込んで切り裂く、『ジャッジメントサンダー』。
名乗り口上は「轟く雷（いかずち）の戦士、シンセイイエロー！」

新真理奈（あらたまりな）
年齢　１４歳
東宝学園中等部２年Ａ組
髪型は黒いショートヘアー。
中学時代の５月までは運動部を所属していたが、飽きたという理由で美術部に入部。

宝塚忍美（たからづかしのび）
年齢　１４歳
東宝学園中等部２年Ａ組
髪型はロングヘアーで茶髪。
勉強も運動も得意で、母親と家の手伝いをしている。

宝塚安美（たからづかやすみ）
年齢　１３歳
東宝学園中等部１年Ｂ組
髪型はツインテールで忍美と同じく茶髪。
口癖は「知りたい？　そりゃ、知りたいわよね！」で、伝説や超自然現象に興味を持つ。

月野夏海（つきのなつみ）
年齢　１３歳
東宝学園中等部１年Ｂ組
髪型は黄色いポニーテール。
月や海が好きで、宇宙や海を勉強している。

ジュエルマスタープリキュア
突然、郵便受けの中にそれぞれの誕生石と携帯電話が入っていた。
その頃、街中に地獄衆が現れ、人間を恐怖と絶望を与えようとしていた。
駆けつける少女達、その時、誕生石と携帯電話が光って『ジュエルコミューン』となった。
変身時、「ジュエルスパークハリケーン！」と叫ぶ。
「ジュエルマスタープリキュア」と掛け声の後、「私達がここにいる限り！」とキュアガーネットが言い、「あなた達の年貢は納め時よ！」とキュアオパールが言った後、「そしてこれまでの自然の怒り、全てを倍にして返してあげるわ！」とキュアトパーズが言う。

そして、必殺技はトパーズ、ガーネット、オパールが互いに手を置いた後、その手を上げながらエネルギーを溜めた後、トパーズが体勢を低くし、手を胸部分に引き、ガーネットとオパールは立ったまま手を胸部分に引き、片方の手を突き出して放つ『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』
そのときの掛け声は「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！」

キュアトパーズ
新真理奈が変身した姿。
トパーズがついている携帯電話型の変身アイテム『ジュエルコミューン』で変身する。
コスチュームはキュアブルームを黄色にカラーリングし、ハートの部分をひし形のダイヤに変更し、髪の色が黒から黄色へと変更した。
接近戦が得意とし、バリアを作ることも可能。
必殺技は上空からエネルギーを溜めてキックする『プリキュア・トパーズビッグバン』。
名乗り口上は「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」

キュアガーネット
宝塚忍美が変身した姿。
彼女の『ジュエルコミューン』はガーネットがついている。
コスチュームはキュアパッションのクローバーを星型のダイヤに変更し、翼の部分を三日月の形をしたブーメランとなり、髪の色が茶色から赤色に変更。
飛翔能力や超能力を持っている。
必殺技はブーメランにエネルギーを溜めて投げる『プリキュア・ガーネットクロウ』。
名乗り口上は「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」

キュアオパール
宝塚安美が変身した姿。
彼女の『ジュエルコミューン』はオパールがついている。
コスチュームはキュアレモネードに似ているが、カールした細い毛の束ではなく、キュアサンシャインに近い髪の長さをした髪型で、蝶の部分をハート型のダイヤに変更して、茶色からピンクに変更し、コスチュームの基本色も黄色とピンクに変更している。
キュアガーネットと同じく飛翔能力や超能力を持ち合わせている。
必殺技はダイヤからエネルギー弾を放つ『プリキュア・オパールメテオ』。
名乗り口上は「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」

キュアパール
月野夏海が変身した姿。
彼女の『ジュエルコミューン』はパールがついている。
コスチュームはキュアホワイトとキュアイーグレットを混ぜたようなドレスでハートの部分を真珠に変更し、髪型は黄色から黒に変更させた。
分身能力や瞬間移動能力を持ち合わせている。
必殺技は『ジュエルコミューン』からピーチロッドに似た武器『パールスティッキ』へとなり、パールの部分から虹色の噴射水を放つ『プリキュア・パールスプラッシュ』。
名乗り口上は「母なる月と海の恵み、キュアパール！」

# 宇宙より現れし戦士

男子生徒と別れたのは星守健一。
彼はパン屋を営んでいるため部活には入部していないのである。

「さて、帰って宿題を済ませて、父さんと手伝おう・・・ん?」

星守が見たのは森の木が枯れていく瞬間である。

「なんだろう?」

星守は気になってその森に入って行った。
しかし、その森には鳥も虫も見当たらなかった。

「一体どうなってるんだ?」

星守は疑心暗鬼。
すると突然、枯れ葉が星守を襲い、吹き飛ばされてしまう。

「!　ウワアアアアアアッ!!!!」

枯れ木から現れたのはダークフォールの滅びの戦士・カレハーンである。
カレハーンはキュアブルームとキュアイーグレットによって倒されたのだが・・・

「じゃあな!」
「またね。」

「フッフッフッフッフッ・・・流石はダークフォールの幹部。」
木の上から現れたのはコブラをモチーフにし、鎧を着た怪人である。
「お前にはまだ名乗ってなかったな。　俺はカレハーン、カレッチと呼んでくれ。」
「私こそ自己紹介がまだでしたね？　私は遠い宇宙から来たポイズン星人。　さて、早速ですが、この男を始末してやりましょう。ハッ！！」
ポイズン星人はカレハーンに名前を教えた後、すぐに星守に向けて毒液を放つ。
「！　ウワッ！！」
星守は「もうダメだ！」と思い目を瞑った。
その時、謎の光の刃が毒液を切り裂いた。
そして、謎の光がポイズン星人に激突した。
「ウワァッ！！」
「！？」
星守が恐る恐る見上げると、光の中からアギトにそっくりな者が現れる。
「君は？」
「私の名はセイバー。　仮面ライダーセイバー。」
「仮面・・・ライダー！？」
星守はセイバーの言葉に驚く。

「フン、なんだそれは！」

カレハーンは枯れ葉の衝撃波でセイバーを襲う。
しかし、セイバーの体は無傷である。

「なに！？」

「あなたは惑星テテュスの！？」

セイバーの状態に驚くカレハーンと、たった今起き上がったポイズン星人。

「ハアアアアア・・・」

セイバーの体が光に包まれ、カレハーンとポイズン星人に目を向ける。

「ハアアアアアアッ！！」

そして、ジャンプし、カレハーンにキックを繰り出した。
カレハーンは腕をクロスして守りを固めるが、簡単に吹き飛ばされてしまう。

「グアアアアアアアアッ！！！！」

セイバーの『サンシャイン・ノア』を受けたカレハーンは爆発してしまう。

「ま、まずい！」

ポイズン星人は液体となり消えていった。

「ありがとう、仮面ライダー。」

星守はセイバーに礼を言うが、セイバーはすぐに態勢を崩れてしまう。

「！　大丈夫か！？」

星守はセイバーの体を支える。

「すまない、私は地球では力を保てないのだ。」

「そんな！　じゃ、どうすれば？」

「私と人間と同化するしかない。　しかし、それは共に戦うことになる。」

セイバーの力を維持するには地球の人間と同化することである。
しかしそれと同時にカレハーンやポイズン星人のような怪人を倒すということになる。
星守は沈黙したが・・・

「僕は構わない。　今君に助けられたんだ。　だから今度は僕が君を助ける。」

「私を？」

「うん。　だから一緒に戦おう！」

セイバーはしばらく黙っていた。
そして・・・

「君の名前は？」

「星守健一。」
「健一、君がそういうなら力を貸そう。」
セイバーは了解を得た。
「ありがとう。　仮面ライダー。」
「私のことはセイバーと呼んでくれ。　健一、覚悟はいいな？」
「いつでも！」
セイバーは星守から少し離れ、体から光の粒子を放ち、星守を包んだ。
星守はゆっくりと目を閉じた。
数分後、星守が目を開けるとそこにはすでにセイバーがいなくなっていた。
星守はポケットに手を突っ込むとそこから石のようなものを取り出した。
『怪人が現れた時、その石を掲げろ。　そうすれば君も戦う力を持つことが出来る。』
「うん、分かった。　ありがとう。」
星守はそう告げ、すぐに家まで走った。
次の日の朝、東宝学園中等部で噂話をしていた。
話しているのは、宝塚安美と月野夏海である。
「ねぇ、夏みん。　知ってる？　昨日この町外れの森が枯れたっていう話。」

「えぇ。　でも、何故か知らないけどすぐに元通りになってたみたいだね。」
「うん。　どうしてかな？」

安美と夏海が話している途中・・・

「こら、そこの2人。早く教室に戻りなさい！　授業が始まるわよ！」

2人に言いつけたのは安美の姉・忍美である。

「はーい、すぐに戻ります！」

安美は怒ったような顔で返答する。
夏海も安美を追うように教室に戻る。
3人の姿が見えなくなった後、学校の窓に土偶のような侍がこっそりと顔を出した。

## 地獄衆、襲来！

授業が終わり、皆下校し始めた。
忍美、安美、夏海と一緒に歩いているのは新真理奈である。

「真理奈。　昨日のニュース見た？」
「うん、森が枯れ始めたって奴でしょ？」
「なんだか面白そうじゃん！」
「安美、呑気なこと言ってる場合じゃないと思うよ？」

彼女達は昨日の出来事に話し込む。
そしてしばらく経ち・・・

「じゃ、また明日！」
「またね。」

真理奈は3人と別れを告げた後、郵便受けを覗いた。

「？　携帯電話に石？」

真理奈が取り出したのは携帯電話と透き通った石である。
真理奈は半信半疑しながら家に入って行った。

「くっそ～、皆楽しそうにしやがって！」
「不満のようだな？　ドグーン。」
「イルバ。」

マントを羽織る甲冑を纏った侍・イルバが大砲やマシンガンを合体した銃を装備した土偶のような侍・ドグーンを気遣うように言う。

「だけど、あ～れだけの人間達が恐怖に怯える所を見ると刺激的でいいじゃない、イルちゃん？」

八本腕を持つイカのような姿をした侍・ゲゾールが楽しげに話しかける。

「あぁ、我が地獄衆の手で人間共に恐怖や絶望を陥れ、全てを制する。　完璧（パーフェクト）に！」
「待てやイルバ。　俺様が人間共を地獄へ送ってやるぜ。」

イルバが地上へ行こうとするがドグーンに止められた。
そしてドグーンが地上へ行くと言い出した。

「武運を祈る。」

「えっ!?　忍美の所にも来てたの!?」
「えぇ、でも携帯電話は同じだけど、石だけが違うなんて・・・」
真理奈は郵便受けに入っていた携帯電話と石について話した。
すると、忍美も安美も同じ物を入っていたのである。

「もしかしてこの石、パワーストーンじゃない?」
「「パワーストーン?」」
「うん、パワーストーンは『夢』や『希望』をかなえる力を持つ幸福の石。　きっと誰かが幸せを贈りたいと言う想いで郵便受けに入れたかもしれない。」

安美はパワーストーンについて話した。

「だからってなんで携帯電話も一緒に入れたのよ?」

忍美は安美にツッ込む。

「あ、真理奈さん、忍美さん、安美。」

夏海がやってきた。
しかも彼女にもパワーストーンと携帯電話を持っている。

「夏みんも入ってたの？」
「えぇ。」
「どういうこと？」

その時、悲鳴が聞こえた。

「なに！？」

４人は悲鳴を聞こえた所へ向かった。
そこには・・・

「ハッハッハッハッハッ！　聞いて驚け、見て驚け！　俺様は地獄衆・埴輪将軍ドグーン！　俺様の手でこの世を絶望に陥れてやる！」

ドグーンと覆面をした一つ目の侍軍団・ゾーマが街を破壊したり、人を苦しめたりしていた惨劇である。

「なに、あいつら！？」
「なんかやばそうだよ！？」

忍美と安美はドグーン達を見て怯んでしまう。

「・・・あっ！」

真理奈が見たのはドグーンが逃げ遅れた少女達の所に歩いていく所である。

「ハッハッハッハッハッハッ、いい泣き顔だ！　もっと泣け！　脅えろ！　ハッハッハッハッハッハッ！」

ドグーンは刀を少女達に向けて笑い出す。

「女の子達が！」

真理奈達は少女達を助けようとしているが、その自身を持たなかった。

「将軍！」
「あ？」
「見知らぬ者が同志達を薙ぎ倒されています！」
「なに！？」

ドグーン達が振り向くとそこには仮面ライダーセイバーがゾーマを倒している。

「貴様、何しに来た！？」
「当たり前だろ！？　その子達を助けに来たんだ！」

真理奈達は勇敢に戦うセイバーを見て、凄いと思い始めた。

「ふざけやがって！　ゾーマ、やっちまえ！」
「ウオォォォォォッ！！！！」

ゾーマの軍団がセイバーを襲う。

セイバーでも３０人以上のゾーマ相手では切りがないようだ。

「ハッハッハッハッハッ！　これで邪魔が出来ん！　さぁて、俺様はさっきの続きをやるか！？」

ドグーンは再び少女達に刀を向ける。

「やめなさい！！」

ドグーンの横に真理奈達が駆けつける。

「なんだ？　自分から怖がらせに来るとはツイてない奴等だな？」

「！　君たち！？」

セイバーは真理奈達がドグーンに向かって来たこと驚く。

「また女の子を泣かせる気！？」

「だから何だって言うんだ？　俺様は人間共が絶望や恐怖を味わう所を見たいんだよ！」

ドグーンは笑いながら言い放つ。

「私達の街を破壊して・・・」

「関係のない人達を怖がらせるなんて許せるわけないでしょ！？」

「許さないならどうする！　あんな奴のような力を持ってないくせに調子にのるな！」

ドグーンはセイバーを見て真理奈達をバカにする。

「力がなくたって！」

「私達はその子達を助ける！！」

すると、彼女達が持っている携帯電話とパワーストーンが光り始めた。

「「「「えっ！？」」」」

「な、なんだぁ！？」

真理奈達はその光に驚いた。

ドグーンも驚きを隠せない。

しばらくすると光がだんだん薄くなっていく。

すると、彼女達が持っている携帯電話が『ジュエルコミューン』になっていた。

「なにこれ！？」

「でもどうして？」

「使い方が分かる！」

「頭の中に流れ込んで来ます！」

真理奈達は『ジュエルコミューン』を開いて画面に宝石のカードをセットし、通話ボタンを押した。

すると彼女達の周りに虹色の風が覆う。

「ジュエルスパークハリケーン！」

虹色の風が止むと４人は別の姿になった。

「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」

「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」

「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」

「母なる月と海の恵み、キュアパール！」
「ジュエルマスタープリキュア！」
「私達がここにいる限り！」
「あなた達の年貢は納め時よ！」
「そしてこれまでの自然の怒り、全てを倍にして返してあげるわ！」

彼女達が名乗り向上を言った後、すぐに我に返る。

「・・・って、なに言ってんの！？」
「さ、さぁ・・・？」
「それにこれなに？」
「どうなってるの？」

## ジュエルマスタープリキュア

4人は自分自身の姿が変わってしまったので、混乱している。

「何がなんだか知らんが、地獄へ送ってやる！」

ドグーンは鉄のパイプを見つけ、掌から小さなビンを出した。

「アノヨイーケ！　三途の川を力に変えて、絶望を陥れろ！」

ドグーンは鉄のパイプに三途の川の水をかけた。
すると、鉄のパイプが巨大な怪物へとなっていった。

「アノヨイ～ケ～！！」

これがアノヨイーケである。

「うわあぁぁぁぁぁっ！？」

「デカッ！」

「こんなのあり！？」

驚きを隠せないトパーズ達。

「アノヨイ～ケ～！！」

鉄パイプのアノヨイーケが腕の鉄パイプでプリキュアに振り下ろした。

「うわっ！？」

トパーズは思わず両手を前に出すと・・・

「アノヨイーケ！？」

アノヨイーケの攻撃はバリヤで弾き返された。

「ア、アレ？」

「凄い。」

さっきのバリアはトパーズが出したのだが、出した本人も驚きを隠せない。

「何をしている！？　とっとと苦しめてやれ！」

「アノヨイ～ケ～！」

アノヨイーケは再びプリキュアを襲う。

「『プリキュア・オパールメテオ』！」

アノヨイーケはキュアオパールの『プリキュア・オパールメテオ』に怯む。

そこからキュアガーネットは隙を見せて・・・

「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」

『プリキュア・ガーネットクロウ』でアノヨイーケにダメージを与える。

「パール、いくよ！」

「はい！」

キュアトパーズはジャンプし、キュアパールは『ジュエルコミューン』を『パールステッキ』に変えて・・・

「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」
「『プリキュア・パールスプラッシュ』！」

キュアトパーズはアノヨイーケに『プリキュア・トパーズビッグバン』を、キュアパールはドグーンに『プリキュア・パールスプラッシュ』を繰り出した。
トパーズの技を受けたアノヨイーケは仰向けに倒れてしまう。
パールの技を受けたドグーンは後ろに押されてしまう。

「アノヨイ～ケ～！？」
「グゥオォッ！？」

ドグーンが少女達から離れた所を見たトパーズはすぐに少女達の所に向かった。

「みんな、もう大丈夫だよ。」
「うわぁぁぁん！！」
「怖かったよ～！」

泣きながら言い出す少女達。

「おのれ～！」

ドグーンはゆっくりとトパーズに向かった。

「パール、この子達をお願い！」
「はい！」

パールは少女達を安全な所に連れて行った。

「覚悟しなさい！」
「うるさい！」

トパーズとドグーンはすぐに構える。
その時、ドグーンの後ろから2体の怪人が現れた。
その怪人はガイアークの蛮機獣・オイルバンキ、妖怪・サルガミである。
オイルバンキはゴーオンジャーに、サルガミはカクレンジャーに倒されたはずだが・・・

「何だテメェら！！」

2体の怪人がまるでドグーンを味方につくようにプリキュアに攻撃し始めた。

「「「キャアァァッ！！」」」

その状況を見たドグーンは訳分からなくなった。

「見つけたべ。　地獄衆。」

ドグーンは後ろから声が聞こえたので後ろを振り向くと・・・

「オラはドクロ星人だべ。」

犬の白骨体を人型にした宇宙人・ドクロ星人がいる。

「何の用だ、てめぇは!?」
「オラ達はお前さん達と手を組んでこの星を征服するために来たんだべ。」
「なんだと!?　じゃ、さっきの奴らはお前が連れてきたのか!?」

オイルバンキとサルガミのことを言っている。
ただ、2体の怪人は何故存在しているのか分からない。

「その通りだべ。　とにかく、オラ達と手を組むか、よく考えるだべ。」
「・・・イルバとゲゾールにこのことを伝えるが、どうなっても知らんぞ!」

ドグーンはドクロ星人にそう告げ、地獄に戻った。
ドクロ星人もすぐに消えて行った。

「みんな、大丈夫?」
「は、はい。」

やっとゾーマを薙ぎ払って、プリキュアの所に来るセイバー。

「あの怪人たちは僕に任せて、君達はあそこにいる怪物を!」
「「「はい!」」」

アノヨイーケの所に向かうプリキュア。
そして、すでに女の子達を安全な場所に連れて行ったキュアパールも駆けつけた。

「私も手伝います！」
「分かった！」

セイバーとパールは2体の怪人を相手にする。

## フォームチェンジ

アノヨイーケを対峙するキュアトパーズ、ガーネット、オパール。
そしてオイルバンキとサルガミを対峙する仮面ライダーセイバーとキュアパール。

「キーッキッキッキッキッ！！」
「くっ！　ヌゥッ！」

サルガミの軽快な動きに苦戦されるセイバー。

「摩擦力０！」
「キャッ！　滑る！」

オイルバンキのオイルに滑るパール。

「「「ヤアァァァァァァッ！！！！！」」」
「アノヨイ～ケ～！？」

アノヨイーケを殴り飛ばすプリキュア達。

「くっ！」
『健一、左のハンドルレバーを回すんだ。』
「分かった！」

セイバーは左のハンドルレバーを回した。
するとコアの色が青くなる。
セイバーはすぐにアクションスイッチを押すと、セイバーの体が青くなる。

アクアフォームにフォームチェンジしたのだ。

「キーッキッキッキッキッ！」

「ハッ！！」

セイバーはサルガミにキックを喰らわした。

「ウワアァッ！」

「速い。」

『健一、今だ！』

「うん！」

セイバーはサルガミが立ち上がる前に『セイヴ・ザ・スター』にエネルギーを溜めた。

そして、サルガミの所に走り、『オーシャンズ・サーベル』で切り裂いた。

「グワアァァァァァッ！！！！！」

『オーシャンズ・サーベル』を受けたサルガミは倒れこみ、爆発した。

「キャァッ！　立てない！」

「いいツルルっぷりだね！」

キュアパールは未だ、オイルバンキのオイルに悪戦苦闘の状態である。

『健一、両方のハンドルレバーを回すんだ。』

「うん！」

セイバーは両方のハンドルレバーを回し、アクションスイッチを押した。
今度は紫色に変わった。
サイキックフォームに変身したのである。

「フッ！」

セイバーは超能力でパールをオイルのない場所に移した。

「大丈夫かい？　ええと・・・」
「キュアパールです。　ありがとうございました。」

パールはセイバーに礼を言った後、すぐに立ち上がった。

「もう一度！」

オイルバンキは再びオイルをかけ始めた。

「「！」」

セイバーとパールは瞬間移動で回避した。

「あいつの動きを封じる！」

セイバーは右のハンドルレバーを回し、アクションスイッチを押した。
今度は赤に変色した。
マグマフォームに変わったのだ。

「フンッ！！」

マグマフォームになったセイバーはオイルバンキを捕まえた。

「わっ！　離すっツル～！！」

「今だ！」

「はい！」

パールはパールステッキを構えた。

「プリキュア・パールスプラッシュ！」

パールは『プリキュア・パールスプラッシュ』を放った。

「今離すよ！」

セイバーは一蹴りでオイルバンキを蹴り飛ばした。

「ギャアアアアアアッ！！！！」

『プリキュア・パールスプラッシュ』を受けたオイルバンキは爆発された。

「アノヨイ～ケ～！！」

アノヨイーケはプリキュアを襲う。

「「「プリキュア・トリプルパンチ！！」」」

「アノヨイ～ケ～！？」

トリプルパンチを受けたアノヨイーケは倒れこむ。

「ガーネット、オパール！」

「「うん！」」

3人は互いの手を置いた。

「「「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！」」」

そう言って手を上げた。

「「「『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！！」」」

3人はアノヨイーケに『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を放った。

それを受けたアノヨイーケは元の鉄パイプに戻ったのである。

「勝ったの？」

アノヨイーケを倒した3人は確認するような目で見渡す。

「うん、さっきの土偶もいない。」

「何？　プリキュア？」
「あぁ、あいつらがそう言ってたぜ？」

ドグーンはあの時の状況をイルバとゲゾールに話した。

「だけどな～んだか変ね。　プリキュアは確かほ～とんどだけど、1ヶ月前に無双将軍・オーガに妖精の力を奪われてへ～ん身出来なくなったんじゃなかったかしら？」
「なんだと？」
「あ～と少しで全員戦えなくなったのにキュ～アマザーに封印されたわよね？」

ゲゾールはプリキュアについて話した。
伝説の戦士・プリキュアは無双将軍・オーガによって妖精の力を奪われて、戦う力は愚か、変身することも出来なくなってしまったのだ。
まだ奪われていない他のプリキュアの力も奪おうとするオーガだが、キュアマザーによってそれを阻止、封印されたのである。

「だが、ドグーンが見たプリキュアは伝説の戦士ではないと考えられる。」
「な～んですって！？」
「そりゃ、どういう意味だ？」

イルバはジュエルフォースプリキュアの事を伝説の戦士ではないと

言い出す。

「あのプリキュアに妖精がいたか？」
「いなかったが・・・」
「あのアイテムは妖精の力が宿っていたか？」
「その気配も感じなかったぜ・・・あっ！」

イルバの質問に答えるドグーン。
すると、ドグーンはハッと気付いた。

「そう、奴らは特別だ。伝説の戦士にはない何かが持っている。」
「こ～りゃ、厄介ごとになるわね。」
「だが、ドグーンが言った宇宙からの侵略者が我々と手を組もうとしている。　如何ほど抵抗しようと我が地獄衆に太刀打ちすることは出来まい。　我々は全てを制する、完璧（パーフェクト）に！」

イルバはまるで悩みが吹っ切れたかのような言い方をする。

その頃、星守の招待でパンを食べる真理奈達。

「う～ん、うまい！」
「このチョココロネ最高！」

チョココロネをパクパクパクパク食べる真理奈と安美。

「もう、二人とも食いしん坊なんだから。」
「アハハ・・・」

呆れた顔をする忍美と苦笑いする夏海。

「まぁまぁ、喜んでもらえたらこっちが嬉しいよ。　しかし驚いたな、君達があの姿になるなんて。」
「いえ、私達もです。」

驚いたのはお互い様のようである。

「そういえば名前はまだ言ってなかったね。　僕は星守健一。　東宝学園の高等部2年だよ。」
「えっ、東宝学園の？　私も同じ学園で中等部2年の宝塚忍美です。」
「1年の月野夏海です。」
「あっちが妹の安美と同級生の新真理奈。」

互いに自己紹介する星守と忍美達。

「ダァーッ、ムズい！」
「なんで休みの日に図書館で宿題なわけ!?」
「ちょっと2人とも、静かにしてよ！」

今、図書館で勉強しているのは焔翔一、波川瑞穂、神代天馬である。
翔一と瑞穂が少し大きな声で言い出したため、天馬が小さな声で注意した。

「君達は小テストした時、点数低かったでしょ？　このままだと高等部に入学しても君達の生徒達に馬鹿にされるよ。」
「別にいいよ。　どうせやったって合格できねぇよ。」
「その通りよね。」

翔一と瑞穂の危機感の無さに呆れる天馬。

## 地球を汚す者、ダイオキシー

ある日の夜、断崖絶壁の洞窟があった。

「つまり、あんたたちと手を組めば地球を汚すことも出来るんだな？」

「その通りですよ。」

マンタのような怪人・一反木綿のマンタイラが話しかけている相手は以前カレハーンと一緒にいたポイズン星人である。

「おもしれぇじゃねぇか。　テメェらが征服すれば俺達もこの地球を汚したい放題だぜ。」

タコのような怪人・のっぺらぼうのオクトルが楽しげに言い出す。

「ところで彼女はどうなってます？」

「大蛇（オロチ）のカイリンダのことか？」

「奥でまた怖い顔してるぜ。」

大蛇のカイリンダは奥で何か起きたらしい。

「おのれ、シンセイジャー！」

妖婦のような人の姿をした女性がいた。

その女性が大蛇のカイリンダである。

だが、その姿は仮の姿である。

今のカイリンダは怒りや憎しみの目で歯軋りをしている。

「困ったことがあればこれを。」

一方、ポイズン星人はマンタイラに黒い箱を渡した。

「何だ、この箱は?」

「見た目の通りブラックボックス。　過去、この地球で敗れ去った悪を蘇らせることができるのです。」

つまり、カレハーン、サルガミ、オイルバンキが姿を現したのは、ブラックボックスの力で仮面ライダー、スーパー戦隊、プリキュアに倒された怪人たちを復活されたということである。

「ますますおもしれぇ。」

その夜、天馬は家で本を読んでいた。

翔一と瑞穂も今日は天馬の家で泊まることにした。

「天馬、さっきから何読んでるんだ?」

「私達に教えてあげてもいいじゃない。」

翔一と瑞穂は天馬が読んでいた本に気になっている。

「僕の父さんの旅日記だよ。　僕の父さんはいろんな所旅してるんだ。」

「探検家なのね。」

「これを見て。」

天馬は旅日記を見せる。

「ここから近い所だけど、木霊之山で鍵が掛かった祠があるんだ。だから明日、その祠を見に行こうと思ったんだよ。」

「面白そうだな。」

「行きたい！」

翔一と瑞穂は天馬と一緒に木霊之山へ行くことにした。

次の日、翔一達はバスで１２分移動後、木霊之山に到着した。

「～～～！　ここが木霊之山か！」

「全く、２人ともバスの中で寝ないでよ。　自家用の車じゃないんだから。」

「いいじゃん、眠かったんだから。」

２人の寝ぼけ眼に呆れる天馬。

そして４５分後・・・

「２人とも、着いたよ。」

「やっと着いたか・・・」

「疲れた～・・・」

（部活は運動部やってるのに、なんでこういう時だけ疲れるの？）

３人は、昨日写真に載った祠の所に到着した。

「これが例の祠だよ。」

「本当に鍵が掛かってるわね。」

翔一はその祠を触ろうとした。

「・・・って翔一！」

天馬は翔一が祠を触れる寸前に止めた。

その時・・・

「へっ！？」

「な、なに！？」

「なんだこれ！？」

祠が光り、掛かっていた鍵が砕け散り、扉が開いた。
そしてその扉から赤、青、黄色の光が翔一、瑞穂、天馬の手首に包んだ。
その光がダイヤル付きのブレスレットになった。

「な、なんだ！？」
「ブレスレット？」
「玩具じゃないよね？」

3人はそのブレスレットを何度も見渡した。
その時、周りの草木が腐り始めている。

「ニューフォースが感じる・・・」

3人は謎の声を聞いた。

「誰だ！？」

翔一、瑞穂、天馬の目の前にザリガニのような怪人が現れた。

「ククククク・・・この俺、網切のギロンガに会えた事が運の尽きだということを思い知らせてやる。」
「な、なにこいつ！？」

ギロンガはハサミを翔一達に向け、近寄る。

「ギロンガバブル！」

ギロンガが翔一達に目掛けて、泡を吐き出す。
翔一達は瞬時に避けたが、地面を見ると雑草が溶け始めている。
「流石ですね、ダイオキシー。　地球を汚すことも悪くないですね。」
木から現れたのはポイズン星人である。
「おい、ポイズン星人。　あの箱使っていいか?」
「構いませんよ。」
ギロンガはブラックボックスを取り出し、蓋を開けた。
「出でよ、敗れた怪人よ!」
ブラックボックスから黒い煙が出て、その黒い煙が形となっていく。
その煙から現れたのはボルキャンサーである。
ボルキャンサーは仮面ライダーシザースの契約モンスターで龍騎に倒されたミラーモンスターでもある。
「ニューフォースを消し去るのだ!」
ボルキャンサーがゆっくりと翔一達に近づく。
「おい、どうすりゃいいんだよ?」
「分かるわけないでしょ!?」
翔一達はこの絶体絶命の状況で分からない状態である。
「諦めちゃダメだ!」

謎の声が響き渡る。
翔一達もポイズン星人達も周りを見渡す。

『チェンジ、ゴセイジャー。』

翔一達の後ろから別の声が響き渡る。
翔一達が後ろを振り向くと、そこには・・・

「嵐のスカイックパワー・ゴセイレッド！」

天装戦隊ゴセイジャー・ゴセイレッドがいる。

「ゴセイレッド！？」
「もしかしてあのスーパー戦隊の！？」
「ゴセイジャーの１人！」

翔一達はゴセイレッドが現れた事に驚いている。

「ほう、ウォースター、幽魔獣、マトリンティス、ブラジラを倒したと言われているスーパー戦隊ですか。」
「スーパー戦隊？　ふん、忌々しい！」

ギロンガはゴセイレッドに攻撃を仕掛ける。

『サモン・スカイックソード。』

ゴセイレッドはスカイックソードを出し、ギロンガを斬りつける。

「ウオッ！？　ガッ！？」

「レッドブレイク！」

ゴセイレッドはレッドブレイクでギロンガを斬りつけた。

「ウワアァァァァッ！！！」

レッドブレイクを受けたギロンガは数メートル吹き飛んだ。

「3人とも、君達も戦えるよ。」

ゴセイレッドは翔一達に向かって言い出す。

「え！？　何言ってんだよ？」

翔一は言い返す。

「君達にもスーパー戦隊の力を貰ったはずだよ。」

「「「！」」」

翔一達は腕にあるブレスレット・『シンセイチェンジャー』を見る。

「とにかくやってみて。」

翔一達は立ち上がり、ボルキャンサーに視線を移す。

「翔一、瑞穂。」

「分かってるわよ。」

「やらねぇと、こっちがやられるからな。」

3人は身構える。

「「「シンセイチェンジ！！」」」

**新生戦隊　シンセイジャー**

「「「シンセイチェンジ！」」」

3人の掛け声と共に赤、青、黄色の光に包まれ、その光から別の姿になった。

「翔ける炎の戦士、シンセイレッド！」
「流れる水の戦士、シンセイブルー！」
「轟く雷の戦士、シンセイイエロー！」
「「「新生戦隊、シンセイジャー！」」」

3人はシンセイジャーとなった。

「新しいスーパー戦隊！」
「しまった！」

ギロンガは辛うじて起き上がり、悔しそうに言った。

「ボルキャンサー、やってしまいなさい！」

ポイズン星人の命令でボルキャンサーはシンセイジャーを襲う。

「ハッ！」

シンセイイエローはボルキャンサーのハサミ攻撃をかわしながら、懐に殴りだす。

「オラァァァァァッ！！」

「ヤアァァァァァッ！！」

シンセイレッドとシンセイブルーの一蹴りで後ろに倒れこむ。

「スゲェ。」

「これがスーパー戦隊の力なの？」

シンセイジャーの力に驚きを隠せない３人。

「クソッ！　ボルキャンサーだけじゃ物足りねぇ！　こいつらはどうだ！？」

ギロンガはブラックボックスで再び怪人を蘇らせた。

今度はギリンマとザンＫＴである。

ギリンマはナイトメアの刺客として、キュアドリーム達に挑戦をしていた。

シールドのザンＫＴはマトリンティス帝国から最初に現れたロボットである。

「アレは、ザンＫＴ！　ゴセイジャーが初めて戦ったマトロイドだ！」

シンセイイエローはザンＫＴが現れた所を見て驚く。

「ボルキャンサーは俺に任せて、君達は残りの２体を！」

ゴセイレッドはシンセイジャーにザンＫＴとギリンマを相手にするように言い出す。

「わかった！」

シンセイレッドは了解を得る。
シンセイレッドとシンセイブルーはギリンマに、シンセイイエローはザンＫＴに対峙する。

「『フレイムソード』！」
「『スプラッシュマグナム』！」

シンセイレッドは『フレイムソード』で、シンセイブルーは『スプラッシュマグナム』でギリンマを攻撃する。

「チィッ！」

ギリンマも鎌でシンセイレッドを斬りつけるが、シンセイレッドも負けずに『フレイムソード』で反撃する。

「くっ！　こうなったら！」

ギリンマは黒い仮面を取り出し、それを顔に取り付けた。
すると、ギリンマは超獣化していった。

「なに！？」
「でかくなっちゃった！？」

ギリンマの超獣化に唖然とする２人。
ギリンマは再び２人を襲い掛かる。
その時・・・

「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」
「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」

いきなりの不意打ちにより後ろに倒れこむギリンマ。
爆煙の中から４人の姿が出てきた。

「なんだ!?」
「！　あれは！」

ギロンガは今の状況に驚くが、ポイズン星人は爆煙から出てきた４人の方に驚いていた。

「何だ貴様ら!?」

ギロンガは４人に何者なのか問い出す。

「知りたい？　そりゃ、知りたいわよね！　私達は乙女のアイドル・プリキュアよ!」
「オパール、何が乙女のアイドルよ?」

ギロンガやポイズン星人の目の前に現れたのはジュエルマスタープリキュアである。

「先ほどドクロ星人が言っていたジュエルマスタープリキュアですか。」

ポイズン星人はドクロ星人からプリキュアのことを聞いたので確信した。

「誰だか知らないけど、ギリンマは私達に任せて！」
「・・・あぁ、分かった！」
「ありがとう！」

シンセイレッドとシンセイブルーはそう告げ、シンセイイエローに合流する。

「皆、いくわよ！」
「えぇ！」
「「はい！」」

「うわっ！」

一方、シンセイイエローはザンＫＴと対峙するが、押されていく一方である。

「１つ、マトロイドは人類を従えなくてはならない。　２つ、マトロイドは人類を懲らしめなくてはならない。　３つ、１と２に反しようと反しまいとマトロイドは自分だけを守らなくてはならない。」

ザンＫＴはレーザーを放射した。

「ウワアァァァッ！！！」

ザンＫＴの攻撃により、跪くシンセイイエロー。

「止めだ。」

ザンＫＴはゆっくりとシンセイイエローに近づく。

「オラアァッ！」
「ヤアァッ！」

その時、シンセイレッドとシンセイブルーがザンＫＴに蹴り飛ばす。

「グウゥッ！？」
「翔一、瑞穂！」

シンセイレッドはシンセイイエローに手を差し伸べる。

「いくぜ、天馬。」
「力を合わせるわよ。」
「・・・うん！」

シンセイイエローはシンセイレッドの手を掴み、立ち上がる。

「おのれ・・・」

ザンＫＴはすぐに立ち上がる。

「『ボルテックランス』！」

シンセイイエローは『ボルテックランス』を出した。

一方、ゴセイレッドはボルキャンサーと対峙するが、ゴセイレッドの攻撃にはボルキャンサーの体の硬さに全く通用しなかった。

「コンプレッサンダーカード、天装！」

『スパークスカイックパワー。』

ゴセイレッドはコンプレッサンダーでボルキャンサーに攻撃するが、効果が無かった。

「くっ！」

今度はボルキャンサーがゴセイレッドに攻撃を仕掛ける。
その時、突然マゼンタ色の弾丸がボルキャンサーを襲った。

「!?」

ゴセイレッドはその弾丸が現れた方向に振り向くと、そこには仮面ライダーディケイドと仮面ライダーセイバー、そしてキュアムーンライトがいた。

「ボルキャンサーか。　なぜ現実世界にいるのか知らないが、本当に馬鹿みたいに硬い奴だな。」

「ディケイド。」

ゴセイレッドは安心したような声をした。

ボルキャンサーがこの隙を突いて、ゴセイレッドを襲い掛かる。

「シルバーインパクト!」

キュアムーンライトが瞬時にボルキャンサーの懐に入り、ムーンライト・シルバーインパクトを放った。

それを受けたボルキャンサーは数メートル吹き飛ばされた。

「ゆりちゃん、わざわざここに連れてきてごめんね。　君達の方も一大事だって言うのに。」

「気にしないで。　私にもあの子達に用があるから。」

セイバーは了解したのか頷いた。

「後はお前に任せる。　これはお前の物語だ。」

ディケイドはセイバーに別れを告げ、オーロラに消えた。

「セイバー、向こうに俺と同じスーパー戦隊がいる。　会ったらこ

のことを伝えて。」
「はい。」

ゴセイレッドはセイバーに別れを告げた。
セイバーとキュアムーンライトはボルキャンサーに目を向けた。

「いくよ、ゆりちゃん。　いや、キュアムーンライト！」
「えぇ！」

## 集結、3大戦士

1人の少年が木霊之山を見つめる。

「仮面ライダー、スーパー戦隊、プリキュア・・・ついに地球に集まったね。」

その少年が薄らと笑みを浮かべる。

「これからが楽しみだね・・・」

少年はすぐにその場から去った。

「ハッ!!」

セイバーは一蹴りでボルキャンサーを蹴り飛ばす。

「オラアァッ!!」

「グウゥッ!!」

シンセイレッドは『フレイムソード』でザンＫＴを斬りこむ。

「プリキュア・トパーズビッグバン！！」

キュアトパーズは『プリキュア・トパーズビッグバン』でギリンマを吹き飛ばす。

３体の怪人は背中合わせに激突する。

別の方向から仮面ライダーセイバーとキュアムーンライト、シンセイジャー、ジュエルマスタープリキュアが現れる。

「あ、セイバー。」

「来てたんだね。」

「あれ、あそこにいるのは・・・」

「キュアムーンライト！」

プリキュア達はセイバーの近くにキュアムーンライトがいることに驚く。

「女の子！？」

「その格好は一体？」

「あ！　仮面ライダー！」

シンセイブルーとシンセイイエローはプリキュアの存在に驚き、シンセイレッドはセイバーを見て、仮面ライダーの事を知っているような口振りをする。

「プリキュア！　それにあそこにいるのが、さっき言っていたスーパー戦隊！」

９人の戦士は一ヶ所に集まる。

「皆ここに来てたのか？」

「「「はい！」」」

「その声、星守先輩！？」

「えっ、天馬君！？」

「もしかしてあんた達、真理奈と忍美なの！？」

「この声・・・」

「瑞穂ちゃん！？」

「お前ら、安美と夏海！？」

「焔先輩！？」

「あなた達がスーパー戦隊になったんですか！？」

セイバー、シンセイジャー、ジュエルマスタープリキュアは互いの声を聞いてすぐに誰かは分かった。

「皆、話し合っている場合じゃないわ。　まずは奴らを倒すわよ。」

セイバーたちはハッと我に返る。

「いけない、忘れる所だった。　みんな、いくよ。」

「「「はい！」」」

「俺達も！」

「「うん！」」

皆はすぐにボルキャンサー、ザンＫＴ、ギリンマに振り向く。

「身と心を１つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！！」

「『プリキュア・パールスプラッシュ』！！」

トパーズ、ガーネット、オパールは『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を、パールは『プリキュア・パールスプラッシュ』を放った。

２つの技を受けたギリンマは消滅していった。

「ハアアアアアッ！！」

「プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ！！」

セイバーは『サンシャインノヴァ』、ムーンライトは『プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ』でボルキャンサーを撃破する。

「喰らえ！」

ザンＫＴは高速チェーン回転砲を放つ。

「「「ハッ！！」」」

シンセイジャーはその砲撃を避けた。

「『バーニングエアスラッシュ』！！」

「『ハイドロプレッシャー』！！」

「『ジャッジメントサンダー』！！」

シンセイジャーは『バーニングエアスラッシュ』、『ハイドロプレッシャー』、『ジャッジメントサンダー』を繰り出した。

「グアアアアアアアッ！！！！」

シンセイジャーの攻撃により、ザンＫＴは倒された。

「ムウゥッ、またしても～！」

ポイズン星人は液体となって去っていった。
ギロンガももうすでにいない。
そして、互いの正体を明かして、しばらくした後・・・

「そう、セイバーは宇宙から来たんですね。」
「宇宙の仮面ライダーなんて珍しいから、簡単に話せなかった。」

星守はセイバーの事を惑星テテュスから来た仮面ライダーであることを話した。

「ゆりさんは地獄衆のこと何か知ってるみたいですね。」
「無双将軍・オーガが世界の制圧をするため、先に私達を狙ってきたわ。　二度と変身できないようにするために。」

月影ゆりは地獄衆とプリキュアの過去を話した。

「どうやって？」
「オーガが持つ棍棒。　その棍棒は妖精の力を吸収する力を持っているわ。　それによって短時間で１６人も力を奪ったわ。」
「オーガはそんなに恐ろしい奴だったなんて・・・」
「でも、キュアマザーによってオーガを封印し、棍棒を別の場所に封印したわ。」
「キュアマザー、私達の他にまだプリキュアが？」
「えぇ。　ただ、何者なのか私達にも分からない・・・」

忍美、安美、夏海は真剣に話を聞くが、真理奈はキュアマザーとい

う名前を聞いた途端、深刻な顔になる。

「どうしたの、真理奈？」

「！　いや、なんでもないよ。」

真理奈は忍美の声を聞くと我に返る。

「けど驚いたぜ、祠から光が出てきたんだからさ。」

「アレは一体なんなの？」

「調べた方がいいね。」

翔一、瑞穂、天馬は祠について話していた。

「まぁ、兎に角まずは下に下りようか。　話はその後。」

星守は一度木霊之山から下りて、その後に話の続きをすることにした。

「全世界を支配するために我々を手を組めと？」

雲の上に浮き島があり、その浮き島に要塞が建てており、その要塞でサソリのようなロボットと複数の目を持つ仮面を被った宇宙人が話をしている。

「その通りだ、メタルピオ。　だから、このメニー星人がここに来たのだ。　インセクロイドと地獄衆、ダイオキシーを組めばこの世界はすでに手に入れたも同じ。」

「だが、セイバーと言う者が世界征服の邪魔をしていると聞くが？」

「だから手を貸したいのだ。」

メニー星人はメタルピオに要求を求めた。

「・・・よかろう。　今の人間は愚かだ。　我々に跪かせねばならん。」

メタルピオは要求を呑む。

「流石はインセクロイド。」

# 敵キャラ設定・作中用語

地獄衆
甲冑将軍・イルバ
鎧を纏いマントを羽織っている。
好きな言葉は「完璧（パーフェクト）」。
武器は黒鮫丸。
黒鮫丸の鞘は刃のように鋭利で二刀流として扱うこともでき、切れ味は金をも斬れるほど。

埴輪将軍・ドグーン
背中に大砲とマシンガンが合体した武器を持ち、勿論刀を持っている土偶のような姿をしている。
ドグーンの体は刀が折れてしまうほど硬い。
命の源は体の中にある。
口癖は「聞いて驚け、見て驚け！」

軟体将軍・ゲゾール
イカのような姿をした侍。
背中には8本の刀を背負っている。
別名「八刀流のゲゾール」。
ホタテが好物でオカマ。

ダイオキシー
一反木綿のマンタイラ
マンタのような姿をした魚人。
伸縮自在の鞭が武器。
素早い動きで撹乱でき、鞭で巻きついた者は毒で苦しませる。

のっぺらぼうのオクトル
タコのような姿をした魚人。
墨で水を汚すことが出来る。
ダイオキシーの中で一番力が強い。

網切のギロンガ
ザリガニのような姿をした魚人。
体がとても丈夫で、腕のハサミは鉄でも切れる。
ギロンガの泡は生き物ですら溶ける。

大蛇（オロチ）のカイリンダ
ダイオキシーのリーダー。
妖婦のような女性の姿をしているが、それは仮の姿。
彼女の正体はマンタイラ達でも知らない。

作中用語
アノヨイーケ
三途の川の水でかけられた様々な物質が怪物化した姿。

三途の川の水
地獄衆が持つ瓶詰めの水。
これによりアノヨイーケを生み出した。

ゾーマ
地獄衆の将軍の手下。
覆面をした一つ目の侍。

ブラックボックス
仮面ライダー、プリキュア、スーパー戦隊に倒された怪人を蘇らせることができる謎の箱。

その箱はエイリアンから貰った。

## それぞれの学園生活

木霊之山の戦いを終えてから3日後、星守達は学園生活を送った。
星守のクラスは転校生が来るという噂を流している。

「ねぇ、転校生ってどんな人かな？」
「楽しみよね。」

このように別のクラスでも噂をしている。
数分後・・・

「今日はこのクラスに転校生が来ます。　さあ、入って。」

先生が教室の外に向かって言うと、木場勇治似で赤と青のオッドアイをした男性が入ってきた。

「宇治原司（うじはらつかさ）です。　よろしくお願いします。」

宇治原は自己紹介をし、星守の隣に座ることにした。
3時間目終了後・・・

「星守健一・・・仮面ライダーセイバーか・・・止められるかなぁ・・・」

宇治原は太陽に目を向けて呟く。

「宇治原君！」
「ん？」

宇治原を呼んだのは星守である。

「星守君か。」
「どう、ここの学園は？」
「賑やかで面白い所だよ。」
「そっか、それはよかった。」

星守と宇治原は仲良さそうに話し合っていた。
その頃・・・

「おい、いつまで待たせるんだよ？」
「何の本借りる気なの？」

翔一と瑞穂は天馬と一緒に図書室に訪問した。

「これだ・・・二人とも来てよ。」

天馬は本を見つけ、２人に本を見せた。

「あの３色の光、ニューフォースっていう力があるみたいだ。」
「「ニューフォース？」」
「うん、大昔のシンセイジャーは地球を環境のいい星にするためにいろんな怪人を倒してるんだ。　そのために必要なのがニューフォース。　そのニューフォースは現代にはない力を秘めていて、傷つけ汚した自然を綺麗で傷つくことのない星にし続けているんだ。」

天馬は翔一と瑞穂にニューフォースについての事を本で説明していた。

「けど、１０年前、日本の港に沈んでいるヘドロから生まれたダイ

オキシーとの戦いによって、ニューフォースが封印されたんだ。」
「でも、どうして今になって封印が解いたの？」
「それは僕にも分からないし、この本にも書かれていない。」

翔一、瑞穂、天馬はニューフォースが祠に封じられた理由は分かったが、何故封印が解いたのか分からずじまいになった。
一方・・・

（キュアマザー・・・どこかで聞いたような・・・）

真理奈は屋上で深刻な顔をしながら空を見つめていた。
真理奈は一度、キュアマザーと会ったことがあるらしいが、いつどこで会ったのか覚えていないらしい。

「真理奈！」
「ん？」

真理奈は後ろに振り向くと忍美が真理奈の所に走ってきた。

「真理奈、お願いがあってね。　来週の土曜日に漢字検定があるんだけど、サンクルミエール学園でのフットサルの練習試合と重ねちゃったの。　それで、私は漢字検定に行くから、真理奈、練習試合に行ってくれない？」

つまり、土曜日にはフットサルの練習試合と漢字検定と重ねてしまったため、忍美は漢字検定に行くことになるが、チーム不足になるため、真理奈にチームを入れるということになったと言う。
しかし・・・

「瑞穂ちゃんに頼んでよ。　私は運動部には飽きたって言ったでし

ょ？　だから私は心を入れ替えて、美術部で最優秀賞を取るんだから。」

そう言って断られた。

「去年運動部辞めたあなたが美術部で最優秀賞取れるわけないでしょうが。」

「うるさいな、これから成長していく所なの！」

忍美は真理奈にちょっかいを出した。

真理奈はそれに怒る。

そして、放課後・・・

「夏みーん！」

「あ、安美。」

「どうしたの？　浮かない顔して？」

「うん、ゆりさんが言ってたこと気になっちゃって。」

「キュアマザーのこと？」

「うん。」

安美と夏海は放課後、下校の準備した後、真理奈と忍美より先に帰宅することになった。

夏海は月影ゆりが言ったキュアマザーのことで考えていた。

「キュアマザーって何者なんだろ？」

「郵便受けに入っていた携帯電話とパワーストーンに何か関係あるのかな？」

「う～ん・・・」

安美と夏海はキュアマザーは何者なのか、携帯電話とパワーストー

ンはキュアマザーと関係があるのか考えていた。

「どーも、幻想サーカス団の団長、マスター・ジャグラー！　私（わたくし）はミステリー星人と申します！」

名乗ったのは猫の耳を持ち、丸いレンズのサングラスのような仮面を被った宇宙人・ミステリー星人。
そしてその話し相手は左側だけ黒いペンキで塗りたてたような顔をして、手品師のような格好をした男、マスター・ジャグラーである。

「地獄衆とダイオキシー、インセクロイドが君達宇宙人集団と手を組んでいるようだが？」
「左様で御座います！　我々は全ての世界を支配し、全宇宙を我が物にするエイリアン集団、それが私達、ネオプラネットで御座います！　あなた方幻想サーカス団も我々と共に全ての世界を我が物にいたしましょうぞ！」

ミステリー星人は幻想サーカス団と手を組んで世界征服を目論む。

「フフフ・・・いいだろう。　我々幻想サーカス団は無数のパラレルワールドに移動しながら世界を手に入れようとしている。ネオプラネットや地獄衆、ダイオキシーやインセクロイドと手を組めば無敵も同然。」

「その通りでございます！　ではあなた様にこれを献上いたします。」

ミステリー星人はマスター・ジャグラーにブラックボックスを差し上げた。

## ゲゾールの作戦（前書き）

セイバーの変身した時の場面が書いてなかったので、この話で書いておきます。

## ゲゾールの作戦

「チクショーッ！！」

悔しそうに酒を飲んだのはドグーンである。
その理由は昨日の事・・・

「やってやれ、アノヨイーケ！」
「アノヨイ～ケ～！！」

車に取り付いたアノヨイーケがプリキュアを襲い掛かる。

「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！！」

3人のプリキュアが『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』によって浄化される。

「チクショーッ！　覚えてろ！」

ドグーンはすぐに撤退した。
・・・と言う風にプリキュアに負けた為、酒を飲んでいたのである。

「ドグちゃんったら何にも考えないから・・・」
「うるせぇ！」
「落ち着くのだ、ドグーンよ。」

イルバはドグーンを制止する。

「ま、今度は私がやってやろうじゃないの。」
「ゲゾールが？」
「あ～たまの悪いドグちゃんと違って相当やるのよ？」
「なんだとこのオカマ！！」
「ま～あ、見てなさい。」

「あ、真理奈。　部活終わったの？」
「うん。　じゃ、行こう。　安美と夏海が待ってるよ。」

真理奈と忍美は部活を終えたため、校門で待っている安美と夏海の元へ向かった。

「み～つけちゃった。」

真理奈と忍美の前にゲゾールが現れた。

「イカ！？」
「なんなの、アンタは！？」

「わ～たしは地獄衆・軟体将軍ゲゾール。　ドグちゃんのように簡単にはいかなくてよ？」

ゲゾールは粘土と三途の川の水を取り出した。

「アノヨイーケ！　三途の川を力に変えて、絶望を陥れなさい！」

そして、三途の川の水で粘土をかけた。
すると、粘土を取り付いたアノヨイーケに変わった。

「アノヨイ～ケ～！！」

「忍美！」
「うん！」
「お姉ちゃん！」

真理奈と忍美は変身しようとする時、安美と夏海が駆けつけてきた。

「「うん！」」

真理奈達は『ジュエルコミューン』を取り出した。

「「「「ジュエルスパークハリケーン！！」」」」

真理奈達はジュエルマスタープリキュアに変身した。

「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」
「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」
「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」
「母なる月と海の恵み、キュアパール！」

「「「「ジュエルマスタープリキュア！！」」」」
「私達がここにいる限り！」
「あなた達の年貢は納め時よ！」
「そしてこれまでの自然の怒り、全てを倍にして返してあげるわ！」

プリキュアは名乗り向上を言う。

「４人だからって勝てると思ったら大間違い。　見てなさ～い。」

ゲゾールは８本の刀を抜いて、アノヨイーケを切り裂いた。

「「えっ！？」」
「自分が作ったアノヨイーケを！？」

ゲゾールの行動に驚くプリキュア達。

「だ～か～ら～、見てなさいって言ったじゃな～い？」

プリキュアはゲゾールが切り裂いたアノヨイーケの体の一部を見る。
すると、アノヨイーケの体の一部が形となって、１０体以上のアノヨイーケへと変わっていった。

「粘土って面白いわね。」

イルバとドグーンは壺からゲゾールの戦況を窺った。

「な、何がどうなってんだ!?」

「このアノヨイーケは粘土で生み出したもの。アノヨイーケを切り裂き、切り裂かれた体の一部をアノヨイーケの分身にするとは。」

「ゲゾールの奴、自分だけいい気になりやがって!」

「アノヨイ〜ケ〜!!」

アノヨイーケの猛攻でプリキュアが倒されてしまう。

「「「「キャアァァァァァッ！！！！」」」」
「ウハハハハハッ！　これだけいれば勝ったも同然ね。」

ゲゾールは余裕を持って嘲笑う。
その様子を宇治原が屋上から見届けた。

「へぇ、思ったよりやるじゃないか。」

ゲゾールは８本の刀を構える。

「さ～て、私が止めを刺してあげようかしら？」

ゲゾールはプリキュアへゆっくりと近づく。
その時、ゲゾールの頭にサッカーボールが当った。

「ヌオォォォォッ！！」

ゲゾールはそれにより倒れる。
さっきサッカーボールでゲゾールに当てたのは・・・

「間に合ったぜ！」

翔一である。
星守も瑞穂も天馬も一緒である。

「みんな！」
「「「はい！」」」

星守は石を掲げた。
その石は光となり、腰辺りに来ると『セイヴ・ザ・コア』となる。

「変身！」

星守は両方のアクションスイッチを押す。
そして、仮面ライダーセイバーへと変身した。

「我が名は救世主、仮面ライダーセイバー！」

セイバーは名乗り向上を言う。

「「「シンセイチェンジ！」」」

翔一、瑞穂、天馬は『シンセイチェンジャー』のダイヤルを回した。
さらに赤、青、黄色光に包まれる。
そして新生戦隊・シンセイジャーに変身した。

「翔ける炎の戦士、シンセイレッド！」
「流れる水の戦士、シンセイブルー！」
「轟く雷の戦士、シンセイイエロー！」
「「「新生戦隊、シンセイジャー！」」」

3人は名乗り向上を言う。

「プリキュア、大丈夫か？」
「「「はい！」」」
「一気に倒しちまおうぜ！」

仮面ライダーセイバー、ジュエルマスタープリキュア、シンセイジャーはアノヨイーケの軍団に目を向け身構える。

## 逆転勝利！

「フフン、あ～んた達の相手はこいつらよ！」

ゲゾールはブラックボックスを取り出し、怪人を蘇らせた。
その怪人はミラーモンスターのバイオグリーザとジャカンジャの呪扇獣マドーギである。
セイバーはバイオグリーザを、シンセイジャーはマドーギを、ジュエルマスタープリキュアはアノヨイーケを相手にした。

「ウワッ！」
「キャッ！」
「ウアァッ！」

シンセイジャーはマドーギの影忍びの術に翻弄されながらやられてしまう。

「速い！」
「クソッ！」

シンセイレッドとシンセイブルーはマドーギにどう対処するか分からない状態である。

「こうなったら、ボルテックランス！」

シンセイイエローは『ボルテックランス』を出した。

「瑞穂、君の水の力が必要だ！」
「分かったわ！　『スプラッシュマグナム』！」

シンセイブルーは『スプラッシュマグナム』を出した。
そしてシンセイブルーは上に跳びあがる。

「『ハイドロプレッシャー』！」

シンセイブルーは『ハイドロプレッシャー』を放つ。
しかし、マドーギは素早くかわした。

「今だ！」

シンセイイエローは『ハイドロプレッシャー』が当った地面に刺した。
すると、その地面から電気が放電し始めた。
電気に耐えられなかったマドーギは地面から出て行った。

「翔一！」
「おう！　『フレイムソード』！」

シンセイレッドは『フレイムソード』を出した。

「『バーニングエアスラッシュ』！」

シンセイレッドはマドーギに『バーニングエアスラッシュ』を使った。
『バーニングエアスラッシュ』を受けたマドーギは爆発された。

「やっ！　はっ！」

セイバーは『セイブ・ザ・スター』の刃でバイオグリーザを斬りつ

ける。

「止めだ！」

セイバーは止めを刺しにいくが、バイオグリーザが攻撃を喰らう前に姿を消した。

「！」

セイバーは周りを見回すが、どこにもいない。
その時・・・

「！　グアッ！」

セイバーの後ろから衝撃を受けた。
セイバーはすぐに後ろを向くが影も形も無かった。

『健一、サイキックフォームだ。』
「分かった。」

セイバーは両方のハンドルレバーを回し、アクションボタンを押した。
そしてサイキックフォームへとフォームチェンジする。

「・・・」

セイバーは再び周りを見回した。
すると、バイオグリーザがゆっくりと近づいてきた。

「！　いた！」

セイバーはバイオグリーザに蹴りだす。
そしてセイバーはすぐに超能力でバイオグリーザの動きを止める。
さらにバイオグリーザの真上に跳び、『グラビティ・デスブレイク』を繰り出す。
『グラビティ・デスブレイク』を受けたバイオグリーザは爆発される。

「「「「キャアァァァァァッ！！！！」」」」

キュアトパーズ達はアノヨイーケに苦戦された。
それどころか、アノヨイーケの分身を倒しても、また分身が出来てしまう。

「トパーズ！」
「ガーネット！」
「オパール！」
「パール！」

プリキュアの所に駆けつけるセイバーとシンセイジャー。

「こいつ、思ったより手強いんですよ！」
「それに何度も倒しても数が増えるだけなんです！」

手強い理由は分かっている。
相手は粘土を取り付いたアノヨイーケである。
倒しても分身が出来るだけなのだ。

「粘土の怪物か・・・確かに厄介だな・・・」
「！　分かったぞ！」

シンセイイエローは何かを思いついたようだ。

「星守さん、翔一、耳を！」

「「ん？」」

シンセイイエローはシンセイレッドとセイバーに耳打ちをした。

「ふん、どんな作戦だろうとこのアノヨイーケには敵わないわよ。」

ゲゾールは自信満々に言い出す。

「よし！」

セイバーは『セイバーサイコキネシス』でアノヨイーケの分身を一ヶ所に集める。

「次は俺だ！」

シンセイレッドは炎を纏った『フレイムソード』で炎を放ち、シンセイイエローは『ボルテックランス』で扇風機のように回し風を起こす。

すると、アノヨイーケが動かなくなった。

「なに！？　どうなってんの！？」

「知らないの？　粘土は乾燥すると固まっちゃうんだよ？」

「ぬあぁんですと！？」

ゲゾールは知らなかったようだ。

「今だよ！」
「「はい！！」」」

トパーズ、ガーネット、オパールは前に出る。

「「「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア！！』」」」

トパーズ、ガーネット、オパールは『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を放った。
それを受けたアノヨイーケは浄化され、粘土に戻った。
その粘土をパールがキャッチした。

「ヌウゥッ！　なんでこうなるの！？」

ゲゾールはすぐに撤退した。

「へぇ、粘土の性質を利用して倒すなんて・・・思ったよりやるね。」

宇治原はゲゾールが撤退した所を見た後、すぐに屋上から消えていった。
変身を解除した8人は一緒に下校した。

「いや～、知らなかったよ。　粘土が熱で固まるなんて。」
「あら、美術部である真理奈はそんなこと知らないの？」
「うるさい、これから覚えていく所なの。」

真理奈と忍美はもめあっている。

「まあまあ、２人とも。」

星守は真理奈と忍美を仲介した。

「さて、帰ってゲームしよっと！」

「ダメだよ！　翔一と瑞穂は昨日の宿題やってなかったんだから僕の家で勉強会！」

「「えぇ～っ？」」

瑞穂がゲームしようと考えたが、天馬が宿題が先だといわれる。

「アハハハハ・・・・」

# 番外編　プリキュア、ピンチの日！？（前書き）

長い番外編ですが、許してください。

# 番外編　プリキュア、ピンチの日!?

「ヌウゥッ、ま～さかこの私が負けるな～んて・・・」
「おのれ、プリキュアめ！　この屈辱、必ず晴らしてやる！」

ドグーンとゲゾールが悔しそうに歩いた。
ちなみに今2人がいるのは、人気のいない路地裏である。

「オホホホホホ、お困りのようザマスね？」

ドグーンとゲゾールは後ろから声が聞こえたので後ろに振り向くと、そこにはシュモクザメのような頭をした宇宙人である。

「だあぁれ？」
「ワタクシはサイエンス星人、ネオプラネットには入っていないザマスが、あなた達の手助けをしに来たザマスよ。　プリキュアにやられたようザマスね？」

サイエンス星人はドグーン達の話を聞いていたようである。

「盗み聞きするとは迷惑な奴だぜ。」

ドグーンは刀を引き抜き、サイエンス星人に近づいた。

「ま、待つザマス！　まず私の話を聞いてからでも遅くないザマスよ！？」

サイエンス星人は慌ててドグーンから離れた。

「まあまあ、落ち着いてドグちゃん。　それで、話ってなあに？」
「実はプリキュアをなんとかする装置を持ってきたザマス。」
サイエンス星人が持っている手提げ袋から謎の装置を取り出す。
「何だそれは？」
「これは人とのコミュニケーションを取れなくするマシーンザマス。
このマイクでプリキュアの声を登録すれば、うまく会話が出来なくなるし、技も思ったように出せなくなるザマス。」
「それってどういう意味だ？」
「それはザマスね・・・あっ誰か来たザマス！　隠れるザマス！」
サイエンス星人とドグーンとゲゾールはすぐに隠れた。
その理由は・・・
「全く安美ったら小学生でもあるまいのに公園でお遊び？」
「だって暇なんだもん。」
「忍美、せっかくの休みなんだからたまにはのんびりしようよ。」
真理奈と忍美と安美が来たからである。
「いい所に来てくれたわね。」
「あぁ！」
ドグーンとゲゾールとサイエンス星人は真理奈達の前に出てくる。
「「「わあぁっ！」」」
3人はいきなり出てきたドグーン達に驚く。

「ハッハッハッハッハッ！　聞いて驚け、見て驚け！　今日の俺様たちは一味違うぞ！」
「「えっ！？」」
「どういうこと！？」
「フフフ、詳しいことはまず変身することね？」
ゲゾールは3人を挑発したような言動で言い出す。
「忍美、安美！」
「うん！」
「はい！」
3人はすぐに『ジュエルコミューン』を取り出し、カードをセットして通話ボタンを押した。
「「「ジュエルスパークハリケーン！！」」」
3人の周りに虹色の風を覆う。
そしてその風が止み、ジュエルマスタープリキュアとなった。
「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」
「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」
「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」
「「「ジュエルマスタープリキュア！」」」
「私達がここにいる限り！」
「あなた達の年貢は納め時よ！」
「そして、これまでの自然の怒り、全てを倍にして返してあげるわ！」
ドグーン達はジュエルマスタープリキュアに変身されたのにも関わ

らず、余裕の表情である。

「ふん！　それで勝ったつもりか！」
「その通り、悔しかったら大きな声で怒ってみなさいね？」

ゲゾールはサイエンス星人が持っていたマシーンを持ち出しながら言う。

「何がなんだか分かんないけど、誰がそんなことするもんですか！」

オパールはゲゾールに文句を言い出す。
すると・・・

【ピコン、ピコン・・・トウロクシマシタ。】

マシーンのスピーカーから声を出した。
キュアオパールが大声出した時にマイクを出したのだろう。

「あ、登録しちゃったザマス。　そこのトパーズとガーネットもなんとか・・・」

ゲゾールはサイエンス星人の言うとおりにした。

「その機械は何なの!?」
【ピコン、ピコン・・・トウロクシマシタ。】
「怪しすぎるわ、きっと罠よ！」
【ピコン、ピコン・・・トウロクシマシタ。】

簡単に登録されてしまう。

「出来ちゃったザマス！　プリキュアは思ったよりアホザマスね。
さあ、そのボタンを押すザマス！」
「これ？」

ゲゾールはスピーカーの下にあるボタンを押した。

【ピコン、ピコン、ピコン・・・カイワモードヲアニマルモードニキリカエマス。】

その時、3人のプリキュアが衝撃を走った。

「「「！　キャアアァァァァァァ！！！！」」」

キュアトパーズ達が倒れこんでしまう。

「なにが起こったんだ？」
「どう？」
「・・・やったザマスか？」

ドグーンとゲゾールとサイエンス星人は3人の様子を窺った。
キュアトパーズ達がゆっくりと起き上がった。
その時・・・

「ワン、ワン！　ワン！？」
「ウキッ！？　ウキキ！？」
「ホーッ、ホーッ！」

キュアトパーズが犬の鳴き声に、キュアオパールが猿の鳴き声に、
キュアガーネットがフクロウの鳴き声になってしまった。

「こいつら何言ってやがんだ！？」
「なんで動物の鳴き声になっちゃってんの！？」

ドグーンとゲゾールは今のプリキュアに驚きを隠せなかった。

「成功ザマス！　あの3人はこのマシーンで動物の声に書きかえられた為、私達は3人の言ってることが理解できないザマスが、あいつらも私達の言ってることが分からないはずザマス！」

サイエンス星人は成功したと分かった為、大喜びの様子。
プリキュア達は揉めている状態である。
きっと大声で言ってしまったせいであろう。

「よ～し、今がチャンスだ！」
「今までの敗北を水に流させてあげるわ！」

ドグーンとゲゾールは刀を引き抜き、プリキュアを斬りつけた。

「ワオ～ン！！」
「ウキャ～ッ！！」
「ホーッ！！」

プリキュアはドグーン達により倒れてしまう。
しかし、すぐに立ち上がり、『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を放とうとする。
ところが・・・

「「「！？」」」

プリキュア達の手にエネルギーが流れてこなかったのだ。

「なるほど、そういうことね。」
「俺様が片付けてやる！」
ドグーンは背中の大砲でプリキュアをなぎ倒し、マシンガンで発砲した。
「やめなさい！」
トパーズたちに駆けつけたのはキュアパールである。
「ヤアッ！！」
キュアパールは蹴りを入れるが、ドグーンには全く通用しなかった。
「ふん、効かんわ！」
ドグーンは大砲でキュアパールに撃ち込む。
「キャアアアアアアッ！！！！」
ドグーンの大砲によってキュアパールが夏海の姿に戻ってしまう。
「流石は地獄衆ザマス！　もしかしたらあの世界の悪と手を組めるかもしれないザマス！」
「なに？」
「別の世界ですって？」
ドグーンとゲゾールは意味深な言葉を放つサイエンス星人に質問を問う。

「そうザマス、今から案内するザマス。」

サイエンス星人はドグーンとゲゾールを連れて別の世界に向かった。
3人の姿が見えなくなった後・・・

「トパーズ、ガーネット大丈夫ですか？　オパール、平気？」

夏海は3人に話しかけた。

「ワン、ワン！」
「ホーッ、ホーッ。」
「えっ？」

夏海はトパーズたちが動物の声で言い出したので驚く。
しかも、トパーズたちは夏海の言葉を理解出来ていないのだ。

「ウッキーッ！！」

オパールは怒ってドグーンの後を追う。

「ちょっ、オパール！」
「ワン！」

トパーズもオパールの後を追う。

「え～っ！？　一体何があったの！？　あの、ガーネット！」

夏海はガーネットに話しかけるが、ガーネットは夏海の言ってることと全く違う接し方をしていた。

「ホーッ！」

ガーネットはトパーズとオパールの後を追った。

「え～っ！？　本当に何があったの！？　声も動物の鳴き声になっちゃったし、まるで私の言っていることが分からないみたい・・・とにかく星守さんに知らせないと！」

夏海は星守の元へ急いだ。

## 番外編　プリキュア、ピンチの日!?（後書き）

『プリキュアオールスターズ～新たな日常と新たな戦い～』に続きます。

# 幻想サーカス団とインセクロイド

パラレルワールド、それはある世界から分岐し、それに並行して存在する別の世界。
例えば、プリキュアがいない世界があったり、仮面ライダーがいない世界があったり、スーパー戦隊がいない世界があったりと、似たような世界が存在しているのだという。
そんな世界の時空トンネルに巨大な船が移動している。
その船の名はパラレルシップ。
その船には幻想サーカス団が様々な世界を巡り、多くの人達に喜びを与えるために作り上げた船である。
しかし、悪行を働く輩によって強奪され、自分の欲のためにパラレルワールドを巡り始めたのだ。

「流石はパラレルシップ、スケールが違う。　おかげで私が作り上げたエナジーボールにドリームエナジーを溜めて億万長者になることも夢じゃない。　ネオプラネットと手を組んだ甲斐があったな。」

マスター・ジャグラーは巨大な装置を見上げて言った。
その時、マスタージャグラーのポケットから着信音が・・・

「はい、もしもし・・・はい・・・オォ！　ドリンクの売り上げが！　はい、分かりました！」

マスター・ジャグラーは電話を切った。

「集合！！」

マスター・ジャグラーは声を出して呼んだ後、笛を鳴らした。

その後、それぞれの通路から頬に星とハートのマークが塗ってあり、三つ編みで赤い髪型をした女性、レディー・マジシャニアと、ピエロのような姿をして、仮面を被っていた男性、ジェスター・ジェニアスと、タンクトップを着た筋肉モリモリの男性、ガード・パラダイズンと、化粧をしていないが、マジシャンのような服装をし、セミロングで黒い髪型をした女性、リリー・サプライザーが出てきた。

「団長、どうしたんですか？　急に呼び出して。」
「みんなよく聞け？　ドリームエナジーから生み出した商品の売り上げがアップしたのだ！」

ジャグラーの言葉を聞いたマジシャニアとジェニアス、パラダイズンが驚きを隠せなかった。

「それって本当ですか！？」
「凄いねぇ！　流石はドリームエナジー！」

3人は大喜びである。

「よ～し。　皆、次の世界に行く準備をしろ！」
「「「オーッ！」」」

ジャグラーはマジシャニア、ジェニアス、パラダイズンと一緒に操舵室に向かった。
しかし、リリーは先ほど出てきた通路に戻った。
リリーは自分の部屋に戻ったのである。
リリーは自分の部屋のドアにノックした。

「和夢。」
「はい。」

ドアの向こうから声が聞こえた後、リリーは中に入った。
リリーの部屋には黒いショートヘアーで流し、男の子の格好をした女の子がいた。
彼女の名は平園和夢（ひらぞのなごむ）。

「リリーさん、さっき笛の音が聞こえましたけど、何かあったんですか？」
「ドリームエナジーから作り出した商品が売上したのよ。」

リリーは先ほどの集合について話した。

「ジャグラー達が作ったエナジーボールでパラレルワールド中の子供達のドリームエナジーを吸収し、それをドリンクやお菓子を作り上げて金儲けをしてる。　和夢、決してジャグラーのようにはならないで。」
「うん、でもリリーさん、どうしてそのことを僕に？」

和夢は何故リリーが和夢に忠告されたか分からなかった。

「この船は元々、私達サプライザー家の物。子供達を喜ばせるために作った物なの。　でも、ジャグラー達がこの船を奪って、金のために利用していた。　おまけにこの船はジャグラーに改造され、時空防衛局に気付かれない状況になってしまったわ。　それに、ジャグラーは宇宙人と手を組んで、全ての世界を征服しようと企んでいたわ。」

和夢はリリーの話を聞いて、言葉が出なくなった。

「リリー、和夢！　もうすぐ到着だ、早く仕事の準備をしろ！」

ドアの向こうからジャグラーの声が聞こえた。

「はい！　今支度します！」

和夢はすぐに返事をした。

和夢が仕事の準備をしたとき、リリーは彼女のポケットにある携帯電話を見つめた。

そう、彼女のポケットにある『ジュエルコミューン』に。

～～～～～～～～～～

「「「トリプルプリキュアキーック！！」」」

一方、トパーズ達はアノヨイーケと戦っていた。

「アノヨイ～ケ～！？」

トリプルプリキュアキックによって倒れる消火器を取り付いたアノヨイーケ。

「パール、今だよ！」

「はい！」

パールはパールステッキを構えた。

「『プリキュア・パールスプラッシュ！』」

『プリキュア・パールスプラッシュ』を受けたアノヨイーケは浄化

され、消火器に戻った。
この時にプリキュアは気付かなかった。
プリキュアの上空に浮遊していたカメラがあることを。

～～～～～～～～～

「プリキュアの分析が終わったわ、メカクネア。」
「ご苦労だったな、サイバティス。」

蟷螂のようなロボット、サイバティスが持つ映像データを、蜘蛛のようなロボット、メカクネアに見せた。

「ジュエルマスタープリキュアはやはり妖精の力を持っていない。全く違う力で地獄衆のアノヨイーケを浄化したわ。今までのプリキュアにはない力でね。」

サイバティスは分析した結果を述べた。

「ふん、こんな小娘共に苦戦するとは・・・こうなれば俺が出る他ない・・・」

メカクネアは映像データをサイバティスに返し、どこかに去ろうとしていた。

「せいぜい頑張るんだね？」

テーブルの上に蜂のようなロボット、キラービーが座っていた。

「キラービー、テーブルの上に座るな。」

メカクネアはゲートを開けて、出て行った。

## ガーネットとオパール、シャイニールミナスと出会う。

次の日、幻想サーカス団の仕事を終えた和夢はコンピュータールームに入った。
和夢はその部屋のコンピューターにスイッチを入れた。
すると映像にプリキュアの映像が映し出された。

「プリキュア・・・」

～～～～～～～～～～

「ルン、ルルン♪」
「安美、なんでそんなにノリノリなのよ?」
「だって、これが楽しみなんだもん♪」

安美が忍美に見せたのは『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』のチラシである。
金曜日にチラシを貰ったのでそこに向かうことになったのである。

「全く、たこ焼き食べるのどこが楽しみなのよ?」
「だってあそこのたこ焼き評判らしいもん。　それにベローネ学園に伝わる『ベローネのルリコさん』のことも気になるし!」
「安美、そんなのただのガセだから・・・」
「行ってもみないでガセって決め付けないの!」

安美は『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』のたこ焼きを食べた後、『ベローネのルリコさん』を噂しているベローネ学園に向かうつもりである。

～～～～～～～～

その頃、真理奈と夏海は・・・

「わざわざすいません、ここまで案内していただいて・・・」
「いいの、いいの。　私もこの町に寄りたい所あるから。」

今、彼女達がいるのはヨーロッパ風の町並みである。
彼女達は電車でここに移動していたのだ。

「でも、どうしてここに行こうって？」
「ここには『ナッツハウス』というアクセサリーショップがあって、そこのアクセサリーを見に行こうと思いまして。」
「そっか。」

夏海はアクセサリーショップ『ナッツハウス』に行こうとしたところ、途中で迷ってしまい、偶然に真理奈と会ってこの町に着いたのだ。

「真理奈さんはどうしてここに？」
「内緒。」

夏海は真理奈に何故この町並みに来たのか聞いたが、答えてくれなかった。

「それより、『ナッツハウス』に行くんでしょ？　私も後でそこに来るから。」
「はい、ありがとうございます。」

夏海は『ナッツハウス』に向かい、真理奈は違う道を通って、別の場所に向かった。
その場所は・・・

「見えた、サンクルミエール学園。」

サンクルミエール学園である。

「今あそこは新聞作りで校舎が開いてるから、図書館には入れそうね。」

真理奈はサンクルミエール学園の図書館に用があるようだ。

～～～～～～～～～

一方、忍美と安美は・・・

「ああもう！　せっかくの楽しみを邪魔しないでよ！」

キュアガーネットとキュアオパールに変身して、メタルゲラスと戦っていた。
メタルゲラスは仮面ライダーガイと契約したミラーモンスターである。

「くっ、でかい割には速いわね。」

メタルゲラスの突進でガーネットを襲い掛かるが、ガーネットはそれを回避。

そのとき・・・

「『ルミナス・ハーティエル・アンクション』！！」

ガーネットとオパールの後ろから金色の光が現れ、その光を受けたメタルゲラスの動きが止まった。

「なに！？」

ガーネットとオパールが後ろに振り向くとそこにはシャイニールミナスがいた。

「シャイニールミナス！？」

「二人とも、今です！」

「え？　う、うん！」

ガーネットとオパールはメタルゲラスに振り向く。

「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」

「『プリキュア・オパールメテオ』！」

ガーネットは『プリキュア・ガーネットクロウ』を、オパールは『プリキュア・オパールメテオ』を繰り出した。

2つの技を受けたメタルゲラスは爆散した。

「ふう・・・」

「ありがとう！」

「どういたしまして。」

シャイニールミナスに礼を言うオパール。

その様子を見ていたのは・・・

「フン・・・」

メカクネアである。

# 忍風戦隊、あ、参〜上〜！

「また図書館かよ〜・・・」
「せっかくの休みなんだから遊ばせてよ。」

翔一と瑞穂はまた天馬に図書館に連れ去られている。

「ダメだよ！　昨日、授業中に居眠りしたの君達の生徒から聞いたよ！　だからテストの時にいい点数取れないんだよ！」

翔一と瑞穂が昨日、学園の授業中に寝てしまって勉強に参加していないと言う。
それで天馬は2人を連れて図書館で勉強することにした。

「はあ〜、また怪人達が出たらどうなるのかな・・・」
「瑞穂！　縁起でもない事を言わないの！」

その時・・・

ドカアァァァァン！！

爆発音が響いた。

「な、なんだ！？」
「もう！　瑞穂が縁起でもないこと言うからだぞ！？」
「私！？」

3人は言い合いながら爆発音がした所に向かった。

～～～～～～～～～～

「ダイナマイトドンドーン！」

怪人がダイナマイトでビルを破壊する。
その怪人の名はハッパバンキ。
害地目一の暴れん坊と呼ばれる蛮機獣である。
ハッパバンキと一緒にいるのは・・・

「瓦礫になったビルを海に放り込んで海を汚してやる！」

のっぺらぼうのオクトルである。

「待て！」

オクトルとハッパバンキは声が聞こえる方向に振り向く。
そこにはシンセイジャーの３人ではなく・・・

「風が鳴き、空が怒る！　空忍！　ハリケンレッド！」
「水が舞い、波が踊る！　水忍！　ハリケンブルー！」
「大地が震え、花が歌う！　陸忍！　ハリケンイエロー！」
「「「忍風戦隊ハリケンジャー！　あ、参～上～！」」」

忍風戦隊ハリケンジャーである。
この３人はゴウライジャー、シュリケンジャーと共に宇宙人群ジャカンジャと戦ったスーパー戦隊である。

「あ～っ！」

「あれは！」
「ハリケンジャー！」

翔一、瑞穂、天馬はハリケンジャーを見て驚く。
ちなみに彼らはすでにシンセイジャーになっている。

「シンセイジャー・・・！！　やれ！！」

オクトルはブラックボックスを出し、マゲラッパとウガッツを召喚した。

「マゲラッパにウガッツ！」

マゲラッパとウガッツを合わせて１００人。

「シンセイジャー、一緒に戦おうぜ！」
「６人で力を合わせれば絶対負けないわ！」

シンセイジャーに協力を願うハリケンイエローとハリケンブルー。

「分かりました！」
「その通りです！」
「いつでもいいっすよ！」

シンセイジャーは了解を得た。

「皆、行くぞ！！」
「「「「「オーッ！！」」」」」

～～～～～～～～～

その頃、星守は仮面ライダーセイバーに変身して、ベルクリケタスワームと戦っていた。
ベルクリケタスワームは加賀美新の弟・亮になりすましたことがあるワームである。

「ハアァッ！！」

セイバーは『セイヴ・ザ・スター』の刃でベルクリケタスワームを斬ろうとするが、ベルクリケタスワームは超高速移動能力で回避された。

『健一、アクアフォームだ。』
「了解！」

セイバーはすぐにスペースフォームからアクアフォームにフォームチェンジした。
そしてセイバーは超高速移動でベルクリケタスワームを追い詰める。
そして・・・

「『オーシャンズ・サーベル』！」

セイバーは『オーシャンズ・サーベル』でベルクリケタスワームを切り裂いた。
それを受けたベルクリケタスワームは爆散される。

～～～～～～～～～

「「「三重連トリプルガジェット！」」」

ハリケンジャーはトリプルガジェットでマゲラッパとウガッツを殲滅。

「スゲェ・・・」

「うん・・・」

ハリケンジャーの戦いぶりに感動する2人。

シンセイイエローはトリプルガジェットを見て思いつく。

「翔一、瑞穂。　僕達の武器も合体できるんじゃないかな？」

「「えっ？」」

2人はシンセイイエローの言葉に疑う。

「ダイナマイトドンドーン！」

ハッパバンキはスーパー戦隊にダイナマイトを投げる。

そして爆発した。

「「「「「「ウワァァァァッ！！！！」」」」」」

ダイナマイトに吹き飛ばされるシンセイジャーとハリケンジャー。

「こうなったら、やるしかないわね。」

「あぁ！　『フレイムソード』！」

シンセイレッドは『フレイムソード』を出す。

「『スプラッシュマグナム』！」

シンセイブルーは『スプラッシュマグナム』を出す。

「『ボルテックランス』！」

シンセイイエローは『ボルテックランス』を出す。

「「「スリーウェポン合体！」」」

『スプラッシュマグナム』に『フレイムソード』を差し込み、『スプラッシュマグナム』の上に『ボルテックランス』を設置する。

そして、『フレイムソード』が2つに割れ、発射口となり、合体銃となる。

「スゲェ！」

「こんな風になるんだ。」

「名前は・・・『トライデントライフル』にしようかな？」

シンセイイエローはその銃を『トライデントライフル』と名づける。

「おのれ、こしゃくな・・・ハッパバンキ、やれ！」

「ハッパッパー！」

ハッパバンキはシンセイジャーに向かって走り出す。

「『トライデントライフル』、チャージ完了！」

『トライデントライフル』の発射口にエネルギーが増幅する。

「『トライデントパニッシャー』！」

シンセイジャーは『トライデントライフル』で強力なエネルギー弾を発射した。

『トライデントパニッシャー』を受けたハッパバンキは爆発され倒された。

「おのれ、シンセイジャー！」

オクトルはシンセイジャーの前から姿を消した。

「よっしゃー！！」

「イエーイ！！」

2人は勝った事を喜ぶ。

「アレ？　ハリケンジャーは？」

シンセイイエローは辺りを見回すが、ハリケンジャーの姿がどこにも無かった。

～～～～～～～

展望台から見下ろしたのは宇治原である。

「ジュエルマスタープリキュアの2人がシャイニールミナスと出会

い、シンセイジャーがハリケンジャーと一緒に戦ってた・・・セイバー、地球には君には知らないものがたくさんあるんだよ。」

宇治原が後ろにチラッと振り向いた。
その視線の先にはフィリップの髪型をした少年がいた。
その少年のポケットにガイアメモリが少し見えた。
『ファング』のガイアメモリを・・・

## 忍風戦隊、あ、参～上～！（後書き）

ハリケンレッドの口上で「なき」という漢字が辞書に載ってなかったので、「鳴き」にしました。

## それぞれの様子

忍美と安美はメタルゲラスとの戦いの後、シャイニールミナスこと九条ひかりが働いている『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』に訪れた。

「いや～、驚いたよ！　私と同じ年齢なのにたこ焼き屋さんで働いているなんて！」
「全く・・・」

呆れ気味の忍美。
ちなみに忍美は何も注文していない。

「アカネさん、こんにちは。」

やってきたのは展望台にいた少年である。
名前は木場来斗（きばらいと）。

「あぁ、来斗君。　遅かったじゃない。」
「すいません。　途中、寄り道してしまって・・・」
「また寄り道？　全く・・・今度寄り道したら承知しないよ。」
「すいません。」

アカネに怒られる来斗。
来斗はすぐにエプロンを巻いて働き始める。

「誰？」
「アルバイトの人かな？」
「木場来斗さん、ここでアルバイトをしているんです。」

ひかりは来斗の事を紹介した。

「へぇ～。　なかなかかっこいいじゃん。」

「安美・・・」

～～～～～～～～～～

その頃、真理奈はサンクルミエール学園に入り、図書室に向かった。

（・・・よし、大分人が出て行ったね。）

真理奈はサンクルミエール学園の生徒が出て行ったことを確認した後、図書室に入った。

その図書室にはミルキィローズこと美々野くるみがいた。

「さてと、そろそろ皆の所に行こうか。」

くるみは荷物をまとめて図書室から出ようとしてたら、わずかに小さいが音が聞こえた。

「ん？」

くるみは音がした所に向かってくると、真理奈の姿があった。

よく見れば真理奈の手にカメラを持っていた。

「この絵ならモデルになりそう。　さて、次は・・・」

真理奈が撮ったのは本の内容の絵や写真である。

「ちょっと、そこ。」
「？」

真理奈はくるみの声を聞いて振り向いた。

（！　あの子はミルキィローズ！）
「なんなの、あなた？」
「・・・あ、初めまして。　新真理奈です。」

真理奈はくるみを見てミルキィローズだと気付いたが、知らないフリをして自己紹介をした。

「ちょっと訳ありでこの図書室の本を。」

真理奈はテーブルに置いてある本をそのままにし、別の本を本棚から取った。

「勝手に取らないでよ！」
「まぁ、いいじゃないですか。　せっかくわざわざ東宝市からやってきたんですし。」
「ダメに決まってるでしょ。」

くるみは本を取ることを止めようとするが、真理奈はそれを聞かず取る。

「学校が違うからってそんなに怒らなくたっていいじゃないですか。」
「学校が違うなんて一言も言ってないでしょ！？」

～～～～～～～～～

その頃、夏海はアクセサリーショップ『ナッツハウス』に向かった。

「そろそろ到着かな。　ん？」

夏海が見たのは、大勢ではないが人が集まっている光景である。

「なんだろう？」

夏海はそこに向かうと、そこには・・・

「それではいきます。　ワン、ツー、スリー！」

和夢がマジックショーをやっている姿である。

今、和夢が見せたマジックは箱の中からハトを出すマジックである。

それを見た人達は「オォ！」と驚きだす。

「凄い！　（まだ私と同じ位の子なのに手品ができるなんて・・・）」

夏海は憧れたような目で和夢を見る。

「それでは、本日のマジックはこれで終了いたします。　皆様ご覧になっていただき、ありがとうございました。」

和夢の別れの挨拶を告げると、皆は拍手をした。

数分後、和夢は荷物をまとめ始めた。

「あの！」
「ん？」

夏海に声をかけられたため、和夢は夏海に振り向いた。

「先ほどのマジック、とても凄かったです。　お名前は？」
「・・・平園和夢、１４歳だよ。」
「私は月野夏海です。」

夏海と和夢は互いの名前を教えた。

「悪いけど、サインはお断りだよ。　僕は次の町で仕事があるんでこれで。」

和夢はすぐに立ち去ってしまう。

「あ、ちょっと・・・」

夏海は止めようとするが、行ってしまった。

～～～～～～～～～

「アハハ、遅くなってしまった。　ナッツ怒るだろうな。」

今、走っているのはパルミエ王国の国王・ココである。
今は小々田コージという人間の姿になっている。

「フフフ・・・彼ならいい余興になるかもね。」

バルコニーからその姿を見たのは宇治原だ。
宇治原はポケットの中からガイアメモリを取り出した。

【ＤＡＲＫＮＥＳＳ】

宇治原はそのガイアメモリのスイッチを押した後、ココに投げた。

## 牙の戦士、その名はファング

「あぁ、おいしかった・・・」
「はぁ、安美ったら、３杯もおかわりするなんて・・・」

安美は『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』のたこ焼きを堪能した。
忍美はその様子を見て呆れ気味になる。
その時、突然町が騒がしくなり始めた。

「何、この音！？」
「行くわよ、安美！」

忍美と安美はすぐに駆けつける。

「ひかりちゃん、ここをお願い！」
「えっ！？」

来斗はエプロンを脱いで安美と忍美の後を追った。

～～～～～～～

騒音の正体はサイコローダーとサイコローグである。
サイコローグはミラーワールドに存在するミラーモンスターでオルタナティブ・ゼロの契約モンスターである。
サイコローダーはサイコローグからオートバイの姿になったものである。
ちなみにサイコローグはサイコローダーに乗っている。
その数は３６体である。

「人類よ！　この数のモンスターの前に抵抗など無意味だ！　我々インセクロイドに跪くがいい！」

サイコローグとサイコローダーを操っていたのはメカクネアである。

「流石だねぇ、インセクロイドは！」

「最高、最高！」

近くにいるのはレディー・マジシャニアとジェスター・ジェニアスである。

「な、なにこれ！？」

「なんて数なの！？」

サイコローグとサイコローダーの数に圧倒される忍美と安美。

「奴らがプリキュアか。　行け！　奴らを倒せ！」

サイコローグが忍美と安美を襲い掛かる。

「安美！」

「うん！」

2人は『ジュエルコミューン』を出して・・・

「「ジュエルスパークハリケーン！」」

虹色の風に覆われ、ジュエルマスタープリキュアに変身した。

「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」
「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」

ガーネットとオパールはサイコローグに立ち向かう。
一方、マジシャニアとジェニアスは離れた所からテーブルと椅子、ヘッドマイクを用意し・・・

「ハーイ、皆様、お待たせ致しました。　ただいま始りましたミラーモンスターとプリキュアの戦いを時空衛星中継にて、ここ水戸屋前よりお送りいたします。　マジシャニアさん、どうなりますでしょうね？」
「そうですね、数の多い方が勝つんじゃないんでしょうか。」
「なるほど、少ない方が勝てないということですね？」
「はい、そうです。」

実況を始めた。
ガーネットとオパールはサイコローグによるミサイル攻撃やサイコローダーでの突撃によって倒されてしまう。

「ここまでだ、プリキュア。」

メカクネアの合図でガーネットとオパールに突撃を行なった。
その時・・・

【ファング。】

どこからか音声を発した。

「「え？」」

ガーネットとオパールは後ろを振り向くと、そこには来斗がいた。
しかも、来斗の腰にはロストドライバーが巻かれていて、手にはファングのガイアメモリを持っていた。

「変身！」

来斗はファングのガイアメモリをロストドライバーにセットし、メモリスロットを横に倒した。

【ファング。】

来斗は音声と共に別の姿になった。
その姿は仮面ライダーダブル・ファングジョーカーに似ているが、ボディサイドの黒が白に変わっている。

「えぇ！？」
「何なの！？」

ガーネットとオパールは驚きを隠せなかった。

「あぁっ！　思いもよらぬ展開になりました！」
「アレは一体！？」

ジェニアスとマジシャニアも驚きを隠せない。

「なんなんだ、貴様は！？」

メカクネアは質問した。

「ファング。　仮面ライダーファング。」

「なに！？」

ファングはガーネットとオパールの前に立ち、サイコローグとサイコローダーの軍団にこう告げる。

「お前達は、もう僕の牙からは逃げられない！」

ファングは決め台詞を言い放つ。

**マキシマムドライブ！**

「仮面ライダー！？」
「セイバーの他に仮面ライダーがいるなんて・・・」

オパールとガーネットがそういうと、サイコローダーに乗ったサイコローグがファング達の周りに囲む。

「うるさいなあ。　近所迷惑だよ。　降りてもらおうかな。」

ファングはメモリを抜き取り、マキシマムスロットに挿入した。

【ファング・マキシマムドライブ！】

すると、肩から刃が現れ、その刃を着脱した。

「『ショルダーファング』！」

ファングは刃を投げた。
すると、その刃はブーメランのようにサイコローダーを切り裂いた。
『ショルダーファング』で切り裂かれたサイコローダーは爆散し、サイコローグはその衝撃に吹き飛ばされる。

「さて、これで戦いやすくなった。」

サイコローグはファングを襲い掛かるが、ファングに軽くひねさせられた。

【ファング・マキシマムドライブ！】

ファングはすぐにメモリをマキシマムスロットを挿入。
今度は右上腕に刃が現れた。

「『アームファング』！」

ファングは10体のサイコローグに右上腕の刃で切り裂いた。
『アームファング』を受けたサイコローグ達は爆散した。

「オパール、私達も負けてはいられないわよ！」
「もち！」

ガーネットとオパールは立ち上がり・・・

「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」
「『プリキュア・オパールメテオ』！」

ガーネットは『プリキュア・ガーネットクロウ』を、オパールは『プリキュア・オパールメテオ』を放ち、7体のサイコローグを消滅させた。

「数を減らしてくれてありがとね。」

ファングはお礼を言った後、メモリをマキシマムスロットに挿入した。

【ファング・マキシマムドライブ！】

次は脚にマキシマムセイバーが現れる。

「『ファングストライザー』！」

ファングは飛び回し蹴りで最後の1体のサイコローグを蹴り飛ばした。

「えぇっ！？　ちょっと～！？」

「こっちこないで～！！」

『ファングストライザー』を受けたサイコローグは爆散。

それに巻き込まれたマジシャニアとジェニアスは吹き飛ばされ、星になった。

「くっ・・・」

メカクネアは瞬間移動で姿を消す。

ファングはロストドライバーのメモリスロットを縦に立て、ファングのガイアメモリを引き抜き、元の来斗の姿に戻った。

ガーネットとオパールも変身を解除した。

「やぁ、宝塚忍美ちゃんに安美ちゃん。　君たちの事は検索済みさ。」

「えぇ！？」

「なんで私達の名前知ってるの！？」

忍美と安美はいきなりの発言に驚く。

「あぁ、ごめんね。　いきなりそんなこと言って。　まぁ、立ち話もなんだし、『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』で話そう。」

来斗は事情を説明するため、忍美と安美を連れて、『ＴＡＫＯ　Ｃ

ＡＦＥ』に戻る。
ちなみにその時はちょうど休憩時間になっている。

「さて、まずは何故君達の名前を知ってるのか。　それは地球の記憶全てが存在する精神世界・地球（ほし）の本棚で検索をかけると、自動的に本が選ばれ、任意の情報が入った本を絞り込み、その本の内容を見た。　その内容が君達の詳細というわけだ。　つまり、君達の事を調べておいたということだよ。」

来斗は詳しいことを話した。

「「へぇ～・・・」」
「けど、地球の本棚は本来、フィリップという男が持つ特殊能力だけど、僕は違うんだ。」
「え、どういうことですか？」

来斗が意味深な言い分をする。

「実は・・・」

## 木場来斗の過去

僕は風都という町から来た。
その頃の僕は地球の本棚を持っていない普通の人間さ。
学校から帰る途中、『ＮＥＶＥＲ』という集団がＴ２ガイアメモリを集めてると聞いた。
その理由は風都市民を生ける死者にするためだったんだ。
でも、風都で噂をしている仮面ライダーが『ＮＥＶＥＲ』のリーダーを倒した。
次の日、公園で散歩していたら、ブランコにファングのメモリとロストドライバーが置いてあった。
僕の興味本位か、そのメモリで変身したら、急に暴走を起きてしまった。
それによって、公園の遊具が破壊・・・
気が付いたら、どこかの施設の中にあるベッドで寝かされていた。
恐らく、暴走した時に意識がなくなっていたんだろう。

「マスター、準備は整えました。」
「ご苦労。　さて、ここからが本番だな。　このＴ２エクストリームメモリでこの男の体に挿入する。　しかし、問題はドーパントにならないかだな。」

マスターと呼ばれた男はＴ２ガイアメモリの１つ、Ｔ２エクストリームメモリを僕の体に挿し込んだ。
少し痛みがあるが、人体は何も起きなかった。

次の日、いつの間にか自宅にいた。
町の中歩き回ると、カワリーノという怪人が暴れだした。

僕は黙っていられず、ロストドライバーにファングのメモリを挿して、仮面ライダーファングに変身した。
しかし、暴走はせず、力がコントロールしていた。
多分、Ｔ２エクストリームメモリのおかげだろう。
僕はカワリーノと対峙し、結果、僕が勝つことができた。
その時、僕の頭の中に本棚や本がたくさんの世界が浮かび上がった。
それが地球の本棚さ。
Ｔ２エクストリームメモリの影響で地球の本棚が使えるようになったんだ。

～～～～～～～～～～

「ということで、最近怪人達が現れて以来、地球の本棚で検索してたんだ。」

来斗は自分の過去を忍美と安美に話した。

「来斗さんの過去にそんなことがあったなんて・・・」
「あ、そろそろ、休憩時間終わりだ。」

来斗はすぐにエプロンを巻いた。

「じゃあ、また後でね。　困ったことがあったら僕に相談してよ。」
「「はい。」」

来斗は『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』の仕事に戻った。

～～～～～～～

「幻獣ケルベロス拳・幻技・迅愚流（じんぐる）！」

その頃、シンセイジャーは幻獣ケルベロス拳・コウと闘っていた。

「『ハイドロプレッシャー』！」

シンセイブルーは『スプラッシュマグナム』でコウのリングを撃ち落とした。

「『バーニングエアスラッシュ』！」

「『ジャッジメントサンダー』！」

シンセイレッドは『バーニングエアスラッシュ』、シンセイイエローは『ジャッジメントサンダー』でコウを切り裂いた。

「グアァァァァ！！」

「今だよ！」

「あぁ！」

「オッケー！」

シンセイジャーは3つの武器を・・・

「スリーウェポン合体！　『トライデントライフル』！」

『トライデントライフル』に合体する。

そして銃口をコウに向ける。

「『トライデントライフル』、チャージ完了！」

銃口にエネルギーが集まり・・・

「『トライデントパニッシャー』！」

『トライデントパニッシャー』を発射した。

「ウゥアァアァアァアァアッ！！！！」

『トライデントパニッシャー』を受けたコウは爆散。

「よし！」

# 暗黒八惑星新幹部決定戦

ネオプラネット・・・
それは全パラレルワールドを支配するために地球侵略を目論んだ宇宙人集団である。
その集団たちは母船『アルカトラーズ』の内部にあるバトルフィールドに集まっている。
その訳は・・・

「これより、暗黒八惑星新幹部決定戦を始める！」

下半身が蛇で上半身が翼の付いた悪魔のような姿をした３ｍ以上の宇宙人が言い出す。
名はプルト・ハデス。
ネオプラネットの首領で全世界を支配するため、地球の悪の勢力と手を組もうと企んでいる。
バトルフィールドに立っているのはポイズン星人とドクロ星人、メニー星人とミステリー星人である。
暗黒八惑星はプルト・ハデスの幹部であり、最強の戦士の者達である。

「始め！」

プルト・ハデスの合図と共に動くポイズン星人とドクロ星人とメニー星人。
ポイズン星人はメニー星人に、ドクロ星人はミステリー星人に対峙する。

「ハァッ！」

ポイズン星人はメニー星人に毒液を放つ。
メニー星人はそれを回避。

「ムン！」

メニー星人はゴートオルフェノクの姿になり、猛スピードでポイズン星人を襲う。

「グッ、ウッ、ウァッ！」

メニー星人の猛攻により怯むポイズン星人。

「んだ！」

ドクロ星人は骨をブーメランのように投げ、ミステリー星人に攻撃する。

「フフフフ！」

ミステリー星人はその攻撃に難なく回避する。

「フフフ、ドクロ星人。　あなたの背中を見てください。」
「だべ？」

ドクロ星人はミステリー星人の言う通り背中を見ると、３枚の札が貼り付けてあった。

「ウゥアァアァアァア・・・！！！！」

ドクロ星人の体が光に包まれ、消えていった。

「喰らえ！」

メニー星人は止めを刺そうとするが・・・

「甘い！」

ポイズン星人は液状化し、メニー星人の攻撃を回避し、メニー星人の背中に回りこんだ。

「終わりですよ！」

ポイズン星人は毒牙を剥き出し、メニー星人の肩に噛み付こうとした。

「甘いのは貴様だ！」

メニー星人はゴートオルフェノクからブロブの膜インの姿に変わり、毒牙を弾き返した。

「なっ！？」

メニー星人はすぐに膜インからキントレスキーの姿に変える。

「ティアァァァァァッ！！！！」

「！　グワァァァァァァッ！！！！」

メニー星人のパンチに吹き飛ばされるポイズン星人。

そして、キントレスキーからスコルピオワームの姿に変え、ミステ

リー星人を襲い掛かる。
メニー星人は超高速移動能力でミステリー星人に猛攻するが、ミステリー星人はいとも簡単に避け続ける。

「フフフ・・・」
「何がおかしい！」
「メニー星人、あなたの足元を見てください。」
「なに！？」

メニー星人は足元を見ると、まきびしがあった。

「グオォォォォォ！？」

メニー星人はあまりの痛みに元の姿に戻ってしまう。

「卑怯だぞ、貴様！」
「勝てばいいのですよ。　勝てば。」

すると、メニー星人が突然バランスが崩れ始めた。
その理由はメニー星人の足元にビー玉が転がっていたからである。

「ビー玉！？」

ミステリー星人はメニー星人の足元にバナナの皮を投げた。
それによってメニー星人は滑って転んでしまう。

「グオッ！！」
「そこまで！」

プルト・ハデスから終了の合図を出した。

「この勝負、ミステリー星人の勝ちとする。」
「なんと卑怯な、大事な幹部決定戦だというのに武器を隠し持っていたとは！」

ポイズン星人はミステリー星人に文句を言い出す。

「しかし、勝ちは勝ちですよ。　どんな手を使っても勝つことが一番です。」

ミステリー星人はそう告げ、軽く流した。

「ミステリー星人、今日からお前は暗黒八惑星の１人とする。」
「はい、身に余る光栄。」

～～～～～～～～

暗黒八惑星新幹部決定戦終了後、メニー星人は悔しそうに岩を殴り始める。

「おのれ、おのれ、おのれぇ！　まさかミステリー星人に幹部の座を奪われるとは！」

その様子を見たポイズン星人は・・・

（ムゥ、１年前、アースロン様があの事態を避ければ、このようなことは・・・）

～～～～～～～～～

1年前、竜の頭の模したメットとマントを羽織り、銀色の鎧を着た宇宙人・地球のアースロンがドツクゾーンの首領・ジャアクキングに世界征服の協力を要求したが、ジャアクキングはそれを断ってしまったため、アースロンは腕ずくで手を組ませようとした。

「仕方ないなぁ！　僕が君たちと手を組もうとしてるのに、あっさり断ってしまうなんてね！」

「ほざけ！」

ジャアクキングは闇のエネルギーを発し、アースロンに直撃する。アースロンはそれを受け、叫び声をあげる。

こうしてアースロンはジャアクキングの闇の力によって人間の姿、つまり地球人の姿に変えられてしまい、それ以来元に戻らず地球に彷徨ったまま、ネオプラネットの元に帰れなくなったしまう。

～～～～～～～～～

（アースロン様、この地球のどこに・・・）

そう、ポイズン星人をはじめ、ドクロ星人、メニー星人、ミステリー星人が暗黒八惑星新幹部決定戦を始めたのは、アースロンがいなくなってしまったため、アースロンのいない幹部の座を4人の内1人がアースロンに代わり、新たな幹部として活動させるためだったのである。

夏海は和夢のマジックショーを見終わった後、彼女は『ナッツハウス』に向かった。

（和夢さん、人と付き合うの苦手なのかな・・・）

夏海は和夢の態度を思い出して俯きだす。
その時・・・

「キャアッ！」
「アァッ！」

突然、誰かにぶつかった。

「いたた・・・」
「ごめんなさい！」
「い、いいえ、こちらこそ・・・」

夏海が見たのは夢原のぞみと同じ色の髪型で雪城ほのかより短い少女である。
名前は永田愛（ながたあい）。

「立てる？」
「はい。」

夏海が愛に立たせ、しばらく経ち・・・

「ふ～ん、東宝学園から来たんだ。」

「はい、ちょっと訳ありで『ナッツハウス』に寄りに来たんです。」
夏海は愛に事情を話した。
「じゃあ、私も行くよ。　夏海ちゃんここ初めてみたいだし。」
「ありがとう御座います。」
愛は夏海と一緒に『ナッツハウス』に向かった。
その時・・・
「アノヨイーケ～！」
町に3体のアノヨイーケが暴れだした。
その3体のアノヨイーケは薔薇のアノヨイーケとボールのアノヨイーケ、そして注射器のアノヨイーケである。
～～～～～～～～～～
その頃、真理奈はくるみが『ナッツハウス』に行くと聞き、彼女の後をついて行った。
「ちょっと、なんで私についてくるわけ！？」
「そう堅いこと言わないでくださいよ。　あそこには私の知り合いがいるもので。」
くるみは真理奈の事をしつこく感じたのか、怒鳴り始めた。
すると・・・
「！　この気配・・・！」

くるみは何かを感じ取ったのか、立ち止まった。
その時、目の前に地面からゾーマの軍団が現れる。

「こいつら・・・」
「地獄衆!?」

ゾーマの軍団に囲まれる2人。

「ウフフ、まさか変身できるお嬢ちゃんがいるとはねぇ～。」

ゾーマの後ろからゲゾールが現れた。

「けど、今回の作戦は成功間違い無しよ。　キュアパールの所にアノヨイーケを送り込んで、私たちはキュアトパーズとミルキィローズを八つ裂きにする。　いい作戦じゃない。」
「キュアトパーズ？　あなた、プリキュアなの!?」

くるみはキュアトパーズの名前を聞いて、真理奈に振り向く。

「だって、『私はプリキュアです』なんて言える訳無いでしょ?」
(それはそうだけど・・・)
「とにかく、あなた達はここで終わりよ。」

ゲゾールはブラックボックスを取り出し、怪人を蘇らせた。
その怪人は魔化網のバケネコと外道衆のヒャクヤッパである。

「私にピッタリな再生怪人ね。」

ゲゾールはまるで勝ち誇ったように笑い出す。

「真理奈！」
「分かってる。」

真理奈はジュエルコミューンをくるみはミルキィパレットを取り出し・・・

「ジュエルスパークハリケーン！」
「スカイローズ・トランスレイト！」

真理奈はキュアトパーズに、くるみはミルキィローズに変身した。

「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」
「青い薔薇は秘密の印、ミルキィローズ！」

2人は決め台詞を言った後、すぐにゾーマを蹴散らした。

「「ハアアアアアアアアッ！！！！！」」

2人の猛攻により、ゾーマの軍団の半数が消滅。

「ヌゥ、相変わらず使えない一兵卒ね。　バケネコ、ヒャクヤッパ！」

バケネコは複数の尻尾から別のバケネコを作り出し、集団による連携攻撃で、トパーズを襲う。

「ウァッ、クッ、キャッ！」

ヒャクヤッパは全身刃でローズを襲う。

「ウッ、アアアッ！！」

バケネコとヒャクヤッパの攻撃に倒れるトパーズとローズ。

「フフフ、これでとどめよ。『八刀流・大渦巻』！」

ゲゾールは八本の刃を扇風機の応用で回し始める。

すると、刃の中心から竜巻が現れる。

「「キャアァァァァァァッ！！！！」」

ゲゾールの『八刀流・大渦巻』に呑まれるトパーズとローズ。

「オホホ、これが八刀流の真骨頂よ。」

その時、ヒャクヤッパが突然爆散した。

「な、何！？」

煙からキュアブラックと同じ髪型でキュアウィンデイのリボンを追加したキュアミントに似た衣装を身に纏い、薙刀のような槍を持った少女が姿を見せる。

「アンタ、何者！？」

ゲゾールは彼女に質問した。

「友と提携する絆の証、キュアペリドット！」

少女は自分の事をキュアペリドットと名乗った。

「キュアペリドット！？」

「ローズ、それからもう一人のプリキュアさん、一緒に戦おか。立てるん？」

ペリドットはトパーズとローズに一緒に戦おうと言い出す。

「・・・えぇ！」

「了解！」

トパーズとローズは立ち上がる。

～～～～～～～～～～～～

その頃、夏海はアノヨイーケに襲われていた。

勿論、愛も一緒である。

「（仕方ない！）永田さん！」

「ん？」

「私がやろうとしたことを内緒にしてください！」

夏海は『ジュエルコミューン』を取り出し・・・

「ジュエルスパークハリケーン！」

夏海は虹色の風に包まれ・・・

「母なる月と海の恵み、キュアパール！」

キュアパールに変身した。

「（キュアパール！）　よ～し！」

「え？」

「私もやろうかな！」

愛が取り出したのは・・・

「！　『ジュエルコミューン』！？」

ジュエルコミューンである。

「ジュエルスパークハリケーン！」

虹色の風に包まれる愛。

そして、風の中から、キュアウィンディとキュアドリームを混ぜたようなドレスで、髪型が変身前より長くなり、ダイヤモンドを嵌めていたティアラを飾っていた姿になる。

「永久（とわ）に続く愛の調べ、キュアダイヤモンド！」

愛は自らの事をキュアダイヤモンドと名乗る。

「エェェッ！？」

「パール、よろしくね。」

ダイヤモンドはパールに挨拶を交わす。

「よろしくねって！」

パールは未だ驚きを隠せないようである。

## 無双将軍、復活！

「新しいプリキュアですって！？　ええい、やっちゃいなさい！」

ゲゾールはバケネコ軍団とゾーマに命令する。

「いくよ、ペリドット、ローズ！」
「えぇ！」
「いつでもええよ。」

トパーズとペリドットはバケネコの軍団を、ローズはゾーマを相手にした。

「ハァッ、ヤァッ！」
「フッ、ハッ！」

トパーズとペリドットはバケネコの軍団を薙ぎ払う。
バケネコは2人の距離をとって、再び連携攻撃をやろうとしている。

「ウチに任してや！」

ペリドットは薙刀を構える。
そして、その薙刀に緑色の光が包み込む。

「この『ペリドットスピア』の力、見せたるで！」

バケネコが連携攻撃でペリドットを襲い掛かる。

「『プリキュア・ペリドットサイクロン！』」

ペリドットは『ペリドットスピア』の光を風になり、バケネコを次々と切り裂いた。
『プリキュア・ペリドットサイクロン』を受けたバケネコが爆散。
一方、ローズは・・・

「邪悪な力を包み込む、薔薇の吹雪を咲かせましょう！　『ミルキィローズ・ブリザード』！」

『ミルキィローズ・ブリザード』でゾーマを1人残らず消滅した。

「ヌウゥッ、またこんな結果になるなんてね！　けど、キュアパールは今頃アノヨイーケに倒されてるかもね。」

ゲゾールはトパーズ達の前から姿を消した。

「急がなきゃ！」

～～～～～～～～～

「パール、いける？」
「1体ならなんとか・・・けど、3体相手じゃ・・・」
「それなら、私がもう1体なんとかしてやるから。」

パールとダイヤモンドは3体のアノヨイーケと相手をしている。
パールは『ジュエルコミューン』から『パールステッキ』を、ダイヤモンドはマイクスタンドに似たロッド、『ダイヤモンドマイク』に変えた。

「アノヨイ～ケ～！」

薔薇のアノヨイーケが花弁でパールを攻撃する。

「『プリキュア・パールスプラッシュ』！」

パールは『プリキュア・パールスプラッシュ』で花弁を飲み込み、薔薇のアノヨイーケを包む。

『プリキュア・パールスプラッシュ』を受けた薔薇のアノヨイーケは浄化される。

「「アノヨイ～ケ～！」」

ボールのアノヨイーケと注射器のアノヨイーケがダイヤモンドを襲う。

「『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」

ダイヤモンドは自分の歌声を巨大な音符に変え、2体のアノヨイーケを命中する。

『プリキュア・ダイヤモンドソング』を受けた2体のアノヨイーケは浄化される。

「イェイ！」

ダイヤモンドはVサインを出した。

「パール！」

パールが振り向くと、そこにはトパーズとローズ、そしてペリドッ

トが駆けつけてきた。

「トパーズ！」

お互いのプリキュア達は変身を解除する。

「夏海、大丈夫だった？」

「はい、あの人のおかげです。」

夏海はすぐに受け答えし、愛に振り向く。

「初めまして、永田愛です。」

「新真理奈です。　この人は・・・えぇっと、名前なんだっけ？」

真理奈はペリドットに変身した薄緑色のショートヘアーの少女を紹介しようとしたが、聞いたのはキュアペリドットという名前だけであって、本当の名前を知らなかった。

「ウチは堤友子。　昨日ここに引っ越してきたんや。」

少女は堤友子と名乗った。

「立ち話もなんやし、場所を変えましょ。」

「だったら、『ナッツハウス』に来て！　このことをココ様に知らせないと！」

くるみは真理奈達に『ナッツハウス』に招くことにした。

～～～～～～～～

「ヌゥッ！　新しいプリキュアがもう一人いるな～んて！」

ゲゾールは3体のアノヨイーケがパールとダイヤモンドに浄化されたことを報告を聞き、悔しがっていた。

「ジュエルマスタープリキュア、確かに油断ならない存在・・・」

イルバが言い出す。

「あいつらとは違うプリキュアか？」

「誰だ！？」

イルバとドグーンとゲゾールは後ろを振り向いた。

そこには強靭な爪を持ち、３本の角が生え、ギガバトルナイザーに似た棍棒・『獄炎棒』を持ち、鎧を纏った武士、無双将軍・オーガがいた。

「オーガ！」

「ひょっとして、封印が解いたの？」

「抜け出すのに苦労したぜ。」

オーガがいたことを驚きを隠せないゲゾール達。

「キュアマザー、小娘共にいい置き土産しやがって・・・」

## 『ジュエルコミューン』誕生の秘密。

真理奈と夏海はくるみの導きにより、愛と友子と一緒に『ナッツハウス』に訪れた。
ちなみに、今はお客さんはいない。

「驚きましたよ、永田さんと堤さんがプリキュアだったなんて。」
「ウチも初めてプリキュアに変身した時、驚きやったで。」
「でも、どうやって『ジュエルコミューン』を?」

真理奈は愛と友子が『ジュエルコミューン』をどのように手にしたのか聞いてみた。

「ウチはここに引っ越した後、宅配便の人からペリドットと携帯をもろたんや。」
「私はカラオケに行く時、靴箱にダイヤと携帯電話が置いてたわ。差出人の名前も書いてなかったし・・・」

愛と友子は詳しく話した。

「私と夏海は郵便受けに入ってた。そうよね?」
「はい、それが地獄衆の襲撃に巻き込まれた時、『ジュエルコミューン』になったなんて・・・誰が・・・」

4人は『ジュエルコミューン』に関して深刻に考えていた。
その時・・・

「失礼します。」

三つ編みの茶髪の少女が入ってきた。

「いらっしゃいませ。」

夏に化けていたナッツが言い出す。

「お客ではないんです。　新真理奈さんと月野夏海さんがここに来ていると聞いて・・・」

「あ、はい。　新真理奈と月野夏海ですが・・・」

「あなた達が・・・初めまして、安田明子（やすだあきこ）と言います。　あなた達にお話があってきました。」

明子は2人に話があると言い出す。

「なんですか?」

明子はポケットから何かを取り出した。

その何かとは・・・

『ジュエルコミューン』である。

「あぁっ!」

「それは!?」

『ジュエルコミューン』を見た真理奈と夏海は驚きを隠せなかった。

愛と友子も同じである。

「『ジュエルコミューン』!?」

数秒後、４人が落ち着いたところ・・・

「あなた達が贈ったパワーストーンと携帯電話はお母様が組織している『ＲＥＢＩＲＴＨ』から贈った物。」
「「「『ＲＥＢＩＲＴＨ』？」」」
「『ＲＥＢＩＲＴＨ』と言えば妖精の世界を研究しとるって言うあの組織？」
「はい。」

明子はパワーストーンと携帯電話について話した。

「そもそも『ＲＥＢＩＲＴＨ』が現れたのは、邪悪の神・ブラックホールが世界を闇に飲み込もうとした後のことです。」

明子は『ＲＥＢＩＲＴＨ』の誕生を話した。

「ブラックホールは確かに２１人のプリキュアによって倒されました。」
「それが、キュアムーンライトやミルキィローズのような戦士たち。」
「はい。　しかし、世界は救われたものの、闇の使いではありませんが、世界を絶望に陥れようと企む勢力が現れました。」

真理奈達はそれを地獄衆やダイオキシーだと分かった。

「そこでお母様達はそれを食い止めるために対策を練り始めました。
　しかし、手遅れだった。　地獄衆の一人・オーガが２１人の内１６人がオーガに敗れ、プリキュアの力を取られてしまったのです。」

キュアムーンライトが言った事である。
対応する前にすでにオーガがプリキュア達を薙ぎ払ってしまったのだ。

「キュアマザーによってオーガを封印したものの、結局プリキュアの力を取り戻すことができなかったのです。」
「それで、あの携帯電話にプリキュアに変身できるように作り上げたんですか？」
「はい。　しかし、妖精の力を頼ってはオーガが復活し、また奪われることになるでしょう。　だからお母様は別の方法で新たなプリキュアを作ったのです。」

真理奈達はあの姿の事を作られた物だと悟った。

「けど、何も備わっていない状態のままでは対抗できないと考えました。　その時、お母様の前にキュアマザーが現れ、１２のパワーストーンを授けました。　そしてキュアマザーはこう言ったのです。
『パワーストーンは人の心を読み取り、力になる。　パワーストーンと人の心が想いを通じた時、必ず奇跡が訪れるでしょう』。」

明子はキュアマザーの伝言を真理奈達に伝えた。

「じゃあ、あの姿は元々作られたプリキュアの姿じゃなく・・・」
「パワーストーンと作ったプリキュアの姿が１つになった新しい姿なのでしょう。」

真理奈達はキュアトパーズやキュアダイヤモンドのような姿を考えて予想した。

「じゃあ変身する前、頭の中に流れ込んできている物は？」
「パワーストーンが『ジュエルコミューン』の使い方を教えたのでしょう。」

夏海が疑問に思ったことを明子に聞いてみた。
要するに『ジュエルコミューン』の使い方が分かるのは、パワーストーンが真理奈達の頭の中でその使い方を教えたと言うことだろう。

「それで、オーガが封印された後、プリキュア達はどないしはったん？」

「16人のプリキュアのほとんどはオーガに対する恐怖心に支配されています。　オーガはプリキュアの力を奪っただけでなく、皆の頭の中にオーガに対する恐怖を植えつけたのでしょう。」

「そんな、あの伝説の戦士が・・・」

愛は今の伝説の戦士の状況に信じられないと言うような表情を見せる。

「メップルやミップル、フラッピやチョッピも、プリキュアの力が奪われたためか、全くコミューンから元の姿に戻れなくなってしまったらしいのです。」

明子は残念そうな顔で真理奈達に伝えた。

「・・・明子さん。　もしよかったら一緒に戦いませんか？　彼女達を救えるのは私たちしかいない・・・私はそう思います。　それに私の知り合いにもう2人、『ジュエルコミューン』を持っています。」

「！　本当ですか！？」

「はい、宝塚忍美と安美です。　せめてくるみの友達を助ける力になりたいんです。」

真理奈は明子に強気な表情を見せる。

「・・・分かりました。　共に戦いましょう。」

明子は真理奈より了解を得た。

## ネオプラネット、動き出す。

ここは『アルカトラーズ』の船内にある暗黒八惑星の部屋の１つ、『天空の間』。
その部屋の中には鷹のようなメットを被り、白い鎧を纏い、黒い翼を持った宇宙人・天王星のウラヌシオンがいた。

「全パラレルワールドにモニタカの映像で見た結果、デスリードは部下をプリキュア共に戦わせた後に『メモリー』のガイアメモリで計画を進み、地球解放軍はウルトラマンとプリキュアによって壊滅。
そしてウェルザード伯爵はディケイド達に追い詰められている・・・フフフ・・・デスリードやダークがやられた後、ネオプラネットがその世界を支配してやる。」

ウラヌシオンは笑みを浮かびながら言い出す。

「そのためには我々ネオプラネットにも動き出す必要がある。　誰か地球の制圧のために行動する者はいないか！？」
「ハハッ！」

ウラヌシオンの呼びかけにより、鶏のような顔をした宇宙人・スピーチ星人が現れた。

「天王星のウラヌシオン様、このスピーチ星人にお任せください。
すでに計画を実行しております。」
「うむ。　では行け！　プルト・ハデス様のために地球を制圧するのだ！」
「ハハッ！」

スピーチ星人はウラヌシオンの命令を聞いた後、すぐに姿を消した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜

翌日、真理奈と夏海は下校時、忍美と安美に前日の事を伝えた。

「じゃあ、あの携帯電話は明子さんのお母さんが贈ったのね。」
「うん。」
「愛さんと友子さんか。　どんな人かな。」

ワクワクする安美。

「ん？」

夏海は咄嗟に表情を変えた。
なぜなら、目の前に和夢が手品をしているからだ。

「お嬢ちゃん、僕からのプレゼントをあげるよ。」

和夢はシルクハットにハンカチを被せ、ハンカチの隙間に手を突っ込む。

「この帽子からお花を出します。　いくよ、ワン、ツー、スリー！」

和夢は素早く帽子から離すと、薔薇が出てきた。

「ワアァ！」
「はい、僕からのプレゼント！」
「ありがとう！」

和夢は女の子に薔薇をプレゼントした。
その後、少女に別れを告げた。

「和夢さん！」
「ん？」

和夢はすぐに振り向いた。

「君は確か・・・夏海さん？」
「はい！」
「後ろの子達は？」
「新真理奈さんと宝塚忍美さんと安美。　友達です。」

夏海は真理奈達を紹介した。

「今の凄かったね。　男の子が路上で手品をするなんて。」
「・・・僕は女だよ。」

和夢の発言により・・・

「「「「エェェェェェェェェッ！？」」」」

当然驚く。

「うるさいなあ・・・それより、僕に何の用なの？」
「女の子だったの！？」
「ぜんぜん気付かなかった！」
「私も男の人かと思いました。」

和夢は質問するが、話を聞いてなかったようである。

「・・・あのね、もう一度聞くよ？　僕に何の用なの？」

「あ、いいえ。　ただ学園の帰りの途中に偶然に見かけただけで・・・」

「あ、そう。　それは悪かったね。　けど、今の事、忘れてよ。」

和夢はそう告げ、去っていった。

「あ・・・」

「うわぁ、手品する時は結構楽しそうな顔なのに、こういう時になると冷たくなるな。」

「あれ、真理奈。」

真理奈達は後ろに振り向くと、星守と宇治原の姿があった。

「星守さん。」

「えぇっと・・・」

「あ、初めて会うんだったね。　彼は宇治原司君。　先日転校してきたんだ。」

「初めまして。　宇治原司だよ。」

挨拶を交わした宇治原。

「初めまして、新真理奈です。」

「月野夏海です。」

「私は宝塚忍美です。　こっちは妹の安美。」

「どうも！」

「よろしくね。」

真理奈達も宇治原に挨拶する。

「ねぇ、さっき大きな声が聞こえたけど、何かあったの？」

星守は真理奈達に聞く。

「いや、下校中に蛇が見かけて・・・」

「それで驚いてたのか。」

「あ、はい。」

真理奈は和夢が男の子ではなく、女の子だったということを言わずにしていた。

「あ、そうだ。明々後日の日曜日、品川で博物館が開かれるみたいだよ。　噂じゃ、プラネタリウムを見せてくれる場所もあるみたいなんだ。」

宇治原は真理奈達に品川で博物館が開かれることを伝えた。

「プラネタリウム？」

「うん、その博物館の目玉と言えるものみたいだよ。」

「面白そうね。」

「瑞穂ちゃんと翔一と神代先輩にも誘おっかな。」

真理奈達は明々後日、博物館に行くことを決心した。

「星守君はどうなの？」

「残念だけど、僕は父さんとの手伝いがあるから。」

「そうか、それは残念だね。」

星守は博物館には行けないと言い出す。
宇治原は星守と真理奈達が自分の方に振り向いていない時、笑みを浮かべた。

和夢は真理奈達の前から去った後、公園のベンチに座っていた。

（・・・また他人に悪い事言ったな・・・）

和夢は『ジュエルコミューン』を握り締めながら後悔していた。

「平園和夢。」

「！」

和夢はベンチから立ち振り向くと、メニー星人がいた。

ショッカー戦闘員も一緒である。

「幻想サーカス団の一員として働いているようだが、俺からすれば用済み。　ここで消えてもらう。」

「簡単に消されてたまるか！」

和夢は『ジュエルコミューン』にカードを挿し込み、通話ボタンを押した。

すると、虹色の風が和夢の周りに囲む。

「ジュエルスパークハリケーン！」

和夢の掛け声と共に風が包み込む。

そして姿はキュアアクアの衣装を紫にし、髪型はキュアルージュと同じ髪型にして紫に仕立て、カチューシャをはめている。

「平和を望む大いなる夢、キュアアメジスト！」

和夢はその姿をキュアアメジストと名付ける。

「いくよ！　（私は負けない、リリーさんを守るんだ！）」

アメジストは『ジュエルコミューン』からマジシャンが使うステッキ、アピアリングステッキを模した『アメジストバトン』に変える。

「ヤァッ！　ハッ！」

アメジストは『アメジストバトン』の先端に炎を出し、ショッカー戦闘員に叩き出す。

「ええい、何を手間取っている！」

メニー星人はスミロドンドーパントへと姿を変えて、アメジストを襲う。

「ウッ、グッ、グアッ！」

スミロドンドーパントになったメニー星人の猛攻により倒れるアメジスト。

メニー星人はすぐに元の姿に戻った後、すぐに彗星のブレドランの姿に変えた。

「終わりだ。」

彗星のブレドランになったメニー星人がブレドランサーでアメジストの喉元に突きつける。

そして、止めを刺そうとブレドランサーを突き出す。

しかし・・・

「！」

メニー星人の腕に棒で止められていた。
その棒が持っていたのは安田明子である。

「フッ！」
「チィッ！」

明子の一蹴りでメニー星人を後退させた。

「あなたは？」
「私は通りすがりの者ですが、多勢に無勢とは納得できませんね。
平園和夢さん、初めまして安田明子といいます。」
「！？（どうして私の名前を！？）」

和夢は明子に自分の名前を言われたので驚きを隠せなかった。
明子は『ジュエルコミューン』を取り出した。

「！」
「ジュエルスパークハリケーン！」

虹色の風に包まれる明子。
そして、キュアブラックの衣装に水色に仕立て、背中にリボンを胸元に星型のブローチを付加した姿になった。

「成功に導く旅人の心境、キュアターコイズ！」

彼女はキュアターコイズと名乗る。

「キュアアメジスト、助太刀します。」
「・・・ありがとう。」

ターコイズは『ジュエルコミューン』からアギト・フレイムフォームが持つフレイムセイバーに似た剣・『ターコイズカリバー』に変えた。
アメジストは戦闘員に風を纏った『アメジストバトン』で振り叩き、ターコイズは『ターコイズカリバー』で戦闘員を切り裂く。

「『プリキュア・アメジストマジック』！」

アメジストは『アメジストバトン』に紫色の光を溜め込み、戦闘員に撃ち込む。
『プリキュア・アメジストマジック』を受けた戦闘員は消滅した。

「『プリキュア・ターコイズスラッシュ！』」

ターコイズは『ターコイズカリバー』に光を集約し、戦闘員に三日月状の刃で切り裂く。
『プリキュア・ターコイズスラッシュ』を受けた戦闘員は消滅。

「クッ！」

メニー星人はアメジストとターコイズの前から姿を消した。
アメジストとターコイズは元の姿に戻る。

「和夢さん、あなたの事はキュアマザーから聞いてます。　サプライザー家の家宝・時空船パラレルシップが悪者に奪われたため、リリーさんと一緒に対策を整っているようですね。」

「・・・」

「よかったら、私や他のプリキュア達にも手を貸しましょうか？」

明子は和夢に協力を願おうとした。

しかし・・・

「結構だよ。　パラレルシップは僕とリリーさんだけでいい。　仲間なんていらない。　仮面ライダーもスーパー戦隊も・・・彼らと協力するほどの事じゃないんだ。」

和夢はそう告げ、明子の前から去っていった。

「和夢さん、あなたにも仲間が必要な時が来ます。　必ず・・・」

明子は和夢に背を向け、去っていく。

## 品川観覧博物館の罠!?

日曜日、真理奈達は翔一、瑞穂、天馬を連れて品川で開館する博物館に到着した。

「日曜日までに宿題済ませてよかったな?」
「そうね。」
「ずっと僕に頼っておいて何言ってるんだよ?」

翔一と瑞穂の気楽そうな言い方に呆れる天馬。

「アハハハ・・・」

苦笑いする夏海。
その瞬間、ラッパの音が響く。

「あ、始めるわよ。」

翔一達は入り口前に振り向く。
入り口前の横から中学生と変わらない身長で黒いショートヘアーの男性・伊智頭(いちず)まさきと茶色のセミショートでメガネを掛けていた男性・横嶋博(よこしまひろし)が出てきた。

「皆様、ここ品川観覧博物館にお越し頂き、ありがとう御座います。早速ですが、当博物館の創設を提案した横嶋博様からご挨拶、演説をして頂きます。それでは横嶋様。」

伊智頭は横嶋に換わるように後退する。
横嶋はマイクスタンドの前に立つ。

「え～、皆様、本日ここに品川観覧博物館が素晴らしい施設に生まれ変わりました。　これも私の莫大な財力の賜物でありまして、子供達の笑顔を・・・」

横嶋が演説すること３０分後・・・

「・・・であるからにして、この品川観覧博物館は市政の進行としての役割を果たしてくれるでしょう。」

まだ演説をしている横嶋。

「あ、あの～・・・」

止めようとする伊智頭を横嶋が拳骨で殴る。

「人が挨拶してるのに邪魔をするな！」

「あ、でも横嶋様。　客席を・・・」

横嶋は客席に振り向くと、待ちくたびれて欠伸が出たり、寝込んだりする人達が見える。

横嶋はこの状況を読んで・・・

「ゴホン・・・では皆様、この品川観覧博物館の素晴らしさを御自分の目でお確かめあれ！」

横嶋の演説が終わった瞬間ドアが開く。

「ふう、やっと終わった・・・」

「全くね・・・」

安美と忍美は多少イラつきながら言い出す。

～～～～～～～～～～

「ありがとう御座いました。」

その頃星守は父親との手伝いで、パン屋を働いていた。
星守がお客さんが出て行った所を見届ける。
そして・・・

「着いたで。」
「あ、いらっしゃいませ。」

お客さんが出て行った瞬間に別のお客さんが入ってきた。
そのお客さんは愛と友子である。

「お召し上がりですか？」
「はい。」
「チョココロネを2つお願いします。」
「はい、かしこまりました。」

愛と友子はチョココロネを注文した。
星守はすぐにチョココロネを取りに行った。

～～～～～～～～～～

その頃、真理奈達は博物館内に入り、展示物を見た。

その博物館の中にはティラノサウルスの骨格標本、プテラノドンの骨格標本、戦車とジェット機の標本、中世騎士の標本、マンモスの骨格標本、宇宙探査機の標本が置かれている。
それから１０分後、真理奈達はプラネタリウムを見ることができる部屋に入った。

「皆様、お待たせいたしました。　こちらが品川観覧博物館の目玉・プラネタリウム。　このプラネタリウムは知っての通り、惑星、星座、彗星等の星を投影し・・・」

横嶋がまた演説しようとした。
伊智頭はこのままではまずいと悟ったのか止めようとした。

「あの、横嶋様・・・」
「また邪魔しおって、こいつ。」
「でも、横嶋様。　これ以上言ったら楽しめませんよ。」
「あ、ゴ、ゴホン。　それでは皆様、目くるめく星達の祭典を心行くまでお楽しみあれ！」

伊智頭はすぐに操作室に入り、プラネタリウムを作動した。
真理奈達はプラネタリウムから投影した数々の星を見て感動している。
そして、操作室の方では・・・

「フフフ・・・地球人共め。　まさかこのプラネタリウムがドリームエナジーを吸収する装置も搭載されているとは夢にも思うまい。　チーズ、用意はいいな？」
「いつでも、スピーチ星人様。」

チーズと呼ばれた伊智頭はスピーチ星人と呼ばれた横嶋の指示によ

り、スイッチを押した。

## 展示物、独りでに動く！？

品川観覧博物館から帰ってきた真理奈達。
ところが、真理奈達の表情がまるでやる気がなくなったかのような顔になり、ベッドに寝転んでいった。
それは、他の客達にも同じ事が起きている。
星守は真理奈の家に伺った。

「すみません、星守ですけども。」
「あ、はい。」
「真理奈さんは？」
「それが、博物館から帰って来た後、ずっとだらけてて・・・」

真理奈はまだ、目が覚めていないようである。

「一体何があったんだろう・・・」

～～～～～～～～～～

その夜、品川観覧博物館では・・・
館内にあるプラネタリウムの映写機がエレベーターのように下に下降していく。
そこには横嶋と伊智頭がいる。

「フフフフ・・・・ハーッハッハッハッハッ！　ついに太古の封印が解かれる時が来た！　思えば苦節４００年！」

横嶋は客がいないのにも関わらず演説をしている。

「あ～あ、この演説さえなかったら少しは立派なご主人なのになぁ・・・」

愚痴をこぼす伊智頭。

「しかし、あれほどのお客さんからドリームエナジーを吸い取って博物館の標本たちを動かすなんて、ナイスアイディアですねぇ。」

そう、真理奈達がやる気を見せないのは、横嶋と伊智頭が作り上げたドリームエナジー吸収装置搭載のプラネタリウム映写機で集まった客のドリームエナジーを吸い取ったからである。

「チーズ。」
「あ、はい。」
「用意はいいな?」
「あ、いつでも～。」

伊智頭はレバーのあるところに移動した。

「宇宙の使いより集まりし希望の力よ！　我が首領・プルト・ハデス様のために我に力を与えたまえ！」
「別にそんな事言わなくても、このレバーを引けばことが済むんだね。」

伊智頭は横嶋にツッコミを入れながらも、レバーを引いた。
すると、プラネタリウム映写機から眩しい光が放ち、ティラノサウルス、プテラノドンの骨格、騎士の鎧、戦車とジェット機、マンモスの骨格、宇宙探査機に浴び始めた。
そして、これらの展示物が独りでに動き始めた。

～～～～～～～～～～～～～～～

星守は真理奈の家に行った後、翔一、瑞穂、天馬、忍美、安美、夏海の所に駆け寄ったが、皆真理奈と同じである。

『健一、胸騒ぎがするのだが・・・』

「うん・・・でも、なんで・・・」

星守は未だ、何故翔一達の元気がなくなったのか分からないままである。

「教えてあげるわ。」

「『！』」

星守はすぐに振り向くと、そこには幻想サーカス団の一人、サプライザー家の一子・リリー・サプライザーである。

「私はリリー・サプライザー。　あなたの味方よ。」

「リリー・サプライザー？」

リリーは頷く。

「彼らの元気がなくなったのは、ドリームエナジーが吸い取られたからよ。」

「ドリームエナジー？」

「ドリームエナジーは人のいい夢をエネルギーにした物。　別の言い方で言うなら希望の力、生きる力。」

リリーはドリームエナジーについて話す。

「天馬君達は大丈夫なのか？」

「心配しないで。　ドリームエナジーが吸い取られたからといって、命に別状は無いわ。　ドリームエナジーは元々夢から生み出した物だからすぐには元通りになるわ。」

リリーは心配ないと言い出す。

「品川に開館したあの博物館の事知ってるのか？」

「横嶋という男があの博物館が設立したのは、多くのドリームエナジーを吸い取るため。」

「・・・！　まさか横嶋がドリームエナジーを取ったのは！？」

「えぇ、私の勘が間違ってなかったら、博物館の中にある展示物を動かすつもりよ。」

～～～

# 品川を守れ！　仮面ライダー！

独りでに動く展示物に逃げ惑う品川の住人達。

「行け行け～！　僕共よ、存分に暴れ回るがよい！」

横嶋はリーダーを気取っているかのように振舞う。

「やめろ！」

駆けつけたのは仮面ライダーセイバーである。
今はサイキックフォームとなっている。
セイバーはジェット機の標本とプテラノドンの骨格を『セイヴ・ザ・スター』の刃で切り裂く。

「な、なんだ！？」

横嶋と伊智頭は宇宙探査機から覗く。
セイバーはティラノサウルスの骨格をキックで破壊。
その後、マグマフォームに切り替えて、戦車の標本を大破し、アクアフォームに切り替えて、中世騎士の標本を『セイヴ・ザ・スター』で切り裂き、最後にスペースフォームに切り替え、マンモスの骨格標本をバラバラにする。

「お前は！？」
「話は聞かせおいた！　よくも博物館のお客さんのドリームエナジーを吸い取ってくれたな！？」
「ギクッ・・・」

セイバーの言葉に図星となる横嶋。

『ネオプラネット・スピーチ星人、こんな茶番はやめて、正体を現せ。』

「よくぞ見破ったな、惑星テテュスの者よ！　察しの通り我こそがネオプラネット！」

横嶋は変装を解き、スピーチ星人となる。

「我こそがネオプラネットの尖兵・スピーチ星人。」

スピーチ星人はこの状況でも演説をしている。

（・・・名前の通り演説が好きなんだな・・・）

セイバーは今の内に『セイヴ・ザ・スター』から光の刃を放つ。

スピーチ星人と伊智頭は慌てて宇宙探査機を動かして避ける。

「危ねぇな、オイ！　チーズ、反撃しろ反撃！」

「あぁ、探査機ですから武器はないですよ？」

それを聞いたスピーチ星人は伊智頭に拳骨する。

「ひとまず退却！」

「はい・・・」

スピーチ星人と伊智頭は宇宙探査機で品川観覧博物館に向かう。

セイバーも2人を追う。

セイバーが後を追うと、博物館ではすでに2人が待ち伏せていた。

「セイバー、ここでお前の墓場にしてやる！」

スピーチ星人がそう言った瞬間、屋上からプラネタリウム映写機、所々の柱からパラボラが出てきた。
パラボラとプラネタリウム映写機からエネルギーが放ち、一ヶ所に集約し、そして集約した光から雷が放たれる。

「！　ウワアアアアアアアッ！！！！」
「フハハハハハハ！　俺に逆らう者は消え去るのみ！」

嘲笑うスピーチ星人。
その時、捻じ曲げた光弾がパラボラを破壊した。
よって、雷が消えた。
セイバーは後ろに振り向くと、そこには仮面ライダーダブル・ルナトリガーがいた。

「『さあ、お前の罪を数えろ！』」
「仮面ライダーダブル。」
「大丈夫か、お前。」
「はい！」
「よし、あとはあの機械だな。」

ダブルはプラネタリウム映写機に見上げ、トリガーマグナムにトリガーのガイアメモリをセットした。

【トリガー！　マキシマムドライブ！】

「『トリガーフルバースト！！』」

ダブルの『トリガーフルバースト』でプラネタリウム映写機を破壊

した。

「う、嘘・・・」

「新手が増えたか!?　こうなったら仕方がない・・・チーズ、最後の手段だ!」

「へい!」

伊智頭はスピーチ星人の命令で、スイッチを入れた。

「フハハハハハハハハ、　博物館に起爆装置を作動させた!　3分後にはお前達2人ともバーベキューだ!」

「何!?」

「逃げる気か!?」

品川観覧博物館に起爆装置を作動させたことを驚くセイバーとダブル。

『翔太郎、ここで爆発させたら大きな被害が出る!』

「クソッ!」

「ダブル!　僕に任せてください!　あなた達はあの宇宙人を!」

「ハ?」

セイバーはすぐにサイキックフォームにフォームチェンジし、飛翔する。

「セイバー!　博物館の周りにバリアで囲むことはできる!?」

『あぁ、だが問題は時間との勝負。　あの建物に囲むと考えると2分はかかる。』

「それで十分だよ!」

セイバーはすぐに博物館の上に着き、バリアを張る。
ダブルはハードタービュラーでスピーチ星人と伊智頭が乗った宇宙探査機を追う。

【サイクロン！　ジョーカー！】

ダブルはサイクロンジョーカーとなる。

「喰らえ！」

ダブルはハードタービュラーで宇宙探査機に激突する。

「ドワッ！」
「ワアァァァァ！！」

激突した衝撃で落ちる伊智頭。
スピーチ星人はしがみ付いた為、落ちなかった。

「行くぜ。」

ダブルはジョーカーのガイアメモリをマキシマムスロットに挿入した。

【ジョーカー！　マキシマムドライブ！】
「『ジョーカーエクストリーム！』」

ダブルは宇宙探査機に『ジョーカーエクストリーム』を使う。
よって、宇宙探査機が爆発される。

「チクショーッ！　おぼてけよ～！！」

星になってしまうスピーチ星人。
その頃、セイバーはようやく博物館にバリアを包んだ。
同時に爆発するが、爆風は館外に漏れず、街に被害を及ばなかった。

「ふう・・・」

安心するセイバー。
月曜日、真理奈達は元気になり、学校に通うことができた。
ドリームエナジーが吸い取られたとはいえ、人体に影響はないのは確かである。
そして昨日、品川による事件を解決した翔太郎は故郷の風都に帰ったのだった。

# 幻想サーカス団とドリームエナジー

星守は昼休み、ベンチで弁当を食べている。
いや、食べながら何かを考えている。
それはリリー・サプライザーの事である。
昨日・・・

～～～～～～～～～～～～

星守は品川の事件解決後、東宝市に戻り、リリーから話の続きを聞いた。

「今、パラレルシップに乗っている幻想サーカス団は、私の父親に代わって、マスター・ジャグラーが責任者よ。　でも、ジャグラーはドリームエナジーを利用して、多くの金を儲けているわ。」
「ドリームエナジーを利用して？　スピーチ星人のように？」
「いいえ、ジャグラーはエナジーボールにドリームエナジーを溜めて、ドリンクやお菓子を作り上げて商品化している。　それも、すべて金のためにやったこと。」

リリーは今の幻想サーカス団について話した。

「そのエナジーボールが作り出したのはジャグラーって奴だよね。」

リリーは星守の質問に対し、頷いた。

「私はそのエナジーボールを止める方法を探っておいたの。　時空防衛局に伝えたいけど、ネオプラネットと手を組んだ今の幻想サーカス団はパラレルシップを改造して時空防衛局へ連絡することも、

情報が漏れ出すこともできなくなってしまったの。」
「じゃあ、君の父さんはサーカス団の団長であって、時空防衛局の協力者なんだね。」
「えぇ。　でも、お父様は病に倒れ病院送りに。　だから副団長を務めているジャグラーが団長になったの。」
リリーは自分がやろうとした事、自分の父親の事を話した。
「リリーちゃん、僕たちに何かできることないのかい？」
「・・・パラレルシップの事は大丈夫。　心配ないわ。」

～～～～～～～～

リリーから話を聞いた後、リリーはパラレルシップに戻り、解決法を考えた。
星守はパラレルシップやリリーの事を心配している。
「星守君、ここにいるんだ。」
星守は振り向くと宇治原が来た。
「ずっと屋上に行ったのかと思ったよ。」
「宇治原君。」
宇治原は星守の隣に座った。
「ニュースで見たよ。　仮面ライダーが品川を守ったって。」
「本当に？」
「うん、もう一人はダブルだったね。もう一人は知らないけど。」

宇治原は昨日の事を話した。

「会いたいな。　もう一人の仮面ライダー・・・」

宇治原はそう俯いた。

「・・・あ、そうだ。　星守君、真理奈ちゃん達に伝えてくれないかな？　今朝、紫色の騎士が海原市にいる女の子2人を襲ったみたいだよ。」

「え！？」

「真理奈ちゃん達に気をつけてって言っておいて。　もしかしたら紫色の騎士がこっちに来るかもしれない。」

宇治原は星守に真理奈達に伝言を送るように言う。

「分かった。」

「それを聞いて安心したよ。」

星守は弁当を食べ終えた後、中等部に向かった。

宇治原は星守が行った後、笑みを浮かべる。

～～～～～～～～～

「スピーチ星人！　地球での作戦が失敗し、失態を犯すとは、なんてザマだ！」

「ヒィィィィィィィ！！」

ウラヌシオンは作戦失敗を犯したスピーチ星人に叱る。

「ウラヌシオン。」
「誰だ!?」

ウラヌシオンは振り向くと、そこにはカブトムシのようなメットを被り、緑色の鎧を着た宇宙人・木星のジュピタールがいた。

「ジュピタール!」
「地球に送り出した宇宙くノ一から伝言だ。　とうとうあいつが動き出したぞ?」
「なに?」

ジュピタールがウラヌシオンに伝えた。

# 魔導騎士、現る！

下校時間、翔一と瑞穂、天馬は帰りにまた図書館に向かった。

「また図書館かよ・・・」
「もう、いい加減にして欲しいよね。」
「君たちが授業サボるからだよ！」

翔一と瑞穂は相変わらず勉強に集中していないため叱り付ける天馬。

「翔一、瑞穂ちゃん、神代先輩！」

3人は後ろに振り向くと、真理奈、忍美、安美がやってきた。

「真理奈。」
「どうしたの？　3人とも。」
「いやね、私たちも図書館に行こうと思って。」

忍美は瑞穂の質問に問う。

「君達にも宿題で分からない所があるの？」
「そうじゃなくて、読みたい本があって・・・」

真理奈は天馬の質問に問う。

「真理奈と忍美は心配ないとして、心配なのは安美だね。」
「どうしてですか！？」
「だって君、理科や数学はダメなんでしょ？　読みたい本を読む前にそれを勉強した方がいいよ？」

「後でやるから大丈夫です！」

天馬は安美に忠告をする。

その時・・・

【ウー・ザザレ】

「「「「「「えっ！？」」」」」」

翔一達は呪文のような声を聞いた。

すると、翔一達の後ろから魔方陣が現れ、５０体のゾビルが現れる。

いや、ゾビルだけじゃない。

ゾビルの後に紫色の騎士が現れた。

その騎士は・・・

「！　あれは！」

「ウルザード！？」

魔導騎士ウルザードである。

ウルザードは魔法戦隊マジレンジャーと戦ったことがあり、レジェンドマジレンジャーと互角にわたり合えるほど強いインフェルシアの魔導騎士である。

「ジュエルマスタープリキュアにシンセイジャー。　お前達の力、見せてもらおう。」

ウルザードが言い出す。

「忍美、安美！」

「えぇ！」

「はい！」
「瑞穂、天馬！」
「えぇ！」
「うん！」

真理奈達は『ジュエルコミューン』を、翔一達は『シンセイチェンジャー』を構える。

「「「ジュエルスパークハリケーン！」」」
「「「シンセイチェンジ！」」」

真理奈達は虹色の風に覆われプリキュアになり、翔一達は赤、青、黄色の光に包まれシンセイジャーになる。

「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」
「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」
「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」
「私達がここにいる限り！」
「あなた達の年貢は納め時よ！」
「そしてこれまでの自然の怒り、全てを倍にして返してあげるわ！」
「翔ける炎の戦士、シンセイレッド！」
「流れる水の戦士、シンセイブルー！」
「轟く雷の戦士、シンセイイエロー！」
「「「新生戦隊、シンセイジャー！」」」

一同、決め台詞を言う。

「行くぞみんな！」
「「「「オーッ！」」」」

シンセイジャーとジュエルマスタープリキュアはゾビルに相手をする。

「『フレイムソード』！」
「『スプラッシュマグナム』！」
「『ボルテックランス』！」

シンセイジャーは『フレイムソード』、『スプラッシュマグナム』、『ボルテックランス』を出し、ゾビルを応戦。
プリキュアも負けずにゾビルと応戦。

「・・・」

ウルザードは6人の戦闘を見届けている。

「『バーニングエアスラッシュ』！」

シンセイレッドはゾビルに『バーニングエアスラッシュ』を繰り出す。
そして、ゾビルは爆散。

「『ハイドロプレッシャー』！」

シンセイブルーはゾビルに『ハイドロプレッシャー』を繰り出す。
ゾビルはそれを受けて爆散。

「『ジャッジメントサンダー』！」

シンセイイエローは『ジャッジメントサンダー』でゾビルを切り裂く。

よって、ゾビルは爆散する。

「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」

トパーズは『プリキュア・トパーズビッグバン』でゾビルを倒した。

「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」

ガーネットは『プリキュア・ガーネットクロウ』でゾビルを切り裂き、倒した。

「『プリキュア・オパールメテオ』！」

オパールは『プリキュア・オパールメテオ』でゾビルを倒す。

シンセイジャーとプリキュアの技でゾビルは全滅した。

「残ったのはウルザードだけだ！」

シンセイジャーとプリキュアはウルザードに振り向いた。

「流石だな。　・・・だが私を倒すことはできない。」

「なに！？」

「そんなのやってみないと分からないでしょ！？」

シンセイジャーとプリキュアはウルザードに立ち向かう。

「来い！」

ウルザードもジャガンシールドからウルサーベルを抜き取る。

# プリキュア&シンセイジャーVSウルザード

ここは、海原市。
この町には伝説の戦士・プリキュアの内2人、キュアブルームとキュアイーグレットがダークフォールに立ち向かい、戦ったのである。
その海原市に2人の少女がウルザードによって倒され、病院に送られたと言うニュースが流れていたのだ。
その病院にキュアブルームこと日向咲、キュアイーグレットこと美翔舞が訪れている。
その理由は・・・

「よかった・・・ニュース見た時、本当に驚いたもん。」
「ごめんなさい。　わざわざ学校の帰りに来るような事をして。」
「気にしないで、薫さん。」
「うん、私たち友達だから。」
「フフ・・・」

霧生満、薫をお見舞いに来るためである。
そう、ウルザードにやられた2人の少女というのは満と薫のことだったのだ。

「・・・けど、最近怪人達が暴れ始めているのに、プリキュア達が変身できなくなったんじゃあ・・・」

薫は弱音を吐き出す。

「大丈夫だよ。」
「「え?」」
「ゆりさんから聞いたの。　新しいプリキュアが地獄衆と戦ってる

って。」
「だから私たち、彼女達を信じてるの。　プリキュアの力を取り戻してくれるって。」

～～～～～～～～～～

【ドーザ・ウル・ザザード】

ジャガンシールドの瞳からケルベロスを象った衝撃波を放つ。

「「ウワアアアアアアッ！！！！」」
「「「キャアアアアアアアッ！！！！」」」

シンセイジャーとプリキュアはウルザードと戦うが、逆に圧倒されてしまう。

「瑞穂、天馬、『トライデントライフル』だ！」
「えぇ！」
「うん！」
「「「スリーウェポン合体！　『トライデントライフル』！」」」

シンセイジャーは『フレイムソード』、『スプラッシュマグナム』、『ボルテックランス』を合体させ、『トライデントライフル』を完成した。

「ガーネット、オパール、私たちも！」
「「うん！」」

3人は互いの手を置く。

「「「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！」」」
「「「『トライデントライフル』、チャージ完了！」」」
「「「『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！」」」
「「「『トライデントパニッシャー』！」」」

プリキュアは『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を、
シンセイジャーは『トライデントパニッシャー』を放った。
しかし・・・

【ドーザ・ウジュラ】

ウルザードはバリアを張って、2つの必殺技を防がれる。

「何!?」
「嘘!?」
「馬鹿な!?」
「えっ!?」
「そんな!?」
「マジ!?」

防がれたことを驚きを隠せないシンセイジャーとプリキュア。

【ウル・ウガロ】

「『暗黒魔導斬り』！」

ウルザードは『暗黒魔導斬り』でシンセイジャーとプリキュアを切り裂く。

「「ウワアアアアアアッ！！！！」」
「「「「キャアアアアアアアッ！！！！」」」」

よって、倒されてしまうシンセイジャーとプリキュア。
ウルザードは６人が立ち上がる暇を与えず・・・

【ザザード】

ジャガンシールドから光線を発射する。

「「ウワアアアアアッ！！！！」」
「「「「キャアアアアアアッ！！！！」」」」

これにより、シンセイジャーとプリキュアは元の姿に戻る。

「・・・」
「おかしい・・・」
「え？」
「あぁ、俺達の知ってるウルザードはこんなやり方をするような奴じゃなかったぜ！」
「えぇ・・・」

翔一と瑞穂と天馬はウルザードがやってることに疑問を感じた。
確かにウルザードは騎士道精神を持っており、卑怯な戦いを嫌い正々堂々な戦いを好む魔法使いだった。
しかし、今のウルザードはさっきやったように、６人が立つ前に魔法を使ったのだ。

「・・・フッ・・・フフフフフフ・・・フフハハハハハハハハハ！！！！」

ウルザードはしばらくすると笑い出した。
そして、ウルザードの姿から別の姿になった。
その姿は・・・

「えっ!?」
「ココ!?」
「その姿、ムシバーンに操られた時の!」

そう、その姿はお菓子の国でムシバーンに操られ、キュアドリームを苦しめたダーク小々田、すなわちココである。

「流石だな、スーパー戦隊のことよく知ってるな?」

ダーク小々田は笑みを浮かべながら言い出す。

「これは挨拶代わり、次に会う時を楽しみにしているぞ。」

ダーク小々田はウーザフォンを取り出し・・・

【ウーザ・ウジュラ】

ダーク小々田の後ろに魔方陣が現れ、ダーク小々田はそこに足を踏み入れ、消えた。

## ウルザードの謎を暴け！

「流石はインフェルシアの魔導騎士・ウルザード。　もし彼が私と同じ惑星の出身だったら結婚したいくらいだわ。」

『アルカトラーズ』で映像を見ていたのはシャチのようなメットを被り、体を覆うほどのマントを羽織って藍色の鎧を着た宇宙人・海王星のネプトユーヌである。

「フフフ・・・あんないい男を他の女と付き合うなんて勿体ないわね。」

「オイオイ。」

ネプトユーヌが映像から目の前に振り向くと、そこには、プテラノドンのようなメットを被り、トリケラトプスの肩当てを掛け、ティラノサウルスの尻尾を持ち、紫色の鎧を纏った宇宙人・土星のサタンギラスである。

「地球に来る前は俺ほどの男がいるのに、今更地球の騎士に心変わりするなんてよぉ。」

「なんだい、誰かと思ったらスケコマシのサタンギラスか！」

「そんな言い方はねぇだろ？」

「全くノックもせずに入ってきて！　何の用だい？」

ネプトユーヌは怒りながら言い出す。

「これはパラレル星人からの報告だぜ。　ウェルザード伯爵が木っ端微塵に、ライダー組織『シャドウ』がヤイバとケンを退けたようだ。　悪の組織がやられても、また新たな組織が生まれる。　パラ

レルワールドの連中は面白いことするじゃねぇか。」
「けど、私たちにとっては好都合。　手を組むべき組織が新たに明らかになった。」

サタンギラスの報告を聞いたネプトユーヌは立ち上がり、ブラックボックスを開け、数十体怪人を復活させた。

「お前達、直ちに『ヤイバの世界』に向かい、『シャドウ』と手を組みに行け！」
「必要ならブラックボックスを持って行ってもいいぜ？　その方が心強いんだからな。『シャドウ』共にこう言え。　我々ネオプラネットはお前達の為に手助けしてやるってな。」
「ハッ！！」

怪人たちは了承を得て、次元のオーロラに入った。

～～～～～～～～～～

「つまり、紫色の騎士の正体がウルザードで、その姿に変身したのはのぞみちゃんっていう子の知り合いってこと？」
「はい。」

翔一達はウルザードについて話した。

「でも、どうして？」
「分からない。」

皆は何故、ココがウルザードになって真里菜たちに挑戦したのか分からなかった。

「あ！」
「ん？」
「あの人なら分かるかも！」
「！　来斗さんだね！」
「来斗さん？」

忍美と安美は星守達に来斗について話した。

「来斗君に地球の本棚が・・・」
「でも、彼ならあのウルザードについて分かるかもしれない！　知恵を借りよう！」
「そうね。　明日は学校休みだし、聞いてくる必要があるわね。」
「よし、これで決まりだ！」

星守、翔一、瑞穂、天馬、真理奈、忍美、安美、夏海は明日、来斗に会うため、『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』に行くことにした。

～～～～～～～～～～

マンションの屋上に宇治原と伊智頭が立っている。

「流石はウルザード。気に入っただけのことはあるよ。」
「ウーザフォンをココ様に渡してシンセイジャーとプリキュアを退けるとは。　あなた様も流石で御座いますよ、宇治原様。」
「フフ、けど、彼だけじゃ心許ないね。　もう少し、彼の仲間を集めておかないとね。　それにしてもチーズ、彼と同じパルミエ王国の出身なのに、よくネオプラネットのエイリアンと一緒にいれたね？」

宇治原がそう言った後、伊智頭はポンッと煙を立たせ、ネズミのような姿になった。
これが伊智頭の正体であり、チーズの本当の姿である。

「そりゃあもう、私は楽～な生活を送りたいもので協力しますチズ！」
「いいかい、チーズ。　この世に楽して生きれる人生はないよ？　今の君はそれぞれの悪の組織の手伝いをしてもらうからね。　いいね？」
「あ、はい！　宇治原様！」

宇治原に注意されるチーズ。

「星守君、僕をがっかりさせるようなことはしないでくれよ？」

## 激突！　オーガ、現る！

火曜日・・・
今日、東宝学園は振替休日で休み。
星守達は来斗に会うため、『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』に向かっていた。

「『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』で思い出したけど、なぎささんとほのかさんも休日の日に来てるのかな？」
「安美、休日でも私達の学園は振替休日で他の学校も同じ日に休むとは限らないと思うけど・・・」
「そういうもんなのかな？」

安美が言った事をツッ込む夏海。

「あ、見えてきたよ。」

星守は『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』を発見する。
そして、店の近くに席を着いているのは美墨なぎさと雪城ほのか、そして咲と舞である。

「あ！　あの人達は！」

安美は４人を見て興奮し始める。

「安美、興奮しないの。」
「今日はその来斗さんっていう人、来てないね。」

瑞穂は辺りを見ると来斗の姿がないのだ。

「じゃあ、来斗さんが来るまでたこ焼き食べよっか！」
「安美、あんたね・・・」
「まあまあ、忍美。　しばらく休もうよ。」

星守が言い出す。

「あれ？」

夏海が見たのは男の子の服装を着て、頭にサングラスをかけている和夢である。
しかも、その和夢はなぎさ達と話している。

「やっぱり、安田さんが言った通りか・・・」
「私がもっとしっかりしてたら・・・」

なぎさは悔しそうに言い出す。

「別にあなたが責める事じゃない・・・ん？」

和夢は視線をなぎさから夏海達に変える。

「夏海さん？」

～～～～～～～～～～

「えぇぇぇぇっ！？　ココが！？」
「シーッ！」

なぎさが大声を出したため、静かにするようにする一同。

「そのココがウルザードになったんだね。」
「うん。」
和夢が言ったことに頷く真理奈。
「ココが満と薫が・・・」
「信じられない・・・」
「無理はないよ。」
ココがウルザードになって満と薫を襲ったことをまだ信じられない咲と舞。
「あの、和夢さん。　たこ焼きを食べに来たんじゃないんでしょう？」
「当たり前だよ。　ところが、品川の事件の後、僕の先輩が『一人で十分だ』と言い出し、僕を置いて行ったんだ。　それからずっと行く宛がなく、少し休憩にしようとここに来たんだ。」
和夢は『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』に来ていた理由を言い出す。
「その先輩ってリリーちゃんのことだね？」
「なっ！？」
「話は聞いたよ、その事件の後。　リリーちゃんが君を置いて行ったのは、君を巻き込まれたくないと思ったからだと思う。　リリーちゃんからパラレルシップの事を話した時、彼女は『心配ない』って言ってた。　僕は正直心配だけど、彼女は強い女の子だよ。　自分の事より他人の事を気遣ってくれる。　そんな人を信じてみようって思ってたんだ。」

星守が和夢にそう言いだす。
他の皆は話の内容が掴めなかった。

「ほのか、どういうこと？」
「私に聞かれても・・・」

星守はそのことを気付く。

「あ、そっか。　まだ話してなかったね。　実は・・・」

星守は品川の事件の事とリリーについて話す。

「・・・ということだよ。」
「そんなことが・・・」

星守の話を聞いて納得する。
その時、爆発音が響いた。

「なに！？」

皆は音が聞こえた方向に振り向くと、ゾーマとアノヨイーケが暴れていた。

「夏海、安美！　あいつらは私たちに任せて、みんなを安全な所に！」
「はい！」
「うん！」

夏海と安美はなぎさ達を安全な所に連れて行った。

「僕もやるよ！」

和夢は『ジュエルコミューン』を出す。
星守達はそれを見て和夢もプリキュアだと判断した。

「変身！」
「「「シンセイチェンジ！」」」
「「「ジュエルスパークハリケーン！」」」

星守はセイバーに、翔一、瑞穂、天馬はシンセイジャーに、真理奈、忍美、和夢はプリキュアに変身した。

「我が名は救世主、仮面ライダーセイバー！」
「翔ける炎の戦士、シンセイレッド！」
「流れる水の戦士、シンセイブルー！」
「轟く雷の戦士、シンセイイエロー！」
「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」
「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」
「平和を望む大いなる夢、キュアアメジスト！」

決め台詞を言った後、すぐに地獄衆に立ち向かう。
その頃・・・

「夏みん、皆を連れて行った後、私たちもお姉ちゃん達と合流するよ！」
「うん！」

その時、安美達の目の前に地面から別の怪人が現れる。
その怪人は無双将軍・オーガだ。

「！　あ、あなたは・・・！？」
「オ、オーガ・・・！？」

オーガを見たなぎさとほのかが脅えていた。

「久しぶりだなぁ、キュアブラック、キュアホワイト、キュアブルーム、キュアイーグレット、シャイニールミナス。」
「なぎささん！」
「ほのかさん！？」

咲と舞はなぎさとほのかを気にかけている。

「もしかして、あの時明子さんが言ってたオーガに対する恐怖を・・・」
「そうよ、俺の妖術で絶望を与えたのだ。」
「どうしてそんなことするのよ！？」
「残念だがそれはいえねぇなぁ・・・」

安美と夏海は『ジュエルコミューン』を出す。

「ひかり、変身ポポ！」
「うん！」

ポルンは『タッチコミューン』に変わる。

「「ジュエルスパークハリケーン！」」

安美と夏海はプリキュアに変身する。

「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」

「母なる月と海の恵み、キュアパール！」

そして・・・

「ルミナス・シャイニング・ストリーム！」

ひかりはシャイニールミナスに変身する。

「輝く命、シャイニールミナス！　光の心と光の意思、全てを一つにするために！」

オパールとパールはルミナスの前に立つ。

「パール、ルミナスをなんとしてでも守るわよ！」

「うん、前のようにプリキュアの力を吸い取ったら大変なことになるわ！」

２人は身構える。

「なぁに、あの力は１６人分だけで十分だ。いたぶらせてもらうぞ。」

オーガも身構える。

## VS　無双将軍・オーガ

セイバー、シンセイジャー、プリキュアはゾーマを一掃した後、アノヨイーケと対峙している。

「『サンシャイン・ノア』！」

セイバーは『サンシャイン・ノア』でアノヨイーケを撃破。

「「「『トライデントパニッシャー』！」」」

シンセイジャーは『トライデントパニッシャー』でアノヨイーケを撃破。

「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」
「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」
「『プリキュア・アメジストマジック』！」

トパーズは『プリキュア・トパーズビッグバン』、ガーネットは『プリキュア・ガーネットクロウ』、アメジストは『プリキュア・アメジストマジック』を放ち、アノヨイーケを浄化した。

「皆、安美達の所へ行こう！」
「「「「「「はい！」」」」」」

セイバー達は安美達の所に合流し始めた。

～～～～～～～～～～

「やれやれ、いくらウルザードの頼みだからと言って人使い荒いね。
ダークネスのガイアメモリはしばらく残しておきたかったんだけどな・・・」

宇治原は後ろに振り向く。
そこには外道シンケンレッドとダークゴセイナイトと幻獣王リオ、仮面ライダーリュウガと幽汽とダークキバ、ダークドリームとダークプリキュアがいた。

【ウー・ザザレ】

その八人の離れた所から魔導陣が現れ、そこからダーク小々田が出てきた。

「ご苦労だったな。」
「ふふ、正直取っておきたかったんだけど、目的のためさ。これくらいの手助けはするよ。」

ダーク小々田は8人を連れて、魔導陣に入り、消え去った。

「さて、セイバーにシンセイジャー、そしてジュエルマスタープリキュア。これからは一筋縄にはいかないよ。」

～～～～～～～～～～

「『プリキュア・オパールメテオ』！」
「『プリキュア・パールスプラッシュ』！」

オパールは『プリキュア・オパールメテオ』、パールは『プリキュア・パールスプラッシュ』を放った。

「馬鹿め！」

オーガは『獄炎棒』で2つの技を振り払う。

「えっ！？」
「そんな！？」

驚愕する2人。

「喰らえ！」

『獄炎棒』を2人に向け、棒から火炎弾が発射した。

「「キャアァァァァァッ！！」」

火炎弾を受けた2人は倒れる。

「大丈夫ですか！？」
「えぇ、何とか・・・」
「大丈夫。」

オパールとパールの所にいくルミナス。

「その女を守るのもいいが、こっちを忘れてるぜ！」

オーガは『獄炎棒』をなぎさ、ほのか、咲、舞に向けた。

「「！！！」」

火炎弾を発射するオーガ。

咲と舞は逃げようとするが、なぎさとほのかは恐怖で硬直している。

「なぎささん！　ほのかさん！」

パールは瞬間移動能力でなぎさとほのかを救出。

「どうした、あの女を守るんじゃなかったのか？」

オーガは挑発的な態度を見せる。

「あんたね、いきなりなぎささん達を撃つなんてどういうつもりよ！？」

「逃げなかったそいつらが悪い。」

「許さない！」

パールは分身能力で６人になり、オーガに突撃する。

「無駄だ！」

オーガは『獄炎棒』で地面にたたきつける。

するとオパールとパール達とルミナスの足元から火柱が立つ。

「「「キャアアアアアアアッ！！！！」」」

よって倒れてしまうオパールとパールとルミナス。

「真面目にやれ！」

【ファング・マキシマムドライブ！】

「『ショルダーファング』！」

オーガの後ろにファングの『ショルダーファング』が放つ。

・・・が、オーガは素手でその技を弾かれてしまう。

「フン。」

「皆、大丈夫かい？」

ファングは3人の所に駆けつける。

「今日はこれくらいにしてやろうか、あばよ！」

オーガはファングの他に誰かが来ていると感じているのか、ファングの前から姿を消した。

「大丈夫～！？」

遅れながら合流するセイバー達。

「オパール、パール！」

「ルミナス！」

トパーズとガーネットは真っ先に3人の所に駆けつける。

3人はすでに気を失っている。

## 決意する戦士たち

あれから1時間後、3人の目が覚めた。
ひかりはオーガの火柱で右腕と左足に火傷を負ったが、安美と夏海はオーガが去ってから時間と共に傷が癒えていた。

「お姉ちゃん、一体何があったの？」
「私たち、確かにオーガにやられたはずですよね？」

本人も理解できなかったようだ。

「実は・・・」

～～～～～～～～～

「オパール！　しっかりしなさいよ！」
「パール！　ルミナス！　しっかりして！」

ガーネットとトパーズは必死に3人を呼びかける。
すると、アメジストはオパールとパールの傷が徐々に回復していくのが気付く。

「オパールとパール、何か変じゃない？」
「「えっ？」」

トパーズとガーネットはオパールとパールの傷が癒えていく所を見た。
3人はよく見ると、2人が持つ『ジュエルコミューン』のパワース

トーンが光り、それを呼応するようにダイヤの部分が光り出す。

～～～～～～～～～～

「つまり、私達の傷が治っていったのはパワーストーンのおかげだったんですね。」

「多分ね。」

忍美は2人に解釈する。

「それより、ごめん・・・」

和夢はひかりに謝る。

「僕がもう少し早く君たちと合流すれば・・・」

「いいえ、和夢さんが謝ることじゃ・・・」

「そうだぜ！」

「元気だしなよ！」

和夢を励ます翔一と瑞穂。

「うん、安美も夏海も頑張ったんだ。　そう悲観したことじゃない。」

天馬も和夢を慰める。

「和夢ちゃん、リリーちゃんから聞いたけど、仲間はいらないなんて思わないでね。　自分自身がしっかりしなきゃいけないからこそ仲間が必要なんだと思うんだ。」

星守も慰める。

「なぎさちゃんにほのかちゃんも。　これだけは覚えて欲しいんだ。くじけそうな時でも支えてくれる人達がいることをね。」

その後、星守はなぎさとほのかに励ます。

「「はい・・・」」

「うん・・・来斗君、早速本題に入る。　ウルザードのこととココに何があったのかを。」

「分かった、検索を始めよう。」

来斗は目を瞑り、地球の本棚に入る。

「検索する項目はココ、キーワードはウルザード。」

キーワードを言う事で本があちこち去っていく。
そして残った本の内容に目を配る。

「成る程、ココがウルザードとして活動を始めているのは、ダークネスのガイアメモリがココの体内に入ったからだ。　ダークネスは日本語で闇と言う。　そのダークネスのガイアメモリは財団Xが作り上げたメモリ、そのメモリには今まで仮面ライダーやスーパー戦隊、プリキュアに倒された全ての悪の記憶が入っている。」

来斗が詳細した為、一同は納得する。
しかし、一人だけ納得できない者がいた。
それは星守である。

「でも、財団?はユートピアドーパントが倒されてからガイアメモリの流通は打ち切りになったんだよね? 誰がココにガイアメモリを?」

「・・・ダメだ、ダークネスのメモリの所持者を調べたけど、それに関する情報が1つもない・・・」

来斗は検索できないと言い出したため、一同は溜息をつく。

「結局分からずじまいか・・・」

「役に立てなくてすまない・・・」

来斗は検索できなかったことを詫びる。

「これからウルザードのような強敵と戦わなきゃいけないのに、何も分からないまま勝てるのかしら・・・」

忍美はこれからの戦いに不安を抱く。

「大丈夫だよ!」

今言ったのは咲である。

「私達だって強い奴と戦って負けそうな時があったけど、最後まで諦めずに頑張ったんだから。」

「えぇ、世界が滅ぼされそうになったけど、希望を捨てずに戦えた。だから私達はここにいる。」

咲と舞は笑顔で皆に励ます。

「2人はオーガの妖術にかからなかったんですか?」

「えぇ。」
「絶好調ナリ！」

皆は咲と舞の励ましによって笑顔になる。

「本当に勝てるのかな・・・」

なぎさは不安を抱く。

「大丈夫、私達の他にも友子さんや永田さん、明子さんがいます。」
「それに、ゆりさんやくるみ、ひかりのようにオーガに吸収されていないプリキュアはまだ残ってるんです。」
「僕は最初、仲間はいらないと言い続けたけど、僕はもう、みんなと一緒に戦うって決めたんです。ちょっと頼りない所があるけど・・・」
「それどういう意味よ！？」

夏海、忍美、和夢はなぎさに慰める。

「でも・・・」
「大丈夫ですよ！　絶対に皆のプリキュアの力、取り戻して見せますから！」
「何も変わらないままじゃ、いい人生送れませんから。」

安美、真理奈はほのかを慰める。

「僕達が彼女に慰めてるのに、自分自身が弱音を吐いてちゃ、説得力ないからね。」
「そうね、『元気出せ』って言ったばかりだもんね。」
「あぁ、俺達はどんな敵でも負けねぇからな。」

「そうだね、落ち込んでても仕方ないからね。」
「うん、戦いはまだ始ったばかりだ。」

天馬、瑞穂、翔一、来斗、星守の順番に言い出す。

～～～～～～～～～

その頃、明子は他のプリキュアを探すため、四つ葉町に向かっていた。
その途中、キュアパッションこと東せつなと出会い、一緒に行くことにした。

「そう、パワーストーンが携帯電話に・・・」
「はい、ラブさん達は携帯電話にピックルンが乗り移り、リンクルンとなり、プリキュアに変身した。　ジュエルマスタープリキュアと少し似ているかも知れません。」

2人は互いに世間話をした。
その時、黒雲に覆われていないのに雨が降り出す。

「え、雨？」
「おかしい、今日天気は晴れなんですが・・・！」

明子は何かを察した。
誰かが近づいて来るかのように、どんどん音が大きくなっていく。
そして、明子とせつなの前に1人の少女が現れた。
その姿はキュアマリンの髪型をし、かれんが初めて変身した時のキュアアクアの衣装を身を纏い、ブーツを履き、チョーカーを嵌めている少女である。

「だれ！？」

「私はキュアアクアマリン！　水城静香（みずきしずか）！　東せつな・・・いや、イース！　あなたを倒す！」

**キュアアクアマリン、参上！**

キュアアクアマリンはせつなに睨みつける。

「『アクアマリンダガー』！」

アクアマリンは『ジュエルコミューン』から2本の短剣に変わる。

「仕方ない。」

明子は『ジュエルコミューン』を取り出す。

「ジュエルスパークハリケーン！」

明子の周りに虹色の風を覆う。

そして、明子はキュアターコイズに変身する。

「成功に導く旅人の心境、キュアターコイズ！」

そして・・・

「『ターコイズカリバー』！」

ターコイズの『ジュエルコミューン』から『ターコイズカリバー』に変わる。

「ハアアアアアアッ！！」

アクアマリンは猛ダッシュでせつなを襲う。

しかし、ターコイズによって阻む。

「そこを退いて！」

「退かない。」

アクアマリンは何度も『アクアマリンダガー』で斬りつけるが、ターコイズに防がれる。

「くっ・・・なら！」

アクアマリンはターコイズとの距離をとる。

「『プリキュア・アクアマリンクロス』！」

アクアマリンが持つ『アクアマリンダガー』に水を溜め込み、クロス状に斬ると、十字型の水の刃が出る。

しかし・・・

「！」

水の刃が５ｍ足らずで弾け、散ってしまう。

「「？」」

「まただ・・・」

アクアマリンは跪きながら悔しそうに言い出す。

「目の前にイースがいるのに・・・」

アクアマリンの目から涙が流れていた。

「ターコイズ、私に任せて。」

せつなはアクアマリンに近づく。

「静香、あなたはどうして私を?」

「とぼけるな! 散々酷いことしたくせに! あの時、ドームでナキサケーベを使って、周りの人達を危ない目に遭わせたのはイースでしょ!?」

アクアマリンはせつなを襲う理由を話した。

そう、ナキサケーベでキュアピーチ、ベリー、パインを対峙した時、静香もドームで開かれるトリニティのライブに来てたのである。

「その時の私は何もできなかった。 けど、それから数ヶ月経った時、郵便受けに宝石と携帯電話が入っていた。 私がそれを触れると、形が変わって、この『ジュエルコミューン』に。」

真理奈達と同じ境遇で『ジュエルコミューン』を手にしたと言う。

「だから私はプリキュアになって、イースを・・・」

「でも、今の私を見てできると思う?」

せつなの言葉を聞き、彼女の顔を見るアクアマリン。

せつなの顔は優しい表情をしている。

「確かに私はラビリンスの一人として、皆を不幸にしてきた。 でも、ラブ達と出会って幸せの素晴らしさを知って、皆の幸せや笑顔を守るために戦うことを決めたの。 これからもね。」

「・・・」

「私からも言わせておきます。　あの時、水の刃が弾けて消えてしまったのは、人を苦しむ姿を見たくないと思ったからだと思います。
　あなたは優しい子です。　あなたはせつなさんを倒せない。」

せつなとターコイズの説得によってアクアマリンの手から『アクアマリンダガー』を離し、泣き出す。
それと同時に変身が解かれ、先ほどまで降っていた雨も止んだ。
変身が解かれた静香の姿は小学５年生程の体で、黒い髪型に戻っている。

～～～～～～～～～～

パラレルシップではジェニアスがカメラを用意し、マジシャニアはゲームソフトを持ち出し、席に着いた。

「ドリームエナジーで儲かった金でゲームソフトの製作できるなんて、俺達にしかできない芸当だよねぇ～。」
「そうね。　さ、ジェニアス、準備できたわよ。」
「オッケー！　ヨーイ、スタート！」

ジェニアスは掛け声と同時にカメラを回した。

「皆様、お待たせいたしました。　ただいまこの宣伝は時空衛星中継にてお送りいたします。　さて、皆様に注目していただきたいのはこちら。　プレイステーション３のロールプレイングゲーム、『プリキュアオールスターズ　～思い出を取り戻せ！　記憶の塔の大冒険～』！　このゲームはこれまで放送されたプリキュアシリーズの６つの中から選択し、そのプリキュアが大切な人の思い出を取り戻すために記憶の塔にいる支配者の所に向かいます。　４人プレイ

ヤーも可能でミニゲームも入っております。　詳しいことはこのゲームソフトと同時発売の攻略本と取扱説明書にてお送りいたします。」

マジシャニアは持っているゲームソフトの説明をした。
そして、3分後・・・

「はい、お疲れ様～。」

宣伝を終えたマジシャニアに拍手するジャグラー。

「よし、明日はマジックショーがあるから今日は早く準備して、睡眠を取ること！」
「「はい！」」

そう告げ、一同解散した。

# キュアアクアマリン、参上！（後書き）

あくまで小説なので信じないでください。

# リリーの作戦

オーガが地上に現れてから3日後、暗黒八惑星はプルト・ハデスに召集される。
八惑星の中に胸元にライオンの顔のような赤い鎧を纏い、鋭い爪を持ち、トラのような顔をしたメットを被った宇宙人・火星のマルジスと黄金でできたメカ風の鎧を纏い、ブーメランのような形をしたメットに赤いランプを持った宇宙人・金星のヴィーナシエルとイルカのメットを被り、亀の頭の形をした肩当てと鮫の背ビレを持ち、青色の鎧を纏い、トビウオの羽を持った宇宙人・水星のマーキュリアもいた。

「よく集まってきた。　ミステリー星人、ウラヌシオン、ジュピタール、ネプトユーヌ、サタンギラス、マルジス、ヴィーナシエル、マーキュリア。」

暗黒八惑星はプルト・ハデスの前に跪く。

「ウラヌシオン、地球制圧の方は進んでないようだな?」
「申し訳ありません。」
「ネプトユーヌ、サタンギラス。　お前達も怪人たちを『ヤイバの世界』に送り込んで以来報告はないようだな?」
「申し訳ありません、プルト・ハデス様・・・」
「あれから3日も経ったのにまだ報告してこないようで・・・」

プルト・ハデスに謝るウラヌシオンとネプトユーヌとサタンギラス。

「まぁ、いい。　単刀直入に言ってやろう。　お前達は全てのパラレルワールドの内8つの世界に向かい、その世界で前線基地を造る

のだ。」
「別の世界に前線基地を？」
「そうだ、今のパラレルワールドは悪の勢力が大幅に減ってきている。　お前達はそれぞれの世界に巡り、その中のパラレルワールドで前線基地を造り、残党共と共に世界を支配するのだ。」
「「「「「「「「ハハッ！！」」」」」」」」

プルト・ハデスの命令で了解をとる暗黒八惑星。

「では、私は『ヤイバの世界』に様子を見に行った後、すぐに別の世界に行きます。」
「任せるぞ。」
「ハッ！」

ネプトユーヌはプルト・ハデスの前から去った。

（今度は異世界の旅か。　面白くなりそうだ。）

サタンギラスはプルト・ハデスの前から去った。

（次はあのような失態はせん。　なんとしてでも戦士共を倒さねば。）

ウラヌシオンはプルト・ハデスの前から去った。

「ところでプルト・ハデス様、アースロンは？」
「まだ地球人の姿のままだが、簡単にくたばらん。　お前達は前線基地を造ることを考えるのだ。」
「ハッ！」

マルジスはプルト・ハデスの前から去った。

「ミステリー星人、何らかのハプニングで失態を犯し、アースロンが八惑星の座を奪い返されるようなことはするなよ？」
「ご安心ください。　私は決して失態は犯しませんゆえ。」

ミステリー星人はプルト・ハデスの前から去った。

「それじゃ、私も行っちゃおっかな～。」

マーキュリアはプルト・ハデスの前から去った。

（全く、マーキュリアめ。　プルト・ハデス様の前だというのに・・・）

ヴィーナシエルはプルト・ハデスの前から去った。

「では、これにて。」

ジュピタールはプルト・ハデスの前から去った。

「フフフ・・・愚かな異世界の悪の手先共め。　お前達がどれほどほざいていようとも、我がネオプラネットの敵ではない。　我は全ての世界を支配し、全ての者を奴隷にしてやる。　全ては宇宙の闇を手に入れるために・・・ハッハッハッハッハッハッハッ・・・」

～～～～～～～～～～

「『プリキュアオールスターズ　～思い出を取り戻せ！　記憶の塔の大冒険～』か。」
「発売日になったけど値段は６２００円。　高い方だわ。」
「やりたいなぁ・・・」

真理奈、忍美、安美はゲームソフトを見てやりたい気持ちを見せる。

「和夢さん、そう怒らないでください。」
「怒っちゃいないよ。　ちょっと呆れてるだけ。」

夏海は和夢が怒っている表情を見て、宥めようとしている。

「同じだと思いますけど・・・」
「だって分かってるの？　伝説の戦士の殆どがオーガに吸い取られた挙句、妖術で恐怖に陥れたんだよ？」
「分かっています。　けど、焦ったらその時点で負け、落ち着いていかないと逆にやられてしまいます。　それにオーガからプリキュアの力を取り戻すのは夏休みに入ってからと決めました。」

和夢は呆れたような表情で視線を外す。

「和夢さんは学校に行ったりするんですか？」
「僕はパラレルシップにあるティーチャーコンピューターで勉強しているから学校には行っていない。」
「でも、学校で勉強した方がいいと思いますよ。　コンピューターで勉強するより、皆で勉強した方が楽しいと思います。」
「どうして？」

和夢は夏海に質問する。

「勉強しながらお話したり、互いに教え合うのは友達にとって幸せだと思ったからです。」
「・・・」
夏海は和夢の質問に返答する。

～～～～～～～～～～

「マジックショーが終わり、休暇に入った。　逆転するには今しかない。」
リリーは今、東宝市のレストランにいる。
リリーはアタッシュケースを持ち出し、レストランから出て行った。
すると、目の前に星守の姿がいた。
「健一君。」
「やぁ、味方は多い方がいいと思ってね。」
リリーと星守は人目がつかない場所に移した。
そして、リリーはノートパソコンを出して、星守にパラレルシップの中について伝えた。
「船底にバリアの役割として使っているコンピュータがあるの。それを破壊できれば時空防衛局への連絡が取れるはずだわ。」
「ドリームエナジーを溜めている装置はどうするの？」
「ジャグラー達が逮捕された後、時空防衛局に持って行く予定よ。」
リリーの話を聞く星守。
その様子を伺っている人物が隠れて聞いた。

その人物は宇治原である。

（そうはいかないよ、お2人さん。　幻想サーカス団は好きにするんだね。　けど、ドリームエナジーは回収させないよ。）

## キャラクター設定？

木場来斗
１７歳
フィリップの髪型をした少年。
風都の出身で『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』でアルバイトをしている。
過去に仮面ライダーファングに変身したが、力が制御できず、気を失ってしまう。
しかし、何者かによってエクストリームのＴ２ガイアメモリを体内に入れられたことで力が制御できた。
Ｔ２エクストリームメモリの影響で地球の本棚に入ることが可能になった。

仮面ライダーファング
木場来斗が変身する仮面ライダー。
仮面ライダーダブルファングジョーカーのボディサイドのジョーカーがないバージョンと言ってもいい。
ロストドライバーにファングのメモリを挿入することで変身できる。
マキシマムドライブが3段階あり、『ショルダーファング』、『アームファング』、『ファングストライザー』を使うことができる。
決め台詞は「お前（達）は、もう僕の牙からは逃げられない！」

永田愛
１４歳
髪型は赤で雪城ほのかより短い髪で流している。
サンクルミエール学園の出身で中学2年生。
カラオケに行く時、靴箱にダイヤモンドと携帯電話が入っていたのを見つけた。
最近手にしたことから夏海に出会う前に『ジュエルコミューン』に

なったのだろう。
歌を歌うのが大好き。

堤友子
１４歳
髪型は薄緑色のショートヘアー。
大阪から引っ越してきたサンクルミエール学園の中学2年生。
宅配便の人からペリドットと携帯電話の入っていた箱を貰う。
愛と同じように真理奈達と出会う前に『ジュエルコミューン』になったのだろう。

安田明子
１４歳
三つ編みで茶色の髪型をしている。
母親は妖精の世界を研究している『ＲＥＢＩＲＴＨ』を組織している。
ターコイズを貰った後、『ジュエルコミューン』になったと考えられる。
現在、他のジュエルマスタープリキュアを探している。

平園和夢
１４歳
黒いショートヘアーの髪型をしている。
男の服装をしているが、実は女の子。
一人称は『僕』だが、プリキュアに変身した時は『私』。
幻想サーカス団の一人だったが、リリーから「巻き込みたくない」との理由で真理奈達の世界に残された。
最初は仲間を必要としなかったが、少しずつ打ち解けていった。
ティーチャーコンピューターで勉強しているからか、学校には行っていないどころか、入学していなかった。

彼女が『ジュエルコミューン』を手に入れた理由は不明。

水城静香
１１歳
髪型は黒いロングヘアー。
出身校は不明だが、ダンスユニット『トリニティ』のライブに見に来たことから四つ葉町に住んでいると考えられる。
以前、『トリニティ』のライブにナキサケーベに襲われたことでせつなを憎んでいるが、せつなと明子の説得で憎しみから足を洗った。
その時の事件から数ヵ月後、郵便受けにアクアマリンと携帯電話を手にし、『ジュエルコミューン』となった。
そして、彼女は水を操ることができる。

キュアダイヤモンド
姿はキュアウィンディとキュアドリームを混ぜたドレスで、髪型は変身前より長くなり、ダイヤモンド付きのティアラを飾っている。
歌声で怪物を静めることができ、鏡を作ることもできる。
必殺技は『ジュエルコミューン』からマイクスタンドのようなロッド『ダイヤモンドマイク』で自分の歌声を巨大な音符に変えて相手に命中させる『プリキュア・ダイヤモンドソング』。
決め台詞は「永久に続く愛の調べ、キュアダイヤモンド！」

キュアペリドット
姿はキュアウィンディのリボンを追加したキュアミントのドレスで、髪型はキュアブラックと同じ。
トパーズのバリアよりも硬いバリアを出すことができ、風を操れる。
必殺技は『ジュエルコミューン』から薙刀のような武器『ペリドットトランス』で緑色の光を包み込み、その光を風に変えて切り裂く『プリキュア・ペリドットサイクロン』。
決め台詞は「友と提携する絆の証、キュアペリドット。」

キュアターコイズ
姿はキュアブラックの衣装を水色に仕立て、背中にリボンを胸元に星型のブローチを付加。
プリキュアや怪人の位置を探る能力を持つ。
必殺技は『ジュエルコミューン』から剣のような武器『ターコイズカリバー』で光を集約し、三日月状の刃で切り裂く『プリキュア・ターコイズスラッシュ』。
決め台詞は「成功に導く旅人の心境、キュアターコイズ！」

キュアアメジスト
姿はキュアアクアの衣装を紫に仕立て、髪型はキュアルージュと同じ髪型で紫、そしてカチューシャを嵌めている。
別の世界に移動することができ、火、水、風、雷を出すことができる。
必殺技は『ジュエルコミューン』からアピアリングステッキを模した『アメジストバトン』に紫の光を溜め込み撃ち出す『プリキュア・アメジストマジック』。
決め台詞は「平和を望む大いなる夢、キュアアメジスト！」

キュアアクアマリン
姿は『ＹＥＳ！　プリキュア５』のキュアアクアの衣装にチョーカーを嵌め、ブーツを履いており、キュアマリンの髪型をしている。
どのプリキュアよりも走るスピードが速く、水を操る力も強化している。
必殺技は『ジュエルコミューン』から２本の短剣『アクアマリンダガー』に水を溜め込み、クロス状に斬ることで十字型の水の刃を出せる『プリキュア・アクアマリンクロス』。

チーズ／伊智頭まさき

パルミエ王国から来たネズミのような妖精。
語尾は「～チズ。」
楽な人生を送りたいという理由でいろんな悪の手先と手伝っている。
人間の姿になる時は伊智頭まさきという中学生と変わらない身長で黒いショートヘアーをした男に変身する。
又、人間の姿の耐久力はミルクよりも強い。

## 敵キャラ設定？（前書き）

出番が少ないキャラクターもいますが、一応紹介します。

## 敵キャラ設定？

無双将軍・オーガ
強靭な爪を持ち、３本の角が生え、鎧を纏った武士。
地獄衆最強の将軍。
２１人のプリキュアを相手にし、その内１６人の妖精の力を奪うことを成功するが、あと5人という所でキュアマザーに封印される。
しかし、時が経ったことで封印から逃れ、再び姿を現した。
ギガバトルナイザーに似た武器『獄炎棒』で火炎弾を放ったり、プリキュアの力を閉じ込めたりことができる。
妖術を使うこともでき、それで殆どのプリキュアに恐怖の種を植え付けた。

マスター・ジャグラー
手品師のような格好をし、左側だけ黒いペンキで塗りたてたような顔をしている。
人の夢をエネルギーにする『ドリームエナジー』を巨大なボール状の装置『エナジーボール』に溜めている。
ジャグラーは『ドリームエナジー』を使って売り物として販売し、億万長者を狙っているが・・・

レディー・マジシャニア
頬に星とハートマークが塗ってあり、三つ編みで赤い髪型をした女性。
幻想サーカス団の一員。
ジェスター・ジェニアスと共に実況・解説を行う。

ジェスター・ジェニアス

ピエロのような姿をして、仮面を被っていた男性。
レディー・マジシャニアと共に実況・解説を行う。

ガード・パラダイズン
タンクトップを着た筋肉モリモリの男性。
ガードマンをやっている。

サイバティス
蟷螂のようなロボットの姿をしているインセクロイド。
女の声をしている。
プリキュアの解析をしており、インセクロイドの側近として働いている。

メカクネア
蜘蛛のようなロボットの姿をしているインセクロイド。
男の声をしている。

キラービー
蜂のようなロボットの姿をしているインセクロイド。
子供っぽい話し方をする。

## 敵キャラ設定？（後書き）

短くてすいません。

## リリーが変身！　その名はアカツキ

7月19日、終業式を終えた真理奈達は広場に現地集合した。
その広場には庭園が広がっており、中央にはダイヤモンドを模した石とその石を持とうとする手のような石が飾っていた。
東宝市の住民からは『絆柱（きずなばしら）』と呼んでいる。

「和夢さん、彼女達が堤友子さんと永田愛さんです。」
「初めまして平園和夢です。」
「堤友子っていいます。」
「永田愛だよ。」

和夢と友子と愛は互いに挨拶した。

「これで明子さんを含めて8人になったわね。」
「うん。」
「それより、これから伝説の戦士に会いに行くんだけど、どこから行く？」

和夢は真理奈に質問する。

「考えたんだけど、まずは咲と舞の所に行って、次にくるみ達がいる所、次に加音町、希望ヶ花市、四ツ葉町、上泉市へと順番に行くつもり。」
「成る程、咲達以外の人達はオーガの妖術が原因でプリキュアの力を取り戻せても戦う意思がないんじゃ・・・」
真理奈は皆にこれから行く町の順番を言い出す。

「でも、順番に行ったらオーガは別の町に行くことも有り得るんちゃうん？」
「そうだね、だったら分かれて行った方がいいかも。」
「そうね、じゃあ、友子と愛はプリキュア５の所に、和夢と夏海はハートキャッチプリキュアの所に、私と真理奈と安美はスイートプリキュアの所に行き、彼女達にかけられているオーガの妖術から解き放ち次第、皆と連絡を取って別の町に向かう。　という計画はどうかしら？」
「はい。」
「うん、そうしよう。」

７人のプリキュアは三手に分かれて、真理奈と忍美と安美は加音町に、愛と友子はサンクルミエールに、夏海と和夢は希望ヶ花市に向かう。

～～～～～～～～～～

その頃、星守はリリーの導きによってパラレルシップの内部に侵入し、船底のコンピュータに起爆装置を仕掛けた。
今、幻想サーカス団は長期休暇で今はマジシャニアとジェニアスだけである。

「よし、あとはこの辺りに・・・ん？」
「どうしたの？」

星守は起爆装置を仕掛けている途中、鉄の扉を発見した。

「リリーちゃん、後はお願い。　僕、あの扉の中見てくる。」
「分かったわ。　でも手短にね。」

「うん。」

星守は残った起爆装置をリリーに任せ、鉄の扉の方に向かった。
鉄の扉に着いた星守はそれを開けて、中を見た。
その扉の部屋はただの倉庫だったが・・・

「ん？」

星守は『暁』という文字が書いてあるアタッシュケースを見つけた。
星守はそのケースを開けると、黄金で出来たベルトと鍵が入っていた。

（もしかして、仮面ライダーの？）
「健一君、用意できたわ！」
「あ、うん！」

星守はすぐにアタッシュケースを閉め、リリーと合流した。

「健一君！」
「うん、スイッチオン！」

星守は起爆装置のスイッチを押した。
よって、コンピュータが爆散される。

～～～～～～～

「キャアッ！　な、なに！？」
「なんだか知らんが、お前達！　すぐに調べて来い！」

ジェニアスはブラックボックスで復活したマスカレイドドーパントに命令した。

～～～～～～～～～～

「リリーちゃん、さっき倉庫に調べたけど、これ、ライダーベルトみたいだ。」
「なんですって!?」

星守はリリーにアタッシュケースに入っていたベルトを見せる。

「多分、君の父さんがしまっていた物かもしれない。　リリーちゃん、試しに変身してみて!」

星守はリリーにベルトを渡した。
リリーは少し沈黙したが、ベルトを受け取り、腰に巻いた。

「変身!」

リリーは鍵を横の鍵穴に差した。
すると、リリーの体に黄金のよりが纏う。
その姿は『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ』のモビルスーツ・アカツキを連想した仮面ライダーである。

「これは・・・」
「やっぱり・・・」

その時、上から足音が聞こえる。

「リリーちゃん、行くよ！」
「・・・えぇ！」

星守の腰から『セイヴ・ザ・コア』が出てくる。

「変身！」

星守はセイバーに変身する。

「我が名は救世主、仮面ライダーセイバー！」
「リリー・サプライザー、仮面ライダーアカツキ、行くわよ！」

セイバーとアカツキは猛ダッシュで上へ目指す。

## リリーが変身！　その名はアカツキ（後書き）

『ふたりはプリキュアＭＡＸ　ＨＥＲＡＴ』や『ＹＥＳ！　プリキュア５ＧＯＧＯ』の町の名前が分からないんで適当につけました。

## ジャグラーの正体

セイバーとアカツキは船底から操舵室へ上っていく。

「ウオォォォォォォォ！！！！！」

その時、上からマスカレイドドーパントが降りてきた。

『健一！』

「分かってる！」

セイバーはスペースフォームからアクアフォームにフォームチェンジした。

「『オーシャンズ・サーベル』！」

セイバーは『オーシャンズ・サーベル』でマスカレイドドーパントを次々と切り裂いた。

「ハアアアアアアッ！！」

アカツキは装備していたビームライフルでビームを放つ。

「ウオォォォォォォォッ！！！！」

マスカレイドドーパントはアカツキの背後に回った。

しかし、アカツキのウイングが独りでに射出し、ウイングの先からビームが放ち、マスカレイドドーパントを薙ぎ倒した。

「「ハアァァァァァァッ！！！！」」

セイバーは水の刃で、アカツキはビームサーベルで残ったマスカレイドドーパントを切り裂く。
その様子を宇治原が見届けた。

「へぇ、パラレルシップの中にあんな物があるんだね。　でも、もう手遅れだよ。」

宇治原はそのまま姿を消した。

～～～～～～～～～～

その頃、加音町に到着した真理奈と忍美と安美はキュアメロディこと北条響とキュアリズムこと南野奏を探した。

「いい音楽ねぇ・・・」
「うん、幸せな気分になりそう・・・」
「愛さんなら興奮したかもね・・・」

真理奈達は加音町で奏でる音楽に満喫している模様。

「出でよ、ネガトーン！」
「「「！？」」」

真理奈達は近くに走っていった。

～～～～～～～～

「ネ～ガ～！」

広場にいるのは太鼓のネガトーン、そしてトリオ・ザ・マイナーのバスドラ、ファルセット、バリトンである。

「フハハハハハハ！　キュアメロディとキュアリズムがいない今、音符を全て集められるチャンスだ！」

「「我々の勝利だ～！」」

ネガトーンは音波で周りの人に悲しみに沈ませる。

「レッツプレイ！　プリキュア・モジュレーション！」

すると別の場所から声がした。

トリオ・ザ・マイナーとネガトーンが振り向くと、そこにはキュアビートがいた。

「爪弾くは魂の調べ！　キュアビート！！」

「出たな、セイレーン！　今度こそ後悔させてやる！　ネガトーン、やれ！」

「ネ～ガ～！」

ネガトーンはキュアビートを襲う。

「心のビートはもう止められないわ！」

～～～～～～～～～～

「何がどうなってんの!?」
「知らないわよ!」

ジェニアスとマジシャニアは混乱していた。
その時、ドアが力強く開いた。
2人は驚いて振り向くと、星守とリリーの姿があった。

「リリー!?」
「お前ら、何をしたんだ!?」

ジェニアスは2人に質問した。

「時空防衛局との通信を遮断したって言うコンピュータを破壊させてもらった。」
「「エェェェェェッ!!?」」

驚きを隠せないジェニアスとマジシャニア。

『ハッハッハッハッハッ!!』

どこからか声が聞こえた。
すると、舵の真上にある映像モニターからジャグラーが出てきた。

「ジャグラー!」
「それで勝ったつもりかね? 今の私達は幻想サーカス団もパラレルシップもいらん。」
「どういうこと!?」
「こういうことだ。」

ジャグラーが一瞬消え、数秒経ったあと、姿を現した。
しかし、その姿は手品師のような姿ではなく、『流星のロックマン』に出てくるファントム・ブラックを連想した姿である。

「なっ!?」
「これが私の本当の姿だ。　幻想サーカス団の団長は仮の姿。　して、その実態はエンドレスのリーダー・ゴーストのジャグラー。以後、お見知りおきを。」

ジャグラーは星守とリリーに自己紹介した。

「これまで溜めた金はお前達にやる。　それで許してくれ。」

ジャグラーはそう言って映像を切った。

「あいつ・・・!」

## 甲冑将軍、地上に参る。

「2人とも、こっち！」

真理奈達は広場に辿り着いた。

「あ！　トリオ・ザ・マイナーにネガトーン！」
「あの青いプリキュアって誰？」

真理奈達が目の当たりにしたのは、キュアビートがネガトーンと戦っている所である。
しかし、21人のプリキュアがブラックホールと戦っている噂を聞いた為か、キュアビートの存在は知らなかった。

「弾き鳴らせ、愛の魂！　『ラブギターロッド』！」

ビートは『ラブギターロッド』を取り出した。

「ネ～ガ～！」
「『ビートソニック』！」

ビートは『ビートソニック』でネガトーンにダメージを与える。
ネガトーンは『ビートソニック』を受けて倒れる。
その時、ネガトーンの背後から魔方陣が現れ、そこから幽汽とダークゴセイナイト、そしてウルザードがが現れる。

「何だ貴様ら！？」

バスドラはウルザード達を見て驚く。

「キュアビート、又の名をセイレーン。」
「！　（どうして私の事を!?）」
「お前1人では何も守れない。　すぐに楽にしてやる。」

ダークゴセイナイトがレオンレイザーでビートを狙い撃ち、幽汽がコマ攻撃でビートに攻撃する。

「キャアアアアアアアッ!!!!!」

ダークゴセイナイトと幽汽の猛攻に吹き飛ばされるキュアビート。

「トリオ・ザ・マイナー。　不幸を撒き散らすなら今のうちだぞ?」
「誰だか知らんが助かるぞ。」
「「「待ちなさい!」」」

ウルザードとトリオ・ザ・マイナーが振り向くと真理奈と忍美と安美が駆けつけてきた。

「「「ジュエルスパークハリケーン!」」」

真理奈はキュアトパーズに、忍美はキュアガーネットに、安美はキュアオパールに変身した。

～～～～～～～～～～

その頃、静香はラブ達がダンスの練習しているステージの所にいた。

（イースはいろんな人に不幸を撒き散らしてる・・・でも今はキュ

アパッションとしてみんなのために戦ってる・・・私どうすればいいのかな・・・）

静香は沈黙していた。

静香はせつなの笑顔を見て、イースの復讐をする気がなくなってしまったのだ。

「お前がキュアアクアマリンか。」

「！」

静香は後ろに振り向くと、甲冑将軍・イルバがいた。

「誰！？」

「私の名は地獄衆、甲冑将軍・イルバ。」

「！　地獄衆！？　明子さんが言ってた・・・」

静香は『ジュエルコミューン』を取り出し・・・

「ジュエルスパークハリケーン！」

キュアアクアマリンに変身した。

「解放する水難の命運、キュアアクアマリン！」

決め台詞を言うアクアマリン。

「『アクアマリンダガー』！」

アクアマリンは『ジュエルコミューン』から『アクアマリンダガー』に変え、イルバに攻撃する。

「フッ！　どうした、君の力はそんな物ではないはずだが？」
「うるさい！」

アクアマリンはイルバから距離を離し・・・

「『プリキュア・アクアマリンクロス』！」

『プリキュア・アクアマリンクロス』を放つ。
しかし、ターコイズに使った時と同じように５ｍ足らずで散ってしまう。

「！　またか！」
「今のは技のつもりかね？　技はこう使うのだ！　『白虎（びゃっこ）の陣』！」

イルバは鮫の背ビレのような黒い刀・『黒鮫丸』で突くように押した。
すると、アクアマリンが突風に吹き飛ばされてしまう。

「キャアアアアアアアッ！！！！」

アクアマリンはイルバの『白虎の陣』で倒れてしまう。

「君は何故復讐をやめた？　倒さねばならぬ敵がいるというのに、何故倒そうとしなかった？　束せつなに・・・先ほどの技が消えてしまったのは、君が弱いからだ。」
「！」
「君の強さはイースに対する怒り。　復讐こそ生きる力なのだ。あの時と同じように怒（いか）れ！　怒りがお前を強くするのだ！」

イルバはアクアマリンにイースに対する怒りを思い出させようとした。

「怒りが私を強くさせる・・・」

「そうだ、その怒りがあればイースも倒せる！」

## 共に戦うはキュアビート！

「さあ、怒りを身に任せ、イースを倒すのだ！」

イルバはアクアマリンに詰め寄る。

「耳を貸さないでください！」

イルバとアクアマリンが振り向くと、キュアターコイズとキュアパッションが駆けつけた。

「ほほう、自分からやってくるとは・・・アクアマリン、お前の憎き敵が来たぞ。」

「キュアパッション・・・」

アクアマリンは悲しそうな目でパッションを見つめる。

「アクアマリン、私を倒すことで悲しみが晴れるなら・・・来なさい。」

「！」

パッションの言葉に驚くターコイズ。

いや、ターコイズだけじゃない。

アクアマリンも驚きを隠せなかった。

「パッション！」

「手を出さないで。」

パッションはターコイズより前に進み、５ｍほどの距離で立ち止ま

る。
そして両腕を広げ、目を瞑る。

「アクアマリン、彼女が望んでいる。　やるのだ。」

アクアマリンは『アクアマリンダガー』を握る。
そして・・・

「ウワアアアアアアアアアッ！！！！」

アクアマリンは走り出し、パッションに目掛け、斬りかかる。

～～～～～～～～～～

その頃、トパーズ達は・・・

「『プリキュア・オパールメテオ』！」

オパールの『プリキュア・オパールメテオ』でダークゴセイナイトと幽汽を退ける。

「何だ貴様らは！？」
「「何者だ～！？」」

トリオ・ザ・マイナーはトパーズ達に聞く。

「知りたい？　そりゃ、知りたいわよね！　私達は・・・」
「伝説の戦士を助ける為に来た新しいプリキュアよ！」

オパールがキメる所にトパーズが先に言ってしまう。

「そりゃないでしょ！？　一番カッコいい所を！」

「はいはい、黙って戦いに集中しなさい。」

トパーズとガーネットはダークゴセイナイトと幽汽を相手にする。

オパールはネガトーンに攻撃する。

「誰なの？」

「私は伝説の戦士を助けに来た、キュアオパール！」

「同じく、キュアガーネット！」

「そして、キュアトパーズ！　お姉さん方、力を貸すわ。」

「いつの時代の言葉なのよ？　私はキュアビート、援護しなさい。」

「プリキュア、頑張るニャ～！」

トパーズ、ガーネット、オパールはビートのサポートを始める。

トパーズは幽汽を、ガーネットはダークゴセイナイトを引きつける。

「「「『トリプル・マイナー・ボンバー』！」」」

トリオ・ザ・マイナーは『トリプル・マイナー・ボンバー』でオパールとビートを攻める。

「『プリキュア・オパールメテオ』！　砲弾サイズ！」

オパールは『プリキュア・オパールメテオ』を放つが、前までは小さくたくさんのエネルギー弾だったが、今のは大砲の弾程の大きさのエネルギー弾である。

「「「ワアァァァァァァァッ！！！！」」」

『プリキュア・オパールメテオ』に直撃されるトリオ・ザ・マイナー。

「ハアアアアアアアアッ！！！」

ビートの連続パンチに怯むネガトーン。

そして・・・

「おいで、ソリー！」

「ソソ！」

「チェンジ！　ソウルロッド！」

ラブギターロッドをソウルロッドに変形する。

「翔けめぐれ、トーンのリング！　『プリキュア・ハートフルビートロック』！」

ビートはネガトーンに『プリキュア・ハートフルビートロック』を放つ。

緑のリングに囲まれたネガトーン。

「三拍子！　1、2、3！　フィナーレ！」

ネガトーンはビートに浄化され、元の太鼓に戻る。

「ニャップニャプ！」

ハミィは両手を打って音符を浄化し、その音符をラリーの頭部の中に入る。

「ララ！　ラリー！」

ネガトーンが浄化された所を見たトリオ・ザ・マイナーは・・・

「「「覚えてろ～！」」」

瞬間移動で逃げる。

一方・・・

「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」

ガーネットは『プリキュア・ガーネットクロウ』でダークゴセイナイトに攻撃するが、すべて弾かれてしまう。

「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」

トパーズは幽汽に『プリキュア・トパーズビッグバン』を放つ。

しかし、避けられてしまう。

「フフフフ、こいつらと互角に渡り合うほど強くなったか・・・また会おう。」

【ウー・ザザレ】

【ウーザ・ウジュラ】

ウルザードとダークゴセイナイトと幽汽の真下に魔方陣が現れ、消えた。

## キュアパッション、出向く！

アクアマリンは『アクアマリンダガー』でパッションに斬りかかるが、首近くまで止まり、持っていた『アクアマリンダガー』が地面に落としてしまう。
そして、アクアマリンは座り込んで泣きじゃくる。

「パッ・・・ション・・・わ・・・私・・・」
「アクアマリン、よく耐えたわね。　怒りに身を任せても空しいだけ。」

パッションはアクアマリンに抱きしめる。

「あなたの本当の強さは、あなたがよく知ってるわ。　それを忘れないで。」

アクアマリンは号泣する。

「特別な戦士も油断ならないと思い、伝説の戦士を無視したが、気が変わった。」

イルバは三途の川の水を取り出し、その水を近くの石にかけた。

「アノヨイーケ！　三途の川を力に変えて、絶望を陥れよ！」

三途の川の水にかけられた石がアノヨイーケになった。

「アノヨイ～ケ～！！」
「アクアマリン、少し休んでて。」

パッションはアクアマリンを後ろにする。
ターコイズも前に出る。

「アノヨイ～ケ～！」

アノヨイーケは石の礫を飛ばす。

「『ターコイズカリバー』！」

ターコイズは『ジュエルコミューン』から『ターコイズカリバー』へと変化し、風車のように振り回し、石の礫を弾き返す。

「ハッ！」

パッションはキックでアノヨイーケを吹き飛ばす。

「アノヨイ～ケ～！？」

アノヨイーケは後退するが、自分の体を分解し、巨大な石の礫となり、パッションとターコイズを襲う。
パッションとターコイズは何度も回避する。
その時、パッションとターコイズの前に水の竜巻が現れ、石の礫を集約した。

「アクアマリン！」
「ありがとう！」

パッションはアクアマリンに礼を言う。

「歌え！　幸せのラプソディ！　『パッションハープ』！」

パッションは『パッションハープ』を出した。

「吹き荒れよ！　幸せの嵐！　『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』！」

パッションは『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』でアノヨイーケを浄化した。

浄化されたアノヨイーケは元の石に戻った。

「アクアマリン、助かりましたよ。」

「えぇ、あの水がなかったら危ない所だったわ。」

ターコイズとパッションはアクアマリンに礼を言う。

「どう・・・いたしまして・・・」

アクアマリンは口篭ったが、言い返した。

～～～～～～～～～～～～～～～

その頃、夏海と和夢はハートキャッチプリキュアにオーガの妖術を晴らすため、希望ヶ花市に到着した。

しかし、夏海はフェアリードロップに寄り道したので、後回しされるハメになる。

「可愛い！　どの服も好きだな・・・」

「はぁ・・・夏海さん、洋服を買いたい気持ちは分からなくもない

けど、今はそれどころじゃないでしょう？」
「でも、これだけお洒落な洋服を見ると興奮します。」
（・・・ふう、今はこの町のプリキュアを助けないといけないのに、なんて能天気なんだ・・・リリーさんでもこんなこと滅多になかったのに・・・）
和夢は夏海の様子を見て呆れたような顔をする。
「外で待っておくから、満足したら来てよ？」
「はい！」
和夢はフェアリードロップから出て行き、店の前に待った。
（そういや、リリーさん、どうしてたんだろう？）
和夢は空を見上げて、リリーの事を考える。
「・・・ん？」
和夢は空から路地に見下ろすと、一瞬だがスナッキーが見えた。
「スナッキー？　まさか・・・まさかね・・・」

夏海と和夢はフェアリードロップの洋服を見終わった後、別の場所に探してみた。

「全く驚いたよ。　いきなり寄り道するなんて。」
「すみません、可愛かったものでつい・・・」
「なぎささん達が変身できるようになったら買ってあげるよ。　それより今はこの町のプリキュアを探すのが先だよ。」

和夢は夏海と話し合う。

「あの・・・」
「なに？」
「ここに来る前から言おうと思ったんですけど、サングラスはやめてくれません？　なんだか怪しく感じてしまうんです。」
「うるさいな。　僕だって好きで男装したわけじゃないよ。　リリーさんに『女の子だと舐められるから』って言われたからこの格好にしたんだ。」

夏海は和夢が男装し、サングラスをかけているのが気になるらしい。

「だからってサングラスかけなくても・・・」

～～～～～～～～～～

「あ～、びっくりした・・・」
「そうよね。」

「あのセイレーンがだよ?」

一方、真理奈達はキュアビートこと黒川エレンに出会い、彼女がプリキュアだということを驚きを隠せなかった。
今、真理奈達が向かったのは、南野奏の親が働いている『Ｌｕｃｋｙ　Ｓｐｏｏｎ』というケーキ店である。
響も以前、交換ステイの時に手伝っていた。

（真理奈、安美。　ブラックホールの件で彼女達の事を知っているとはいえ、他人のフリするのよ。）
（大丈夫、くるみ相手にも誤魔化したから。）
（任せてよ。）

忍美は耳打ちで真理奈と安美に伝える。

～～～～～～～～～～～～

その頃、愛と友子はくるみに会うため、『ナッツハウス』に向かった。

「真理奈ちゃんから聞いたけど、ココがウルザードになって悪いことしよるなんて、信じられへんな。」
「うん。」

友子と愛はココについて話した。

「でも、誰がココを操ったんだろう・・・」

友子と愛は誰がココをダークネスのガイアメモリで洗脳したのか考

えていた。
その時・・・

「ウワアアアアアアアッ！！！！」

遠くから男性の叫び声が聞こえた。

「なに！？」
「行くで！」

友子と愛はすぐに駆けつける。
数分走り着くと、そこには宇治原が倒れており、その近くには仮面ライダーリュウガとダークプリキュアがいる。

「いけない！」
「助けな！」

友子と愛は『ジュエルコミューン』を取り出し・・・

「「ジュエルスパークハリケーン！」」

友子と愛の周りに虹色の風に覆われ・・・

「友と提携する絆の証、キュアペリドット！」
「永久に続く愛の調べ、キュアダイヤモンド！」

プリキュアに変身した。
そして、ダイヤモンドはリュウガに、ペリドットはダークプリキュアに対峙する。

「ダダダダダダダダッ！！！」
「ハアアアアアアアッ！！！」
最初は押されたが、徐々に押し返すダイヤモンドとペリドット。

【アドベント】

リュウガはアドベントカードでドラグブラッカーを召喚した。
「こんなのあり！？」
ダイヤモンドはドラグブラッカーの火炎弾を回避し続ける。
「『ダークフォルテウェイブ』！」
ダークプリキュアは『ダークフォルテウェイブ』を放つ。
「『ペリドットトランス』！」
ペリドットは『ジュエルコミューン』から『ペリドットトランス』に変化し、『ダークフォルテウェイブ』を受け止めた。

【ファイナルベント】

リュウガは再びアドベントカードを使った。
すると、リュウガの周りにドラグブラッカーが螺旋状に飛ぶ。
「一気に決める！　『ダイヤモンドマイク』！」
ダイヤモンドは『ジュエルコミューン』から『ダイヤモンドマイク』

に変える。

「ハアァッ！！」

リュウガは『ドラゴンライダーキック』を繰り出す。

「『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」

ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』で迎撃する。
しばらく経つと、リュウガが地面に落ち、元の姿の戻り、腕からダークネスのガイアメモリが出てきて、そしてメモリブレイクされる。
ダークプリキュアはそれを見て、退散した。

「ふう・・・」

プリキュアは変身を解除し、宇治原の所に駆けつけた。

「大丈夫ですか！？」
「う、う～ん・・・」

気が付いた宇治原はゆっくりと起き上がる。

「いたたた・・・酷い目に遭った・・・」

宇治原は頭を抱えながら座り込む。

「大丈夫ですか？」
「うん、ちょっと頭を打っただけだよ。　それより、あの人を。」
「あ、はい。」

愛はリュウガになった人を介抱した。

（？　この人、どこかで会うたことが・・・）

## スナッキーがうろつく。

愛と友子と宇治原はリュウガになった人を病院に連れて行った後、病院のドアから出た。

「宇治原さんって真理奈ちゃんの知り合いだったんですか・・・」
「うん、真理奈ちゃんの学園に転校してきたんだ。　・・・と言っても、僕は高等部だけどね。初めて友達になれた人が紹介してくれたんだ。」
「でも、どうしてこの町に?」
「ずっと家に寝転がっても退屈だから、散歩に行こうと思ってね。」

宇治原は東宝学園に転校した事とサンクルミエールに来た理由を話した。

「でも、いきなり仮面ライダーやプリキュアが襲ってくるなんてびっくりしたよ。　僕が気を失っている間に何か起きたのかい?」
「え、いや・・・気のせいですよ。」

愛は誤魔化す。

「そうか・・・じゃあ、また襲ってくるかもしれないから帰るよ。君達も気をつけてね。」
「「はい。」」
「あ、そうだ!　携帯電話のテレビで見たニュースだけど、最近希望ヶ花市で黒い影がうごめいているって噂だよ?　気になるんなら行ってみるといいよ。　それじゃあ。」

宇治原は愛と友子の前から去ろうとした。

「あの！」
「ん？」
「ウチとはどこかで会うてまへんでしたか？」

友子は宇治原に質問する。

「まさか。」

宇治原は返答する。

「そうですか。」
「じゃあね。」

宇治原は愛と友子の前から去った。

「どうしたの？」
「いや、どこかで会うたことあるような気がしたんやけど・・・」

～～～～～～～～～～～～

その頃、夏海と和夢は・・・

「はぁ～、つぼみさんとえりかさんが合宿でいないなんて・・・」
「僕達って一体何しに来たんだろう・・・」

つぼみとえりかがいないため、公園のベンチで座り込んでた。

「まぁ、悩んでも仕方ない。　こうなったらキュアサンシャインと

キュアムーンライトを探そう。」
「はい。」

夏海と和夢はベンチから立ち上がった。

「ん？」
「え？」

和夢は何かを見つけような反応をする。
夏海は和むが見た所に視線を移すと・・・

「キーキー・・・」
「キー・・・」

たるんでるスナッキーがいた。
しかも2体いる。

「スナッキー！？」
「やっぱり！」
「キー！？」

スナッキーは夏海達の声に反応して振り向くと、すぐに逃げ出した。

「あ、待て！」

夏海と和夢はスナッキーの後を追う。

「どうしてスナッキーが！？　確か砂漠の使徒はいなくなったんですよね！？」
「うん！　でもスナッキーがここにいるということは、あいつらは

残党だ！」

追いかけてから１０分後・・・

「キー・・・キー・・・」

「キー・・・キー・・・」

スナッキーは走り疲れたのか、休憩した。

グ～・・・

「「キー・・・」」

スナッキーが先程たるんでいたのは、お腹が空いていただけであった。

「追いついた！」

「！　キー！！」

スナッキーは夏海と和夢に捕まえられてしまう。

そして、１５分後・・・

「キー！　キー！」

「キーキー！」

スナッキーはおにぎりを食べ始めた。

ちなみにそのおにぎりは和夢が買った物である。

「余程、おなかが空いていたんですね・・・」

「全く、なんで砂漠の使徒の戦闘員のために買わなきゃいけないん

だよ？」

夏海にお願いしておにぎりを買っていたらしい。

「キーキー。」

「キー。　キーキー。」

スナッキーは何かを話そうとした。

和夢はポケットから小さな機械を取り出し、スナッキーに向けた。

すると、画面から文字が出てきた。

「なになに？　『僕達はプリキュアに謝りたくてこの町に来た。けど、どう信じさせればいいか分からず、ずっと隠れてた』。」

「つまり、反省したかったんですね？」

「キー。」

スナッキーは頷いた。

「本当に反省してるの？」

「キー。」

スナッキーは再び頷いた。

「彼女達を騙して変身アイテムを盗もうとしたんじゃない？」

「キー！　キーキー！」

スナッキーは自分の顔を振る。

「和夢さん、とりあえずいつきさんの所へ行きましょう。　スナッキーも来ますか？」

「「キー！」」

スナッキーは頷く。

「但し、彼女に会う時は君達の人生がないと思ってよ？」

「キー！」

## エンドレス、動き出す。

その頃、暗黒八惑星の一人、木星のジュピタールは土星のサタンギラスと金星のヴィーナシエルと連絡を取っている。

「つまり、まだ見つけていないのは我々以外5人だけか。」
「そういうことになりますね。」
「『ヤイバの世界』ではヘルって野郎がやられちまったらしいな。怪人共が手を組んでる様子もない。あいつら『シャドウ』に倒されたな?」

サタンギラスは『ヤイバの世界』の現状を伝えた。

「世界を救済する戦士ですから、それは仕方ないかと・・・」
「仮面ライダーゴッドか・・・新たな悪の組織が誕生しただけでなく、新たな戦士まで現れるとは・・・」
「しかし、ヘルって野郎め、わざわざプロトを復活させ、ヤイバに戦わせたのに無駄骨だったな。地球人は本当に弱い生き物だぜ!ガッハッハッハッハッハッ!!」

サタンギラスはヘルの最期を笑った。

「全く、女好きのサタンギラスが地球人をバカにするのもどうかと思うがな・・・」
「いいじゃねぇか。別の惑星の人間と交際しても構わないものだぜ? それこそ奇跡みたいにな。」

サタンギラスはジュピタールに楽しげに言い出す。

「確かに地球人は弱い生き物だが、女の大半は可愛いのがたくさんいるもんだぜ。　ネプトユーヌが地球人に惚れちまうのに分かる気がするぜ。　目移りが激しくなるというか、なんと言うか・・・」
「サタンギラス、後でネプトユーヌに知らせるぞ。」
ジュピタールは呆れ気味に言い出す。
「しかし、気になるのは惑星テテュスの使いです。　なぜ、我々と同じエイリアンが地球人と共に戦ったのでしょう?」
「私も少し気になっていたのだ。」
ヴィーナシエルとジュピタールはセイバーについて疑問を持っていた。
「決まってる、地球人になりすましたエイリアンとの感応だ。」
サタンギラスは得意げに話す。
「では、セイバーはアースロンの存在に気付いたと?」
「あぁ、セイバーは地球に到着次第、アースロンの後を追うつもりだが、手下が地球人を襲う所を見て、先にそっちに優先したんだよ。　そこで自分のエネルギーを使って、ブラックボックスで蘇らせた怪人を倒した。　だが、それにより地球で活動するエネルギーが保てなくなり、近くにいた地球人と同化したんだよ。」
サタンギラスは分かりやすく話す。
「地球人と同化すれば、アースロンを見つけるのに容易いことだからな。」
「しかし、なぜセイバーはアースロンがすぐ近くにいたのに倒そう

としなかったのでしょう？　地球人に宇治原司と名乗る者の正体を伝えれば絶好のチャンスだというのに・・・」

「だからだよ。　すぐに気付いてすぐに正体を明かせば、周りの奴らにも危害が及ぶ。　そうならないように友達のフリをしたんだよ。　もっともそう提案したのは同化した地球人だがな。」

サタンギラスはヴィーナシエルの疑問を明確に説明した。

「アースロンと地球人のガキとの知恵比べか。　これは見物だぜ。」

～～～～～～～～～～～～～～～

ここは光のない空間。

そこにはゴーストのジャグラーと赤い長髪の吸血鬼・バンパイアのカミーラと巨大なハンマーを持つ石の怪人・ゴーレムのパラダイズンと強靭で大きな爪を持つ狼のような怪人・ウェアウルフのガルムがいた。

「ジャグラー、そのエネルギーで地球が夜の世界に変えれるんだな？」

「早くやってよ。」

ガルムとカミーラは待ちきれずに言い出した。

「まぁ、落ち着け。　まだ満タンになったわけじゃない。　もっともっと集めないとな。　ということで、カミーラ、ガルム。　２人はまたお留守番だ。」

「チェッ、なんだよ・・・」

「パラダイズン、もう一度人間の姿になって、ドリームエナジーを集めるぞ。」
「分かったぜ、マスター！」
「だからその呼び方はいいの。」

ジャグラーとパラダイズンは人間の姿になり、空間の外に出た。

## シンセイジャー、明日の予定

宇治原はサンクルミエールを後にし、東宝市に戻った。

「リュウガが倒されるなんてね。　正直驚いたよ。　プリキュアが仮面ライダーを倒す描写なんて滅多にないからね。」

宇治原は先程のペリドットやダイヤモンドの戦いを見て感想を述べた。

「プリキュアは惑星テテュスの住人程じゃないけど強い。　もっと彼女達について調べた方がいいかも。　ただのオシャレ少女だと思って甘く見てしまったからね。」

宇治原はポケットからダークネスのガイアメモリを取り出した。

「さて、どんな悪を変身させるかな・・・」

宇治原は屋上から町の人を見回した。
その時、ダークネスのガイアメモリが持っている手が一瞬だが怪人の手が浮かび上がった。

「！　これは・・・」

宇治原は町の人から目を逸らして自分の腕を見た。
宇治原は一瞬浮かび上がった怪人の手を見て笑みを浮かべた。

「ようやく本当の姿に戻れるようになったようだね。」

宇治原はガイアメモリをポケットにしまうと、別の姿になった。
その姿は・・・

「地球のアースロン・・・ただいま復活だ。」

ネオプラネットのエイリアン、地球のアースロンである。
アースロンはすぐに宇治原司の姿に戻る。

「ジャアクキング、感謝してるよ。　僕を地球人の姿にさせたのは・・・これが理由なんだね？」

～～～～～～～～～～～～

その頃、星守は・・・

「リリーちゃん。　これからの仕事がキャンセルしちゃったけど、本当にそれでいいの？」
「えぇ、これからは地獄衆やエンドレスを倒さなきゃいけない。それに、ジェニアスやマジシャニアがどさくさに紛れて逃げ出したわけだから、すぐに追わないと。」

リリーは幻想サーカス団の団員、ジェスター・ジェニアスとレディー・マジシャニアを追うべく、スケジュールの仕事をキャンセルした。

「それじゃあ、また今度。」
「うん・・・でも、リリー・サプライザーじゃ、ちょっとね・・・」
「え？」

星守は深刻に考え始めた。
そして・・・

「よし、君の名前を変えよう。　君の名前は時守(ときもり)ソラだ。」
「時守ソラ？」
「うん、時間と空間を守る少女。　君にピッタリな名前だよ。」

星守はリリーに名前の由来を教えた。

「よく考えた物ね。」
「それじゃ、ソラ。　また会おうね。」

星守は時守にそう告げた。

「えぇ。」

時守はパラレルシップに乗った。
星守もその場から去った。

『健一、ようやく彼が本気を出してきたぞ。』
「うん、宇治原君・・・いや、アースロンのことだね。　彼が東宝学園に来た時、君が気付いてくれなかったら、僕は戦いづらくなるかもしれない。」
『私を救ってくれた礼だ。　しかし、これからは一筋縄にはいかない。』

～～～～～～～～～～

その頃、翔一達は図書館に訪れた。

「夏休みに入ったのにまた図書館かよ。」
「今度はどんな本を読んでんのよ？」
翔一と瑞穂は机で待ちぼうけしていた。
「二人とも、これを見て。」
天馬は持って来た本のページを見せる。
「この川の近くにある大樹。　この大樹は昔、僕達と同じシンセイジャーが訪れたようだけど、その大樹には守護獣と呼ばれるシンビーストが眠っている不思議な世界に通じてるみたいなんだ。」
天馬は本に書いてあった内容を話した。
「そこで、明日はその大樹の所に行き、本当かどうか調べてみよう。」
要するに、本に載っている川の近くに大樹があって、その大樹には別の世界に通じる道があるという、天馬は明日、翔一と瑞穂と一緒にそこに行って、シンビーストがいるのかどうか、調べに行こうとしていた。
翔一と瑞穂の返事は・・・
「あぁ、そうだな。」
「そうね、これからは戦力を上げないとね。」
迷う事無く了承した。

## ペリドット・ダイヤモンドＶＳ無双将軍オーガ

「アアアアアッ！！！！」

ミルキィローズが衝撃によって吹き飛ばされた。
その衝撃の正体は地獄衆、無双将軍・オーガである。

「ミルク、貴様一人立ち向かった所で何が出来る？　ドリーム達の力も俺の手にあり、妖術にかけられたプリキュアも恐怖に怯えている。　貴様に勝ち目はないことを知っているはずだぜ？」
「クッ・・・」

ローズはフラつきながら立ち上がる。

「例え勝ち目がなくても！」
「戦わなアカン時があんねや！」

オーガの前に立ちはだかったのはキュアダイヤモンドとキュアペリドットである。

「やはり来たな？」
「ペリドット、ダイヤモンド！」
「大丈夫なん？」
「ゆっくり休んどいて。」

ダイヤモンドとペリドットはローズに向けて笑顔で言い出す。

「貴様等は遊べそうだな？」
「オーガ、アンタの悪巧みは許さへんで！」

「覚悟しなさい！」

ダイヤモンドとペリドットはオーガに立ち向かう。

「ダダダダダダダダッ！！！」

「ハアアアアアアッ！！！」

ダイヤモンドとペリドットは猛ラッシュでオーガに攻め込む。
しかし、オーガはそれをすべて防いだ。

「フン！」

オーガは距離をとって火炎弾を放った。

「ハッ！」

ダイヤモンドは鏡を出して、火炎弾を防いだ。

「『ダイヤモンドマイク』！」

「『ペリドットトランス』！」

ダイヤモンドは『ジュエルコミューン』を『ダイヤモンドマイク』に変え、ペリドットは『ペリドットトランス』に変えた。
そして、２人は再びオーガに攻撃した。

「やるな、オパールとパールとは違うぜ。」

「プリキュアの力を奪い取り・・・」

「皆を恐怖に怯えさせるやなんて・・・」

「「絶対に許さない（へん）！」」

2人は構えた。

「『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」
「『プリキュア・ペリドットサイクロン』！」

ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』を、ペリドットは『プリキュア・ペリドットサイクロン』を放った。

「ヌゥアァァァァァッ！！！！」

しかし、オーガはその2つの技を弾き返した。

「「！？」」

ダイヤモンドとペリドットは驚きを隠せない。

「喰らえ！」

オーガは再び、火炎弾を放った。
ダイヤモンドとペリドットはそれを回避した。

「まだまだ！」

オーガは『獄炎棒』を地面にたたきつけた。
よって2人の真下から火柱が立つ。
火柱が止むと、ペリドットがいなく、ダイヤモンドは無傷のまま立っていた。

「なに！？」
「ペリドット！」

「ハアアアアアアアア！！」

ペリドットはオーガの真上から『ペリドットランス』で急降下する。
そして・・・

バキッ！！

オーガの『獄炎棒』の片方の先端部分が砕かれ、そこから5つの小さな光の玉が出てきた。

「やった！　ついに取り返した！」
「ダイヤモンド、ペリドット！」

ローズは喜んだ顔でダイヤモンドとペリドットに駆けつける。

「やるな、さっきのは鏡で映したか・・・だが、プリキュアの力を取り戻せても、俺の妖術が解かれるわけじゃねぇ。　それを覚えてろ。」

オーガは3人の前から姿を消した。

「妖術を解かせることは出来なかったけど、ドリーム達の力を取り戻せてよかったね、ローズ、ペリドット。」
「えぇ。」
「・・・」

ローズはダイヤモンドの言葉に返事するが、ペリドットは何も言わなかった。

「ペリドット？」

「あのオーガ、わざとプリキュアの力を取り戻させた気が・・・」

～～～～～～～～～～

「何故、わざと奴らに差し出した？　もう一度奪い返せば伝説の戦士を復活することはなかった。」

イルバは今帰って来たオーガに質問する。

「これを見ろ。」

オーガがイルバに見せたのは赤黒いエネルギー体である。

「これは？」

「負の力だ。　人間が絶望に陥れた時、このように集まってくる。だから伝説の戦士に妖術をかけたんだ。　プリキュアの力を奪ったのはただのカモフラージュよ。」

オーガは質問に答えた。

「その力を何に使うつもりだ？」

「それは内緒だ。　さて、俺はもう一度出かけるぜ。　次はメロディとリズムの所だ。」

## 妖術を解くには・・・

その頃、真理奈達はエレンの導きによって、『Ｌｕｃｋｙ　Ｓｐｏｏｎ』に訪れた。

「いやー、練習試合の時は本当に参ったよ。」
「ねぇ。」
「フフ、けど、いい試合だったよ。」

忍美と安美と響は練習試合をしていた頃を話していた。

「あ～あ、これだから運動部は・・・」

真理奈はやや呆れ気味でボソッと言い出した。

「真理奈、あの話本当なの？」
「えぇ、オーガって言う妖術使いの将軍が皆を苦しめたの。」

真理奈はエレンにオーガについて話した。
その時、真理奈の『ジュエルコミューン』から着信音が・・・

「？　愛からかな？　もしもし。」
「もしもし？　私、明子の母で安田成実です。」
「えぇ！？　明子さんの！？」

真理奈は成実の事を明子の母だと聞いて驚く。

「今、加音町にいるんだけど、今どこにいるの？」
「え、あぁ、今は『Ｌｕｃｋｙ　Ｓｐｏｏｎ』にいますけど・・・」

「じゃあ、忍美ちゃんと安美ちゃんもいるわよね？」
「はい。」
「じゃあ、今から響ちゃんと奏ちゃんを連れて、調べの館に来て欲しいの。」

成実は真理奈に響と奏を調べの館に連れてくるように言い出す。

「調べの館に？」
「用件はそこで言うわ。　とにかく連れてきて。」

成実は真理奈にそう告げ、電話を切った。

「真理奈、どうしたの？」
「明子さんのお母さんが加音町に来てるの。」
「「明子さんの！？」」
「調べの館に響と奏を連れてきてって。」

真理奈は皆に成実の言葉を伝える。

「なんだろう？」

～～～～～～～～～

真理奈達は響、奏、エレンを連れて、調べの館に来た。

「成実さん、ここで用事を言うって言ってたけど・・・」

真理奈はチラチラと周りを見渡す。

「ここよ。」

真理奈達は振り向くと、壁の陰からパーマネントウェーブの髪型をした女性が出てきた。
この人が明子の母、安田成実である。

「初めましてね。　皆。」
「初めまして、新真理奈です。」
「宝塚忍美です。　こっちは妹の安美。」
「どうも。」

真理奈達は成実に自己紹介する。

「あなた達が北条響ちゃんと南野奏ちゃんね。」
「「はい。」」
「私は・・・」
「エレンちゃんね。　噂は聞いたわよ。」

成実は響達の名前を言う。

「それで、成実さん。　私たちに用件って?」
「そうそう、実は3人にこれを渡そうと思ってね。」

成実はアタッシュケースからカードを取り出した。

「このカードは伝説の戦士を援護するために作ったサポートカード。
味方を治療したり、やられそうになった時に援助することが出来るの。　他の皆にも渡すつもりだったけど、まだ試験中だから、あなた達専用のカードしか出来なかったけどね。」
「「へぇ〜・・・」」

忍美と安美は成る程と言いそうな動きをした。

「あの、私と響をここに連れてきたのは？」

「えぇ、早速本題に入るわ。　響ちゃん、奏ちゃん。オーガとの戦いを終えてから、変わったことはなかった？」

成実は響と奏に質問する。

「・・・はい・・・」

「・・・」

「その顔だとあるみたいね。　真理奈ちゃん、オーガの妖術の事聞いたわよね。」

「はい、プリキュアの力を奪っただけじゃなく、妖術で響達を怖がらせたって。」

真理奈は成実の質問に答える。

「えぇ、その妖術がある以上、プリキュアの力を取り戻せても、本人は受け取ることは出来ない。その事で困ったんだけど、ようやくなんとかする方法を見つけたわ。」

成実の言葉に驚く皆。

「本当ですか！？」

「その方法って何ですか？」

忍美と安美は成実に質問する。

「難しくもあり、簡単でもあるの。」

「難しくもあり・・・」
「簡単でもある？」
「プリキュアの浄化技で妖術にかけられた者の体に打ち込まないとそれが消えない。　つまりこれは勇気が必要とする方法よ。」
成実は真理奈達にそう告げた。

## 仮面ライダーアカツキ設定・作中用語

時守ソラ／リリー・サプライザー

髪型は黒いセミロング。
幻想サーカス団の団員だが、マスター・ジャグラーが人々の夢を奪おうとしたことを許せなく、星守健一と共にサプライザー家の家宝であるパラレルシップを奪還した。
彼女の父はサーカス団の団長で、時空防衛局の協力者だが、病に倒れてしまう。
そして、平園和夢を弟子にしている。
星守との別れ際に時守ソラと名付けた。
名前の由来は「時間と空間を守る少女」。

仮面ライダーアカツキ

モチーフは『機動戦士ガンダム　ＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ』のモビルスーツ・アカツキ。
ベルトの名前は『ゴールドバックル』、鍵の名前は『ゴールドキー』。
変身する時は『ゴールドキー』を『ゴールドバックル』の鍵穴に差し込むことで変身完了。
『シャイニングライフル』でビームを発射。
『シャイニングサーベル』で切り裂く。
『サンゴールドカタパルト』は追尾性のビーム砲が搭載され、空を飛ぶことができる。
『ゴールドキー』を２つの武器の内一つ差し込むことで必殺技は２つ使える。

『シャイニングライフル』で追尾・散弾する『イリュージョン・シュート』。
『シャイニングサーベル』でビームサーベルを倍以上伸ばして切り裂く『メガ・スラッシュ』。

作中用語

パラレルシップ
サプライザー家の家宝。
全てのパラレルワールドに人々を喜ばせるために作った。
しかし、マスター・ジャグラーによって改造される。

ニューフォース
地球を環境のいい星にするために必要とする力。
汚し、傷つけた自然を綺麗で傷つくことのない星にし続けているが、ダイオキシーとの戦いの時、封印されてしまった。

ドリームエナジー
人のいい夢をエネルギーにした物。
ソラ曰く「希望の力、生きる力」。

ダークネスメモリ
財団Xが作り上げたガイアメモリ。
いままで倒された悪の記憶が宿っている。
今は宇治原司が所有。

パワーストーン
キュアマザーが所有した石。
今は真理奈達の家に贈られている携帯電話と一体化。
パワーストーンは全部で12個。

惑星テテュス
セイバーが生まれた惑星。

「もうすぐ明堂院家の道場だけど、砂漠の使徒と戦ったあのお嬢様がこいつらを許してくれるのかな?」

その頃、夏海と和夢はいつきが住んでいる明堂院流古武道の道場に向かった。

和夢はスナッキーを見て不安なことを言う。

「大丈夫ですよ。　今は砂漠の使徒はいません。」

「それはそうだけど・・・」

その時、夏海の『ジュエルコミューン』から着信音が・・・

「?　忍美さん?　はい、もしもし。」

「夏海、さっき『ＲＥＢＩＲＴＨ』の人から妖術を解く方法を聞いたの。」

「えっ!?」

「それは本当なの!?」

夏海と和夢は忍美の言葉に驚く。

「えぇ、妖術にかけられたプリキュアに浄化技を打ち込むそうよ。」

「それじゃあ荒療治じゃないか。　なんでそんな強引なやり方を?　他に方法はなかったの?」

「・・・えぇ、残念ながら・・・」

夏海と和夢は衝撃の言葉に驚きを隠せない。

「これは心の準備が必要という物ね・・・これ以上話すと空気重くなるから、また連絡するね。」

電話を切る忍美。
夏海は『ジュエルコミューン』をしまう。

「なんだか面倒なことになってきたな・・・」
「はい・・・」

その時、目の前に魔方陣が現れる。
その魔法陣から出てきたのはダークプリキュアとダークドリームである。

「ダークプリキュアにダークドリーム!?」
「夏海さん!」
「はい!」

和夢と夏海は『ジュエルコミューン』を取り出し・・・

「「ジュエルスパークハリケーン!」」

2人の周りに虹色の風を纏い・・・

「母なる月と海の恵み、キュアパール!」
「平和を望む大いなる夢、キュアアメジスト!」

パールはダークドリームを、アメジストはダークプリキュアと対峙する。

「ハァァァァァァァァッ!!!」

アメジストは負けずに猛ラッシュする。

「くっ！　うぅっ！」

パールはダークドリームの攻撃を避けてばかりで、一度も反撃しない。

（パール・・・2人まとめて倒してやる！）

「『プリキュア・ダークパワー・フォルティシモ』！」

ダークプリキュアは『プリキュア・ダークパワー・フォルティシモ』でアメジストを襲う。

しかし・・・

「フッ！！」

アメジストは片手でダークプリキュアの攻撃を受け止めた。

「甘く・・・見るなぁ！！」

アメジストはダークプリキュアを地面に叩き落した。

「ウワァッ！」

「『アメジストバトン』！」

アメジストは『ジュエルコミューン』を『アメジストバトン』に変え、ダークプリキュアの腹に向ける。

「『プリキュア・アメジストマジック』！」

アメジストはダークプリキュアに『プリキュア・アメジストマジック』を繰り出す。

「ウワアァァァァァァァァッ！！！！」

ダークプリキュアは元の人間の姿になり、ダークネスのガイアメモリはメモリブレイクされた。

「ハァァァァァァァァッ！！」

アメジストはダークドリームの元に走り出す。

「これ以上！　誰かの夢を！　奪わせはしないわ！」

アメジストは『アメジストバトン』で火、雷、水、風の順番にダークドリームを攻撃し続けた。

「グゥッ！」

「止めだ！」

アメジストは『アメジストバトン』をダークドリームに向けた。

「ダメです！」

その時、パールはアメジストの前に出る。

「パール！？」

「外見は闇のプリキュアでも、ダークネスのガイアメモリに操られただけです！」

パールはアメジストに説教する。

「それは分かってるけど、やらないと負けるわ！」

「それでも傷つけてはいけません！」

「どいて！　このままじゃ！」

アメジストはパールにどくように言うが、パールは動じない。

「アレ？　プリキュア同士で揉めあってる！」

「「えっ！？」」

アメジストとパールは上を見上げると、電柱のコードに水星のマーキュリアが座っていた。

「誰！？」

「ハロー♪　キュアパールにキュアアメジスト。　私はネオプラネット暗黒八惑星・水星のマーキュリアよ。　なんでダークドリームがいるのか分からないけど、なんだか面白そう。」

マーキュリアは楽しそうに言い出す。

「でも、アメジストはちょっとやりすぎたかな？　その子に代わっておっ仕置き～。」

マーキュリアは指を鳴らした。

その時、アメジストの足元から水が溢れ出し、アメジストを包んだ。

「なっ！？　ムグッ！　うぅっ！」

アメジストは口を押さえる。

「アメジスト！？」

「ハーイ、君はそこでじっとしてもらえるかな？」

マーキュリアはリングが付いたロッドで振ると、シャボン玉が出てきてパールを包む。

「えっ！？」

パールはシャボン玉から出ようとするが、パンチやキックを繰り出しても割れない。

（い・・・息が・・・ゴボッ・・・）

アメジストは限界が来たのか、マーキュリアの水の中で失神する。

それと同時に変身が解かれる。

「ウフフ♪」

マーキュリアは再び指を鳴らすとアメジストを包んだ水が弾け、パールを包んだシャボン玉が割れる。

「和夢さん！」

パールは和夢に駆けつける。

「ウフフ♪　じゃ、アースロンを迎えに行こうかな？　じゃあね♪」

マーキュリアは瞬間移動でどこかに去った。

ダークドリームも魔方陣に入り、和夢とパールの前から姿を消した。

## 軟体将軍、参る！

イルバはオーガの事をゲゾールとドグーンに伝えた。

「ゲゾール、ドグーン。　オーガが再び地上に行ったようだ。　大した用事ではないが・・・」

「気にするな、俺様は人間が絶望する所が好きなんだからよ。　オーガの好きにすればいいぜ。」

ドグーンはオーガの行動に認める。

しかし・・・

「イルちゃん、ドグちゃん。　オーガがやりたいことは分かるけど、私は我慢が限界よ。　私はプリキュアに勝ちたいのよ。」

ゲゾールはイルバとドグーンに論する。

「一度ならず二度までも私の作戦が失敗に終わったのよ。　それが悔しくて我慢できないのよ。」

ゲゾールは理由を述べる。

「うむ、よかろう。　我が妖術を君に授ける。」

イルバの掌から赤黒いエネルギー体が現れ、それをゲゾールの体内に入る。

「おぉ、これよ！　これならプリキュアに勝てるわ！　イルちゃんの妖術と私の本当の力を合わせれば、プリキュアなんて私の策に惑

わされたも同然よ！」

ゲゾールはすぐにイルバとドグーンの前から去った。

～～～～～～～～～～

その頃、来斗は買い物に行く途中、怪人と出くわし、ファングに変身して対峙した。

その怪人は・・・

「避けないで！　ギュッと抱きしめさせて！」

ルナドーパントである。

「全く、初めてここに訪れた時といい、しつこいね。」

ファングが若葉台で倒したのもルナドーパントである。

詳しくは『仮面ライダー×スーパー戦隊×プリキュア　短編集』にて。

「私と楽しみましょう！」

ルナドーパントは腕を伸ばしてファングを巻きつこうとする。

しかし、ファングはひらりと避ける。

「悪いけど、こっちも好きな人がいるんでね。　もっとも、オカマを花嫁候補に入れるのはまっぴらごめんだよ。」

「ムッキィィィィッ！　オカマって言わないで！」

ルナドーパントはもう一度腕を伸ばす。

「よっと、さっさと終わらせて、『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』に戻らせてもらうよ。」

ファングはルナドーパントの腕を避けて、ファングのガイアメモリをマキシマムスロットに挿入した。

【ファング！　マキシマムドライブ！】

「『ファングストライザー』！」

ファングは『ファングストライザー』でルナドーパントを蹴りだす。

「嫌いじゃないわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ルナドーパントは爆散した。
ファングは変身を解除した。

「さ、急いで戻ろう。」

ファングは近くに置いた買い物袋を拾い、『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』に戻った。

～～～～～～～～～～

「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」
「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」

トパーズ達も戦闘の最中である。
その相手はオーガだ。

「チィッ！」

オーガは『獄炎棒』でトパーズとガーネットの技を弾き返す。
それを見た響と奏は・・・

「む、無理だよ・・・勝てるわけないよ・・・」
「こ・・・怖い・・・」

オーガの妖術のためか、怯えている。

「大丈夫、プリキュアは負けやしないわ。」

成美は響と奏に慰める。

「おかしい、まるで手加減してるような・・・」
「えぇ。」

トパーズとガーネットはオーガの事を怪しく感じる。

「トパーズ、ガーネット！　一気に決めるよ！」
「えぇ！」
「あんたが言うなって。」

3人は互いの手を重ね合う。

「「「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォーズファンタジア』！！」」」

トパーズ達は『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を放つ。
しかし・・・

「ふん！」

オーガはジャンプして避けた。

「『ビートソニック』！」

ビートは『ビートソニック』でオーガに攻撃する。

「くっ！」

オーガは『ビートソニック』に避けきれず、攻撃に当たる。
その瞬間、『獄炎棒』からプリキュアの力が2つ出てきた。
ビートはそれを受け取る。

「オーガ、どういうつもり？」
「なんで手を抜くようなことしたの？」

トパーズとガーネットはオーガに質問する。

「フン、それを言ったらつまんねぇだろ？」

オーガはプリキュアの前から去っていく。

「一体何がしたいの・・・」

その時、今度はゲゾールが現れた。

「プリキュア。」

「ゲゾール！」

「今度こそあんた達の息の根を止めてあげるわ。」

ゲゾールがそういうと、トパーズ達とゲゾールの足元から赤黒い水が湧き上がっていく。

「な、なにこれ！？」

「！　ち、力が・・・」

トパーズ、ガーネット、オパール、ビートは赤黒い水によって体のバランスが崩れてしまう。

「ウフフ、この水はイルちゃんから授けた妖術の力よ。　この水は光の戦士の力を半分にする効果があるのよ。　まずは・・・」

ゲゾールはブラックボックスで魔化網のバケネコ、アリエナイザーのカジメリ星人・ベンG、ダークフォールのミズ・シタターレを蘇らせる。

「更に！」

ゲゾールは三途の川の水が入ったビンを４本取り出し、他の４本の腕から海賊船の模型、三味線、竹刀、ピストルを取り出して、それらを三途の川の水にかけた。

「アノヨイーケ！　三途の川を力に変えて、絶望を陥れなさい！」

それらの物がアノヨイーケに変わった。

「アノヨイーケ！」

「そして！」

赤黒い水からゾーマが２００体現れた。

「今度の作戦は完璧よ。　プリキュア、これがあんた達の最期よ。」

## 悲しみを終わらす大地と海の守り手（前書き）

ＧＡＳＨさんからのオリジナルプリキュアが登場します。

## 悲しみを終わらす大地と海の守り手

「！　この感じ・・・」

宇治原は何かを感じ取ったのか振り向いた。

「・・・分かる、分かるよ。　地獄衆の将軍様が本気を出してきたようだね。　プリキュア、どう立ち向かうかな？」

「あ、いた！」

宇治原は上を見上げると、マーキュリアが降りてきた。

「コミュニケーション能力に頼って探ってみたけど、ここにいたんだね、アースロン。」

「マーキュリアか。　わざわざ、僕を迎えに来たというのかい？」

「うん。」

マーキュリアの用件を分かるように言い出す宇治原。

「でも、もう少し待ってくれないかな？　まだセイバーと同化した男と別れの挨拶をしていないんだ。」

「えぇ～？　やっと見つけたのに～・・・」

「星守君、僕をがっかりさせないで、楽しませてよね。」

～～～～～～～～～

その頃、トパーズ達は地獄衆の戦いを始めた。

しかし、ゲゾールを倒すどころか、ゾーマに苦戦する一方で２００

体の内２０体しか倒せていなかった。

「思うように力が入らない・・・」

「はぁ、はぁ・・・」

その理由はゲゾールが使った妖術で赤黒い水によってプリキュアの力が弱まったからである。

「ウフフ・・・もうあなた達に勝ち目はないわ。　あなた達を倒したら、次はそこにいる腰抜け娘達よ。」

ゲゾールは響と奏と成美を見る。

「あ、プリキュアを手助けしようとする組織できたっけ？　だったら、そいつらを皆殺しにするまでよ。」

ゲゾールはトパーズ達に振り向く。

「八刀流・水面切り！」

ゲゾールは八本の刀で水を切るようにすると、８つの風の刃が現れた。

その時・・・

「『プリキュア・グランドクラック』！」

無数の小石が風の刃を砕く。

「「「「！？」」」」

「な、なに！？」

プリキュア達とゲゾール達は上を見上げる。
そこにいるのは、上半身は濃い青のレオタードの上に紫の軍服をベースにした衣装を着ており、手は長袖になって、服の下には濃い青のロンググローブを着て、紫の宝石をあしらった青のリボンがついているプリキュアである。

「アンタ、何者!?」
「悲しみを終わらす大地と海の守り手。キュアアルガティア！」

自らの事をキュアアルガティアと名乗る。
キュアアルガティアは『機動戦士ガンダムＯＯの世界』で生まれたプリキュアである。（詳しくは『プリキュアＶＳプリキュア』にて。）

「「キュアアルガティア!?」」
「やっと現れたわね、別世界のプリキュアが。」
「何よ、何よ！　カッコつけちゃって！　アノヨイーケ、引き摺り下ろしなさい！　あんた達はトパーズ達をやっつけて！」

ゲゾールはアノヨイーケにアルガティアを引き摺り下ろすよう命じ、ベンＧ、バケネコ、ミズ・シタターレにトパーズ達を攻撃するよう命じた。

「『プリキュア・ウォーターボンバー』！」

アルガティアは巨大な水球を発射した。
それが着弾した後、水の衝撃波がベンＧたちを襲う。

「『プリキュア・ツインブラスター』！」

アルガティアは地と水の力を持った光線で、アノヨイーケを浄化する。

「大丈夫？」
「えぇ！」
「ええい、どきなさい！」

ゲゾールはベンGとバケネコを突き飛ばすと、自分の体の回りに赤黒いオーラが立つ。
そしてゲゾールの姿が変貌した。
その姿は足がイカの足になり、腕が８本から１０本になって、頭部が『ウルトラマンダイナ&ウルトラマンティガ』に出てくるクイーンモネラのような頭になった。

「えぇ～っ！」
「そんなのあり！？」
「私が引き摺り下ろしてあげる！　八刀流・千風鬼（せんぶうき）！」

ゲゾールは八本の刀をグルグル回すと、１０００程の風の刃が出てきた。

「クッ！　『プリキュア・グランドスプレッド』！」

アルガティアは無数の岩石弾を広範囲に発射する。
よって風の刃が次々と撃ち落とされた。
しかし・・・

「！　なっ！？」

アルガティアの足にゲゾールの足が巻きつかれていた。
ゲゾールはアルガティアを地上に叩き落し、赤黒い水に着水させた。

「グッ、クゥッ！」

アルガティアは赤黒い水によって力が弱まってしまう。

「ウフフ、プリキュア。　頭は生きてるうちに使う物よ。」

## 復活！メロディとリズム

マーキュリアは『アルカトラーズ』に帰還後、アースロンについて報告した。

「ほお、マーキュリア。　パラレルワールドから帰ってすぐアースロンと会ったか。」
「は～い、コミュニケーション能力に頼って見つけました～。」
「マーキュリア、プルト・ハデス様に馴れ馴れしいことを言わないでください。」

プルト・ハデスにアースロンについて話すマーキュリア。
マーキュリアの言葉に叱るヴィーナシエル。

「ウフフフ、マーキュリアったら子供ね。」
「あ～！　子供って言った！」

ネプトユーヌにからかわれたマーキュリアは怒る。

「マーキュリア。　アースロンに会ったものの、ここには戻らないといったのだな？」
「は～い、まだやることがあるって言ってました～。」
「それでこそアースロン。　ジャアクキングの件では失敗に落ちたのは事実だが、自分がやることに無駄がない。　奴が戻ってきたら幹部復帰させてやろう。」
「プルト・ハデス様！」

ポイズン星人が入ってきた。

「惑星レジスタンスの者がこの船の近くにある惑星に到着した模様です。」
「ここに戻ってきた他の八惑星は？」

プルト・ハデスはポイズン星人の報告を聞いた後、ネプトユーヌに帰還した幹部の事を聞いた。

「ミステリー星人以外の幹部はすでに帰還しております。」
「サタンギラス、ウラヌシオン、マルジス、ジュピタールをここに呼び集めよ。」
「「「ハッ！」」」

～～～～～～～～～

「ウフフ、ここまでのようね？」
「アンタ達如きが私たちに敵うわけないじゃない。」
「ここで止めを刺してやる！」
「ミャア～オ。」

ゲゾール、ミズ・シタターレ、ベンG、バケネコはゆっくりとトパーズ達に近づく。

「ガーネット、オパール！　アレを使おう！」
「うん！」
「はい！」

トパーズ、ガーネット、オパールは成美から貰ったカードを取り出した。
トパーズは天使の羽を描いたカード、ガーネットは赤い光の玉を描

いたカード、オパールは緑色の光の玉を描いたカードを『ジュエルコミューン』セットし、通話ボタンを押した。
すると、アルガティアの背中に天使の羽が現れ、赤と緑の光がアルガティアの体に包む。

「これは・・・！　（頭の中に何かが伝わってくる！　この水を・・・）」

アルガティアは空を飛び、銃を構える。

「『プリキュア・ツインブラスター』！」

アルガティアは赤黒い水を目掛けて、地と水の力を持った光線を放つ。
すると、赤黒い水がなくなり、元に戻っていく。

「水が・・・消えていく・・・」

いや、それだけじゃない。
『プリキュア・ツインブラスター』の衝撃で、光の波が大きく広がっていく。

「そ、そんな！」

響と奏は光の波を受けると、２人の体から赤黒いエネルギー体が現れ、消滅した。

「一体・・・なにが起こったの？」
「不思議・・・あの光なんだろう・・・」

響と奏は自分の手を見渡しながら言う。

「オーガの妖術が解けたのよ。　アルガティアのおかげでね。」

成美は響と奏に説明する。

その時・・・

「キィィィィッ！！　なんでいつもいつも！」

響と奏は我に返り、ゲゾール達を見る。

「許さないわ！」

ゲゾールは作戦失敗の事で怒りを露に出す。

「成美さん、安全な所へ！」

「えぇ、頼んだわよ。」

成美は響と奏から離れる。

「行くよ、奏！」

「オッケー、響！」

響と奏は『キュアモジューレ』を出す。

「二人とも、その前に！」

トパーズとガーネットはプリキュアの力を響と奏に目掛けて投げる。

光の玉は響と奏の中に入る。

「よし！　ドリー！」
「ドド！」
「レリー！」
「レレ！」

ドリーとレリーは『キュアモジューレ』に入る。

「「レッツプレイ！　プリキュア・モジュレーション！」」

響はキュアメロディ、奏はキュアリズムに変身する。

「爪弾くは荒ぶる調べ！　キュアメロディ！」
「爪弾くはたおやかな調べ！　キュアリズム！」
「「届け、二人の組曲！　スイートプリキュア！」」

決め台詞を言うメロディとリズム。

「ニャプ～！　メロディとリズムが完全復活したニャ～！」
「メロディ！　リズム！」

大喜びするハミィとビート。
そして、トパーズ達の前からカードが現れた。
そのカードは金色のハートのト音記号が描かれている。

「新しいカード。」

トパーズ達はそのカードをしまう。

「メロディ、リズム。　行くよ！」
「うん！　ここで決めなきゃ女がすたる！」

「あいつらに気合のレシピみせてあげるわ！」

## 今こそ放て！　『プリキュア・パーフェクトハーモニー』！

アルガティアの『プリキュア・ツインブラスター』の影響でプリキュアとして復活したメロディとリズム。
メロディとリズムはミズ・シタターレを、ガーネットとオパールはベンGを、トパーズとビートとアルガティアはバケネコと対峙する。

「これ以上好きにはさせないよ、オバサン！」

メロディはミズ・シタターレの事をオバサンと呼ぶ。
それを聞いたミズ・シタターレは激怒する。

「誰がオバサンよ！　ミズ・シタターレと仰い！」

ミズ・シタターレは巨大な水玉を投げ、メロディとリズムを攻撃した。
しかし、2人はそれを避ける。

「ヤァァァァァッ！！」
「ハァァァァァッ！！」

ミズ・シタターレに反撃するメロディとリズム。

「ドギー・クルーガーがいないのは残念だが、代わりにお前らを苦しめて止めを刺してやる！」

ベンGは背中からミサイルを撃つ。
ガーネットとオパールはミサイルを避ける。

「私達は負けない！」
「当然！　あんたなんかにやられると思ったら大間違いよ！」
ガーネットとオパールはすぐにベンGに反撃する。
「ミャアァ～オォ～！」
バケネコの尻尾から別個体のバケネコが１０体現れる。
「数が増えればいいものではない！」
「お化けは苦手だけど、友達のためなら絶対に負けない！」
「何体でもかかってきなさい！」
トパーズとビートとアルガティアはバケネコに攻撃する。
「ええい、なんなのよ！　あれだけ痛めつけてやったのに！」
ゲゾールは怒りながら言い出す。
「あんたには分かんないでしょうね！」
「デザートは別腹みたいなもんよ！」
「オパール、何の例えよ？」
トパーズ、オパール、ガーネットの順番に言う。
「やっちゃいなさい！」
ゲゾールはゾーマに総攻撃するよう命令する。
「皆、一気に決めるよ！」

トパーズの掛け声に了解する一同。

「『ミラクルベルティエ』！　おいで、ミリー！」
「ミミ～！」
「『ファンタスティックベルティエ』！　おいで、ファリー！」
「ファファ～！」
「『ラブギターロッド』！　おいで、ソリー！」
「ソソ！」
「チェンジ、ソウルロッド！」

メロディは『ミラクルベルティエ』、リズムは『ファンタスティックベルティエ』、ビートは『ラブギターロッド』を出す。

「「「翔けめぐれ、トーンのリング！」」」
「「『プリキュア・ミュージックロンド』！」」
「『プリキュア・ハートフルビートロック』！」

メロディとリズムは『プリキュア・ミュージックロンド』、ビートは『プリキュア・ハートフルビートロック』を放ち、ミズ・シタターレ、ベンG、バケネコを囲む。

「「「三拍子！　1・2・3！　フィナーレ！」」」

3人の技によって消え去る14体。
そして・・・

「『プリキュア・ツインブラスター』！」
「「「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！」」」

アルガティアは『プリキュア・ツインブラスター』を、トパーズとガーネットとオパールは『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を放って、１００以上のゾーマを倒す。

「ウソでしょ！？」

驚愕するゲゾール。

「トパーズ、ガーネット、オパール！　ゲゾールはお前達に任せる！」

「メロディ、リズム！」

「「「「「うん！」」」」」

トパーズ、ガーネット、オパールはハートのト音記号が描いたカードを『ジュエルコミューン』に読み込ませた。

すると、トパーズ、ガーネット、オパール、メロディ、リズムの後ろに大きなハートのト音記号が現れる。

「不幸をもたらし！」

「人を悲しませるあなた！」

「幸福（しあわせ）の音楽を聞かせましょう！」

トパーズ、ガーネット、オパールの手にハートのト音記号が浮かぶ。

メロディとリズムはベルティエを鳴らす。

「「「「「『プリキュア・パーフェクトハーモニー！』」」」」」

トパーズ、ガーネット、オパールのハートのト音記号から黄金の閃光波を螺旋状に発射し、ゲゾールに命中する。

そして、その閃光波がリングとなる。

「「三拍子！　１・２・３！　フィナーレ！」」

メロディとリズムの掛け声とともに爆発する。

「こ、こんな所で私が・・・！　そんなあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！」

ゲゾールは爆発の中で消える。

「「「「「「やったぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」」」」」」

大喜びするプリキュア。

「後のことは任せよう。　また会おう、皆。」

アルガティアは皆に気付かれないように去っていった。

## 今こそ放て！　『プリキュア・パーフェクトハーモニー』！（後書き）

ＧＡＳＨさんのオリジナルプリキュア・キュアアルガティィアの活躍はこれにて終了いたします。

## 水城静香の過去

その頃、ミステリー星人以外の暗黒八惑星はレジスタンス星人を迎撃するため、出発の準備を始めた。

「やれやれ、しばらくの間地球はお預けとはな・・・1年以上地球にいるアースロンと帰りに寄ったマーキュリアが羨ましいぜ。」

「そうね、私も地球に降りてウルザードに会いたかったわ。」

サタンギラスとネプトユーヌは愚痴をこぼした。

「プルト・ハデス様のご命令ですから仕方ありません。」

「か～っ、ヴィーナシエル、女なのに堅いね～。」

サタンギラスはヴィーナシエルの言葉にがっかりする。

「それにしてもミステリー星人、奴の実力は認めるが、あの暢気な態度が気に入らん！　何故あいつが八惑星の一人なんだ！？」

マルジスは怒った顔で言い出す。

「まぁ、落ち着け。　プルト・ハデス様はアースロンが戻り次第、彼を幹部復帰するようだ。　これで完全な八惑星が揃う。」

「それじゃ、さっさと任務を終わらせて、プルト・ハデス様にいい報告しなきゃ。」

ジュピタールはマルジスを宥め、マーキュリアは楽しそうに言う。

「レジスタンス星人め、この『パーフェクトな強さを誇る偉大なる

ネオプラネットの幹部、暗黒八惑星の一人、ビューティーにかっこいい天王星のウラヌシオン様』に逆らうとは愚かな奴らよ。」

「「あんた、呼び名長すぎ！」」

ウラヌシオンをツッこむネプトユーヌとマーキュリア。

「さて、全員準備できたことだし、早速出発するぞ！」

暗黒八惑星の7人はレジスタンス星人を迎撃するべく、小型宇宙船に乗り込む。

～～～～～～～～～～

その頃、真理奈達は響達と別れを告げ、友子達と夏海達に連絡を取った。

「夏みん！　夏みん！　ダメ、連絡取れない。」

安美は夏海に連絡を取るが、返事する様子が全くなかった。

「今友子から聞いたのはかれんさんやこまちさんは妖術が効かなかったけど、他の3人は効いたって事だけね。」

忍美は友子との連絡で得た情報を言う。

「真理奈ちゃん、忍美ちゃん、安美ちゃん。　たった今後輩から連絡があったわ。　ハートキャッチプリキュアの力が奪われたのはつぼみちゃんとえりかちゃんよ。　2人とも合宿でそこにはいないらしいの。」

成美は得た情報を真理奈達に伝えた。

「合宿！？」

「取り越し苦労だったね、忍美。」

つぼみとえりかがいないことを落ち込む真理奈達。

「それともう一つ、四ツ葉町で明子が9人目のプリキュアを見つけたらしいわよ。」

「「えぇっ！？　9人目！？」」

「トパーズ、ガーネット、オパール、パール、ダイヤモンド、ペリドット、ターコイズ、アメジスト。　そして9人目がアクアマリン。名前は水城静香。」

成美はキュアアクアマリンこと水城静香について話す。

「静香ちゃんは以前、ドームにいた時ナキサケーベに襲われたことがあるの。」

「そのナキサケーベがイースの・・・ですよね？」

「えぇ、それがきっかけでイースを憎むようになり、数ヵ月後、私が贈ったコミューンを触れた時、『ジュエルコミューン』になったの。」

成美は静香の経緯を話した。

「でもその前にせつながプリキュアとして覚醒した。　静香はそのことを知らなかったんですね。」

「だったら、まずいんじゃ・・・」

「心配しないで。　彼女は明子とせつなちゃんの説得で改心したわ

よ。」

成美は静香の事を心配ないと言った。

「まぁ、彼女は自分の力を引き出せていないけど、彼女は水を操れるの。」

「「「水？」」」

「えぇ、新人君から聞いたわ。　彼女がまだ9歳の時、全く雨が降っていない事を困った農家を見た時、静香ちゃんが拳をあげた途端、雨雲がないのにも関わらず、雨を降らしたり、静香ちゃんと同い年の子供が川に溺れそうになった時、川の水を触れた途端、その水が子供を岸まで上がらせたりしてたの。」

成美は静香について話し続けた。

「フフ、本当に不思議な子なの。」

「へぇ～。」

「あたしその光景見たいなぁ～！！」

「安美、興奮しすぎよ。」

安美をツッこむ忍美。

「とにかく、四ツ葉町は明子に任せて、3人は友子ちゃんの所に行きなさい。　私は夏海ちゃんの所に行くわ。」

「「「はい。」」」

真理奈達は返事をする。

## アースロンの配下・フェニキシアン

宇治原は目の形をしたモニターを見た。
彼が見たのはダークエンジェルス五幹部の戦いぶりである。

「やれやれ、最近の地球の悪の組織は面白みがないな。　世界を消滅するだの破壊するだの・・・プルト・ハデス様や僕ら八惑星のように全ての者達を奴隷にすれば楽な道になるのに。　あのクオークスのように。」

宇治原はダークエンジェルスの戦いを見て呆れたような口を叩いた。

「僕も『アルカトラーズ』に戻ったら、そっちの世界に向かう準備をするかな。」

宇治原は屋上から降りる。
その時、空からフェニックスのような宇宙人・ウイング星人フェニキシアンが現れる。

「フェニキシアン？」
「アースロン様、キュアトパーズ達の始末はこの私めに。」
「フフ、いいのかい？　プルト・ハデス様の許可なく地球に下りて。」
「承知の上。　もっとも私はミステリー星人が八惑星の座を奪うようなこと、我慢できない物です。」

フェニキシアンはアースロンに事情を話す。

「仕方ないね・・・なら、ナッツハウスに向かい、プリキュアを倒

すんだ。」
「ハッ！」

～～～～～～～～～～

その頃、夏海は・・・

「成る程、スナッキーが僕達を謝りに・・・」
「はい、あのスナッキー、深く反省してるみたいです。」
「僕は認めてないけどね。」

和夢はすでに回復した。
パワーストーンの力のおかげでもあるが、途中でいつきに出会い、介抱してくれたのである。

「反省したのなら戦う気はしないよ。　謝ろうとする者に戦う理由なんてないからね。」
「本当ですか！？」
「うん。」

スナッキーが反省したことを認めたいつきに喜ぶ夏海。
しかし、和夢は納得いかない顔をする。

（なんでだ？　スナッキーは砂漠の使徒の手下。　裏切るかもしれない相手に何故・・・？）

和夢は納得しないように思う。

「悪いけど、ちょっと外の空気吸ってくる。」

和夢は部屋から出て行く。

～～～～～～～～～～

「出てきなさい、プリキュア！　伝説の戦士の殆どが戦えなくなっている者など、足元にも及ばないわ！」

フェニキシアンは怪人を使って町を襲い始めた。
その怪人はアノマロカリスドーパント、幻獣ピクシー拳使いのヒソ、エターナルのネバタコスである。

「試してみる！？」
「ん？」

フェニキシアンが振り向く。
そこにはキュアトパーズ、キュアガーネット、キュアオパールが駆けつける。

「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」
「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」
「『プリキュア・オパールメテオ』！」

トパーズは『プリキュア・トパーズビッグバン』を、ガーネットは『プリキュア・ガーネットクロウ』を、オパールは『プリキュア・オパールメテオ』を繰り出した。
しかし・・・

「喰らえ！」

「幻技・突剣呑（つっけんどん）！」
「そんなものか！？」

アノマロカリスドーパントはオパールを、ヒソはガーネットを、ネバタコスはトパーズを反撃した。

「「「キャアアアアアアアッ！！！！」」」

3体の反撃により倒れるトパーズ達。
その時、友子と愛、そしてくるみが駆けつけた。
勿論、のぞみ達と一緒である。

「みんな！」

友子と愛はくるみ達よりも先に前に走り、『ジュエルコミューン』を出す。

「「ジュエルスパークハリケーン！」」

友子と愛はプリキュアに変身する。

「友と提携する絆の証、キュアペリドット！」
「永久に続く愛の調べ、キュアダイヤモンド！」

そして、ペリドットとダイヤモンドはフェニキシアンと対峙する。

「キャアアアアアアアッ！！！！」

フェニキシアン達にやられるトパーズ達。

「ペリドット、かれんさんとこまちさんは妖術効かなかったよね？　プリキュアの力あげたの？」

トパーズはペリドットに質問する。

「いや、あげてへん。　かれんさんが言いよった。『私が変身する時はみんなと一緒よ』って。」

ペリドットは事情を説明する。

「・・・だったら、のぞみ達が奮起するまで戦い続けるまでね。」
「そうね、かれんさんやこまちさんがそう決めたんなら。」
「持ちこたえるまでってことだね！」
「うん！」

トパーズ達は立ち上がる。

「何度立ち上がろうと、何も変わらない。　夢や希望など、そんな物を持つから自分の目的に邪魔されるのよ。　人はただ上の者に従えばいいのよ。」

フェニキシアンは手から火炎弾を放つ。
しかし、トパーズのバリアに防がれる。

「そんな事ない！　夢と希望があるから、新しい自分と向き合えるの！」
「従われるだけじゃ変われない！　努力をすればするほど、人は進化していくんだから！」
「邪魔されるなんてことはない！　たくさんの人達と一緒にやれば安心して次の一歩に進めるんだもん！」

トパーズとガーネット、オパールはフェニキシアンに主張した。

「下らない。　そんなことを考えるから自分のことに集中できないのよ。」

フェニキシアンは無数の羽根を飛ばす。
しかし、ペリドットは『ジュエルコミューン』を『ペリドットランス』へと変え、旋風を巻き起こし、羽根を防ぐ。

「ふざけたこと言わんといて！　自分ことに集中できない？　せやったら自分一人でできることがある言うの！？」
「一人より皆と一緒の方ができないことなんてないわ！」

ペリドットとダイヤモンドはフェニキシアンに主張した。

「皆・・・」
「そこまでして・・・」
「・・・」

のぞみとりんとうららは5人の戦いを見る。

「のぞみ、りん、うらら。　あの子達が必死に頑張っているのに、

自分達だけ何もしないわけにはいかないでしょう？」
「オーガは確かに強いけど、皆で力を合わせれば、できないことなんてないわ。」
「あんた達だってやらなきゃいけないことがあるはずよ。　それをやり遂げるわよ、一緒に。」

かれん、こまち、くるみはのぞみ、りん、うららを説得する。
のぞみ達は少し俯く。

「うん・・・そうだよね。」
「いつまでも怖がってるわけにはいかないわね。」
「はい！」

のぞみ達は立ち上がる。

「皆・・・よし、３人とも！　ちょっと我慢してて！」

ダイヤモンドは『ジュエルコミューン』から『ダイヤモンドマイク』に変える。

「前にも言うたようにオーガの妖術を解くにはプリキュアの浄化技が必要なんや。　せやからしばらく目瞑ってや！」

ペリドットは確認するように言い出す。

「のぞみ、りん、うらら。　準備はいい？」
「「うん！」」
「はい！」

３人は返事する。

「させるか！」
「こっちのセリフよ！」

くるみは『ミルキィパレット』を出す。

「スカイローズ・トランスレイト！」

くるみはミルキィローズに変身した。

「青い薔薇は秘密の印、ミルキィローズ！」

ミルキィローズはキックでフェニキシアンを吹き飛ばす。

「ウアアアア！！」

「今こそ恐怖という名の呪縛から解き放て！　『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」

ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』でのぞみ達に当てる。
すると、のぞみ達の体から赤黒いエネルギー体が現れ、消えてしまう。

「皆、戦えるよね？」

ダイヤモンドは確認するように言い出す。

「うん！　勇気百倍、可愛さ百倍！」
「なんで可愛さまでつけるのよ・・・」

「でも、これで一緒に戦えます！」

のぞみ達は大丈夫のようだ。

「こんの・・・古代生物が！！」

ガーネットはアノマロカリスドーパントを蹴りだす。

「足が多ければいいもんじゃないよーだ！」

オパールはネバタコスの足を避けながら反撃する。

「武術してるなら、もっと武術家らしくやりなさい！」

トパーズはヒソの幻技を避けて反撃する。

「皆！　プレゼントフォーユー！」

ダイヤモンドは５つの光の玉をのぞみ達に目掛けて投げた。

その玉はのぞみ達の中に入る。

「ありがとう！」

のぞみはダイヤモンドに礼を言う。

ダイヤモンドもウインクで返す。

「皆、いくよ！」

「「「「ＹＥＳ！」」」」

のぞみ達は『キュアモ』を取り出した。

「「「「「プリキュア・メタモルフォーゼ！」」」」」

のぞみはキュアドリームに、りんはキュアルージュに、うららはキュアレモネードに、こまちはキュアミントに、かれんはキュアアクアに変身した。

「大いなる希望の力、キュアドリーム！」
「情熱の赤い炎、キュアルージュ！」
「弾けるレモンの香り、キュアレモネード！」
「安らぎの緑の大地、キュアミント！」
「知性の青き泉、キュアアクア！」
「「「「「希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく５つの心、ＹＥＳ！　プリキュア５！」」」」」

決め台詞を言うドリーム達。
それと同時にペリドットの前にカードが現れる。
そのカードの絵には『ＹＥＳ！　プリキュア５』の頃のドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、アクアの絵が描かれている。

「なんや？」
「ペリドット、それはサポートカードだよ。『ジュエルコミューン』を使って！」
「サポート・・・何がなんだか知らんけど、やったる！」

ペリドットは『ジュエルコミューン』にカードをセットし、通話ボタンを押す。
すると、ドリーム達の体が光り、その光が集約し、ドリーム達の前に出る。
そして、その光が形となる。

光が弾けるように消えると、初期だった頃のプリキュア５の姿が現れる。

「「「「「「「「「「えええええええええええええええええっ！！！？」」」」」」」」」」

「私たちが２人！？」

「自分でもびっくりしたわ！」

今の光景を見て驚きを隠せないプリキュア達。

使ったペリドット本人も驚きを隠せなかった。

「数が増えたぐらいでどうというほどのものではないわ！」

フェニキシアン、アノマロカリスドーパント、ヒソ、ネバタコスはプリキュアに襲い掛かる。

「とにかく、さっさとやっつけるわよ！」

「「「「うん！」」」」

「私たちも！」

「「「「「ＹＥＳ！」」」」」

１６人のプリキュアも迎撃する。

## プリキュア、総攻撃！

ダイヤモンドとペリドット、ローズはヒソと対峙する。

「お前達のようなちっぽけな存在等、負けるはずがない！」

「ちっぽけかどうかは分からないでしょ？」

「せや！　私たちプリキュアはあんたらなんかに負けへんで！」

「いくわよ！　ダイヤモンド、ペリドット！」

「「うん！」」

ヒソはダイヤモンド、ペリドット、ローズを襲う。

しかし、3人はすぐに避ける。

ローズはパンチの猛ラッシュでヒソにダメージを与える。

ペリドットも『ジュエルコミューン』から『ペリドットランス』に変え、ヒソに斬りつける。

「おのれぇっ！　幻技・真剣翔舞！」

ヒソは真剣翔舞でペリドットたちに攻撃する。

「ハッ！」

しかし、ダイヤモンドは鏡を瞬時に出し、跳ね返す。

「今がチャンス！」

ダイヤモンドは『ジュエルコミューン』から『ダイヤモンドマイク』に変える。

「『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」
「『プリキュア・ペリドットサイクロン』！」
「邪悪な力を包み込む、薔薇の吹雪を咲かせましょう！　『ミルキィローズ・ブリザード』！」

ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』を、ペリドットは『プリキュア・ペリドットサイクロン』を、ローズは『ミルキィローズ・ブリザード』を放つ。

「グワァァァァァァァァッ！！！！」

ヒソは3人の必殺技によって消滅する。
『ＹＥＳ！　プリキュア５』のドリーム達はアノマロカリスドーパントと、『ＹＥＳ！　プリキュア５ＧＯＧＯ！』のドリーム達はネバタコスと対峙する。

「おのれ、プリキュア！」

ネバタコスは足で『５ＧＯＧＯ！』のドリーム達を襲う。
アノマロカリスドーパントも歯の弾丸で『プリキュア５』のドリーム達を襲う。
しかし、両方とも避けられ、反撃させられる。

「皆！」
「「「「ＹＥＳ！」」」」

『５ＧＯＧＯ』のドリーム達は両腕を蝶の部分にクロスする。

「『プリキュア・シューティング・スター』！」
「『プリキュア・ファイヤー・ストライク』！」

「『プリキュア・プリズム・チェーン』！」
「『プリキュア・エメラルド・ソーサー』！」
「『プリキュア・サファイア・アロー』！」

『５ＧＯＧＯ』のドリーム達は必殺技を繰り出す。

「ぐわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

ネバタコスは消滅される。
『プリキュア５』のドリーム達もそれぞれの武器を出し、一つにし、それを巨大化する。

「夢と希望の力とともに！」
「「５つの光よ！」」
「「今ここに！」」
「「「「「プリキュア・ファイブ・エクスプロージョン！」」」」」

『プリキュア５』は『プリキュア・ファイブ・エクスプロージョン』を放つ。

「ウッギャアアアアアアアアッ！！！！！」

アノマロカリスドーパントは消滅される。
そして互いのドリーム達が顔を見合わせる。
その後、『プリキュア５』のドリーム達が光の粒子となり、消えていく。
トパーズ、ガーネット、オパールはフェニキシアンと対峙する。

「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」
「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」

「『プリキュア・オパールメテオ』！」

トパーズは『プリキュア・トパーズビッグバン』を、ガーネットは『プリキュア・ガーネットクロウ』を、オパールは『プリキュア・オパールメテオ』を放つ。

「ウワアアアアアアアッ！」

フェニキシアンは後ろに倒れこむ。

「馬鹿な、どこからそんな力を！？」

「知りたい？　そりゃ、知りたいわよね！」

「教えてあげるわ！　私達は仲間と助け合うことで強くなるの！」

「仲間と助け合い、協力し、成長する！」

「「「それが絆の力よ！」」」

3人は互いの手を置く。

「「「身と心を一つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！」」」

3人は『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を放つ。

「アアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

フェニキシアンは消滅される。

～～～～～～～～～～

トパーズ達の戦いをモニターで見守る宇治原。

「やれやれ、呆気ないね、フェニキシアン。」

宇治原は呆れたような言い方でフェニキシアンをバカにする。

「宇治原様、宇治原様！」

別のモニターからチーズが出てきた。

「なんだ、チーズ？」

「シンセイジャーの３人が明日近くの川にある大樹に行って、シンビーストが眠っている世界に行くつもりですチズよ！」

「よし、君はこれからダイオキシーの所に行ってくれ。」

「了解ですチズ！」

宇治原はチーズからのモニターを消す。

## 夏海と和夢

フェニキシアンとの戦いの後、真理奈達はのぞみ達にココについて話した。
ココが何者かによってダークネスメモリを体内に入れられ、ダーク小々田へと変貌し、ウルザードとして活動させられたことを・・・

「そんな・・・ココが・・・」
「ごめんね、嫌な事話して・・・」

のぞみは忍美の話を聞いて、少し落ち込む。

「ココ様を操るなんて許さないミル！　見つけたら懲らしめてやるミル！」
「まあ、落ち着きなよ、ミルク。　正体が分からない以上、懲らしめるどころじゃないよ。」

真理奈は冷静に言い出す。

「兎に角、夏海ちゃんと和夢に連絡しよう。　ドリーム達も力を取り戻せたって。」
「そうだね。」

安美は夏海を、愛は和夢を連絡する。

～～～～～～～～～～～～～～～～

その頃・・・

「・・・」

和夢は縁側で空を見上げる。
和夢はダークドリームとの戦いの最中を思い出す。

『外見は闇のプリキュアでも、ダークネスのガイアメモリに操られただけです！』

「夏海さん、なんで敵をかばうんだろう・・・」

夏海も部屋で和夢の事を思い出す。

『これ以上！　誰かの夢を！　奪わせはしないわ！』

「誰かの夢のために戦うなら、なんで操られただけの人を・・・」

その時、２人の『ジュエルコミューン』から着信音が鳴る。

「安美？」
「愛か？」

２人は画面を見て言う。
しかし、しばらく経つと２人はすぐに通信を切る。

～～～～～～～～～～

「えっ？　もしもし？」
「変だなあ、連絡取らないなんて。」

安美と愛は2人からの返事が来ないことを気付く。

「希望ヶ花市で何があったんやろう？」

友子は2人の事を心配そうに言う。

「・・・よし、すぐに希望ヶ花市に行こう。　成美さんが向かってるけど、私たちも行く必要があるわね。」

真理奈は希望ヶ花市に行くと言い出す。

「そこに行くなら、シロップが乗っけてやるロプ！」

～～～～～～～～～～～～

「ずっと、高見の見物をするのは体に毒だね。　少し腹ごしらえでもするかな。」

宇治原がいるのは『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』の前である。

「いらっしゃい。」

「お兄さん、たこ焼き1つお願いね。」

「はい。」

来斗はすぐにたこ焼きを作り始める。

その間、宇治原はカレンダーを見つめる。

（ふーん、明日休業日なんだ。　今日ここに来て正解だったね。）

宇治原は今度は来斗の方に振り向く。

（風都の人間がこんな所にいるとはね。）

「お待ちどおさまでした。」

来斗はテーブルの上にたこ焼きを置いた。

「どうも。」

宇治原はすぐにたこ焼きを食べた。

その時、ひかりはコーンフレークと生クリームを買い終え、『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』に戻ってきた。

「来斗さん、ただいま。」

「おかえり、ひかりちゃん。」

来斗はひかりが帰って来たことに気付き、返事した。

「ご馳走様。」

宇治原は来斗に金を払い、『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』から去っていく。

「ありがとう御座いました。」

ひかりは宇治原にお礼を言う。

そして、宇治原がひかりの横に通り過ぎた途端・・・

（！？）

ひかりは宇治原から何かを感じ取ったのか、表情が一変する。
そして、宇治原に振り向く。

（何、あの人・・・この感じ、前に感じたことが・・・）
「ひかりちゃん？　ひかりちゃん！」

ひかりはハッと我に返る。

「どうしたの、ボーっとして。」
「あ、いいえ。　なんにも・・・」
「そうか。」

来斗は安心したのかため息を出す。

「ひかり、来斗君！　そろそろ店閉めるよ！」
「「はい！」」

ひかりと来斗はアカネの指示に従って、片付けを始めた。
そして、片付けを終えた後・・・

「ご苦労様、ひかりちゃん。」
「お疲れ様です。」
「明日休業日だから、何か予定入れないとね・・・」

来斗はしばらく考え始める。
そして・・・

「じゃぁ明日、デートしようか？」
「えぇっ！？／／／」

ひかりは来斗のいきなりの発言に顔が赤くなる。

「四ツ葉町に行く？　一緒に。」

「な、何言ってるんですか！？／／／」

驚きを隠せないひかり。

～～～～～～～～～

「何！？　シンセイジャーがシンビーストの所へ！？」

「はいチズ、そこにはシンビーストが眠っているという世界につながっているらしいチズよ。」

チーズはマンタイラにシンセイジャーが明日向かうと言うシンビーストの眠る世界に向かうことを伝えた。

「おのれ、シンセイジャー。　シンビーストのところには行かせん。オクトル！　奴らを待ち伏せしろ！」

カイリンダはオクトルに命令した。

「おうよ！」

## 仲直り、自分に嘘はつかない。

加音町でゲゾールを倒し、サンクルミエールでフェニキシアンを倒したプリキュア。
その後、真理奈達は忍美、安美、友子、愛はのぞみ達と別れ、シロップに乗って、夏海と和夢が任せていて、成美が向かっている希望ヶ花市に行った。
数分後、真理奈達は希望ヶ花市に到着した。
その後、シロップと別れを告げる。

「さて、とりあえずは希望ヶ花市に着いたけど、夏海達はどこにいるんだろう？」

真理奈達は希望ヶ花市に着いたものの、夏海達はどこにいるかはっきり分からないのだ。
その時、真理奈の『ジュエルコミューン』から着信音が鳴る。

「成美さんからだ。　もしもし。」
「あ、真理奈ちゃん？　今ね、いつきちゃんの家にいるの。　そこに夏海ちゃんと和夢ちゃんがいるわよ。」
「えっ！？　あのいつきの！？　じゃ、すぐに行きます！」

真理奈は成美からの通信を切り、『ジュエルコミューン』をしまう。

「夏海達はいつきの道場にいるみたいよ。」
「本当に！？」
「うん、早速行こう。」

真理奈達はいつきの道場に向かった。

～～～～～～～～～～

成美は携帯電話をしまい、和夢の横に座った。

「和夢ちゃん、あなたの気持ちは分からなくもないわ。　でも、もし夏海ちゃんが操られてたらどうするつもりだったの？」

「そ・・・それは・・・」

「その顔だと戦えないと言いたげね？」

和夢は成美の言葉に頷く。

「和夢ちゃん、確かに悪を倒さなきゃいけないけど、何より誰かを助ける、守ることを考えるべきだと思うの。　伝説の戦士だって大切なものを守るために戦ってる。　それに、あなたは仲間と一緒に戦うって決めたんじゃないの？」

「！」

和夢は以前自分が言ったことを思い出す。

『僕は最初、仲間はいらないと言い続けたけど、僕はもう、みんなと一緒に戦うって決めたんです。』

「そうですよね。　僕が言った事なのに、自分一人で戦っているつもりになって・・・今考えると恥ずかしい・・・けど、今度からはもう自分に嘘はつきません！　仲間のためにも！」

「うん、よく言ったわね。」

和夢は悩みを吹っ切れた。

～～～～～～～～～～～～～～～

「・・・」

夏海は一人で体育座りしている。
その時、縁側から和夢が入ってきた。

「夏海さん、あの時はごめんね。　真理奈達と初めて一緒に戦った後、一緒に戦うって決めたのに、自分勝手で一人で戦っているようなことをしてしまった。　でも、今の僕は違う。　もう仲違いはしない。　手品師の罪は人の夢を壊してしまうことと、誰かを悲しませる所を黙って見ている事だ。　今度からは自分に嘘はつかない。　だから、一緒に戦おう。」

「和夢さん。」

「フフ、ちょっとカッコつけすぎたかな?」

和夢は自分の言葉に少し赤らめる。

「和夢さん、私たち友達ですよね?」

「・・・うん、言ったはずだよ?　今度からは自分に嘘はつかないって。」

和夢は夏海に手を差し伸べる。

「これからも頑張りましょう。」

夏海は和夢の手を握る。
そして和夢は夏海の手を引っ張り、立たせた。

「失礼しますっと。」

反対側から真理奈達が入ってきた。

「和夢、あの時連絡切ったようだけど何かあったの？」
「夏海もどうしたの？」
「「なんでもない。」」

夏海と和夢は同時に言った。

「あ、ハモった。」
「まあ、何はともあれ、２人は元気でよかった。　さ、そろそろ帰ろう。お母さん達、心配してるからね。」
「うん。　せやけど、明日はどうするん？」
「明日はここ、希望ヶ花市と四ツ葉町に行くよ。」

真理奈は明日の予定を言う。

「希望ヶ花市は僕が。」
「ウチもやで。」
「あたしも！」

和夢、友子、愛は希望ヶ花市にと言い出す。

「じゃあ、私と忍美と安美と夏海は四ツ葉町か。」
「そうね、明日の朝、絆柱にね。」

真理奈達は明日の準備を整えるため、各自、自宅に戻った。
和夢は成美の家で寝泊りすると言い、成美の車で『ＲＥＢＩＲＴＨ』

に向かった。

## 冒険者、現れる！

夜、宇治原はビルの屋上でオーガと対面する。

「将軍様、いくら負の力を溜め込むためとはいえ、そろそろ本気出さないと痛い目に遭うよ。　ゲゾールがやられてしまうくらいだからね。」

「俺が負けるとでも思ってるのか？　プリキュアをやる前にお前からやってもいいんだぜ？」

オーガは宇治原に挑発する。

「怖い怖い・・・分かったよ、将軍様の考えに任せるよ。」

「フン。」

オーガは宇治原の前から消えた。

（さて、どうするか・・・ひかりっていう女の子、他の地球人とは違う器だね。　何か特別な力を持ってることは確かだ。　そのおかげで僕の中にあるジャアクキングの闇の力を感じ取った。）

宇治原はひかりについて俯いた。

（このままだと時期に僕の正体がバレるかもしれない・・・どうする・・・）

～～～～～～～～～～

翌朝、絆柱に集合した真理奈達は行き先を確認した後、真理奈と忍美と安美と夏海は四ツ葉町に、友子と愛と和夢は希望ヶ花市に向かった。

「ねぇ、和夢。　あれからスナッキーはどうしたの？」
「２人のスナッキーは『ＲＥＢＩＲＴＨ』に預けられてるよ。」

プリキュアに謝りたいというスナッキーはあの後、『ＲＥＢＩＲＴＨ』に預けているらしい。

「それより、四ツ葉町で安田さんと一緒にいる素人プリキュア、なんだか不安だよ。　正直期待できない。」
「静香ちゃんのことね。」
「大丈夫や、四ツ葉町には真理奈ちゃん達がおんねや。」
「・・・そうだね。」

和夢は静香の事を期待できないというが、友子は心配ないという。
和夢は参ったような顔振りしたように認めた。

～～～～～～～～

一方、真理奈達は四ツ葉町に到着。

「ここに明子さんが来てるんだね。」
「静香ちゃんもね。」
「ウ～ッ、早く会いた～い！」
「安美、興奮しすぎだよ・・・」

安美は成美から静香の事を聞いたからか、興奮しまくりである。

「ん？」

真理奈が見たのは、ひかりと来斗が一緒に歩いている所である。

「ひかりに・・・来斗さん？」
「あ、本当だ。　何やってるのかしら？」
「さあ、でも仲良さそうだよね。」

真理奈と忍美はひかりと来斗の状況を見た。

「いいな～、羨ましい・・・」
「安美、妬いてるの？」
「妬いてないよ！」

安美と夏海は来斗とひかりの様子を見届けた。
それを見た真理奈と忍美は呆れた表情で・・・

「全く、安美は・・・」
「やれやれ、なんで女の子はイケメンに弱いんですかね？」

・・・と言い出す。

～～～～～～～～～～

その頃、翔一達は川のほとりにある大樹に向かった。

「2人とも、もう少しで例の大樹だよ。」
「あぁ。」

「シンビースト、どんなものなんだろう。」

それから２０分後・・・

翔一、瑞穂、天馬は大樹に到着した。

「着いたね。」

「ここから見るとでかいわね。」

翔一達は大樹を見上げる。

「よし、行こうぜ。」

翔一は大樹に近づく。

しかしその時・・・

「そこまでだ、シンセイジャー！」

「「えっ！？」」

翔一達の目の前にのっぺらぼうのオクトルが現れた。

「行かせはせんぞ！」

「瑞穂、天馬！」

「えぇ！」

「うん！」

翔一達は『シンセイチェンジャー』を構える。

「「「シンセイチェンジ！」」」

３人はシンセイジャーになる。

「今探し物を探してる途中なんだよ！　邪魔すんな！」
「黙れ！　出て来い、怪人共！」

オクトルはブラックボックスで怪人を出した。
その怪人はエターナルのスコルプ、魔化網の牛鬼である。
その時・・・

「レディ！　ボウケンジャー、スタートアップ！」

オクトルたちとシンセイジャーは声が聞こえたため、振り向く。
そこにいるのは・・・

「熱き冒険者、ボウケンレッド！」
「迅き冒険者、ボウケンブラック！」
「高き冒険者、ボウケンブルー！」
「強き冒険者、ボウケンイエロー！」
「深き冒険者、ボウケンピンク！」
「果て無き冒険スピリッツ！」
「「「「轟轟戦隊、ボウケンジャー！」」」」」

轟轟戦隊ボウケンジャーである。

**シンビースト、目覚める。**

「ボウケンジャー！？」
「本物に会えるなんて！」
「喜んでる場合？　早くダイオキシーを倒すよ！」

シンセイジャーは構える。

「おい、お前ら。　さっさとシンビーストの所へ行けよ？」
「そうそう、ここはあたし達に任せて。」

ボウケンブラックとボウケンイエローが言った。

「えっ？　でも・・・」
「大丈夫だよ、簡単にはやられないから。」
「私たちのことは気にせず、行ってください。」

ボウケンブルーとボウケンピンクが言った。

「いいんですか？」
「あぁ、ちょっとした冒険だ。　異世界の冒険、頑張れよ。」

ボウケンレッドが言った。

「瑞穂、天馬。　行くぜ！」
「えぇ！」
「うん！」

シンセイレッドとシンセイブルーとシンセイイエローは大樹の所に

向かった。

「行かせるな！」

オクトルはスコルプと牛鬼に命令した。

「「「「「『サバイバスター』！」」」」」

ボウケンジャーは『サバイバスター』でオクトル、スコルプ、牛鬼を足止めする。

「それはこっちのセリフだぜ？」

「アタック！」

ボウケンジャーはオクトル、スコルプ、牛鬼に立ち向かう。

一方、シンセイジャーは大樹の前に立った。

「けど、どうやって？」

「ここまで来たはいいけど、どうやってシンビーストの世界に入るのよ？」

シンセイブルーが大樹に触れる。

その時・・・

「キャアァッ！？」

シンセイブルーは大樹に呑まれる様に入った。

「瑞穂！？」

「（もしかしたら！？）翔一！　僕達も！」

シンセイイエローはシンセイレッドを引っ張って、大樹の中に入った。

～～～～～～～～～～

ここは、古代遺跡のような場所であり、３つの巨大な台座がある。
その台座に赤く巨大な鷹、青く巨大なシャチ、黄色く巨大なユニコーンがいる。
鷹の方はシンホーク、シャチの方はシンホエール、ユニコーンの方はシンユニコーンである。

「シンホーク、シンホエール。ダイオキシーが近くにいる。」
「本当なの、シンユニコーン。」
「あぁ、今はボウケンジャーたるものが食い止めている。」
「お出迎えが来たぜ。」

シンホーク達は台座の下に見下ろす。

「ここがシンビーストの世界。」
「そのようだね。」
「あれは！？」

シンセイジャーはシンビーストの方に見上げる。

「よく来た、シンセイジャー。」
「ここは、私達シンビーストが眠る空間。」

シンユニコーンとシンホエールが言った。

「シンビースト、ダイオキシーが遠い宇宙から来た宇宙人と手を組んでこの地球を征服しようとしてるんだ。」
「なに!?　本当か!?」
「うん。　だから、力を貸してほしいんだ!」

シンセイイエローはシンビーストに事情を話した。
その時、シンホークの後ろから咆哮が雄叫ぶ。
現れたのは銀色の巨大なライオンである。

「「「シルバレオン!」」」

シンホーク達はそのライオンの事をシルバレオンと呼んだ。

「焔翔一、波川瑞穂、神代天馬。　あえて言おう。　お前達は真に自然の命を愛しているか?」
「「「えっ?」」」

シンセイジャーはシルバレオンの言葉に目が点になる。

「我々は大自然の守護者。　この地球の自然にはすべて命がある。
しかし、人間はその自然を傷つけた。　お前達は真に自然を愛しているか?」

シルバレオンはシンセイジャーに質問する。

「確かに僕達人間は自然を壊し、過ちを犯してきた。」
「でも、それがいけないって気付いたから、皆はその自然を守ろうとしてるの。」
「俺達だって地球の自然が大好きなんだ!　いずれ亡くなってしま

う時が来ても、必死で生きてるんだ。　俺達はそんな自然が大好きなんだ！」

「「「だから、ダイオキシーに自然を傷つけさせない！」」」

シンセイジャーはシルバレオンに言った。

「・・・よかろう、ならばそれを証明して見せよ。」

シルバレオンは了解を得る。

「シンホーク、シンホエール、シンユニコーン。　シンセイジャーと共に行くのだ。」

「あぁ！」

「オッケーッ！」

「はい！」

シンホーク達は台座から降りて、シンセイジャーの前に立つ。

「シンセイレッド、俺の名はシンホーク。　よろしく頼むぜ。」

「あぁ！」

「シンセイブルー、私はシンホエール。　一緒に戦いましょう。」

「よろしくね！」

「シンセイイエロー、私はシンユニコーン。　行こう、人間界へ。」

「うん！」

シンセイジャーはシンビーストに乗り込み、ボウケンジャーの所に向かった。

# 暗黒八惑星、迎撃！

シンセイジャーがシンビーストが眠る世界に行く前、ミステリー星人を除く暗黒八惑星は惑星ルインにレジスタンス星人が潜んでいると聞き、到着した。

「懲りない宇宙人たちね。　勝てないと分かっているのに・・・」
「いいじゃねぇか、プルト・ハデス様がやれって言ってるんだぜ？」
「固より惑星レジスタンスのエイリアンは惑星テテュスとは協力的ではない。　セイバー達と組んでいない以上、絶好のチャンスだ。」
ネプトユーヌ、サタンギラス、ジュピタールの順に言った。

「アースロンは惑星レジスタンスの住人のようですね？」
「あぁ、お前とマーキュリアが入る前にアースロンとヴィンラスが暗黒八惑星として戦ったのだ。　だが、ヴィンラスが裏切ったためアースロンの手に葬られたがな。」
ヴィーナシエル、ウラヌシオンの順に言った。

「へぇ～、そんなことがあったんだ。」
「結構可愛い女の子なのにな。　アースロンの奴、殺生な奴だ。」
マーキュリア、マルジスの順に言った。

「昔話は後にするぞ。　そろそろお出ましだ。」
ウラヌシオンは前を向く。
目の前にいるのはゼクトルーパーのような姿に白で基調した宇宙人

が数十人いた。
それがレジスタンス星人である。

「突撃だ。」

暗黒八惑星は一斉に走り出す。
レジスタンス星人の軍団も突撃する。
マルジスは回し蹴りをしたり、背負い投げをしたり、踵落としをするなど、格闘技でレジスタンス星人を圧倒させる。

「ハッ！」

マルジスは拳を強く前に出すと、炎を纏った獅子が数人のレジスタンス星人を襲う。
それによって炎上し、倒れこむ。
ジュピタールは素早い動きでレジスタンス星人を斬り裂く。

「木の葉乱舞！」

ジュピタールは自らの分身を出し、数人のレジスタンス星人を翻弄するように動き回り、その後次々と斬りつける。
ヴィーナシエルは左腕からマシンガンを出し、射撃する。
近くにいるレジスタンス星人は蹴り技で対抗した。

「そこまでです！」

ヴィーナシエルは右足からミサイルを発射し、レジスタンス星人を一掃する。
マーキュリアは泡でレジスタンス星人を囲み、指笛で水の矢を出し、レジスタンス星人を貫く。

「水星に代わって・・・お仕置きよ♪」

マーキュリアはフィンガースナップでレジスタンス星人の足元から水を溢れ出し、窒息させる。
サタンギラスは手の動作で地面を割らせたり、地面が盛り上げて生きているかのようにレジスタンス星人を襲う。

「女の子が戦場にいたらエスコートしたいぜ。」

サタンギラスの目が光った後、レジスタンス星人の周囲の地面が落とし穴になるように下げられる。
サタンギラスから上から太刀で炎の刃を作り、レジスタンス星人を襲う。
ネプトユーヌは華麗な動きでレジスタンス星人を蹴る。
そして、水の鞭でレジスタンス星人を打つ。

「ウフフ・・・いただきます。」

ネプトユーヌはシャチのような水の塊となってレジスタンス星人を食べるように襲う。
ウラヌシオンは軽快な動きを利用して槍で斬り裂く。
そして翼から羽根の矢を放ち、次々と撃ち抜く。

「さらばだ、全宇宙の屑共！」

ウラヌシオンは風を巻き起こし、レジスタンス星人を飛ばした後、槍でレジスタンス星人を斬り裂く。
八惑星は周りにレジスタンス星人の残党がいないか確認した後、壁際に着き、背もたれしたり、座ったりした。

その後、ヴィーナシエルが持つアタッシュケースからペンライトのような物を取り出し、他の八惑星に配る。
そして、そのライトで自分の体に照らす。

「う～ん、非常に効くね。」

戦いの最中で傷ついた体が完治した。

「このスペースライト、結構役に立つな。」
「おかげでスムーズにいけそうね。」

マルジス、ネプトユーヌの順に言い出す。

「この惑星のレジスタンス星人は大幅に減った。　早く終わらせるぞ。」
「フフフフ、全く愚かな奴らだ。　『パーフェクトな強さを誇る偉大なるネオプラネットの幹部、暗黒八惑星の一人、ビューティーにかっこいい天王星のウラヌシオン』に逆らうとはなめられたものだ。」
「「だから、呼び名長すぎ！」」

ネプトユーヌとマーキュリアはウラヌシオンにツッ込む。

## チョウシンセイ、推参！

物語は現在に戻る。
ボウケンレッドはオクトルを、ボウケンブラックとボウケンイエローは牛鬼を、ボウケンブルーとボウケンピンクはスコルプを対峙した。

「いきますよ、ブルー！」
「オッケー、ピンク。」

ボウケンブルーは『ブロウナックル』を、ボウケンピンクは『ハイドロシューター』を出した。

「『ナックルキャノン』！」
「『シューターハリケーン』！」

ボウケンブルーは『ナックルキャノン』を、ボウケンピンクは『シューターハリケーン』を放つ。
スコルプはそれによって消滅してしまう。

「さっさと終わらせるぜ、菜月。」
「ブラック、ミッション中はコードネームでしょ？」
「そうだったな。」

ボウケンブラックは『ラジアルハンマー』を、ボウケンイエローは『バケットスクーパー』を出した。

「『ハンマーダイナマイト』！」
「『スクーパーファントム』！」

ボウケンブラックは『ハンマーダイナマイト』を、ボウケンイエローは『スクーパーファントム』を繰り出す。
牛鬼は大ダメージを受け、爆散される。

「喰らえ！」

オクトルは墨を吐き出すが、ボウケンレッドはそれを避けて、『サバイブレード』でオクトルを斬りつける。

「ぐぅっ！？　おのれ！」
「そろそろ終わりにするぞ！」

ボウケンレッドは『ボウケンジャベリン』を出した。

「くっ！」

オクトルは再び墨を吐くが、ボウケンレッドはジャンプで避ける。

「『レッドゾーンクラッシュ』！」

ボウケンレッドは『レッドゾーンクラッシュ』でオクトルを一刀両断する。

「ガアァァァァァァッ！！？」

そして、ボウケンレッドはオクトルの懐に走り出し・・・

「『ジャベリンクラッシュ』！」

『ジャベリンクラッシュ』でオクトルを斬りつける。

「グワアアアアアアアアアッ！！！！」

それに伴い、オクトルは爆散される。
しかし、オクトルの体がヘドロになって、そのヘドロが大きくなり、巨大化した。

「許さんぞ～！！」
「チーフ、ゴーゴービークルを・・・」
「いや、その必要は無さそうだ。」

ボウケンレッドが言い出す。
その時、オクトルの背後から衝撃を受ける。

「グオッ！？　なんだ！？」

オクトルは後ろに振り向く。
そこにはシンホークとシンホエールとシンユニコーンがいた。

「お待たせしました、ボウケンジャーの皆さん。」
「ここからは私たちに任せてください！」
「よ～し、いくぜ！」

シンビーストは巨大化したオクトルに向かう。

「チーフ？」
「あいつらに任せよう。　シンセイジャーの冒険はここから始まるんだ。」

ボウケンレッドはシンセイジャーの前から去っていく。
ボウケンブラック、ボウケンブルー、ボウケンイエロー、ボウケンピンクもボウケンレッドに続くように去っていく。

「シンセイジャーめ・・・！　叩き落してやる！」
「「「こっちのセリフだ（よ）！！」」」

シンホークは翼でオクトルを斬りつける。

「グッ！」

シンホエールは尻尾でオクトルをたたきつける。

「ガッ！」

シンユニコーンは角でオクトルを突き出す。

「グオッ！」

シンビーストの攻撃で怯むオクトル。

「翔一、そろそろ決めるぞ！」
「瑞穂、合体して奴を倒すよ！」
「天馬！」
「オォッ！」
「オッケーッ！」
「分かった！」

シンセイジャーは了解する。

「「「新生合体！」」」

シンユニコーンが足となり、シンホエールがボディとなり、シンホークの体とシンホエールの尾の部分が腕となり、鉤爪から手となり、翼をボディの背中について、シンホークの頭部がボディの頭となり、嘴の中から顔を出し、巨人に合体し、シンユニコーンの頭部を刀となって、それを持つ。

「「「チョウシンセイ！　推参！」」」

シンセイジャーはその巨人をチョウシンセイと名付ける。

「しまった、チョウシンセイに合体を！」

オクトルはチョウシンセイを殴りかかるが・・・

「「「『チョウシンセイバー』！　『ライトニングブレイク』！」」」

『チョウシンセイバー』と呼ぶ刀を雷で纏わせ、オクトルを斬りつける。

「ゴアァッ！！」

オクトルは後退する。

「止めだ！」

「「「『チョウシンセイバー』、新生奥義！」」」

チョウシンセイは『チョウシンセイバー』を円を描くように回し・・

・

「「「『シンセイクリーンヒット』！！」」」

オクトルに火の刃、水の刃、雷の刃を一回ずつ斬りつける。

「グワアアアアアアアアアアッ！！！！」

斬られたオクトルはチョウシンセイの前に倒れ、爆散される。

「よっしゃーっ！！」
「ヤッターッ！！」
「勝った！」

シンセイジャーは大喜びした。

「天馬、これから先は強敵と戦うことになるだろう。　覚悟はできてるか？」
「承知の上だよ。」
「瑞穂、これからもよろしくね。」
「うん、よろしく。」
「翔一、一緒にダイオキシー達を倒そうぜ！」
「おうよ！」

## オーガの目的

その頃、真理奈達はラブたちを探す前に明子と9人目のプリキュアになったと言う水城静香の所に向かった。

「私たちプリキュアもこれで9人か・・・何人いるんだろうな？」
「パワーストーンが12個あるわけだから、12人じゃない？」
「う～っ！　会いたい、会いたい、会いたい・・・会いた～い！！」

大興奮の安美。

「安美、落ち着いて。」
「あんたが会いたい理由は彼女が水を操れるって分かったからでしょ？」

安美を抑える夏海と呆れ気味の忍美。

「「イヤアァァァァァァァッ！！！！」」

突然の悲鳴に驚く4人。

「今のは！？」
「行こう、皆！」

真理奈達は悲鳴の聞こえた方向に走る。

～～～～～～～～～～～～

悲鳴の正体は桃園ラブと蒼乃美希である。
そして、2人を庇うように立っているのは山吹祈里。
更に、彼女達の目の前にいるのはオーガである。

「キュアパイン、変身できないクセしてそいつらを庇うとはいい度胸じゃねぇか。」

オーガはゆっくりと近づく。

「友達を見捨てるなんてできない！」
「強がりもそこまでだ。」

オーガは『獄炎棒』で振り下ろそうとした。
しかし・・・

「フッ！」

オーガの前にキュアターコイズが現れ、『ターコイズカリバー』に防がれる。
さらに、キュアパッションとキュアアクアマリンがオーガに攻撃する。

「フン！」

しかし、簡単に避けられる。

「あなたがオーガ・・・ラブさん達のプリキュアの力を渡してもらいましょう。」
「取れるものなら取ってみろ。」

構えるターコイズとアクアマリンとパッション。

「待ちなさい！」

一同が振り向くとトパーズ達の姿が映る。

「ターコイズ！　お待たせしました！」
「私たちも戦います！」
「トパーズ、皆さん！」

トパーズ達はターコイズたちの横に並ぶ。

「オーガ、これで7対1よ！」
「威勢のいいことを言うな。　ゲゾールに苦戦されたガキ共め。」

オーガは余裕を見せる。

「いくよ！」
「うん！」
「「はい！」」

トパーズ、ガーネット、オパール、パールはオーガに攻撃した。
しかし、軽々と防がれる。

「皆、離れて！　『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』！」

パッションは『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』でオーガを襲うが、それも防がれてしまう。

「フン。」

「！　行けーっ！」

アクアマリンは手を強く前に出すと、水が『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』を纏う。

「チィッ！」

怯んだオーガだが、辛うじて避けた。
同時に『獄炎棒』から3つの光の玉が出てきた。
ターコイズはその光を受け取る。

「そろそろ本気を出さないと、やばいんじゃないの？」

オパールはオーガに質問する。

「いいぜ、ブロッサム達の力を渡した後でな。」
「「「「「「えっ？」」」」」」
「どういうこと？」
「明日が決戦だ、プリキュア。」

オーガはそう告げ、去っていく。

「一体何が狙いなの？」

～～～～～～～～

「オーガ、これでお前が持っているプリキュアの力はあと6つだぜ？　何考えてんだ？」
「悪ぃな、俺が今持っている力の内2つはアースロンって野郎に渡

したぜ？」

オーガは2つのプリキュアの力の事を教えた。

「アースロン？　そいつは誰だ？」

「1年前にここに来た宇宙人だ。　それより、明日は光の園に向けて出発する。　そして光の園に侵略するんだ。」

オーガは明日の予定を言う。

「何を言う？　あそこは地上から通じる道がなければ侵略することはできんのだぞ？」

「だからこそ、この負の力を集めたんだ。　大勢の人間共の悲鳴のおかげで予想より早く道を作れるぜ。」

オーガが集めた負のエネルギーで光の園に繋ぐ道を作り、侵略しようと考えていた。

「プリキュアは邪魔な存在だ。　手始めに光の園をぶっ潰してやるぜ。」

～～～～～～～～～～

その頃、八惑星は惑星ルインにいるレジスタンス星人を倒し続けた。

「宇宙拳法・獅子豪炎！」

マルジスは炎のライオンを出し、そのライオンが爪でレジスタンス星人を薙ぎ払う。

「宇宙忍法・流星の舞！」

ジュピタールは刀の分身を作り、その刀を矢のようにレジスタンス星人を襲う。

「フハハハハッ！　楽勝だな！」

「フン・・・」

勝ち誇ったように言い出すマルジスと笑みを浮かべるジュピタール。

「潰れろ！」

サタンギラスは地割れを起こし、その地割れでレジスタンス星人を挟む。

「飲み込んであげる。」

ネプトユーヌは水のシャチとなって、レジスタンス星人を飲み込む。

「早いトコ終わらせて、キャバクラルームでイチャイチャするぜ。」

「全く、これだからスケコマシは・・・」

サタンギラスは楽しみにしていそうな事をいう反面、ネプトユーヌは呆れ気味で言う。

「海より広いあたしの心もここらが我慢の限界よ！」

マーキュリアは数十個の水玉を出し、それをレジスタンス星人に放つ。

「風穴を開けましょう。」

ヴィーナシエルは銃で次々とレジスタンス星人に発砲する。

「フフフフ、楽しいショーだったぞ？」

ウラヌシオンはボウガンでレジスタンス星人に発砲する。

「これで全員？」

「えぇ。」

「これで『アルカトラーズ』に帰れるな。　さて、アースロンの方はどうなったかな？」

質問するマーキュリアに答えるヴィーナシエルに、アースロンを気になるウラヌシオン。

八惑星はレジスタンス星人がいないことを確認した後、小型宇宙船に戻る。

「「「ヤアァァァァァァァァッ！！！！」」」

ペリドットとダイヤモンドとアメジストはオーガと対峙していた。

「フハハハハハッ！！」

オーガは3人の攻撃をすべて防ぐ。

アメジストは瞬時に『ジュエルコミューン』から『アメジストバトン』に変え・・・

「『プリキュア・アメジストマジック』！」

『プリキュア・アメジストマジック』を放つ。

しかし、オーガに弾かれた。

「そんな技、効かねぇな？」

「クッ！」

オーガは『獄炎棒』をプリキュアに向け、火炎弾を放った。

「『サンフラワー・イージス』！」

サンシャインは『サンフラワー・イージス』で火炎弾を防ぐ。

「ウチ等は！」

「負けないわよ！」

ペリドットは『ペリドットトランス』にダイヤモンドは『ダイヤモンドマイク』に変える。

「『プリキュア・ペリドットサイクロン』！」
「『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」

ペリドットは『プリキュア・ペリドットサイクロン』を、ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』を放つ。
しかし、オーガは『獄炎棒』でそれらを防ぐ。

「『サンシャイン・フラッシュ』」

サンシャインは『サンシャイン・フラッシュ』でオーガに攻撃する。

「クッ！」

ダメージを受けるオーガ。
同時に2つの光の玉が飛び出す。
ダイヤモンドはそれを受け取る。

「楽しみは取ってやる。　明日、楽しみにしていろ！」
「明日？」
「どういうことなん？」

オーガは何も言わずに去っていく。
その後、ペリドット達は変身を解き、植物園に戻る。

「つぼみ、えりか。　取り戻したよ。」
「ありがとう御座います！」
「これで一緒に戦えるよ！」

つぼみとえりかにプリキュアの力を渡すいつき。

「つぼみ達はオーガの妖術に掛けられなかったみたいだね？」

「うん。」

「実はなぎささんとほのかさんがつぼみ達の身代わりにオーガの妖術をかけられたんだ。」

「成る程・・・」

事情を話すいつきに納得する3人。

「あれ？　君達は昨日の。」

声した方に振り向く友子達。

宇治原が植物園に入ってきたのだ。

「「宇治原さん！」」

愛はつぼみとえりかといつきに宇治原を紹介する。

「奇遇だね、今日はどうしたの？」

「なんでもないですよ。」

「宇治原さんこそ、どうしてここに来てはるん？」

質問する友子。

「昨日の2人組が僕を襲った経験があったんでね、紫の美人さんに守られとこうと思ってね。」

「えぇっ！？　ホントに！？」

「というのは嘘だけどね。」

「嘘かい！」

ズッこける６人。

「フフ、実はニュースがあるんだ。　四ツ葉町に朝なのにも関わらず幽霊が出てきたらしいよ？」

「幽霊？」

「そう、その幽霊は人の家に入って何かを始めてるらしいんだ。何をしているのか正直僕にも分からない。」

宇治原は詳しいことを話す。

その時、つぼみの顔が青くなる。

「あれ～？　つぼみ、もしかして幽霊怖いの～？」

「ヒッ！？　こ、怖くなんかないですよ！？　私はただ・・・」

宇治原は今のつぼみを見て意地悪そうな表情を浮かべる。

「アーッ、幽霊！」

「ヒィッ！？　ど、どこですか！？」

「な～んちゃって。」

宇治原は携帯でつぼみの顔を撮った。

「～～～～～～っ！！　宇治原さん！　酷すぎです！」

つぼみは宇治原にポカポカ殴る。

「ごめん、冗談だって。」

「冗談のつもりなら言わないでくださいよ！」

宇治原に怒るつぼみ。

「とにかく、君達も気をつけるようにね。」

宇治原は友子達の前から去ろうとする。

その時・・・

「待ちなさい。　なんでそのことをつぼみ達に教えるの？」

入り口に星守とゆりがいた。

「ゆりさん！」

「星守さん！」

「あなたの事は健一から聞いたわ。　人間のフリをして学園生活を始めてるなんて。」

「「「「「えぇっ！？」」」」」

ゆりの言葉に驚く友子達。

「人聞きの悪い冗談はやめてくれないかな？　君達がそこにいるって言うことは聞いていたんでしょ？　僕は昨日、悪者の2人に襲われたんだよ？」

宇治原は本当の事を言う。

「それは違う。　君は芝居をしてたんだ。　君の正体を隠すためにね。」

星守は真実を言う。

「フフフフフフ・・・ハハハハハハハハ・・・」
「宇治原さん？」
「まぁ、いずれはバレるとは思っていたよ。」

宇治原は参ったと感じたのか、アースロンの姿になる。

「「「「「「「エェェェェェェェ！？」」」」」」」
「それがあなたの本当の姿ね？」
「そうだよ。　僕はネオプラネット・地球のアースロン。」

「全く、金髪の三つ編みのお嬢ちゃんがジャアクキングの闇を感じたから誤魔化す方法を考えたのに、星守君が美人さんに言いふらしたからこんなことになっちゃったよ・・・」

アースロンはがっかりしたように言い出す。

「言いふらしたというより、無理矢理言わされただけだけど・・・イ、イテテテッ！」

星守が事実を言い出した途端、ゆりに頬をつねられた。

「いずれにせよ、こうなった以上、しばらくの間話をしておかないとね。」

アースロンはフィンガースナップで空間を変えている。
その空間は宇宙である。

「「エェェェェェェェェッ！！！？」」
「これは・・・宇宙！？」
「夏海ちゃんがここにいたら興奮するだろうな！」
「「オイ・・・」」

今の空間を見て驚く一同。

「これはどういうつもり？」
「植物園は君たちしかいないとはいえ、ちゃんと話せるようにしておこうと思ってね。」

アースロンは理由を述べる。

「目的は何なの？」

星守はアースロンに質問する。

「すべての世界を征服し、すべての者達を奴隷化すること。」

アースロンの言葉に驚く星守とゆり以外の者達。

「どうしてそんなことを？」

「ネオプラネットの首領・プルト・ハデス様は１０年前、別の世界にいるデスリード達のように、自分の星をリセットしたことがあってね。　でも、プルト・ハデス様は物足りないようで、満足できなかった・・・だから、すべての者を服従して、新しい世界を作るんだ。」

アースロンは目的の理由を言った。

「服従やて！？」

「リセットよりはマシだろ？　フッ、大体、リセットとかそんなことを考えるから弱い生き物なんだ。　親や友達が他人に殺されたくらいでそんなことを考えるなんて世界を甘く見過ぎてる。」

「こいつ・・・」

和夢はアースロンが他人の事を笑っている所を見て怒りを露に出す。

「和夢、待って。」

「なんだよ！」

友子が和夢を下がらせる。

「もう一度聞くけど、ウチとはどこかで会うてへんか？」

「あの時は嘘をついてすまなかったね。　そうだよ、確かに君とは1年前に会ったさ。　あの時はジャアクキングに負けた後だったね。　僕が倒れているところを君が介抱してくれた。　でも、礼は言わないよ？　伝説の戦士プリキュアがオーガと戦ってから数ヶ月、君が作り物のプリキュアに変身したからね。　そうと分かった以上、袂を分かれるしかなかった。　全く、僕の恋人が裏切った時の事を思い出すよ。」

アースロンは友子の質問に答える。

「じゃあ、ココがダークネスメモリでウルザードにならせたのも？」

「僕がやったのさ。　ココの場合は実験台として使っておいたんだ。　残りのダークネスメモリは僕のペットに使うつもりだったけど、ウルザードの頼みで半数のメモリを使って、リュウガやダークプリキュアのような悪の戦士に変身させたのさ。」

アースロンはダークネスメモリについて話した。

「さっきもそうですけど、幽霊の事を教えたのは何故ですか？」

「僕個人の理由だけど、ただ奴隷にさせるだけじゃ面白みがないからね。　まぁ、一番の理由は別の世界の悪にネオプラネットの力を見せ付けるというのが本音かな？」

つぼみの質問に答えるアースロン。

「その為に地獄衆や幻想サーカス団と手を組んだのか！？」

「そうだよ。　流石は地球の悪達だ。　地球人を奴隷にせざるを得ないものだね。」

アースロンは笑みを浮かべる。

「あなた達の目的のために地球の悪と手を組むなんて・・・私、堪忍袋が切れました！」

「地球の人達はお互いに助け合っていい世界にしようとしてたのに、それを踏みにじるなんて・・・海より広いあたしの心も、ここらが我慢の限界よ！」

つぼみとえりかがアースロンに向けて言い出す。

「怖い、怖い。　女の子を怒らせると怖いって本当なんだね・・・でも・・・」

アースロンは宇治原司になる。

「僕の本当の姿は僕にとって切り札のような物。　僕のお気に入りのメモリで相手をしてあげるよ。」

宇治原はガイアドライバーを取り出し、腰に取り付けた。
そして宇治原のポケットからガイアメモリを取り出し、ボタンを押した。

【デストピア！】

宇治原はガイアメモリをガイアドライバーに挿入する。
すると、宇治原が黒い鎧を纏い、背中に黒い翼が出てきて、腰に刀を差し、三叉の矛を持つ怪人になった。

同時に空間が元の植物園に戻る。

「ドーパント！」

「そう、これはユートピアに対を成すデストピア。　もう一つの最強メモリさ。」

デストピアドーパントが言う。

「つぼみ！」

「えりか！」

「いちゅき！」

植物園の窓からシプレ、コフレ、ポプリが入ってきた。

「シプレ！」

「ポプリ！」

「ってあんたら、今までどこ行ってたのよ！？」

「話は後です！」

「「「変身ですぅ（です）（でしゅ）！」」」

「「「うん！」」」

つぼみとえりかはプリキュアの力を体の中に入れる。

「「「「プリキュアの種いくですぅ（です）（でしゅ）！」」」」

「「「「プリキュア・オープン・マイハート！」」」」

「「「「ジュエルスパークハリケーン！」」」」

「変身！」

星守は仮面ライダーセイバーに、和夢達はプリキュアに変身した。

「我が名は救世主、仮面ライダーセイバー！」
「永久に続く愛の調べ、キュアダイヤモンド！」
「友と提携する絆の証、キュアペリドット！」
「平和を望む大いなる夢、キュアアメジスト！」
「大地に咲く一輪の花、キュアブロッサム！」
「海風に揺れる一輪の花、キュアマリン！」
「陽の光浴びる一輪の花、キュアサンシャイン！」
「月光に冴える一輪の花、キュアムーンライト！」
「「「「ハートキャッチプリキュア！」」」」

決め台詞を言う戦士達。

## 2つの花と2つの宝石

その頃、四ツ葉町にいた真理奈達はラブ、美希、祈里、せつなと出会い、オーガを追い払うことを成功した。
しかし、オーガの妖術にかけられたのはラブ、美希であることが分かった。

「ラブさん、美希さん。　ジュースを買ってきましたよ。」
「う、うん。　ありがとう。」
「はぁ、こんなに怯えてちゃ、全然完璧じゃないわね・・・」

ラブと美希はかなり落ち込んでいる。

「夏海ちゃん、真理奈ちゃん達は?」
「昨日の戦いの連戦で相当疲れてましたから、成美さんの車で休んでます。」

夏海は真理奈達の様子を話す。
一方、忍美と安美は後部座席、真理奈は助手席で睡眠を取った。

「・・・母・・・さん・・・」

真理奈は寝言を言っている。

『真理奈、お誕生日プレゼントですよ。』
『なんだろう?』

『あぁ!　ハーモニカ!』
『フフ、お誕生日おめでとう。　真理奈。』

『母さん、ありがとう！』

「母さん！」

真理奈はふと目が覚める。
真理奈は夢を見ていたようだ。
彼女はポケットからハーモニカを取り出す。

（母さん、私は今も頑張ってるよ。）

～～～～～～～～～
その頃、セイバーとプリキュア達は植物園から出て、デストピアドーパントと対峙した。

「プリキュア・おしりパンチ！」
「プリキュア・おでこパンチ！」

ブロッサムとマリンはデストピアドーパントに攻撃する。

「ネーミングセンスの悪い技名だね！」

デストピアドーパントは矛を地面に強く叩く。
すると強い衝撃波でブロッサムとマリンを吹き飛ばす。

「「キャアァァァァァッ！！」」
「口ほどにもない。」

アメジストはデストピアドーパントの懐に入る。
そして、アメジストは『ジュエルコミューン』を『アメジストバト

ン』に変えた。

「『プリキュア・アメジストマジック』！」

アメジストはデストピアドーパントの懐に『プリキュア・アメジストマジック』を放つ。

アメジストは当然爆風で吹き飛ばされる。

「グゥッ！　どうだ！？」

煙が晴れると、デストピアドーパントは無傷で立っている。

「捨て身の攻撃かい？　そんなことでは僕には倒せないよ？」

「ヤアァァァァァッ！！」

ペリドットは『ペリドットトランス』でデストピアドーパントを対峙する。

「何でなん！？　助けたのに何でそんな悪いことするん！？」

「悪いね、実を言うと僕は女を信じてないんだ。」

デストピアドーパントは矛で『ペリドットトランス』を止めた後、腰についている刀を抜いて、ペリドットを斬りつける。

「キャアァッ！！」

「『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」

ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』を放つ。

しかし、デストピアドーパントは刀で斬り、破れる。

「ハァッ！」

デストピアドーパントは矛にエネルギーを集め、ダイヤモンドに光線を浴びせる。

「キャアァァァァァァァァァッ！！」

デストピアドーパントに圧倒されるアメジスト達。

「こうなったら・・・」

ペリドットとダイヤモンドはカードを出した。
そのカードの絵はフォルティシモ記号が描かれている。
2人はそのカードを『ジュエルコミューン』に読み込ませる。
すると、ブロッサムとマリンの手に『フラワータクト』が握られ、ペリドットとダイヤモンドの『ジュエルコミューン』がグリップ部分が星型にあしらわれた『フラワータクト』に似た、『ジュエルタクト』になる。

「「「「集まれ、2つの花と2つの宝石の力！」」」」

ブロッサムとマリンとペリドットとダイヤモンドはフォルティシモ記号を描く。

「「「「『プリキュア・フローラル・アンド・ジュエルパワー・フォルティシモ』！」」」」

ブロッサムとマリンとペリドットとダイヤモンドにエネルギーを纏い、突進する。

「僕だって負けないぞ？」

デストピアドーパントは翼を羽ばたき、宙に舞う。
そしてデストピアドーパントの足にエネルギーを集約する。

「ハッ！！」

デストピアドーパントはライダーキックのようにブロッサム達にキックする。
ぶつかり合うが、デストピアドーパントの方が一枚上手だった。

「「「「キャアァァァァァァァッ！！！！」」」」

今の攻撃で変身が解かれるつぼみ達。

「残るは君たちだけだよ？」

デストピアドーパントはセイバー、サンシャイン、ムーンライトに振り向く。

「強い・・・」
（アースロン、今まで戦った敵とは違う。）

サンシャインとムーンライトはデストピアドーパントを警戒する。

「アースロン、僕と勝負だ。　一対一で勝負しよう。」
「「！？」」

セイバーの言葉に驚くサンシャインとムーンライト。

「ふふ、いいよ。　受けて立ってあげる。」

了解を得るデストピアドーパント。

## 仮面ライダー　VS　ドーパント

「ヤァッ！」
「ハァッ！」

セイバーは『セイヴ・ザ・スター』の光の刃で、デストピアドーパントは矛で対峙する。

「流石は惑星テテュスの住人。　油断できないね。」
「アースロン。　違う形で出会っていたら、こんなことにはならなかったのに、残念だよ。」
「残念？　フフフ・・・やっぱり地球人は弱い生き物だね。」

デストピアドーパントは刀で斬りかかるが、瞬時に回避するセイバー。

「地球の生き物は君達が思っているほど、弱くなんかない！」
「そうかな？　全く地球人の考えてることが分からないよ。」

デストピアドーパントは矛にエネルギーを集め、光線を放った。
しかし、セイバーはマグマフォームにフォームチェンジし、光線をボディで受け止め、素手で光線を弾かせる。

「次で決めてやろうか！」
「いくぞ！」

セイバーはアクアフォームにフォームチェンジし、水の刃を出す。
デストピアドーパントは刀にエネルギーを集める。
そして、互いに向かい合う。

「「ハアァァァァァァァァァッ！！！！」」

2人の刃が斬りかかる。
その後、振り向きもせず、立ち止まったままである。

「「・・・」」

しばらく経つと・・・

「グッ！？」

デストピアドーパントの様子が変わる。
デストピアドーパントが宇治原に戻る。
ガイアメモリはメモリブレイクされていなかったが・・・

「ガイアドライバーを斬ったのか・・・」

宇治原はガイアドライバーを拾う。
ガイアドライバーはセイバーによって斬られ、壊れている。

「負けたよ、星守君。　僕を追い詰めるなんて・・・」
「星守さんが勝ったんですか？」
「そのようだね・・・」

つぼみたちはゆっくりと上体を起こす。

「けど、これで楽しみが増えた。」

宇治原はアースロンへと姿を変える。

セイバーはアースロンに振り向く。

「アースロン。　君はあの時、君の恋人が裏切ったって言ったけど、何があったんだい？」

セイバーはアースロンに質問する。

「それに関しては言わないよ。　これが別れの挨拶さ。」

アースロンは両手を地面に置く。

すると、地面からカマキリの怪人が現れる。

「「エェェェェェェェェ！！？」」

「何こいつ！？」

驚きを隠せない戦士たち。

「マンティスホムンクルスのシックルちゃんだ。　また会おうね。」

アースロンはマントを翼に変えて、どこかに飛んでいった。

アースロンの姿が見えなくなった後、バイク音が響いた。

皆は振り向くと、仮面ライダーアカツキが黄金のオートバイ・『ゴルドマッシャー』で現れた。

「3人とも、付いて来て。」

アカツキは和夢、愛、友子に向けて言った。

「「「えっ？」」」

和夢達は戸惑いを見せる。

「フフ・・・ソラ、彼女達を頼んだよ。　それとかっこいいバイクだね。　どこで買ったの？」

「話は後、兎に角あなたはそこの怪人を倒すことを考えて。」

「分かった。」

セイバーはアカツキから了解を得る。

「待ってください！　あなたは？」

和夢がアカツキに質問する。

「彼女は仮面ライダーアカツキ。　又の名を時守ソラ。　そして本名、リリー・サプライザーさ。」

「エェッ！？　リリーさん！？」

「話は後よ。　付いて来て。」

「はい！」

和夢はすぐにキュアアメジストに変身する。

「永田さん、掴まって！」

「う、うん。」

「堤さんはリリーさんのバイクに乗って！」

「え、ええけど・・・」

愛はアメジストの手に掴み、友子はアカツキの後ろに乗る。

「ゆりさん、皆！　突然ですけど、これで失礼します！」

アメジストは急かすような言動で言い出す。

「あ、はい。」
「「う、うん。」」
「アースロンが言っていた幽霊のことね？　気をつけて。」
「あなた達も。　気をつけて。」

アカツキは４人に別れを告げた後、エンジンを吹かす。

「フッ！」

アメジストは手を前に出すと灰色のオーロラが現れた。
そして４人はそのオーロラに入る。

## ファングとアカツキ

「つぼみちゃん、えりかちゃん。　まだ戦える？」

セイバーはつぼみとえりかに質問する。

「はい。」

「当然です！」

つぼみとえりかは『ココロパフューム』を取り出す。

そして・・・

「「プリキュアの種、いくですぅ（です）！」」

「「プリキュア・オープン・マイハート！」」

つぼみとえりかはプリキュアに変身する。

「大地に咲く一輪の花、キュアブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花、キュアマリン！」

「「ハートキャッチプリキュア！」」

決め台詞を言うブロッサムとマリン。

「いくよ！」

セイバーとハートキャッチプリキュアはマンティスホムンクルスと対峙する。

「ヤッ！　ハァッ！」

セイバーの格闘に怯むマンティスホムンクルス。

「『ブロッサム・シャワー』！」
「『マリン・シュート』！」
「『サンシャイン・フラッシュ』！」

ブロッサムの『ブロッサム・シャワー』、マリンの『マリン・シュート』、サンシャインの『サンシャイン・フラッシュ』でマンティスホムンクルスに攻撃する。
マンティスホムンクルスは両腕の鎌で風の刃を繰り出す。
しかし・・・

「フッ！」

ムーンライトは『ムーンタクト』で風の刃を弾き返す。

「セイバー！」
「うん！」

セイバーはスペースフォームに戻る。

「『サンシャイン・ノア』！」
「『プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ』！」

セイバーは『サンシャイン・ノア』、ムーンライトは『プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ』を繰り出す。
マンティスホムンクルスはそれを受け、消滅される。

～～～～～～～～～～

その頃、来斗とひかりは・・・

「ク～ネクネ～、クネクネ～♪」

仮面ライダーファングとシャイニールミナスに変身し、ルナドーパントと対峙していた。

「いい加減しつこいね。」

ファングはガイアメモリをマキシマムスロットに挿入する。

【ファング！　マキシマムドライブ！】

「『ファングストライザー』！」

ファングは『ファングストライザー』を繰り出す。

「天まで届け！」

ルナドーパントは触手でファングを叩き落す。

「ウワァッ！？」

地面に落ちるファング。

「来斗さん！」

駆けつけるルミナス。

「三度も同じ手は効かないわよ！」

体をクネクネしながら言い出すルナドーパント。

「愛してあ・げ・る♪　えーい！」

ルナドーパントが触手を振ると、マスカレイドドーパントが現れた。

「全く、いい加減にしてもらいたいね。　ん？」

ファングとルミナスの背後から灰色のオーロラが現れた。

そのオーロラからアカツキ、アメジスト、愛と友子が出てきた。

「来斗さん！」

「和夢ちゃん！」

「「私たちも戦います！」」

愛と友子は『ジュエルコミューン』を出した。

「「ジュエルスパークハリケーン！」」

愛はキュアダイヤモンド、友子はキュアペリドットに変身した。

「永久に続く愛の調べ、キュアダイヤモンド！」

「友と提携する絆の証、キュアペリドット！」

決め台詞を言う2人。

「新しいプリキュア、あの人達も・・・」

ルミナスはダイヤモンドとペリドットを初めて見たようだ。

「ファング、あなたの事は聞いたわ。　いくわよ。」

「女の子のライダーか。　興味深い。」

ファングはアカツキの手を掴んで立ち上がる。

「実を言うと、私、女に厳しいの。」

ルナドーパントは触手でアカツキを襲う。

「ハッ！」

アカツキは『シャイニングサーベル』でルナドーパントの触手を斬る。

「あぁ！　斬れちゃった！」

「アメジスト、ダイヤモンド、ペリドット、ルミナス。　マスカレイドを頼んだわよ。」

「「「「はい！」」」」

4人は返事する。

ファングとアカツキはルナドーパントと対峙する。

「『ルミナス・ハーティエル・アンクション』！」

ルミナスは『ルミナス・ハーティエル・アンクション』でマスカレイドドーパントの動きを止める。

そして・・・

「『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」
「『プリキュア・ペリドットサイクロン』！」
「『プリキュア・アメジストマジック』！」

ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』を、ペリドットは『プリキュア・ペリドットサイクロン』を、アメジストは『プリキュア・アメジストマジック』を放つ。
よって、マスカレイドドーパントは消滅される。

「君、この後、ジュースはどうかな？」
「いらないわよ。」

2人はルナドーパントを蹴り飛ばす。

「やったわね！？」

アカツキは『ゴールドキー』を『シャイニングライフル』に差し込む。
ファングも再び、ガイアメモリをマキシマムスロットに挿入する。

「ライダーは助け合いでしょ？」
「仰るとおりだわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

ルナドーパントはファングとアカツキに近づく。

【ファング！　マキシマムドライブ！】

アカツキは『シャイニングライフル』をルナドーパントに向ける。
ファングはジャンプする。

「『イリュージョン・シュート』！」
「『ファングストライザー』！」

アカツキは『イリュージョン・シュート』を、ファングは『ファングストライザー』を放つ。

「嫌いじゃないわあぁぁぁ

## オドロキーマ、召喚！

「ハハハハハハ、流石だな。　仮面ライダーにプリキュア。」

ファングとアカツキ、プリキュア達が後ろを振り向くと、ゴーストのジャグラー、ゴーレムのパラダイズンがいた。

「マスター・ジャグラー！　ガード・パラダイズン！」

「チッチッチッ、今の私はゴーストのジャグラー。　そしてこいつが・・・」

「ゴーレムのパラダイズン！」

ジャグラーとパラダイズンは自分の名前を伝えた。

「あんたらやな？　人の夢を奪って金儲けしとるんは！」

「金儲けはマジシャニアとジェニアスの目的だがな。　だが、私達エンドレスは違う。　私達は大量のドリームエナジーを使ってこの世界を夜の世界にするのさ。」

ジャグラーはエンドレスの目的を言い出す。

「夜の世界ですって！？」

「その為に全パラレルワールドの人達のドリームエナジーを奪ったのか！？」

「その通り。」

ジャグラーはアメジストの質問に答える。

「そんな事させない！　『イリュージョン・シュート』！」

アカツキは『イリュージョン・シュート』を放つが、ジャグラーの体にダメージを与えるどころか、透きぬけてしまう。

「えっ！？」

「これはどう！？　『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」

ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』を使うが、それも透きぬけてしまう。

「嘘ッ！？」

「どうなってんねや！？」

今の状況に驚くジャグラーとパラダイズン以外の者達。

「フフフ・・・私には肉体がない。　だから私を倒すことも浄化することもできないのだよ。」

「そんな・・・」

「・・・というわけで皆様。　あなた方にはこちらをお渡しします。」

ジャグラーは杖を出す。

そして、杖の先端から無数の雷をアカツキ達を襲わせた。

「ウワアァァァァァァァッ！！！」

「「「「キャアァァァァァァッ！！！」」」」

倒れこむ仮面ライダーとプリキュア。

「パラダイズン、オドロキーマを出せ！」

「分かったぜ、団長！」

パラダイズンは唇が描いた鉄球付のハンマーを取り出した。

「読者の皆様、ご説明いたしましょう。　このハンマーはびっくりキッスボールと言い、物体や生き物に当てるとオドロキーマが誕生するのです。」

ジャグラーはどこからかマイクを出し、パラダイズンが使おうとしたハンマーについて説明した。

「お客様にぃぃぃぃぃぃ！！　パラダイスをぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

パラダイズンはびっくりキッスボールをハンマー投げのように投げ、木に当てた。

すると木が大きくなり、唇がついた怪物になる。

「皆様、こちらが先ほど説明したオドロキーマでございま～す。」

「オドロキ～マ～！」

オドロキーマは仮面ライダーとプリキュアを見下ろす。

「それでは皆様、またの御機会がありましたら、お会いしましょう。
そんじゃ♪」

ジャグラーとパラダイズンは仮面ライダーとプリキュアの前から姿を消した。

～～～～～～～～～～

「なぁ、オーガ。」
「あぁ？」

ドグーンはオーガに言い出す。

「残り2つのプリキュアの力、俺に渡してくれねぇか？」
「ふん、将軍一人いなくなっちまったからイラついたのか？」
「あぁ。　だがそれ以上にプリキュアに負けたくねぇ。　俺の実力で痛めつけてやる！」

ドグーンはイラつきながら言い出す。

「ドグーン、気持ちは分かるが、光の園のこと忘れてはいまい？」
「構わねぇよ、光の園は俺とイルバだけで十分だ。　思う存分暴れろ、ドグーン。」

オーガは2つのプリキュアの力をドグーンに渡した。

「おうよ！」

～～～～～～～～～～

その頃、アースロンは『アルカトラーズ』に帰って来た。

「よく戻ってきた、地球のアースロン。」
「ありがとう御座います。」
「アースロン、今のお前を評価して、幹部復帰のチャンスを与えよ

う。　ミステリー星人・デルダン！」

プルト・ハデスはミステリー星人・デルダンを呼んだ。

「お呼びで御座いましょうか？　プルト・ハデス様。」

「デルダン、お前は今からアースロンと決着をつけさせる。　お前が勝てばこのまま八惑星の一人として行動させる。　但し、アースロンが勝てばお前はアースロンの配下だ。」

「ご了解いたしました。」

「ではデルダン。　僕は一足先にバトルフィールドに行くよ？」

「フフフフ、あなたを奴隷として働かせてあげましょう。」

アースロンはプルト・ハデスとデルダンの前から去った。

## プリキュアVSオドロキーマ

「ソラさん、来斗さん。　ここはウチらに任せてください。」
ペリドットはアカツキとファングに言う。
「分かったわ。」
「任せるよ。」
ペリドット、ダイヤモンド、アメジスト、ルミナスはオドロキーマと対峙する。
「オドロキ～マ～！」
オドロキーマは木の葉で攻撃する。
しかし、ペリドットとルミナスはバリアで防御。
「「ダブルプリキュアパンチ！！」」
アメジストとダイヤモンドはダブルプリキュアパンチでオドロキーマにお見舞いする。
「オドロキーマッ！！」
オドロキーマは枝から蔓を伸ばして４人のプリキュアを襲う。
「皆！　避けるんや！」
ペリドットの言葉で避けるダイヤモンドとルミナスだが、アメジス

トは違った。

「ウオォォォォォォォォッ！！！」

アメジストは避けるどころか、オドロキーマの懐に飛び込もうとしている。

「「アメジスト！？」」

そんなアメジストに驚くペリドットとダイヤモンドとルミナス。

（こいつの懐に入って、アメジストマジックで決める！）

だんだんオドロキーマに近づくアメジスト。
そしてアメジストはオドロキーマの懐に入る。

「（よし！）プリキュア・・・なっ！？」

アメジストはいつの間にか蔓に巻きつかれていた。

オドロキーマはアメジストに木の実を放った。
すると、その木の実は爆発した。

「ウワアァァァァァァァァッ！！！！」

アメジストはその衝撃を受け、和夢に戻ってしまう。

「グッ、クゥッ・・・」

「「「和夢　（さん）（ちゃん）！」」」

オドロキーマは蔓で和夢を襲う。

「『プリキュア・ペリドットサイクロン』！」

ペリドットは『プリキュア・ペリドットサイクロン』で蔓を斬った。

「『ルミナス・ハーティエル・アンクション』！」

ルミナスは『ルミナス・ハーティエル・アンクション』でオドロキーマの動きを止めた。

「「ダイヤモンド！」」

「任せて！」

ダイヤモンドは『ダイヤモンドマイク』を構える。

「『プリキュア・ダイヤモンドソング』」

ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』でオドロキーマに与えた。

よってオドロキーマは浄化され、元の木に戻った。

「和夢ちゃん！」

「大丈夫ですか？」

「立てるん、和夢？」

「う、うん・・・」

ルミナスとペリドットとダイヤモンドは変身を解き、和夢の所に駆け寄る。

ファングとアカツキも変身を解いて、和夢の所に歩いていった。

ソラは和夢に厳しい目で見る。

「和夢、何であなたはオドロキーマにやられたか分かる？」

「・・・それはあいつの蔓をよく見てなかった・・・」

「違う。」

ソラは和夢の言葉を遮るように言い出す。

「仲間を信じてないからよ。　友子が避けろって言ったのにあなたは無視して突っ込んで行った。」

ソラは和夢に本当の理由を言い出す。

「仲間を信じることができないなら、プリキュアをやめなさい。」

和夢はソラの言葉に大きくショックを受ける。

「ソラさん！　いくらなんでも言い過ぎで・・・」

愛は慌ててソラに言い出すと、和夢はソラたちを背に向け、歩き出す。

「和夢、どこ行くねん！？」

「和夢さん！」

友子とひかりは和夢を止めようとするが、何も言わずに去ってしまう。

～～～～～～～～～

その頃、アースロンはバトルフィールドでデルダンと対峙している。

「アースロン様、お気をつけて！」
「アースロン様、しっかり！」

ポイズン星人とメニー星人はアースロンを応援していた。

「始め！」

プルト・ハデスが合図する。
アースロンはゆっくりとデルダンに近づく。

（フフフ、もっと近づいてください。　あなたの足元にはまきびしが散らばっていますよ。）

デルダンは笑みを浮かべる。
しかし、アースロンも笑みを浮かんだ。
アースロンがデルダンに近づくと、足元のまきびしがアースロンに道をあけるように動き出す。

（なっ！？）

驚きを隠せないデルダン。

「フフフ・・・ハアァッ！」

走り出すアースロン。
そして、デルダンに殴りかかるアースロン。
デルダンは軽く避ける。

しかし、アースロンはデルダンの足を蹴りだす。

「ウオッ！？」

デルダンは倒れそうになるが、すぐに体勢を直してアースロンに殴りかける。

しかし、アースロンはデルダンのパンチを受け止め、連続攻撃で返り討ちする。

「グゥッ！」

「この僕こそが八惑星の一人さ！」

アースロンはデルダンに強いキックで蹴り飛ばす。

「ギャアァァァァァァァァッ！！！！」

デルダンはアースロンの一蹴りで吹き飛ばされ、倒れこんでしまう。

「そこまで！　この勝負、アースロンの勝ち！」

「悪いね、デルダン君。」

「アースロン、お前はこれより暗黒八惑星の一人とする。」

「ありがとう御座います。」

アースロンはプルト・ハデスに礼を言う。

「アースロン！？　もう戻ったのか？」

「やっと帰って来たみたいね。」

「ついに正真正銘の八惑星が揃ったと言うことですか・・・」

「ハ～イ、アースロン♪」

「フフフ、それでこそアースロン。」

「遅いぞ、アースロン。」
「アースロンから地球に可愛い女の子がいたのか聞きたいぜ。」
マルジス、ネプトユーヌ、ヴィーナシエル、マーキュリア、ジュピタール、ウラヌシオン、サタンギラスの順に言い出す。
「お、ただいま。」
アースロンは7人の八惑星の所に歩き出す。

# 埴輪将軍、参る！

ネオプラネットの幹部・暗黒八惑星の一人として戻ってきたアースロン。
彼は『生命の間』でサタンギラス、ネプトユーヌ、ジュピタールと話をしていた。

「そう、元の姿に戻れたものの、ジャアクキングの闇は残ったままだったのね。」
「でも、そのおかげで地球の怪人たちについて調べ尽くせたよ。」

アースロンは今、ネプトユーヌと話している。

「なぁ、アースロン。　地球で可愛い女の子いたか？」
「サタンギラス、相変わらずだね。　でも安心して。　その女の子は数え切れないほど多いから、後で見せてあげるよ。」
「へへへ、期待してるぜ？」
「全く、アースロンまで・・・」

アースロンがサタンギラスと話しているところを呆れるネプトユーヌ。

「ジュピタール、デルダン君がまだ幹部として働いている時、前線基地を造ったんだって？」
「あぁ、どのような世界かは知られていないが、楽しみにしておけ。」

質問するアースロンに答えるジュピタール。
その時、玉座の横からモニターが出てきて、誰かが通信を入った。

その誰かとは・・・

『アースロン様、アースロン様！』

伊智頭まさきに化けたチーズである。

「どうしたの、チーズ？」

『実はですね、ダークエンジェルスの幹部の2人がこの世界に来たみたいですよ！』

伊智頭はアースロンに報告する。

「それは本当かい？」

『本当ですよ。　今、新宿でマイナスエネルギーを集めているみたいですよ！』

「よし、君はそのまま新宿にいて。　僕もすぐに行く。」

『了解です！』

アースロンは伊智頭との通信を切った。

そして、アースロンは必要な物を持っていく。

「幹部復帰したのに、忙しい奴だぜ。」

～～～～～～～～～～

一方・・・

「聞いて驚け、見て驚け！　俺様は地獄衆・埴輪将軍ドグーン！

俺様が直々に人間共を絶望に陥れてくれるわ！」

ドグーンは１５０人のゾーマと魔化網のオトロシ、インフェルシアの冥獣グール、ラビリンスのドラゴン・クラインが町を襲っている。
そして、ドグーンは三途の川の水が入ったビンを取り出す。
更に、ドグーンの隣に馬の頭蓋骨が嵌めている馬・ヘルホースが現れた。
ドグーンは三途の川の水をラジオ、鏡、壺をかけた。

「アノヨイーケ！　三途の川を力に変えて、絶望を陥れろ！」

ラジオと鏡と壺はアノヨイーケに変わった。

「アノヨイ～ケ～！」

その時、地獄衆の目の前にプリキュア達とソラと来斗が出てきた。

「また出たわね、地獄衆のバカ将軍！」

真理奈がこう言った。

「バカだと！？　小娘共が！　まとめて絶望を味わせてくれるわ！かかれ！」

ドグーンの命令で真理奈達を襲い掛かるゾーマ。

「ひかりちゃん、ラブちゃんと美希ちゃんをお願い！」
「はい！」

ソラは『ゴールドバックル』を、来斗は『ロストドライバー』を、ひかりは『タッチコミューン』を、祈里とせつなは『リンクルン』

を、真理奈達は『ジュエルコミューン』を取り出し・・・

「「変身！」」
「ルミナス・シャイニング・ストリーム！」
「「チェインジ・プリキュア・ビートアップ！」」
「「「「「「「ジュエルスパークハリケーン！」」」」」」」

変身した。

「お前達は、もう僕の牙からは逃げられない！」
「時守ソラ、仮面ライダーアカツキ、行くわよ！」
「輝く命、シャイニールミナス！　光の心と光の意思、全てを一つにするために！」
「イエローハートは祈りのしるし！　とれたてフレッシュ、キュアパイン！」
「真っ赤なハートは幸せの証！　熟れたてフレッシュ、キュアパッションヨン！」
「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」
「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」
「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」
「母なる月と海の恵み、キュアパール！」
「永久に続く愛の調べ、キュアダイヤモンド！」
「友と提携する絆の証、キュアペリドット！」
「成功に導く旅人の心境、キュアターコイズ！」
「解放する水難の命運、キュアアクアマリン！」

決め台詞を言う仮面ライダーとプリキュア。

## 仮面ライダーパラレル（前書き）

夢原信者さんの敵キャラ、勝手に出させていただきました。
（勝手なことをしてすいません。）

その頃、伊智頭は新宿でダークエンジェルスの幹部2人がマイナスエネルギーを集めている所を見ていたため、身を隠して様子を伺った。

「いいぞ！　もっとやれ！」
「・・・」

その幹部はラジェスとミラーズ。
この2人は『夢原信者の世界』で全パラレルワールドのリセットを企てている組織・ダークエンジェルスの幹部である。
そして、今暴れているのはリセッターの2体である。

「（マイナスエネルギーがたまっていない。）ラジェス、次行くわよ。」
「ちっ、もうかよ・・・」
「なんとしてでも『ラグナロクストーン』の力を完全な物にして、あんな悲劇を終わらせてみせる。」

ミラーズは手を握り締めながら言い出す。

「それは不可能だ。　世界の摂理に悲劇あり、悲劇は永遠に終わることはないのさ。」

ラジェスとミラーズの目の前に現れたのは地球のアースロンとメニー星人とポイズン星人である。

「初めまして、僕はネオプラネット・暗黒八惑星の一人、地球のア

ースロン。　この2人は僕の親衛隊さ。」

アースロンは自分の名前を言った後、メニー星人とポイズン星人を紹介した。

「サウザンダー、バイオス。　挨拶代わりだ。　リセッターを始末しろ。」

「「御意！」」

サウザンダーと呼ばれるメニー星人がディケイド激情態になり、バイオスと呼ばれたポイズン星人の鱗から鋭い刃となる。

【ファイナルアタックライド・ディディディディケイド！】

ディケイド激情態になったサウザンダーは『ディメンションキック』でリセッターを葬る。

バイオスは素早い動きでもう片方のリセッターを斬り裂く。

「なっ！？」

（こいつら・・・！）

アースロンの部下の実力を見て驚きの表情を見せるラジェスとミラーズ。

「あっけなかったな？」

「この程度で世界を滅ぼすとは愚かな方達です。」

2人はラジェスとミラーズをバカにするような口振りをする。

「テメェら・・・！　バトルスーツ展開！」

ラジェスの格好が戦闘服に変わる。

「待ちなさい、ラジェス！」

ミラーズはラジェスを静止するが、彼はそれを聞かず突っ込んでいった。

しかし・・・

「なっ！？」

ラジェスのパンチがアースロンに受け止められる。

「フフフフ・・・カアァッ！！」

アースロンの目が光ると、落雷や炎、水柱や風の刃、氷柱や大地の針がラジェスの周囲に襲い掛かる。

「グワアアアアアアアアアアッ！！！！！」

ラジェスはミラーズの前に倒れこむ。

「ラジェス！」

ラジェスに駆け寄るミラーズ。

「お嬢ちゃん、これは何か分かるかな？」

アースロンはミラーズに何かを見せる。

その何かとは・・・

「！　パラレルメモリ！」

他のパラレルワールドへ移動できるパラレルメモリである。
アースロンは宇治原になり、ロストドライバーを取り出した。
そして、腰に装着する。

【パラレル！】

「変身！」

宇治原はパラレルメモリをロストドライバーに挿入した。

【パラレル！】

宇治原が仮面ライダーエターナルに似て、背中にメタルシャフトをモチーフにしたパラレルシャフト、片手にトリガーマグナムをモチーフにしたパラレルマグナム、マキシマムスロットとは反対側の腰にエターナルエッジをモチーフにしたパラレルエッジを持つ仮面ライダーに変身する。

「なに！？」

ミラーズは驚きを隠せない。

「フフフ、このメモリは僕に相応しい。　僕の名は・・・仮面ライダーパラレル。」

宇治原は今の姿を仮面ライダーパラレルと名乗る。

「くっ、このことをデスリード様に知らせなければ！」

【パラレル！　マキシマムドライブ！】

ミラーズはラジェスを連れて別の世界に撤退する。

「フフフ、リセットはさせない。　すべての世界を手に入れるのはネオプラネットだ。」

「いや～お見事ですよ、アースロン様！」

「お、チーズ。　様子見ご苦労様。」

ダークエンジェルスの幹部が撤退している所をパラレルの元に走る伊智頭。

「幹部復帰にパラレルメモリのゲット！　流石はネオプラネット最強の戦士の幹部・暗黒八惑星！　さっきの戦い振りもお見事で御座いますよ、アースロンさ・・・」

「おっと、それ以上は言わないでおかないかな？」

パラレルは伊智頭の話を遮るように言い出す。

「さて、『アルカトラーズ』に戻るよ、２人とも。」

「「はい。」」

パラレルの命令通りに付いて行くサウザンダーとバイオス。

パラレルは変身を解き、アースロンに戻る。

「あの～、幹部に戻ったはいいんですが、学園の方はどうするんですか？」

「心配ないさ。　僕が東宝学園に転校した頃の記憶を全生徒の頭か

ら取り除いておいたからね。　それより、君は今まで通り、この星の悪との手伝いをすればいい。」

「わかりました！」

アースロン達は伊智頭と別れる。

## レッツ、プリキュア！

一方、ファングとアカツキとプリキュア達はドグーン達と対峙していた。

「プリキュア、雑魚は私たちに任せて！」
「君たちは奴らを！」

ファングとアカツキはゾーマとやりあっていた。

「「「

「大丈夫です！　ターコイズ！」
「早い所倒しましょう！」

パールとターコイズとアクアマリンはオトロシに何度も攻撃する。
しかし・・・

「「キャアァァァァァァッ！！」」

パインとパッションはドラゴン・クラインの反撃に倒れる。

「「アアアァァァァァァッ！！」」

ペリドットとダイヤモンドもグールの巨大な拳によって吹き飛ばされる。

「「「キャアァァァァァァッ！！」」」

パールとターコイズとアクアマリンはオトロシの突進に吹き飛ばされる。

「「みんな！」」
「ガーネット、オパール！　早いトコ決めよう！」
「「うん！」」

トパーズとガーネットとオパールは必殺技の体勢に入った。

「「「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！」」」

3人は『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を3体のア

ノヨイーケに放った。
3体のアノヨイーケは浄化され、元の姿に戻った。

「ガーネット、オパール！」
「「うん！」」

3人はペリドットたちのところに行くが・・・

「待ちやがれ！　テメェらの相手は俺様だ！」

ドグーンはトパーズ達の前に立ち、口から火を出した。

「「「アアアアアアアアアッ！！！」」」

トパーズ達は火に吹き飛ばされる。

「皆・・・」
「・・・」

ラブと美希はただ見ているしかなかった。

「ラブさん、美希さん！　パインとパッションがあんなに頑張っているのに、どうして立ち上がろうとしないんですか！？」

ルミナスはラブと美希に説得する。

「ごめん・・・どうしてもオーガのことを頭から離れられないの・・・」
「えぇ・・・もうオーガと会いたくない・・・勝てる相手じゃないわ・・・」

ラブと美希は怯えながら言い出す。

「だったらどうして、プリキュアとして戦ってたんだい？」

後ろから声をかけられるラブと美希。
後ろに振り向くと星守の姿があった。

「僕は星守健一、初めましてだね、２人とも。話はゆりちゃんから聞いたよ。君たちはラビリンスの総統・メビウスと戦い、シフォンを助け、世界を救った。確かに普通なら怖くて逃げ出したかもしれない。でも、君たちは立ち向かった。それはみんなの笑顔を守りたいという強い意思があるから。君達の幸せはオーガに壊されるほど脆い物なのかい？」

ラブと美希は星守の言葉に沈黙する。

「よく考えるんだね。」

星守はオトロシに振り向く。

「変身！」

星守は仮面ライダーセイバーに変身する。
そしてセイバーは走りながらマグマフォームにフォームチェンジする。

「フッ！！」

セイバーはオトロシの角を受け止め、持ち上げた。

「ヌウゥゥゥゥ・・・ハアァッ！！」

セイバーはオトロシを投げた。
オトロシは横に倒れてしまい、立てなくなった。

「皆、こいつの弱点は甲羅の目だ！」
「「「目？」」」

パールとターコイズとアクアマリンは甲羅を見渡した。
そして、甲羅に目があることを気付く。

「アレですね！？」
「私に任せてください！」

パールは『ジュエルコミューン』を『パールステッキ』に変える。

「『プリキュア・パールスプラッシュ』！」

パールは『プリキュア・パールスプラッシュ』でオトロシの甲羅の目に当てる。
オトロシはそれを効いたのか、悲鳴を上げる。

「セイバー！」
「うん！」

セイバーはオトロシのところに走る。

「『プロミネンス・クラッシュ』！」

セイバーはオトロシに『プロミネンス・クラッシュ』を喰らわす。
オトロシは大爆発された。

「・・・ラブ。　祈里やせつながあんなに頑張ってる。　私たちも頑張らないとね。」
「うん。　やっぱ皆で幸せゲットしないと。」

ラブと美希は立ち上がった。

「ラブさん。　美希さん。」

ルミナスは2人を見て笑顔になる。

「馬鹿な!?　オーガの妖術が弱まっただと!?」

ドグーンは驚きを隠せない。

「パール!」
「はい!」

ターコイズは『ターコイズカリバー』を平面にする。
パールはそれを乗る。
そして、ターコイズは思い切りパールを飛ばした。

「ラブさん、美希さん!　我慢してください!　『プリキュア・パールスプラッシュ』!」

パールはラブと美希に目掛けて『プリキュア・パールスプラッシュ』を放つ。
すると、ラブと美希の中にあるオーガの妖術が消えていった。

「よし！」
「あたし完璧！」
「２人とも、変身です！」

パールは２つのプリキュアの力をラブと美希に目掛けて投げた。
ラブと美希はプリキュアの力を取り戻す。

「いくよ、美希たん！」
「オッケー！」

ラブと美希は『リンクルン』を出す。

「「チェインジ・プリキュア・ビートアップ！」」

ラブはキュアピーチ、美希はキュアベリーに変身する。
そして、２人はドラゴン・クラインの前に立つ。

「ピーチ、ベリー！」
「ごめんね。　パイン、パッション。　遅くなっちゃった。」
「待ってたわよ、２人とも。」
「よーし、４人揃った所で、アレ行くよ！」
「「「うん！」」」

４人はドラゴン・クラインに振り向く。

「ピンクのハートは愛あるしるし！　もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」
「ブルーのハートは希望のしるし！　つみたてフレッシュ、キュアベリー！」

「イエローハートは祈りのしるし！　とれたてフレッシュ、キュアパイン！」
「真っ赤なハートは幸せの証！　熟れたてフレッシュ、キュアパッションー！」
「「「「レッツ、プリキュア！」」」」
決め台詞を言うピーチ達。

「ピーチ、ベリー、パイン！　あなた達はトパーズ達の所に行って！」
「「「えっ！？」」」
「大丈夫、私は一人じゃないわ。」

パッションはピーチとベリーとパインにこう言う。

「大丈夫ですよ！」
「私たちがいます！」
「任せてください！」

パールとターコイズとアクアマリンが駆けつける。

「・・・分かった。」
「頼んだわよ、パッション。」
「パール達も気をつけて。」

ピーチとベリーとパインはトパーズ達に合流した。
セイバーはファングとアカツキと共にゾーマの軍団を薙ぎ払った。

「健一、あの3人はパッションと協力したとして、ペリドットとダイヤモンドはどうするの？」
「大丈夫、まだルミナスがいる！」
「でも・・・」
「仲間を信じる事も大事なことなんだ！」

セイバーはファングとアカツキに言った。

「とにかく、僕達はこいつらを！」
「「うん！」」

ファングとアカツキは了解をとる。
一方、グールと対峙していたペリドットとダイヤモンドとルミナスは・・・

「「ヤアァァァァァァァ！！！」」

グールのパンチを受け流し、近寄る。
グールは巨大な拳でペリドットとダイヤモンドを襲う。

「『ルミナス・ハーティエル・アンクション』！」

ルミナスは『ルミナス・ハーティエル・アンクション』でグールの動きを止めた。

「今です！」
「「うん！」」

ペリドットは『ジュエルコミューン』から『ペリドットランス』を、ダイヤモンドは『ダイヤモンドマイク』を変えた。

「『プリキュア・ペリドットサイクロン』！」
「『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」

ペリドットは『プリキュア・ペリドットサイクロン』を、ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』をグールに放つ。
グールは仰向けに倒れ、消滅された。

一方、ドラゴン・クラインと対峙していたパールとターコイズとアクアマリンとパッションは・・・

「強い・・・」
「でも、私たちは負けません！」

立ち上がるプリキュア。

「愚かな、無駄だといったはずですよ？」
「諦めない！　お前のような強敵がいても！」

パールとターコイズとアクアマリンはドラゴン・クラインに猛ラッシュで攻め込む。

「おのれぇっ！！」
「『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』！」

パッションは『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』でドラゴン・クラインを包む。
パールは『パールステッキ』を構え、ターコイズは『ターコイズカリバー』を構える。

「『プリキュア・パールスプラッシュ』！」
「『プリキュア・ターコイズスラッシュ』！」

パールは『プリキュア・パールスプラッシュ』を、ターコイズは『プリキュア・ターコイズスラッシュ』を放つ。
しかし、その技をドラゴン・クラインが受け止める。

「くっ！」

その時、ドラゴン・クラインの目の前にアクアマリンがいた。

「何度も失敗したけど、これだけ近ければ！」

「なっ！？」

アクアマリンは『ジュエルコミューン』から『アクアマリンダガー』に変える。

「『プリキュア・アクアマリンクロス』！」

アクアマリンは『プリキュア・アクアマリンクロス』を放つ。

「グワアアアアアアアアアッ！！！！」

ドラゴン・クラインは消滅された。

そして・・・

「くっ！」

「硬いわね・・・」

トパーズ、ガーネット、オパール、ピーチ、ベリー、パインはドグーンと対峙するが、苦戦する一方である。

「くたばれ！！」

ドグーンはヘルホースに乗った状態でマシンガンを撃った。

「「「「「キャアアアアアアアアアアッ！！！！」」」」」

プリキュアはドグーンの猛攻に倒れる。

「ガキ共が！　必死になりやがって！　地獄衆に敵うわけねぇだろうが！」

ドグーンは怒りの声を上げる。

「まだまだ・・・」

「勝つ気でいるなんて・・・バッカじゃないの？」

「絶対諦めない！　絶対に！」

プリキュア達は再び立ち上がる。

「ガキ共があぁぁぁぁ！！　まとめて捻りつぶしてくれるわ！！」

ドグーンはヘルホースでプリキュアを突進しようとしていた。

「『プリキュア・オパールメテオ』！」

オパールは『プリキュア・オパールメテオ』を放つ。

ドグーンは避けたが、ヘルホースは消滅される。

「喰らえ！」

ドグーンは大砲を放つ。

「はっ！」

トパーズはバリアを張って、ドグーンの砲弾を撥ね返した。

「ぐおぉっ！？」

ドグーンは撥ね返された砲弾を受けられた。

「おのれぇっ！」

ドグーンはマシンガンで発砲する。
すぐに避けるプリキュア達。

「ん！？」

ガーネットはドグーンの体を見て気付いた。
砲弾を受けた箇所にヒビが入っていることを。

「オパール、耳貸して！」
「何？」

ガーネットはオパールにこそこそと話す。

「「え？」」

ピーチ達は理解できていないが、トパーズは笑みを浮かべる。

「ピーチ、ベリー、パイン。　２人のやり方を見てみよう。」
「いくわよ、オパール。」
「オッケー！」

ガーネットとオパールは話を終えた後、すぐにドグーンに振り向く。

「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」
「『プリキュア・オパールメテオ』！」

ガーネットは『プリキュア・ガーネットクロウ』を、オパールは『プリキュア・オパールメテオ』を放つ。
そして、2人の超能力でヒビの入ったドグーンの体に集中する。

「ふん！　そんなモン痛くも痒くもないわ！」

ドグーンは余裕を持って言い出す。
しかし・・・

「！　ウオォォォォォォォォォッ！！？」

何回か受けるとドグーンの体が割れて穴を開けられた。
同時にドグーンの体の中からプリキュアの力が出てきた。

「馬鹿な！？　俺様の体があんな小娘共に！？」

ドグーンは割れていた体の一部を見て驚きを隠せなかった。

「成る程。」
「凄いよ！　ガーネット、オパール！」
「まあね。」
「当然だよ！」

その時、ガーネットとオパールの目の前にカードが現れる。
そのカードにはクローバーが描かれたボールを描かれている。

「何これ？」

「ボール？」

ピーチとベリーとパインはガーネットとオパールが持っているカードを覗いた。

「チィッ！　ガキ共が！　焼き尽くしてやる！」

ドグーンの口から火炎放射を放つ。

「危ない！」

トパーズはバリアを張って、ピーチ達を守る。

「早くして！」

「「「「うん！」」」」

ガーネットとオパールは持っていたカードを『ジュエルコミューン』に読み込ませる。

「「『プリキュア・ハピネスボール』！」」

『ジュエルコミューン』から出た光が一ヶ所に集まり、ボールになる。

そのボールはパインが持つ。

「レディーゴー！！」

ピーチの掛け声で走り出すプリキュア。

「オパール！」

「オッケー！」

パインはオパールに投げる。

「ベリー！」

「任せて！」

オパールはベリーにパスする。

「ガーネット！」

「えぇ！」

ベリーはキックでガーネットにパスする。

「ピーチ！」

ガーネットはキックでボールを真上に蹴り飛ばす。

「悪いの悪いの飛んでいけ！　『プリキュア・ラブサンシャイン・シュート！』」

ピーチはガーネットが蹴り飛ばしたボールをドグーンに目掛けて思い切りシュートした。

そして『プリキュア・ハピネスボール』がピンク色になり、ハートが出てきた。

「グウゥワアァァァァァァァァッ！！！！」

ドグーンの体が『プリキュア・ハピネスボール』によって貫通された。

ドグーンは仰向けに倒れ、爆散された。

「「「「「「ヤッターッ！！」」」」」」

大喜びするガーネットたち。

## ウラヌシオン、地球に降りる。

その頃、『アルカトラーズ』に帰還したアースロンは・・・

「よぉ、アースロン。　ダークエンジェルスがこの世界に来たって？」

「うん。　だけど、僕からしてはネズミ同然だよ。」

話しかけられたのは、サタンギラスだ。

「そうか・・・ところでそいつらに女はいなかったか？」

「この世界に来てたのは2人、その内一人が女の子だよ。」

「ほ～ぉ、もし可愛かったら会ってみたいぜ。」

「フフ、いずれ別の世界にも訪れるさ。」

互いに話し合うアースロンとサタンギラス。

「サタンギラス、私達暗黒八惑星がとても強いとはいえ、女の子にセクハラするような真似はしないでよね？」

「それも戦法の一つなんだよ。」

「フフフ・・・」

サタンギラスに文句を言うネプトユーヌと笑みを浮かべるアースロン。

「まぁでも、もし私が結婚したら、その幹部を養子として迎え入れようかしら？」

「ネプトユーヌ、人の事いえないよ。」

ネプトユーヌをツッこむアースロン。

「アースロン。」
「お、ヴィーナシエル。」

ヴィーナシエルがガイアドライバーを持ってアースロンの所まで歩いてきた。

「ガイアドライバーの修理終わりましたよ。」
「ご苦労様、ヴィーナシエル。」

ヴィーナシエルはアースロンにガイアドライバーを渡した。

「ハ～イ、アースロン♪」
「マーキュリアか。」

アースロンに挨拶するマーキュリア。

「たまには私たちも地球に誘ってよね。」
「分かったよ。」

マーキュリアのお願いに返事するアースロン。

「アースロン！　アースロン！」

マルジスが走ってきた。

「どうしたの、マルジス？」
「ウラヌシオンを見かけなかったか？」
「別に？」

マルジスの質問に答えるアースロン。

「やはり知らないか。　あの鳥が！　俺達を差し置いて急にいなくなりおって！！」

マルジスが怒り出し、鎧から噴煙が思い切り放出した。

「ゲホッゲホッ！　ちょっとマルジス！」

マルジスの噴煙に咳き込むアースロンたち。

「全く・・・」

マルジスの上から水が落ちてきた。
すると、噴煙が治まり、落ち着いていった。
マルジスの上にはジュピタールがぶら下がっている。

「その悪い癖をなんとかしないのか？」
「ありがとう、ジュピタール・・・」

ため息を出しながらジュピタールに礼を言うアースロン。

～～～～～～～～～～

大空の樹、その樹には咲と舞の思い出の場所であり、泉の郷と緑の郷をつなげる門でもある。

「真理奈達が頑張ってるのに、私たちだけ何もできないなんて・・・

悔しいよ・・・」
「私たちにできることがないのかしら・・・」

2人は変身できないことを悩んでいる。
2人はオーガの妖術にかけられていない。
しかし、咲が『大丈夫』と言ったものの、内心は自分達が戦えないことを悩んでいる。

「あぁ、もう！　気合入れろ、私！」

その時、咲と舞の目の前に背広を着て、帽子を被っていた者が現れた。

「何！？」
「誰ですか？」

咲と舞は質問するが、背広の者は返事せず、指を咲と舞に指しだす。

「「え？」」

すると、背広の者の指から波動が出た。
咲と舞はその波動を受け、瞳のハイライトが失っていく。

「力が欲しいか？」
「「はい。」」
「友達を助けるために戦うか？」
「「はい。」」

背広の者が質問すると返事する咲と舞。

「フフフ、よかろう。」

背広の者は背広と帽子を脱ぎ捨てた。

背広の者の正体は・・・

ウラヌシオンだ。

「その願い、この俺、『パーフェクトな強さを誇る偉大なるネオプラネットの幹部、暗黒八惑星の一人、ビューティーにかっこいい天王星のウラヌシオン様』が叶えてやろう!」

ウラヌシオンは思い切って言った。

「お前達の名は?」

ウラヌシオンは咲と舞に名前を尋ねる。

「日向咲・・・」

「美翔舞・・・」

咲と舞は自分の名前をウラヌシオンに教える。

「よし。　咲、舞。　お前達にこれをやろう。」

ウラヌシオンが咲と舞に渡したのは、ダークネスのガイアメモリである。

ドグーンを倒した後、真理奈達は帰宅するが、友子と愛は四ツ葉町に残り、和夢の事を明子に伝えた。

「そうですか・・・」

「なんとか励ましたいけど、私達和夢ちゃんのこと知らないからどう言えばいいのか・・・」

友子と愛はそのことで悩んでいた。

「私が知っているのは幻想サーカス団の団員として働いているということぐらいしか・・・時守さんは何かご存知ですか?」

明子はソラに質問する。

「別に・・・」

ソラは明子の前から去った。

「ソラさん・・・」

ソラは少し離れた路地に入り、近くにある椅子に座った。

(和夢・・・)

ソラは俯いていた。

ソラも内心、和夢の事気にしているらしい。

～～～～～～～～～～

その頃、和夢は森の中で寝転がっていた。
そして和夢は『ジュエルコミューン』を見つめる。

（これを手に入れたのは・・・あの世界に訪れた時か・・・）

～～～～～～～～～～

僕がサーカス団で雑用係していた頃、『キュアセイバーの世界』にいた。
掃除をしていた途中、光の玉が棚の上に降りていったと思ったら、携帯電話とアメジストになった。
その携帯電話はプリキュアのデータが入っていたんだ。
興味本位で触ったら、また光り出し、携帯電話とアメジストが一つになって『ジュエルコミューン』になった。

～～～～～～～～～～

「そして、プリキュアになったのは・・・」

～～～～～～～～～～

そう、『風上光の世界』に訪れた時、一人のプリキュアが怪人と戦っていた。
そのプリキュアの名前はキュアガイア。
そしてその相手はユートピアドーパントだ。

ガイアはユートピアドーパントと対峙していたけど、力が制御できなかったのか、苦戦するばかりだった。
僕はその時にキュアアメジストに変身した。
キュアガイアと協力して。
なんとかユートピアドーパントを倒した後・・・

「力を制御できないくせに無茶して・・・素人同然だね・・・どうしてそこまでするの？」
「どうしてって、人が悲しむ所を黙ってみていられるわけないよ。
君もどうしてプリキュアとして戦ってるの？」

キュアガイアの正体、神河千鶴が僕にプリキュアになった理由を聞いてきた。

「理由なんかないよ。　ただ体が勝手に動いただけ・・・でもプリキュアじゃない場合はこう言うね。
『守りたい人が1人いる。　たくさんの人達を喜ばせたいという夢を持った人が。　僕はそんな人を失いたくない。　だから頑張ってるんだ。』って。」

～～～～～～～～～～

「！　あぁもう！　何余計なこと考えてんだろう！？」

和夢は髪を掻き揚げながら言い出す。
その後、ため息を吐き出す。

「はぁ・・・なんだかリリーさんとは会えないような感じがする・・・」

和夢はソラの言葉を思い出して、思い悩む。

～～～～～～～～～～

その頃・・・

「ドグーンを倒して、プリキュアの力を取り戻せたけど、誰の物なんかわからへん・・・」

「そうよね・・・」

友子と愛は四ツ葉町を後にし、家に帰ろうとした。

その時・・・

「お譲ちゃん達、２日間連戦ご苦労様。」

友子と愛は声したほうに振り向くと宇治原がいた。

「「アースロン！」」

「フフ、これで地獄衆も最期の時が近づいてきたね。」

友子と愛は『ジュエルコミューン』を出した。

「おっと！　今回は戦いに来たんじゃないよ？　実はニュースがあるんだ。　地獄衆の将軍様、オーガが光の園を進撃するみたいだよ？」

友子と愛は宇治原の言葉に驚く。

「よっぽどプリキュアのことが邪魔でしょうがないみたいだね・・・」
「他人事みたいなこと言えるな、あんたは！」
「フフ・・・」
宇治原は友子と愛との距離を少し離れた。
「確かに伝えたよ。　黒と白のお嬢ちゃんにもよろしく伝えてね？」
宇治原は友子と愛と別れた。
「光の園を侵略やて？　そんなアホな！」
「兎に角、みんなに知らせないと！」

～～～～～～～～～～

その頃、オーガ達は・・・

「軟体将軍・ゲゾールの残党兵、２００！」
「埴輪将軍・ドグーンの残党兵、１００！」
「甲冑将軍・イルバの兵、５００！」
「無双将軍・オーガの兵、８５０！」

ゾーマ兵は一人ずつ兵数をオーガに伝える。

「合わせて１６５０か。　そしてアノヨイーケを何体か入れれば光の園など簡単に潰せる。」

オーガは笑みを浮かべる。

「そして光の園を潰した後、泉の郷、パルミエ王国、スウィーツ王国、心の大樹、メイジャーランドを潰してやるぜ。　そうすればプリキュアの伝説は終わりだ。　見ていろ、キュアマザー。　憎きプリキュアがこの世から消えてなくなる所をな！　ハーッハッハッハッハッハッ・・・・」

## 平和を守護する星の輝き

次の日、オーガの目的を聞いたジュエルマスタープリキュア達はなぎさとほのかとひかりが住んでいる上泉市に集まった。

「真理奈、和夢は来とったん？」
「ううん、来てない。」
「そうか・・・」

友子の質問に答える真理奈。

「でも、絶対来ると思う。」
「何でそう言い切れるん？」
「和夢も夢があるから。」

友子は首を傾げる。

「！　来る！」

真理奈達との数メートル離れた所から地獄衆が現れた。
１０００以上のゾーマ兵、２０体のアノヨイーケ、そしてオーガとイルバだ。

「プリキュアか。　アースロンの野郎、言いふらしやがって。　まぁいい。　イルバ、お前に任せるぜ。」
「よかろう。」

イルバはオーガから負のエネルギーの塊を貰う。

「皆の者、ここはオーガに任せ、我々は光の園に向かう！」
「オォーッ！！」
「続け！」

イルバは負のエネルギーの塊をかざすと赤黒い川が天に駆け上がっていく。
イルバとその手下達はその川を渡り、光の園に向かう。

「皆！　止めるよ！」
「「「「うん！」」」」
「「「はい！」」」

真理奈達は『ジュエルコミューン』を出す。

「「「「「「「「「「ジュエルスパークハリケーン！」」」」」」」」」」

真理奈達はプリキュアに変身した。

「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」
「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」
「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」
「母なる月と海の恵み、キュアパール！」
「友と提携する絆の証、キュアペリドット！」
「永久に続く愛の調べ、キュアダイヤモンド！」
「成功に導く旅人の心境、キュアターコイズ！」
「解放する水難の命運、キュアアクアマリン！」

決め台詞を言うプリキュア達。

「かかれ！」

プリキュアに一斉攻撃する８５０のゾーマと１０体のアノヨイーケ。

～～～～～～～～～～

「オーガが光の園に侵略するって本当！？」

「はい。　今頃、真理奈さん達が止めに行ってる筈です。」

ひかりはなぎさとほのかに伝えた。

「無理よ！　オーガに勝てるわけないわ！」

なぎさとほのかはひかりから目を逸らす。

「いい加減にしてください！　なぎささんとほのかさんはそれでいいんですか？　メップルとミップルの故郷が無くなってしまうんですよ？　お２人はこのままでいいんですか？」

ひかりはなぎさとほのかに叱咤する。

「それは・・・」

「嫌だけど・・・」

「だったら立ち上がってください。　大丈夫ですあなた達には私がいます。　いいえ、真理奈さん達やのぞみさん達も。　あなた達には仲間がいます。」

なぎさとほのかはしばらく悩んだ。

そして・・・

「うん・・・そうだよね。　いつもくよくよしてられないよね。」
「ありがとう、ひかりさん。　私たちはまだ怖いけど、頑張るわ。」
なぎさとほのかはひかりに返事する。

～～～～～～～～～～

そして、和夢は・・・

「・・・」

和夢はまだ四ツ葉町付近の森に寝転がっていた。

「平園和夢。」
「！？」

和夢は驚いて起き上がると、ＧＡＳＨさんのオリジナルプリキュア・キュアコズミックこと星川勇奈が立っていた。

「誰？」
「私は星川勇奈。　またの名をキュアコズミック。」

勇奈は自分の名前を和夢に伝えた。

「キュアコズミック？　じゃあ、あなたもプリキュア？」
「別の世界の・・・だけどね。」

勇奈はそう告げる。

「・・・そうだろうね・・・」

和夢はため息をついてまた寝転ぶ。

「僕はバカだな。　いろんなパラレルワールドを旅して仕事をしてきたのに、この世界のプリキュアじゃないかって勘違いしちゃった。
僕はあなたと同じ余所者なのに・・・」

和夢は俯いた。

「余所者だから何？　だからずっとこのままにいるの？　あなたがプリキュアとして戦ったのは、誰かの夢を守るためじゃないの？」

「！」

勇奈の言葉に反応する和夢。
その後、沈黙する和夢。

「そうだ、僕は！」

和夢は起き上がり、立ち上がった。

「和夢。」

和夢と勇奈が振り向くと、ソラの姿が映る。

「リリーさん、僕は誰かの夢を守るために戦っていた。　でも一人では守ることはできない。　だけど、仲間と一緒なら守ることができる。　僕は真理奈達と一緒に戦います！」

和夢はソラにそう告げる。

「ようやく決心したようね？」

ソラの質問に頷く和夢。

「リリーさん、戦いに行く前に僕からの約束を聞いてください。」

「言ってみて。」

「もう一度サーカスを始めて、いろんな世界を廻りましょう。　たくさんの別の世界の人達を喜ばすために。　これはあなたの夢であり、あなたの父親の夢でもありますから。」

和夢は自分の願いをソラに伝えた。

そして、ソラの返事は・・・

「戦いが終わったら来なさい。　団員の募集を始めるからね。」

ＯＫということである。

和夢はそれを聞いて・・・

「ありがとう御座います！」

和夢は笑顔で返事する。

「行ってきます。」

和夢は『ジュエルコミューン』を取り出した。

「ジュエルスパークハリケーン！」

和夢はキュアアメジストに変身する。

「平和を望む大いなる夢、キュアアメジスト！」

決め台詞を言うアメジスト。

「勇奈さん、行きましょう。」

「えぇ。」

勇奈はコスモタリスマンを使って・・・

「プリキュア！　コズミックチャージ！」

キュアコズミックに変身した。

「平和を守護する星の輝き！　キュアコズミック！」

決め台詞を言うコズミック。

そして2人はソラと別れ、トパーズ達のところに向かった。

# 光の使者、復活！

なぎさとほのかはまだ怯えながらもひかりと一緒にトパーズ達のところに向かった。

「なぎささん、ほのかさん。　大丈夫ですか？」
「・・・うん、大丈夫だよ。」
「・・・みんなが頑張ってるんだもの、私たちも頑張らないと・・・」

その時、３人の目の前から灰色のオーロラが出てきた。

「「ヒッ！？」」

なぎさとほのかは驚き、一歩後ろに下がった。
灰色のオーロラからキュアアメジストとキュアコズミックが出てきた。

「！　九条さん、なぎささんにほのかさん！」
「アメジスト！　それから・・・」
「別の世界から来たプリキュア、キュアコズミックよ。」

コズミックは自分の名前を名乗った。

「真理奈さん達は地獄衆と戦っています。　協力してくれますか？」
「当然よ、そのためにこの世界に来たんだから。」

コズミックは即答で答えた。

「なぎささん、ほのかさん。　オーガと戦うつもりなんですね。」
「うん、正直怖いけど・・・今はそう言っていられないよ。」
「私も。」

なぎさとほのかは決心したように言い出す。

「2人とも、今からあなた達の恐怖という名の呪縛を解き放ちます。
『アメジストバトン』！」

アメジストは『ジュエルコミューン』から『アメジストバトン』へと変化させた。

「『プリキュア・アメジストマジック・ヒーリング』！」

アメジストは『アメジストバトン』から紫色の星屑を出し、なぎさとほのかに当てる。
すると、なぎさとほのかの体から赤黒いエネルギー体が現れ、消えてしまう。

「ありがとう！」
「どういたしまして。　あとはブラックとホワイトの力です。　行きましょう！」
「待って！」

アメジストたちは声した方向に振り向くと成美の姿があった。

「アメジスト、これを渡すわ。」

成美はアメジストにカードを渡した。
そのカードが描かれているのはダークプリキュア5の絵である。

「（ダークプリキュア5。）・・・ありがとう御座います。」

5人は成美の前から去っていった。

「頑張ってよ、プリキュア達。　もうすぐ他のみんなも来てくれるわ。」

～～～～～～～～～～

「『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！」

トパーズとガーネットとオパールは『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』でゾーマを消し去る。

「はぁ、はぁ・・・これで半分ほど減ったかな？」

トパーズは息を切れながら言い出す。

トパーズの言う通り、大分減っているが、それでも４９０体である。

それに、イルバの軍勢８００は光の園に向かっている。

「もう間に合わねぇかもな。さっさと倒させてもらうぜ！」

オーガは『獄炎棒』をトパーズ達に向ける。

「それはこっちのセリフだよ！」

オーガは声したほうに振り向いた。

その声の主はアメジストだ。

オーガはアメジストの跳び蹴りで怯む。

「「「「「「「「「「アメジスト！」」」」」」」」」」

「『プリキュア・アメジストマジック・ヒーリング』！」

アメジストは『プリキュア・アメジストマジック・ヒーリング』でトパーズ達の疲労を回復させた。

「遅くなってごめんね。」

アメジストはトパーズ達に謝る。

「謝ることじゃないでしょ？」

「うんうん、いい肩慣らしになったし。」

「せや、ちょうどあったかなってきたトコやねん。」

「どうせならもうちょっと遅くなってもいいと思ったのよね。」

ガーネット、オパール、ペリドット、ダイヤモンドが言い出す。

「待ってましたよ、アメジスト。」

「よろしく、アメジスト。」

ターコイズとトパーズが言う。

アメジストは頷く。

「アメジスト、私がキュアアクアマリン。　まだ力を発揮できないけど、一緒に戦いましょう。」

「当然だよ。　それと、足手纏いにならないでよね。」

アメジストはアクアマリンの頭を撫でる。

「パール、なぎささんとほのかさんにプリキュアの力を！」
「はい！」

パールはプリキュアの力を取り出す。

「させるか！」
「こっちのセリフよ！」

コズミックはオーガと対峙する。

「早く投げて！」
「はい！」

パールはプリキュアの力をなぎさとほのかに向かって思い切り投げる。
その力はなぎさとほのかの中に入っていく。
そして、ポケットから『ハートフルコミューン』が出て、『ハートフルコミューン』が煙に覆われる。

「メポ！」
「ミポ！」

その煙からメップルとミップルが現れる。

「メップル！」
「ミップル！」

なぎさとほのかは喜びのあまり、メップルとミップルを抱きつく。

「なぎさ、会いたかったメポ！」
「ミップルもミポ！」
「よかった・・・」
「メップル・・・」

メップルとミップルとようやく会えたことを涙するなぎさとほのか。

「あの～2人とも？　感動の再会を浸ってる所悪いんですけど、それどころじゃありませんよ？（汗）」

ひかりはなぎさとほのかにツッこむ。

「『プリキュア・アメジストマジック・フルパワー』！」

アメジストは紫色のビームでゾーマを一掃する。

「トパーズ、ガーネット、オパール！　なぎささん達と一緒に光の園へ行って！　ここは私たちが食い止めるから！」
「「「うん！」」」

アメジストの言葉に返事するトパーズとガーネットとオパール。

「よーし、変身するメポ！」

メップルとミップルは『ハートフルコミューン』になる。
そして・・・

「デュアル・オーロラ・ウェイブ！」

なぎさとほのかはキュアブラックとキュアホワイトに変身した。

「光の使者、キュアブラック！」
「光の使者、キュアホワイト！」
「「ふたりはプリキュア！」」
「闇の力の僕たちよ！」
「とっととお家に帰りなさい！」

決め台詞を言うブラックとホワイト。

「ルミナス・シャイニング・ストリーム！」

ひかりはシャイニールミナスに変身する。

「輝く命、シャイニールミナス！　光の心と光の意思、全てを一つにするために！」

ルミナスは決め台詞を言う。

「皆、ここから行って！」

アメジストは灰色のオーロラを出した。

「行きましょう、ブラック、ホワイト、ルミナス！」

トパーズ達は灰色のオーロラに入った。
すると、ルミナスは何かを感じ取ったのか、立ち止まって後ろに振り向いた。
ビルの間に宇治原の姿が映る。
宇治原はそのままビルの間に入った。

（あの人は・・・）
「ルミナス、どうしたポポ？」
「ううん、なんでもない。急ぎましょう！」
ルミナスは灰色のオーロラに入った。
「ふん、たった6人で止められるものか・・・」
オーガは笑みを浮かべて言い出す。
「あなたも、もう年貢の納め時よ！」
残った7人は身構える。
「ふん、なら試してみるか？」
オーガも身構える。

## 地上での戦いと光の園での戦い

地上に残ったアメジスト達とコズミックだが、敵が多すぎるのか疲れが増した。

「喰らえ！」

オーガは『獄炎棒』で火炎弾を放つ。

「くっ！」

ペリドットはバリアで火炎弾を防ぐ。

「フン、ずいぶんお疲れのようだが、もう終わりだな？」

追い詰められるプリキュア達。

「止めを刺してやる。」

「「「「「「「「「「ちょ～っと待った～！！」」」」」」」」」」

「ん？」

地獄衆とジュエルマスタープリキュアとキュアコズミックが振り向くとそこには１２人のプリキュアが立っていた。

「大いなる希望の力！　キュアドリーム！」

「情熱の赤い炎！　キュアルージュ！」

「弾けるレモンの香り！　キュアレモネード！」

「安らぎの緑の大地！　キュアミント！」

「知性の青き泉！　キュアアクア！」
「もぎたてフレッシュ！　キュアピーチ！」
「つみたてフレッシュ！　キュアベリー！」
「とれたてフレッシュ！　キュアパイン！」
「大地に咲く一輪の花！　キュアブロッサム！」
「海風に揺れる一輪の花！　キュアマリン！」
「爪弾くは荒ぶる調べ！　キュアメロディ！」
「爪弾くはたおやかな調べ！　キュアリズム！」

ドリーム達はアメジスト達の所に駆けつける。

「皆！」
「大丈夫？」
「助けに来たわよ。」

アメジストに言うドリームとルージュ。

「来てくれたんだね？」
「はい！」
「もう大丈夫よ。」

ダイヤモンドを立たせるレモネードとミント。

「おおきに。　アクア、ピーチ。」
「どういたしまして。」
「よく頑張ったね。」

ペリドットを立たせるアクアとピーチ。

「来てくれると信じてました。」

「完璧なあたしがいるから安心して。」
「みんなで力を合わせれば、オーガを倒せるって信じてる。」
ベリーとパインに握手するターコイズ。
「パッションたちは？」
「パッション達は光の園に向かっています。」
「そういうこと！」
アクアマリンの質問に答えるブロッサムとマリン。
「ということは・・・」
「うん、トパーズ達に会ってるはずだよ。」
「オーガは私たちに任せましょう。」
メロディとリズムはパールの質問に答える。
「負け犬がゾロゾロと・・・わざわざやられに来るとはな。」
オーガは笑みを浮かべながら言い出す。
「違う！　私たちは光の園を守るために来たのよ！」
「あなた程の悪魔に決して負けません！」
メロディとブロッサムが言う。
「なら俺を倒してみろ！」
地獄衆とプリキュアが身構える。

～～～～～～～～～

一方・・・

「はぁ、はぁ・・・」

トパーズ達は善戦したが、数が多すぎたのか疲労が増している。

「流石はプリキュア。　しかし、ここまでだな？　安心しろ、私が楽にしてやろう。　完璧（パーフェクト）に！」

イルバは黒鮫丸を構える。

「玄武の陣！」

イルバは地面を斬ると大地が波のようにトパーズ達を襲う。

その時・・・

「ビートバリア！」

「サンフラワー・イージス！」

トパーズの前から2つのバリアが現れ、大地の波を防いだ。

「なに！？」

イルバが見たのは、5人のプリキュアである。

「青い薔薇は秘密の印！　ミルキィローズ！」

「熟れたてフレッシュ！　キュアパッション！」

「陽の光浴びる一輪の花！　キュアサンシャイン！」
「月光に冴える一輪の花！　キュアムーンライト！」
「爪弾くは魂の調べ！　キュアビート！」

決め台詞を言うプリキュア達。

「ローズ、パッション、サンシャイン、ムーンライト、ビート！」

5人はトパーズ達に駆けつける。

「ブロッサム達はアメジストたちと一緒に戦ってるわ。」
「この戦いを終わらせましょう。」

ムーンライトとビートが言う。
トパーズ達は笑顔で返す。

「フッフッフッフッ・・・ゾーマ、奴らはお前達に任せる。　私はそこの5人と戦いたくなった。」

イルバの周りに6体のヘルホースが現れた。
そしてイルバは背後のヘルホースに乗る。

「キュアトパーズ、キュアガーネット、キュアオパール、キュアブラック、キュアホワイト！　ついてくるがいい！」

イルバはヘルホースでクイーンの玉座に向かう。

「あいつ、クイーンの所に！」
「追いましょう！」
「「「はい！」」」

トパーズ達はヘルホースに乗り、イルバの後を追う。

「ムーンライト、私たちも！」
「いいえ、トパーズ達に任せましょう。」

ビートはムーンライトに言い出すが、ムーンライトはトパーズ達に任せようと言い出す。

「プリキュアめ！」
「将軍様の邪魔はさせん！」

ゾーマはムーンライトたちを襲う。

「行くわよ！」
「「「「はい！」」」」

## 光と闇を一つに

「アノヨイ～ケ～！！」

ギターのアノヨイーケがメロディとリズムを襲う。
しかし・・・

「「『プリキュア・パッショナートハーモニー』！！」」

メロディとリズムの『プリキュア・パッショナートハーモニー』で浄化される。
植木鉢のアノヨイーケがブロッサムとマリンを襲う。
しかし・・・

「「『プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ』！！」」

ブロッサムとマリンの『プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ』で浄化される。
ラジオのアノヨイーケとファンデーションのアノヨイーケ、そして救急箱のアノヨイーケがピーチ、ベリー、パインを襲う。
しかし・・・

「『プリキュア・ラブサンシャイン・フレッシュ』！！」
「『プリキュア・エスポワールシャワー・フレッシュ』！！」
「『プリキュア・ヒーリングプレアー・フレッシュ』！！」

ピーチはラジオのアノヨイーケを、ベリーはファンデーションのアノヨイーケを、パインは救急箱のアノヨイーケを浄化した。
ビーズのアノヨイーケがドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、

アクアを襲う。
しかし・・・

「『プリキュア・シューティング・スター』！！」
「『プリキュア・ファイヤー・ストライク』！！」
「『プリキュア・プリズム・チェーン』！！」
「『プリキュア・エメラルド・ソーサー』！！」
「『プリキュア・サファイア・アロー』！！」

ドリーム達の必殺技でビーズのアノヨイーケが浄化される。
扇風機のアノヨイーケがペリドットを襲う。
しかし・・・

「『プリキュア・ペリドットサイクロン』！」

ペリドットの『プリキュア・ペリドットサイクロン』で浄化される。
鎖のアノヨイーケがダイヤモンドを襲う。
しかし・・・

「『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」

ダイヤモンドの『プリキュア・ダイヤモンドソング』で浄化される。
携帯電話のアノヨイーケがターコイズを襲う。
しかし・・・

「『プリキュア・ターコイズスラッシュ』！」

ターコイズの『プリキュア・ターコイズスラッシュ』で浄化される。
水鉄砲のアノヨイーケがパールを襲う。
しかし・・・

「『プリキュア・パールスプラッシュ』！」

パールの『プリキュア・パールスプラッシュ』で浄化される。

「ヤアァァァァァァァァ！！！」

アクアマリンは空気中の水分を水に変え、波のようにゾーマを襲う。

「喰らえ！」

オーガは火柱でアメジストとコズミックを襲う。

しかし・・・

「「ハアァァァァァァァッ！！！」」

「なに！？」

アメジストとコズミックは猛ラッシュでオーガに猛攻する。

「『プリキュア・コズモブレイカー』！」

コズミックは『プリキュア・コズモブレイカー』でオーガを殴り飛ばす。

「グゥオォオオオオオオッ！！！」

アメジストは『ジュエルコミューン』に・・・

「使わせてもらうよ。」

カードを読み込ませる。
すると、アメジストの目の前にダークドリーム、ダークルージュ、ダークレモネード、ダークミント、ダークアクアが現れた。

「皆、力を貸して。」

アメジストはダークプリキュア5に言い出す。

「えぇ、そうさせてもらうわ。」
「フッ、仕方ないか。」
「じゃ、協力しよっか。」
「えぇ、そうね。」
「本当は1人で十分だけど、やるしかないわね。」

ダークプリキュア5は了解を得る。

「『アメジストバトン』。　皆、行くよ!」

アメジストが走り出すと、ダークプリキュア5も走り出す。
オーガは『獄炎棒』を構える。

「『ダークネスファイヤー』!」
「『ダークネスフラッシュ』!」
「『ダークネススプレッド』!」

ダークルージュは『ダークネスファイヤー』、ダークレモネードは『ダークネスフラッシュ』、ダークミントは『ダークネススプレッド』を放つ。

「チィッ!!」

オーガは耐えるが・・・

「ハアァッ！！」

ダークアクアの剣により、『獄炎棒』を真っ二つにする。

「なっ！？」

流石に驚くオーガ。

「「ヤアァッ！！」」

アメジストとダークドリームのパンチで吹き飛ぶオーガ。

「バカな！？」

「これで終わりだよ！　オーガ！」

アメジストは『アメジストバトン』を真上に上げる。

ダークプリキュア5も『アメジストバトン』に向けて手を掲げる。

すると、白と黒のエネルギー体が一つになり、稲妻が走る。

「光と闇が1つになる時！」

「「「「「正しき力が悪を討つ！」」」」」

「「「「「『プリキュア・シャイニングダークネス・マジカルフォース』！！」」」」」

アメジストが『アメジストバトン』をオーガに向けると白と黒の稲妻がオーガを襲う。

「グウゥワアァァァァァァァァァァァァッ！！！！」

オーガは『プリキュア・シャイニングダークネス・マジカルフォース』によって爆散される。
そして、ダークプリキュア５の姿が消えていく。
ダークプリキュア５が消えていったと同時にコズミックがアメジストに近寄る。

「アメジスト、よく頑張ったわね。」
「コズミック・・・」
「あとの事はあなた達に任せるわ。」

コズミックは灰色のオーロラを出し、そのオーロラに入る。

## パラレル襲来！　そして・・・

アメジストの元に駆け寄るパール達。
アメジストはパール達に振り向く。

「行こう、トパーズ達が待ってる。」

アメジストは灰色のオーロラを出す。
その時・・・

【パラレル！　マキシマムドライブ！】

「えっ！？」

プリキュア達は今の電子音を聞いて、周りを見回す。
その時、プリキュア達に衝撃が走り、倒れこむ。

「グウゥッ！？　な、なに！？」

アメジストはもう一度辺りを見回すと、仮面ライダーパラレルの姿が映る。

「流石だね、あのオーガを倒しちゃうなんて。　でも、オーガを倒したからっていい気にならないで欲しいね。」

パラレルはメモリを引き抜くと、宇治原に戻る。

「宇治原さん・・・」

パールは宇治原を見て悲しそうな表情になる。
宇治原の事は友子から聞いたので事情は知っている。

「１８人か・・・ねぇ、トパーズ達が帰って来るまで、僕たちが相手をしようか？」

宇治原の後ろから魔方陣が現れ、そこからダーク小々田、ダークドリーム、幻獣王リオ、ダークキバ、幽汽、ダークゴセイナイト、外道シンケンレッドが現れた。

「久しぶりだな、キュアドリーム。」
「ココ！　目を覚まして！」

ドリームはダーク小々田に言い出す。

「無駄だよ、彼らはダークネスメモリに操られた人形に過ぎないよ。元に戻すには彼らを倒すしかない。」
「ココを倒すことなんてできないよ！」

ダーク小々田はウーザフォンを取り出し・・・

「ならばここで朽ち果てるがいい。　魔導変身、ウーザ・ウル・ウザーラ！」

【ウーザ・ウル・ウザーラ】

ウルザードに変身した。

「闇に生まれ、闇に帰す。　魔導騎士ウルザード。」
「さて、僕もやらせてもらおうかな。」

【パラレル！】

「変身！」

宇治原はパラレルメモリをロストドライバーに挿入した。

【パラレル！】

そして、仮面ライダーパラレルに変身した。

「さぁ、奴隷の世界に案内しよう。」

決め台詞を言うパラレル。

～～～～～～～～～

その頃、トパーズ達はイルバを追い続けている。

（！　ほほう、あのオーガを倒すとは・・・おかげで私の本当の力が戻りつつある。）

プリキュアとイルバがもうすぐクイーンの玉座に到着した時・・・

突然爆発が起こる。

「「「「「「キャアアアアアアアアッ！！！？」」」」」」

今の爆発により、トパーズ達はヘルホースから落ちてしまう。

「な、なに!?」

すると、別の方向から誰かが近づいてくる足音を感じる。
その足音の正体は・・・

「フハハハハハッ！　いいザマだな！」

埴輪将軍ドグーンである。

「えっ!?」
「ドグーン!?」
「どうして!?」

トパーズ、ガーネット、オパールは驚きを隠せなかった。
ドグーンはガーネット、オパール、ピーチ、ベリー、パインの合体技『プリキュア・ラブサンシャイン・シュート』によって倒されたはずだったが・・・

「聞いて驚け、見て驚け！　俺様の中には命の源がある！　だから俺様の体を破壊できても、そいつがある限り何度も蘇ることができるのだ！」
「そんな！」
「またあいつの体を壊さないといけないの!?」

驚きを隠せない3人。

「いや～！　今の大砲の射撃、天晴れですチズ～！」
「おぉ、チーズ。　光の園を連れて来てありがとよ。」

どこからかチーズが現れた。

「いやもう、アースロン様から頂いたスペースミラクルライトのおかげですチズ！」

チーズは揉み手をしながら言う。

「ねずみ？」

「おや、ひょっとしてこの姿で会うのは初めてですチズ？　私は・・・」

チーズが煙に覆われ、伊智頭まさきになる。

「「エェェェェェェェェ！！！？」」

「アーッ！　アンタ！」

「品川の！」

「博物館の人じゃん！」

トパーズ達は驚きを隠せない。

「はい、この姿は仮の姿でして。」

イルバはヘルホースから降りて、ドグーンの所に向かう。

「ドグーン、例の物は見つけたか？」

「あぁ。」

ドグーンは何かを取り出す。

それはプリズムストーンとプリズムホーピッシュである。

「アーッ！」

「それは！」
「プリズムストーンメポ！」
「プリズムホーピッシュミポ！」

ブラックとホワイト、メップルとミップルはプリズムストーンとプリズムホーピッシュを見て驚く。

「それをどうするつもり！？」

ブラックはイルバに質問する。

「こうするのだ！」

イルバはドグーンからプリズムストーンとプリズムホーピッシュを取り上げ、掲げる。

～～～～～～～～～～

【パラレル！　マキシマムドライブ！】

「『パラレル・テレポートシューティング』！」

パラレルはパラレルマグナムをアメジスト、メロディ、リズムに向け、撃った。
弾は出ていなかったが、アメジストとメロディ、リズムが吹き飛ばされる。

「「「キャアアアアアアッ！！！！」」」

『パラレル・テレポートシューティング』によって倒れる3人。
他の15人もウルザード達に倒されてしまう。

「ん?」

パラレルは消滅されたはずのオーガが赤黒い光になって空に向かって飛んでいく所を気づく。

「なんだ?」

～～～～～～～～～～～～

「フフフフフフフフ!!」

イルバが笑い出す。

「アレを見て!」

ホワイトが指をさす。
トパーズ達はその方向を見る。
指をさした先には赤黒い光である。
その光が大きくなり、姿を現す。
オーガが巨大化したのだ。

「オーガ!?」
「まさか、プリズムストーンの力で!?」

トパーズ達は驚きを隠せない。

「その通り、この石の力でオーガを蘇らせ、新たな力を与えたのだ。
そして・・・」

イルバはビンの入った三途の川の水を取り出し、それをプリズムストーンがついたプリズムホーピッシュをかける。

「アノヨイーケ！　三途の川を力に変えて、絶望を陥れよ！」

三途の川の水にかけられたプリズムホーピッシュがアノヨイーケになった。

「アノヨイ～ケ～！！」
「さて、ここはオーガ達に任せて、我々はここから去るとしよう。
行くぞ、ドグーン。」
「オウよ。」

イルバとドグーンはヘルホースに乗って光の園から去っていく。

「なんだか凄いことになりましたね。　私は逃げましょう！」

伊智頭はサッサと逃げ出す。

「光の園をぶっ潰してやるぜ！」
「待て～！！」

オーガは声がした方向に振り向く。
そこにはシンホークとシンホエールとシンユニコーンがやってきた。
シンセイジャーが駆けつけて来たのだ。

「シンセイジャー！」

「プリキュア、こいつは俺達に任せろ！」
「そこの怪物は頼んだわよ！」
「いくよ、翔一、瑞穂！」
「オウ！」
「オッケー！」

シンセイイエローの了解を得るシンセイレッドとシンセイブルー。

「「「新生合体！」」」

シンホークとシンホエールとシンユニコーンが合体して、チョウシンセイとなる。

「「「チョウシンセイ！　推参！」」」

## キュアマザー、現る！

「喰らえ！」

チョウシンセイは『チョウシンセイバー』でオーガに振り下ろす。
オーガは片手で『チョウシンセイバー』を受け止め、チョウシンセイの腹部に殴る。

「テメェらがシンセイジャーか。　光の園をぶっ潰す前に片付けてやる！」

オーガは目を光らせ、チョウシンセイの足元に炎上していく。

「「ウワアァッ！」」
「キャアァッ！」

オーガの力に怯むシンセイジャー。

「負けてたまるか！」

～～～～～～～～

トパーズ、ガーネット、オパール、ブラック、ホワイトはプリズムホーピッシュのアノヨイーケに苦戦している。

「こうなったら・・・ガーネット、オパール！」
「「うん！」」

トパーズとガーネットとオパールは互いの手を重ねる。

「「「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！」」」

3人は『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を放つ。

しかし、アノヨイーケに全く効果がなかった。

「えっ！？」

「嘘！？」

「何で！？」

トパーズ達は驚きを隠せなかった。

「ホワイト！」

「うん！」

ブラックとホワイトは互いの手を握る。

「ブラックサンダー！」

「ホワイトサンダー！」

ブラックとホワイトの片手に黒と白の落雷が落ちる。

「プリキュアの美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「「「『プリキュア・マーブルスクリュー・マックス』！」」」

ブラックとホワイトは『プリキュア・マーブルスクリュー・マックス』を放つ。

しかし、アノヨイーケは平気である。

「そんな！」

「マーブルスクリューも効かない！」

「プリズムストーンメポ！　プリズムストーンがアノヨイーケを守ったんだメポ！」

「邪悪な力がどんどん大きくなっていくミポ！」

プリキュア達はアノヨイーケを見る。

「アノヨイーケ～・・・」

アノヨイーケがプリズムストーンの中心部にエネルギーを集め、増幅している。

プリキュア達なら避けれるが、背後にはクイーンの玉座がある。

「アノヨイーケッ！！」

アノヨイーケが集めたエネルギーを放射した。

トパーズはバリアを作り、ガーネットとオパールは超能力でバリアを強化する。

「まだまだぁ！」

「諦めない！」

「踏ん張る！」

トパーズとガーネットとオパールはアノヨイーケの攻撃に耐える。

「どうしよう、マーブルスクリューが効かないあいつにどうすれば・・・」

弱気になるブラックとホワイト。

「せっかく復活したのに、もう諦めるんですか？」
「そうですよ、私たちが諦めないであなた達が諦めてどうするんですか？」
「虹の園には私達の仲間が・・・それにこの光の園もルミナス達がいる。　ルミナス達だって諦めていないんだから！」

ブラックとホワイトは3人の言葉を聞いてハッと思い出したような素振りをする。

「・・・そうだよね、私達には仲間がいる！」
「ルミナス達も頑張ってる。　だから、私たちも頑張らないと！」

ブラックとホワイトは戦う顔に戻った。
その時・・・

「そうです、諦めてはいけません。」

5人は今の声に反応する。
すると、アノヨイーケが突然、横に倒れこんだ。

「なに！？」

5人はアノヨイーケとは反対の所に振り向く。
そこには胸に金のリボンを背中に銀のリボンをついて、キュアムーンライトのようなスカートにスパッツを穿き、ブーツを履き、ティアラを嵌めた黒い髪型の女性が立っている。

「あなたは？」

ホワイトは女性に話しかける。

「時空を超える光の母君、キュアマザー！」

その女性はキュアマザーと名乗る。

「「キュアマザー！？」」

「あの人がターコイズが言ってた・・・」

「オーガを封印したプリキュア・・・」

「キュアマザー・・・（なんだろう、この人を見てると懐かしい感じが・・・）」

驚く４人だが、トパーズは驚かなかった。

「フハハハハハ、まさかこの状況でキュアマザーと再び会えるとはな！　シンセイジャーを片付けたら、次は貴様の番だ、キュアマザー！」

オーガはマザーに見下ろして言い出す。

～～～～～～～

「『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』！」

「『ミルキィローズ・ブリザード』！」

パッションは『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』を、ローズは『ミルキィローズ・ブリザード』を放つ。

これによってゾーマが１５０人まで減った。

「くそっ！　引き上げろ！」

ゾーマは敵わないと感じたのか、逃走した。

「ハァ、ハァ、ハァ・・・やっと片付けたわね・・・」

「安心するのはまだ早いわ。　急ぎましょう。」

ムーンライト達はトパーズ達の後を追った。

～～～～～～～～～～

【パラレル！　マキシマムドライブ！】

パラレルはメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

「『パラレル・ゴッドスピードラッシュ』！」

パラレルはアメジスト達を一人ずつ目の前に現れ、殴ったり蹴ったりし始める。

アメジスト達は為す術なくやられてしまう。

「やれやれ、せっかくダークネスメモリで操った幽汽や幻獣王リオまで倒されるなんて・・・どうしてくれるんだよ？」

パラレルはため息をつきながら言い出す。

「アースロン、ここは任せる。」

「待・・・って・・・ココ・・・」

ドリームは止めようとするが、立ち上がる力も残っていなかった。
それはアメジストたちも同じだった。
ウルザードはダークキバ、ダークドリーム、ダークゴセイナイト、外道シンケンレッドと一緒に魔導陣に入り、消え去った。

「全くウルザードの奴・・・まぁ、そこのお譲ちゃん達は僕達にフルボッコされて動けないから放っておくか・・・とりあえず、光の園にお邪魔するか。」

パラレルは灰色のオーロラを出し、そのオーロラに入る。

**『プリキュア・マーブルスクリュー・バースト』！**

プリズムホーピッシュのアノヨイーケは7つのプリズムストーンを光らせ、アノヨイーケの周りにザケンナー、ウザイナー、コワイナー、ホシイナー、ナケワメーケ、デザトリアン、ネガトーンを出した。

「ザケンナー！」
「ウザイナー！」
「コワイナー！」
「ホシイナー！」
「ナケワメーケ～！」
「ウオオオオ！」
「ネガトーン！」
「一気に出してきたわね！」
「デザトリアン達は私たちに任せなさい。」

ムーンライト達が駆けつけてきた。
マザーはザケンナーを、トパーズとルミナスはウザイナーを、サンシャインはコワイナーを、ローズはホシイナーを、パッションはナケワメーケを、ムーンライトはデザトリアンを、ビートはネガトーンを、ブラックとホワイトとガーネットとオパールはアノヨイーケを対峙する。

「マザー、話が・・・」
「話は後です！　今はザケンナー達を倒してください！」
「はい！」

トパーズはマザーに話しかけるが、マザーは怪物達に集中するよう

言い出す。
マザーはザケンナーの攻撃を避け、反撃する。
そして・・・

「『プリキュア・シーリングサークル』！」

マザーは両手を差し伸べると、ザケンナーの背中に六亡星の陣が現れ、ザケンナーの動きを止める。

「『プリキュア・セイントパワーストリーム』！」

マザーは片手を前に出すと、銀色の光の玉が現れ、その玉から光線を放つ。

「ザケンナー！？」

『プリキュア・セイントパワーストリーム』に倒れるザケンナー。
マザーはこの機を逃さずに・・・

「地球（ほし）を脅かす悪よ！　今、ここから立ち去りなさい！」

マザーは両手を前に出すと左手に黄金の光が、右手に白銀の光が現る。

「『プリキュア・エターナルサンシャイン・バーストストリーム』！」

黄金の光と白銀の光が光線となり、２つの光線が１つになって、ザケンナーを包み込む。
ザケンナーが消滅された。

ウザイナーはトパーズとルミナスを襲う。

「『ルミナス・ハーティエル・アンクション』！」

ルミナスは『ルミナス・ハーティエル・アンクション』でウザイナーの動きを止める。

「サンキュー、ルミナス！　あとは私が！」

「はい！」

トパーズは高くジャンプする。

「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」

トパーズは『プリキュア・トパーズビッグバン』でウザイナーに攻撃する。

ウザイナーが消滅された。

サンシャインは得意の武術でコワイナーを迎撃する。

そして・・・

「集まれ！　花のパワー！　『シャイニータンバリン』！」

サンシャインは『シャイニータンバリン』を出す。

「花よ舞い踊れ！　『プリキュア・ゴールドフォルテバースト』！」

サンシャインは『プリキュア・ゴールドフォルテバースト』でコワイナーを浄化する。

コワイナーが消滅された。

ローズはホシイナーの攻撃を避け、ホシイナーの足元にパンチする。

よってクレーターができ、ホシイナーのバランスが崩れる。

「邪悪な力を包み込む、薔薇の吹雪を咲かせましょう！　『ミルキィローズ・ブリザード』！」

ローズは『ミルキィローズ・ブリザード』でホシイナーを包む。
ホシイナーが消滅された。
パッションは瞬間移動でナケワメーケを翻弄し、攻撃する。
そして・・・

「歌え！　幸せのラプソディ！　『パッションハープ』！」

パッションは『パッションハープ』を出す。

「吹き荒れよ！　幸せの嵐！　『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』！」

パッションは『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』でナケワメーケを包み込む。
ナケワメーケが消滅された。
ビートはネガトーンの音波を避け、ネガトーンに踵落としする。

「弾き鳴らせ、愛の魂！　『ラブギターロッド』！」

ビートは『ラブギターロッド』を取り出す。

「おいで、ソリー！」
「ソソ！」

ソリーは『ラブギターロッド』の先端に装着する。

「チェンジ、ソウルロッド！」

ビートは『ラブギターロッド』を『ソウルロッド』に変形する。

「翔けめぐれ、トーンのリング！　『プリキュア・ハートフルビートロック』！」

ビートは『プリキュア・ハートフルビートロック』でネガトーンを囲む。

「三拍子！　1・2・3！　フィナーレ！」

ネガトーンが爆発され、消滅される。

ムーンライトはデザトリアンの攻撃を避け、そのまま反撃する。

そのとき、ムーンライトの視線に宇治原の姿が映る。

（まさか・・・！）

ムーンライトはすぐに視線を変え、『ムーンタクト』を出す。

「花よ輝け！　『プリキュア・シルバーフォルテウェイブ』！」

ムーンライトはデザトリアンに『プリキュア・シルバーフォルテウェイブ』を浴びる。

デザトリアンが消滅された。

ブラックとホワイトとガーネットとオパールはアノヨイーケの攻撃を避けながら、反撃する。

「アノヨイ～ケ～！」

アノヨイーケは光を集約し始めた。
先ほどのように光線を放射するつもりである。
その時、ガーネットとオパールの目の前にカードが現れる。
しかも2枚も。
トパーズも1枚のカードが目の前に現れる。
1枚は『レインボー・ブレス』が描かれており、もう1枚はトパーズは白鳥が描かれ、ガーネットは蝶が描かれ、オパールは猫が描かれている。

「新しいカード！」
「一枚のほうは分かるけど・・・」
「もう一枚は何？」

トパーズ達はカードを眺めていた。

「トパーズ、ガーネット、オパール！」

マザーの声でハッと我に振り返り、アノヨイーケを見る。
アノヨイーケは今でも発射できている。

「考えてる暇はないわ！　行くわよ！」
「うん！」

ガーネットとオパールは『レインボー・ブレス』のカードを読み込ませる。
すると、ブラックとホワイトの腕に『レインボー・ブレス』が取り付けた。
同時にガーネットとオパールの腕に『スパークル・ブレス』が取り付けた。

「これは！」
「『レインボー・ブレス』！」
「どうして『スパークル・ブレス』が！？」
「一緒に必殺技を撃てって言うの？」

ガーネットとオパールとブラックとホワイトが互いの顔を見て、頷きだす。

「「ブラックサンダー！」」
「「ホワイトサンダー！」」

ブラックとオパールはブラックサンダーを纏い、ホワイトとガーネットはホワイトサンダーを纏う。

「プリキュアの美しき魂が！」
「「闇を照らす光が！」」
「邪悪な心を打ち砕く！」

アノヨイーケが光線を放射した。
ブラックとホワイトが互いの手を強く握る。

「「「「『プリキュア・マーブルスクリュー・・・」」」」」

ブラックとオパールとホワイトとガーネットの手から雷を放ち、雷が出た手を後ろに下げる。

「「「「「バースト』！！」」」」」

４人の手を前に出すと強力な白と黒の光の光線を放つ。

互いの光線は相殺するが、徐々にアノヨイーケが押されていく。
そして・・・

「アノヨイ～ケ～！！？」

アノヨイーケが『プリキュア・マーブルスクリュー・バースト』により浄化され、プリズムホーピッシュに戻った。

## 『プリキュア・マーブルスクリュー・バースト』！（後書き）

仮面ライダーパラレルのマキシマムドライブ、パラレルマグナム時とマキシマムスロット時では思いつきましたが、パラレルシャフト時とパラレルエッジ時のマキシマムドライブは思いつきません・・・誰でもいいですから知恵を貸してください。

## ミラクルチョウシンセイ

その頃、星守はセイバーに変身してカマキリヤミーと対峙した。

「ヤァッ、ハァッ！」
「グッ、グオッ！」

セイバーの攻撃により倒れこむカマキリヤミー。

「止めだ！」

セイバーは必殺技の構えを取る。
その後、ジャンプし・・・

「『サンシャイン・ノア』！」

『サンシャイン・ノア』でカマキリヤミーを倒した。

「ふぅ・・・」
『健一、油断してはいけない。　ネオプラネットは何を考えているか分からない。』
「うん・・・」

セイバーが星守に話しかける。
その時、灰色のオーロラが現れる。
そのオーロラから現れたのは、ガラガランダとジャーク将軍である。

「ガラガランダ！　ジャーク将軍！」
「貴様が宇宙から来た仮面ライダーか？」

「まさか大ショッカーが復活したのか！？」
「違う！　我々は生まれ変わったのだ。　大ショッカーが誕生し、残党共がスーパーショッカーとして活動、ある世界ではメガショッカーが誕生し、ある時はスーパーネガショッカーが襲来。　そして我々は新たにネオショッカーとして生まれ変わったのだ！」
ジャーク将軍がネオショッカーと言い出す。
「ネオショッカー！？」
「そう、ネオプラネットと手を組んでな！」
セイバーは驚く。
ネオショッカーがネオプラネットと手を組み、世界征服を企んでいたのだ。
「貴様はここで死んでもらう！」
ガラガランダとジャーク将軍がセイバーに歩み寄る。
「待て、ネオショッカー！」
ガラガランダとジャーク将軍が見上げると、屋上に小津勇とドギー・クルーガーの姿が映る。
「超天空変身！　ゴール・ゴル・ゴル・ゴル・ゴルディーロ！」
「エマージェンシー！　デカマスター！」
勇はウルザード・ファイヤーに、ドギーはデカマスターに変身した。
「百鬼夜行をぶった斬る！　地獄の番犬！　デカマスター！」

「猛る烈火のエレメント！　天空勇者！　ウルザード・ファイヤー！」

決め台詞を言うデカマスターとウルザード・ファイヤー。

「デカマスター・・・ウルザード・ファイヤー・・・」

～～～～～～～～～～

その頃・・・

「成る程、プリズムストーンの力でオーガを蘇らせただけでなく、巨大化させるなんて。　やっと手に入れたシンビーストもここまでだね。」

宇治原は物陰に隠れながら言い出す。

チョウシンセイはオーガの猛攻に押されてしまう。

「クソッ！　強ぇ！」

「でも、まだよ！」

「そうだ！　負けない！」

チョウシンセイとオーガの戦いを見届けるトパーズ達。

「頑張れ、シンセイジャー！」

「オパール、何応援してんのよ！？」

「そうだよ、私達もシンセイジャーと協力してオーガを倒さないと！」

応援するオパールにツっ込むガーネット。

「では彼らと友に戦うのです。」

「！　クイーンですね。」

マザーは今の声をクイーンだとすぐに分かった。

その時、トパーズ達に3体の妖精が駆けつけた。

その妖精は白鳥、蝶、猫のような妖精である。

「話は聞いたスプ！」

「私達も力を貸すフル！」

「よろしくニポ！」

トパーズ達はいきなりの出来事で驚く。

「スプロン！　フルップ！　ニポルン！」

「久しぶりミポ！」

「メップル、ミップル！　久しぶりスプ！」

メップルは白鳥をスプロン、蝶をフルップ、猫をニポルンと呼ぶ。

「この子達はシンセイジャーと共にいるシンビーストの血を受け継いでいます。　あなた達なら使いこなせると信じています。」

トパーズ達は何のことだかさっぱりだったが、『ジュエルコミューン』を出し、カードを取り出す。

「使いこなせるかな？　スーパー戦隊の力。」

「やってみるしかないでしょ。」

「いくよ、皆！」

トパーズ達は『ジュエルコミューン』にカードを読み込ませた。
すると、スプロンとフルップとニポルンがシンビーストとなる。

「大きくなっちゃった！」
「信じられない・・・」
「凄いよ、スプロン！」

感心するトパーズ達。
トパーズはシンビースト化したスプロンに言う。

「この姿ではジュエルスワンって呼んで。」
「私はジュエルバタフライです。」
「オイラはジュエルキャットだよ。」

そう名乗るジュエルスワン達。

「さぁ、皆。　僕たちに乗りなさい。」

トパーズはジュエルスワンに、ガーネットはジュエルバタフライに、
オパールはジュエルキャットに乗る。
シンセイジャーはその状況を見ていた。

「シンビースト！？」
「この世界にもいるなんて！」

ジュエルキャットはオーガにしがみつき、引っ掻き始めた。
すぐにオーガから離れるジュエルキャット。
そして鱗粉を撒き散らすジュエルバタフライ。

「貴様らぁ！」

オーガは殴りかけるが、すぐに回避するジュエルバタフライ。
そして、ジュエルスワンは猛スピードでオーガに突進する。

「チィッ！」

後ろに後退するオーガ。

「シンユニコーン！」
「あぁ、合体できるかもしれん。」
「マジか！？」

立ち上がるチョウシンセイ。

「聞こえるか！？　スワン、バタフライ、キャット！　チョウシンセイと合体するんだ！」

チョウシンセイはジュエルスワン達に言う。

「合体！？」
「そんなことが！？」
「でも面白そう！」

ジュエルスワン達はチョウシンセイのところに向かう。

「トパーズ！」
「オッケー！」
「いいわね、ガーネット！」
「勿論！」

「オパール、行くよ！」
「がってん！」

意気投合するシンセイジャーとジュエルマスタープリキュア。

「「「「「「「ミラクル新生合体！」」」」」」」

ジュエルキャットの頭部がチョウシンセイの肩当てに、ジュエルスワンの翼が折り畳んでジュエルキャットのボディと合体し、チョウシンセイの背中に合体する。
そしてジュエルバタフライが『チョウシンセイバー』と合体する。

「「「「「「「ミラクルチョウシンセイ！　推参！」」」」」」」

シンセイジャーとジュエルマスタープリキュアはミラクルチョウシンセイと名づける。
その様子を見た宇治原は・・・

「シンセイジャーとプリキュアの力が一つになってあの巨人に・・・
もう何でもありだね・・・」

感心した後、すぐに立ち去った。

「うわ～、なんだか凄そう・・・」

様子を見ていたのは宇治原だけでなく、伊智頭も見ていた。

## ミラクルチョウシンセイ（後書き）

せっかくこの小説を作ったので書いておきました。（笑）

## 決着！　ＶＳオーガ！

オーガの前に立ちはだかるミラクルチョウシンセイ。

「シンセイジャー、プリキュア。　貴様ら共々、地獄に送ってやる！」

オーガは腕から炎の刀を出し、ミラクルチョウシンセイに斬りかかる。

「「「「「「『ミラクルチョウシンセイバー』！　『精霊剣・一閃』！」」」」」」

ミラクルチョウシンセイは『ミラクルチョウシンセイバー』と名乗る剣に光を込め、オーガの炎の刀とぶつける。

よって鍔迫り合いになる。

オーガはミラクルチョウシンセイを突き飛ばし・・・

「舐めるな！」

炎の刀でミラクルチョウシンセイを斬り裂く。

怯むミラクルチョウシンセイ。

しかし・・・

「地獄へ行くのはお前だ！」

「そうよ！　あんたのような暴将にやられるもんですか！」

「これまでの人達に絶望を与え、悲しみを繰り返させるお前達なんかに許すわけにはいかない！」

シンセイレッド、シンセイブルー、シンセイイエローが言い出す。

「バカめ、人間の心には怒りもあって悲しみもある。　世の中は苦しみから逃げ出すことはできねぇんだよ！」

オーガは言い返す。

「オーガ！　あんたの言う通り、苦しさから逃げ出すことはできない！　でもね！」

「その苦しみを立ち向かうには互いに信頼しあい、立ち向かっていく勇気が必要なの！」

「怒りや悲しみがあっても、皆と分かち合えば絆が芽生える！　あんたのような人の心を踏みにじるような奴に負けないんだから！」

ガーネット、オパール、トパーズが言い出す。

「「「「「『ミラクルチョウシンセイバー』！　『フェアリースパーク』！」」」」」

ミラクルチョウシンセイの『ミラクルチョウシンセイバー』に銀色の雷を纏い、オーガを斬りかかる。

オーガは炎の刀で受け止めようとするが、真っ二つに斬られてしまう。

「なに！？」

「「「「「「ヤアァッ！」」」」」」

ミラクルチョウシンセイは再びオーガに斬りかかる。

「グオォッ！！」

「「「「「「『ミラクルチョウシンセイバー』、奥義！」」」」」」

『ミラクルチョウシンセイバー』に光を集約して、ジャンプする。
そしてオーガに向かって急降下する。

「「「「「「『シンセイミラクルエアストライク』！！」」」」」」

ミラクルチョウシンセイは『ミラクルチョウシンセイバー』でオーガの体を貫く。

「グワアアアアアアアアアッ！！！！　こんなガキ共にいいいいいいいいいい！！！！」

オーガは倒れこみ、爆散された。

「「「ヤッターッ！」」」
「よっしゃーっ！」
「イェイ！」

大喜びするシンセイジャーとプリキュア達。

～～～～～～～～～～

しばらく経った後、夏海達も光の園に到着。
和夢は回復が終わった後、パラレルシップに戻っている。
夏海達はパワーストーンの影響で回復した為、のぞみ達を回復させるのに時間がかかったので合流が遅くなったのだ。

「そっか、宇治原さん・・・いや、アースロンと一戦交わっちゃっ

たんだね。」
「はい。」

夏海から事情を聞いた真理奈達。

「負けるモンですか！」
「えぇ。」

真理奈達が話してる途中、キュアマザーが歩み寄ってきた。

「あ。」
「皆さん、よく頑張りました。　おかげで光の園は無事でした。」

真理奈達に感謝するキュアマザー。

「当然の事してやったまでですよ。　それより、あなたはまさか・・・」

真理奈はキュアマザーに言いたいことを言おうとした。

「えぇ、真理奈。　私はあなたの母、新真奈美です。」

キュアマザーの発言に驚く忍美達。

「キュアマザーの正体って真理奈のお母さん！？」
「えぇ、久しぶりですね。　忍美さん、安美ちゃん。」
「詳しく教えてくださいませんか？」

天馬は真奈美がなぜキュアマザーとして戦っていたのか聞こうとした。

「えぇ、実は・・・」

キュアマザーが話そうとしたその時・・・

「大変ムプ～！」

「大変ププ～！」

真理奈達が振り返るとムープとフープが大慌てで飛んで来た。

「ムープ、フープ！」

「どうしたスプ？」

スプロンはムープとフープに質問する。

「咲と舞がいなくなったムプ～！」

「探しても見つからないププ～！」

驚きを隠せない真理奈達。

「！　邪悪な気配を感じるフル！」

「ニポルンも感じるニポ！」

スプロン達は邪悪な気配を感じたと言う。

キュアマザーはオーロラを出し、その気配の正体を見る。

すると、オーロラに映し出したのは地獄衆のゾーマである。

「地獄衆！　ゾーマは私に任せて、咲さんと舞さんを！」

「え、でも・・・」

「お願いします！」

キュアマザーは真理奈達にお願いした。

「・・・分かった。」

「こうしてはいられません。　真理奈さん、私は一度『ＲＥＢＩＲＴＨ』に戻り、母にこのことを伝えます！」

「分かりました、明子さん！」

キュアマザーと真理奈達は手分けして行動する。

～～～～～～～～～～

「ハァッ！」

「ムンッ！」

デカマスターとウルザードファイヤーはガラガランダとジャーク将軍を斬りつける。

「グアッ！！」

「ヌウッ！！」

ガラガランダとジャーク将軍は倒れる。

「『Ｄソード・ベガ』！　『ベガスラッシュ』！！」

「マージ・ゴル・ジー・マジカ！　『ブレイジングストームスラッシュ』！！」

デカマスターはガラガランダに『ベガスラッシュ』を、ウルザードファイヤーはジャーク将軍に『ブレイジングストームスラッシュ』

で斬りつける。

「「グワアアアアアアアアアッ！！！！」」

斬りつけられた2人の体に火花を散らす。

「これで終わりだと思うな！　我が首領はこれしきの事で諦めはせん！」

「新たなる組織ネオショッカーに大バンザーイ！！」

ガラガランダとジャーク将軍は倒れ、爆散される。

## 黒いコートの2人組

オーガとの戦いが終わった後、アースロンは『アルカトラーズ』に戻り、『生命の間』の玉座の横にあるモニターを見た。
その映像はミラクルチョウシンセイである。

「まさか光の園の妖精がチョウシンセイと合体するなんて・・・せっかく手を組んだ地獄衆の将軍・オーガが倒されたから面倒なことになるね。」

アースロンはミラクルチョウシンセイの映像を見て思う。
その時、扉からノックの音がした。
アースロンはすぐに映像を消した。
入ってきたのはネプトユーヌである。

「毎度毎度外出してご苦労様ね。　アースロン。」
「嫌味のつもりかい？　だったら入ってこないでくれないかな。」
「そう怒らないでよ？　あなたの目の前にこんな美女がいておいて暴言しないでくれる？」

ネプトユーヌはアースロンの肩に手を置いて言う。

「（美女って自分で言うことかな・・・）で、僕に何の用なの？」

アースロンはネプトユーヌに用件を問う。

「ジュピタールとヴィーナシエル、サタンギラスが新たな悪の勢力と契約したみたいよ。　ジュピタールは獣忍（けものしのび）、ヴィーナシエルは暗黒黒騎士団、サタンギラスは時空鬼と手を組んだみたい。」

ネプトユーヌはアースロンに用件を言った。

「そして、もう一組、ネオショッカー。　結構な数だね。」

「地獄衆、ダイオキシー、インセクロイド、エンドレス、ネオショッカー、獣忍、暗黒黒騎士団、時空鬼。　これだけ手を組めば別世界の侵略も夢じゃないわね。」

「でもこれで役に立たない連中だったら知らないよ?」

「だからよ、簡単にやられないように私達ネオプラネットがサポートするの。」

ネプトユーヌはアースロンの顔に近づく。

「ねぇ、あなたにはヴィンラスっていう恋人いたけど、今はもういない。　どう?　私と一緒に遊ばない?」

「やだよ、僕は気に入った娘にしか相手にしないんだ。」

アースロンはネプトユーヌから離す。

～～～～～～～～～～～～～～～

その頃、成美は地下研究室で何かを開発していた。

成美が作っていたのは何かのケースのようだ。

「よし、あとは・・・」

「お母様、お母様!」

成美はドアの方に振り向くと、明子が入ってきた。

「あら、明子。　どうしたの、慌てて？」
「咲さんと舞さんが行方不明になったんです！」
「咲ちゃんと舞ちゃんが行方不明に？」

明子は成美に報告すると、ブザーが鳴り出す。

「警報！？」
「スナッキー！　モニタースイッチオン！」
「キーッ！」

成美はスナッキーにモニターを映すように言い出す。
実は２人のスナッキーはいつき達に謝った後、『ＲＥＢＩＲＴＨ』に預けられ、成美と手伝いをしていた。
モニターを出すと、黒いコートを着た２人組が浮遊飛行していた。

「黒いコート？」
「スナッキー、あの２人が向かう場所を示して！」
「キーッ！」

スナッキーはコンピューターを操作して、２人組が向かう場所を探した。
座標を見ると真っ直ぐ南西に向かっていることが判明。
そして、矢印が示していたのは・・・

「東宝市！？」
「あそこには真理奈さん達が向かっています！」
「明子、すぐに連絡して！」
「はい！」

明子は『ジュエルコミューン』を取り出し、真理奈達に連絡を取る。

～～～～～～～～～～

一方、ウラヌシオンは雲の中から見届ける。

「さあ、プリキュアよ。　早くしないと町が破壊されるぞ。」

ウラヌシオンが笑みを浮かべながら言い出す。

「ん？　来たか。」

ウラヌシオンが見たのはトパーズ、ガーネット、オパール、パールである。

「あの2人ね、明子さんが言ってた・・・」

「止めるわよ！」

トパーズ達は2人組の前に立つ。

2人はすぐにオパールとパールを殴りかかる。

「くっ！」

「問答無用みたい！」

トパーズとガーネットは2人と対峙する。

その様子を見たウラヌシオンは・・・

「フッハッハッハッハッハッ！　相手が何者か知らず必死に戦っておるわ。」

笑い出す。

「埒が明かないわね！」

「トパーズ、オパール！　ジュエルフォースでいくわよ！」

「「うん！」」

トパーズ達は2人から離れた後、必殺技の体勢に入る。

すると、2人組はコートを脱ぎ捨てる。

トパーズが見たのは灰色のシャツに黒いロングスカート身に纏った姿、つまり、満と薫の戦闘の時の姿となった咲と舞である。

「「「「えぇっ！？」」」」

トパーズ達は驚きを隠せなかった。

「咲！？」

「舞！？」

「ウソッ！？」

「そんなことって！？」

その様子を伺ったウラヌシオンは・・・

「ハーッハッハッハッハッハッ！　やっと気付いたか？　お前達が戦っているのは伝説の戦士の2人なんだよ。　さあ、どうするね？　ハッハッハッハッハッハッ！」

## 咲と舞を救え！　２つの力の戦士、現る！

トパーズ達は敵の正体が咲と舞であることを知り、攻撃を止める。

「咲さん！　舞さん！　一体どうしたんですか！？」

パールは咲と舞を呼びかけるが、全く聞く耳持たない。

「プリキュア・・・」

「倒ス・・・」

咲と舞はトパーズ達を襲う。

トパーズとガーネットは迎え撃つ。

「オパール、パール！　明子さんに連絡して！」

「はい！」

パールは『ジュエルコミューン』で明子に連絡を取る。

～～～～～～～～～～～～

「えっ！？　皆さんが戦っているのは咲さんと舞さん！？」

明子はパールからの連絡を聞いて驚く。

「スナッキー、すぐに映像を出して！」

「キーッ！」

スナッキーは明子と成美に咲と舞の映像を見せる。

「どうして咲さんと舞さんが！？」

（咲ちゃんと舞ちゃんがトパーズ達を・・・まさか・・・！）

成美はスタンドマイクを持って・・・

「トパーズ、ガーネット！　聞こえる？」

『成美さん！？』

『どうしたんですか！？』

「メガネを描いたサポートカードを使って！　そして咲ちゃんと舞ちゃんをよーく見つめるのよ！」

成美はトパーズとガーネットに指示する。

～～～～～～～

「分かりました！」

トパーズとガーネットは成美が言ったようにメガネを描いたカードを取り出し、『ジュエルコミューン』に読み込ませる。

その後、咲と舞を見る。

「！？」

「なにこれ！？」

トパーズとガーネットが見たのは咲と舞のハートである。

しかし、そのハートの一部一部が黒く染めている。

「黒ずんでる！」
『やっぱりね・・・咲ちゃんと舞ちゃんは何者かに操られるわ！黒ずんだハートがその証拠よ！』
成美は確信がついたように言い出す。
『皆、よく聞いて！　咲ちゃんと舞ちゃんは今、悪の手先によって悪い気を送り込まれて正気を失ってるの！』
「何ですって！？」
「何か方法はないんですか！？」
ガーネットは成美に咲と舞を元に戻す方法を聞く。
『咲ちゃんと舞ちゃんを元に戻す方法は唯一つ、プリキュアの技に想いを込めて打ち込むしかないわ。』
「想いを込めて・・・」
「そうすれば、咲と舞は元に戻るんですね？」
『えぇ！』
「オパール、パール！　あなた達がやりなさい！」
「うん！」
「はい！」
オパールとパールはなるべく離れる。
トパーズとガーネットは咲と舞を撹乱する。
「トパーズ・・・倒ス・・・」
「ガーネット・・・倒ス・・・」
咲と舞は攻撃を繰り出すが、トパーズとガーネットは回避し、撹乱を続ける。

それを見たウラヌシオンは・・・

「おのれ、ちょこまかと！　一体何が狙いだ？」

何度も避けている姿を見て、苛立っている。
ガーネットは舞の攻撃を避ける。

「（じっとしてなさい！）『プリキュア・ガーネットクロウ』！」

ガーネットは『プリキュア・ガーネットクロウ』で咲と舞の足に当てる。
咲と舞は効いたのか、バランスが崩れ、倒れこむ。

「よし！」
「オパール、パール！　今だよ！」
「オッケー！」
「はい！」

オパールはパールの手を繋ぎ、空に飛翔する。

「パール、いくよ。」
「うん。」

パールは『ジュエルコミューン』から『パールステッキ』に変え、舞に向ける。
オパールも手を咲に向ける。
その時、後ろから光が漏れ出す。

「「！？」」

雲から光弾が現れ、パールに命中する。

「キャアアァッ！！！」

『どうしたの！？　パール！』

「誰かがいきなり上空から撃ってきたんです！」

オパールは成美に状況を説明する。

「！　あそこ！」

トパーズは雲に指をさす。

そこにはウラヌシオンの姿が・・・

「フッハッハッハッハッハッ！　無駄だ、無駄だ！　その2人はお前達の仲間ではない！　我が僕となったのだ！　俺の完璧な作戦のおかげでな！　ハーッハッハッハッハッハッ！」

ウラヌシオンは笑いながら言い出す。

「じゃあ、咲と舞を操ったのは！」

ガーネットはウラヌシオンの言葉で咲と舞を操ったのはウラヌシオンだと確信する。

「小娘共、そこをどけ。」

「ヤダ！」

「2人を元に戻すまでどかないわ！　オパール！」

「うん！」

オパールとパールは再び、咲と舞に向ける。

「バカめ！　あくまでどかぬというなら、お前達から始末してやる！」

ウラヌシオンは手をオパールとパールに向ける。

その時・・・

「『プリキュア・テンペストドライバー』！」

ウラヌシオンの周りに雷を帯びた嵐に呑まれる。

しかし、ウラヌシオンには全く効果がなかった。

ウラヌシオンが振り向くと、ＧＡＳＨさんのオリジナルプリキュア、キュアテンペストの姿が映る。

彼女とキュアブレイズとキュアガイアを合わせればダブルフォースプリキュアと呼ぶ。

「トパーズ、大丈夫？」

「その声、まさかテンペストなの？」

「そうだよ。　あたし達助けに来たから。」

「あたし達？　まさかあの２人も？」

テンペストの隣にキュアブレイズ、キュアガイアが現れる。

「その通りよ。」

「貴方達が苦戦していると思って、ここへ来たの。」

「皆・・・」

ガーネットは喜びを見せる。

『今よ！　オパール、パール！』
「「はい！」」
（咲さん、舞さん！）
（2人ともお願い！）
「「想いを届いて！」」

オパールは『プリキュア・オパールメテオ』を、パールは『プリキュア・パールスプラッシュ』を放つ。
咲と舞は2人の技に包まれ、2人の中にある悪の気が消えていく。
同時に2人の掌からダークネスメモリが現れ、メモリブレイクされた。
よって2人の格好は私服に戻る。

「舞、大丈夫？」
「咲、しっかり！　これくらいでくたばる程、柔じゃないでしょ？」
「う・・・ん・・・私たちは一体・・・」
「う～ん、何があったんだろ？」

トパーズとガーネットは咲と舞が正気に戻ってることを確信した。

「成美さん、咲と舞は正気に戻りました。」
『皆よくやったわね。』

咲と舞が元に戻って、喜びを浮かべるトパーズ達。
しかし、今は喜んでいる場合ではなかった。

「あいつ！」
「パール、咲さんと舞さんをお願い。」
「うん！」

トパーズとガーネットとオパールはウラヌシオンの所に向かう。

「邪魔したことを後悔させてやる。」

「待ちなさい！」

「あなただけは許さない！　よくも2人を操ってくれたわね！」

トパーズ達はウラヌシオンの前に立つ。

「バカめ！　誰が相手だろうと同じことだ！　すぐに片付けてくれる！」

ウラヌシオンの鎧からエネルギーを放出して、ボール状に溜め込む。

「ジュエルフォースでいくわよ！」

「「オッケー！」」

3人は必殺技の構えに入る。

「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！」

トパーズ達は『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を放つ。

「『エアエナジーショット』！」

ウラヌシオンは風のエネルギーをボール化した光弾を放つ。

『エアエナジーショット』はどんどん『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を押し、トパーズ達に命中する。

「「「キャアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」」」

『エアエナジーショット』を受けた3人は大ダメージを与え、変身が解かれ、倒れこむ。
それだけじゃない。
3人が持つ『ジュエルコミューン』が破壊されてしまう。

「う・・・こ、コミューンが・・・」
「ハーッハッハッハッハッハッ！　見たか！？　この『スペースアーマー』の能力はお前達のレベルが違うのだ！」

ウラヌシオンが笑い出す。

「「「『プリキュア・トライブレスター』！」」」

ダブルフォースプリキュアは『プリキュア・トライブレスター』を放つ。
しかし、ウラヌシオンはなんともないように余裕を見せる。

「フッフフフ！　そんな程度か？」
「そんな！？」
「私たちの技が・・・」
「効かないなんて・・・」

『プリキュア・トライブレスター』が効かないウラヌシオンを見て驚きを隠せなかった。

「諸君！　改めて言おう！　我こそがネオプラネット・暗黒八惑星の一人、天王星のウラヌシオン！」

ウラヌシオンは自分の名前を伝える。

「フフフフ、楽しいショーだったぞ。　今日の所は挨拶代わりとしておこう。楽しみはまた今度だ！　さらばだ！　ハーッハッハッハッハッハッハッ！！」

ウラヌシオンは空高く飛び、去って行った。

「ネオプラネット・・・」
「暗黒八惑星・・・」
「天王星のウラヌシオン・・・」

# ジュエルマスターとダブルフォース（前書き）

サブタイトルが思いつかなかったので、こうなりました。

ウラヌシオンとの一戦から数時間後、夏海達は真理奈、忍美、安美の看病するため、『ＲＥＢＩＲＴＨ』の医務室にいた。
友子や愛、静香も来ている。

「酷いやられ様だね。」
「こないな時に何してんねや？　安田博士は・・・」
「分かりません。　一度お母様に話したのですが、３人が目を覚めたら言ってあげるとばかりで何も教えてくれないんです。」
「『ジュエルコミューン』が壊れたって言うのに・・・」

愛、友子、明子、静香は焦っていた。

「明子さん。」
「はい。」
「安美達の治療なんですが・・・」

夏海は３人のベッドを見る。
３人が寝ているベッドはハッチが取り付けられ、ホースのような物が付いている。

「あれで大丈夫なんでしょうか？」
「はい、医務室の地下にはミラクルライトを応用した一部の人間を回復させる増幅装置が設置してあります。　その増幅装置を応用すれば病院で手当したり、薬局の薬で治すよりも早く回復ができるんです。　今の真理奈さん達が回復するのは３日程でしょう。　病院で例えるなら１ヶ月で治る時間です。」

明子は夏海達がいる医務室について説明した。

「へぇ～、それは凄いことやな。」

「流石『ＲＥＢＩＲＴＨ』！　妖精界の研究をしただけのことはある！」

感心する友子と愛。

「ところで夏海さん。　あの時映像に映っていたあのプリキュアは？」

「私たちのこと？」

医務室に入ってきたのはキュアテンペストこと神名遥、キュアブレイズこと江神麗華、キュアガイアこと神河千鶴である。

「遥さん、麗華さん、千鶴さん。」

「久しぶりね、夏海。」

この３人は以前、『キラーの世界』で地獄衆・軟体将軍ゲゾール、埴輪将軍ドグーン、ミラーズ、サイエンス星人との戦いで、真理奈、忍美、安美、夏海、星守と共に戦ったため知り合っている。

「紹介します。　あちらの方々は神名遥さん、江神麗華さんに神河千鶴さんです。」

夏海は友子達に遥達を紹介する。

「初めまして、神名遥だよ。」

「私は江神麗華、よろしく。」

「神河千鶴です。」

遥達は友子達に名前を伝える。

「初めまして、私は『ＲＥＢＩＲＴＨ』代表の娘、安田明子と申します。」

「私、永田愛って言うの。」

「ウチは堤友子や。　この子は水城静香ちゃんや。」

「よろしくお願いします。」

明子達も遥達に名前を伝える。

～～～～～～～～～～

その頃、アースロンは陣を描いていた。

「よし、あとは・・・」

アースロンは２つのプリキュアの力を取り出し、陣の真ん中に置く。

そして、アースロンは陣の外に出た。

「いくよ。」

アースロンは陣に手を置く。

すると、陣が光り出し、真ん中に置いてあるプリキュアの力を包み込み、その光の中から２体のホムンクルスが現れる。

「よろしくね、ラビットホムンクルスのロップ君に、ホークホムンクルスのエアロンちゃん。」

アースロンはラビットホムンクルスとホークホムンクルスの頭を撫でる。

「アースロン様。」

扉を開けて入ってきたのはバイオスだ。

「なに？」

「数時間前、別の世界のプリキュアがウラヌシオン様の前に立ち塞がったようです。」

「別の世界って言ったっていろんな世界がある。　もっと詳しく言って。」

「はい。　『キラーの世界』で活躍した、風と雷を操るキュアテンペスト、炎の氷を操るキュアブレイズ、水と土を操るキュアガイアがウラヌシオン様の作戦を妨げたとのことです。」

バイオスはアースロンに詳しく報告する。

「うん、よろしい。　だったら、僕のペット達を動かすか。」

アースロンはラビットホムンクルスとホークホムンクルスを見る。

「そうだ！　ネプトユーヌとサタンギラスも連れて行こう！　バイオス、ネプトユーヌとサタンギラスに地球に下りる準備をしろと伝えて。」

「はい。」

バイオスは『生命の間』から出て行った。

「しかし、すぐに攻撃するというのは楽しみがなくなる。　まずは顔合わせと行こうか。」

～～～～～～～～～

午後3時20分、成美は電話で誰かと連絡を取っている。

「ライダー開発責任者、石堀彰人君、そっちの作業はどうなってるの？」

『うん、順調だよ。』

石堀彰人という男性が成美に伝える。

「うん・・・うん、分かったわ。　私もあと少しで完成するところよ。　お互い頑張ろうね。」

『うん、僕も急いで完成するよ。』

「じゃ、またあとでね。」

成美は彰人との連絡を切った。

その時、ドアが開ける音がした。

成美が振り向くと、咲と舞が入ってきた。

「あら。　咲ちゃん、舞ちゃん。　どうしたの？」

「あの、成美さん。　私たちにできることはないですか？」

「真理奈達の力になりたいんです。」

咲と舞の言葉に驚く成美。

「驚いたわね、そんな事言うなんて・・・」

成美はすぐに考える。

「・・・分かったわ。　明日の朝、ここに来て。」

「「！　ありがとう御座います！」」

礼をする咲と舞。

「それと、このことは誰にも言わないようにね？」

「「はい。」」

# 暗黒黒騎士団

「ククククク・・・溶けろ！　汚れてしまえ！」

ダイオキシー・網切のギロンガが町を溶かし、汚し始めた。
ギロンガだけじゃない。
手下とも言える貝のような怪人の集団が町を汚し始めた。
その貝のような怪人をシキと呼んでいる。

「もっと汚せ！」
「やめろ！」

ギロンガが振り向くとシンセイジャーが駆けつけてきた。

「木霊之山の妖怪！　ここまでよ！」
「ちゃんとギロンガと呼べ！」

ギロンガが名前を呼んでくれなかったことに怒る。
その時、ギロンガの目の前に魔導陣が現れ、ウルザードと外道シンケンレッドが現れる。

「ウルザード！　外道シンケンレッド！」
「網切のギロンガ。　手を貸してやろう。」
「フン！　好きにしろ！」

その時・・・

「そこまでだ。」

どこからか声がした。
シンセイジャーは後ろに振り向くと、小津勇、ドギー・クルーガー、志葉薫の姿が・・・

「！」
「もしかしてあなた達は！？」

シンセイジャーは驚きを隠せない。

「シンセイジャー、ダイオキシーはお前達がやれ。　あの雑魚共は俺が片付ける。」
「外道に落ちたシンケンレッドは私が引き受けよう。」
「ウルザード、お前の相手は私だ。」

3人はシンセイジャーの隣に立つ。

「いいだろう、相手になってやる。」

勇は『ファイヤーウーザフォン』、ドギーは『マスターライセンス』、薫は『ショドウフォン』を取り出す。
そして・・・

「超天空変身！　ゴール・ゴル・ゴル・ゴルディーロ！」
「エマージェンシー！　デカマスター！」
「一筆奏上！」

勇はウルザードファイヤーに、ドギーはデカマスターに、薫は女性シンケンレッドに変身した。

「猛る烈火のエレメント！　天空勇者、ウルザードファイヤー！」

「百鬼夜行をぶった切る！　地獄の番犬！　デカマスター！」
「シンケンレッド、志葉薫！」

名乗り口上を言う3人。
ウルザードは魔導陣を出し、ゾビルを地上に出す。
そして、それぞれの隙間からナナシ連中が現れる。

「いくぞ！」
「こい。」

ウルザードファイヤーとウルザードは剣を抜き、走り出す。

「参る！」

女性シンケンレッドと外道シンケンレッドも刀を抜き、走り出す。

「銀河一刀流の剣技、とくと味わうがいい。　ディーソード・ベガ！」

デカマスターも『ディーソード・ベガ』を抜き、シキ、ゾビル、ナナシ連中に立ち向かう。

「覚悟しなさい、妖怪！」
「ギロンガと呼べって言っただろうが！！（怒）」
「地球を汚させはしない！」
「いくぜ、瑞穂、天馬！」
「「うん！」」

シンセイレッドは『フレイムソード』、シンセイブルーは『スプラッシュマグナム』、シンセイイエローは『ボルテックランス』を出

し、ギロンガに立ち向かう。

～～～～～～～～～～

ここは『ネガの世界』、その世界にネオショッカーの旗が掲げられている。
ネオショッカーのアジトにはマトリンティス帝国の１０サイのロボゴーグ、砂漠の使徒のサラマンダー男爵、秘密結社ゲドンの首領・十面鬼ユム・キミルがいる。

「しかし、首領もネオプラネットと組んで世界征服するとはな。」
「私には関係ない、私は下等な人類共を僕にすればそれでかまわん。」
「フフフフ、私も同じ気持ちですよ。」

～～～～～～～～～～

同刻、燃え盛っている町の中に騎士の集団が歩いていた。
その集団が暗黒黒騎士団である。
骨のような鎧を纏っていた２本の槍を持つ騎士・スカルナイト、悪魔のような顔をベースにした兜を被っていた騎士・デモンナイト、騎士の鎧を纏った幽霊・シャドウナイト、牙を剥き出しにして剣がついた盾を持つ騎士・ブラッドナイトが城に向かっている。

「やっと見えたぞ、アルバトロス城。」
「兄貴、あそこに例の物があるんだよな？」
「そうだよ、デモンナイト。　これで我が願望が叶う。　フハハハハハハハハハ・・・」

城からその様子を伺っている5人。
宝石の付いた王冠を被った男・レン・アルバトロス、ティアラを被った少女・エレナ・アルバトロス、青いロングヘアーの少女・泉智恵、赤いショートヘアーの少女・カガリ、緑色のショートヘアーでチョーカーを嵌めている少女・ミドリの5人である。

「エレナ！　逃げるのだ！　カガリ、ミドリ、エレナを頼む！」
「「はい！」」
「お父様！」

3人はレンの元を後にする。

「智恵、君も行きなさい！」
「あなたは？」
「私のことはかまうな！　行きなさい！」

智恵は黙り込むが・・・

「分かりました。」

智恵はエレナ達の所に追う。
レンはマントを脱ぎ捨て、王冠を取る。
そして内ポケットからナイトサバイブのカードデッキを取り出す。

「暗黒黒騎士団め、これ以上の勝手は許さん！」

レンはカードデッキを前に出す。
すると、Vバックルが現れ、レンの腰に巻く。

「変身！」

レンはVバックルにカードデッキを装填する。

そしてレンは仮面ライダーナイトサバイブに変身する。

## VS　網切のギロンガ

「掛かってきやがれ、妖怪！」
「ギロンガって呼べって言っただろうが！！（怒）」

ギロンガはシンセイジャーと対峙する。
シンセイレッドは『フレイムソード』で斬りつけるが、体が硬いためか効き目が薄かった。

「喰らえ！　ギロンガバブル！」

ギロンガはシンセイレッドに泡攻撃する。

「グワアァッ！！」

ギロンガの泡攻撃に倒れるシンセイレッド。

「瑞穂！」
「オッケー！　『ハイドロプレッシャー』！」
「『ジャッジメントサンダー』！」

シンセイブルーとシンセイイエローは『ハイドロプレッシャー』と『ジャッジメントサンダー』でギロンガを攻撃する。

「ガアァッ！？」

後退するギロンガ。

「「いまだ（よ）！」」

「おう！　『バーニングエアスラッシュ』！」

シンセイレッドは『バーニングエアスラッシュ』でギロンガを斬り裂く。

「グワアアアッ！！？」

倒れこむギロンガ。
デカマスターの方は・・・

「ハアァッ！！」

次々とシキやゾビル、ナナシ連中を斬りかかる。
ナナシ連中は弓矢でデカマスターを狙い、撃った。
しかし、全部『ディーソード・ベガ』で弾き返す。

「『ディーソード・ベガ』！　『ベガスラッシュ』！」

デカマスターは『ベガスラッシュ』でシキ、ゾビル、ナナシ連中を次々と斬り倒す。
女性シンケンレッドの方は・・・

「くっ！」
「『モウギュウバズーカ』！」

外道シンケンレッドの『モウギュウバズーカ』の砲弾に怯む女性シンケンレッド。

「まだまだ！」

女性シンケンレッドは『シンケンマル』に『秘伝ディスク』をセットし、回した。
すると、『シンケンマル』が『烈火大斬刀』となった。

「ハアァァァァァァァッ！！！！」

女性シンケンレッドは『烈火大斬刀』で『モウギュウバズーカ』の砲弾を受け流しながら近寄る。

「『烈火大斬刀』！　『百火繚乱』！」

女性シンケンレッドは『百火繚乱』で外道シンケンレッドに斬りつける。
その後、『シンケンマル』に戻る。

「『火炎の舞』！」

女性シンケンレッドは『火炎の舞』で外道シンケンレッドに斬りつける。
外道シンケンレッドは耐えられなかったのか、爆散され、元の姿に戻った。
ダークネスメモリもメモリブレイクされる。
ウルザードファイヤーの方は・・・

「ハハハハハハッ！！」

ウルザードは光の刃を放ち、ウルザードファイヤーを襲う。
ウルザードファイヤーは赤い『ジャガンシールド』で防ぐ。

「！」

ウルザードファイヤーは『ジャガンシールド』を見ると、所々がチョコレートになった。

「チョコレートにして食べてやる。」

「そうはいかん！」

ウルザードファイヤーはウルザードの元に走り出す。

「フン！」

ウルザードは再び光の刃を放つ。

ウルザードファイヤーは『ジャガンシールド』で防ぎながらウルザードに近づく。

「！　ウル・ウガ・・・ぐおぉっ！」

ウルザードが呪文を唱えようとした途端、『ジャガンシールド』に怯む。

ウルザードファイヤーがウルザードの呪文を唱える前に『ジャガンシールド』を投げ、ウルザードを怯ませたのだ。

「マージ・ゴル・ジー・マジカ！　『ブレイジングストームスラッシュ』！」

ウルザードファイヤーは『ブレイジングストームスラッシュ』でウルザードを斬り裂く。

「グアアァァァァァァァッ！！！！」

ウルザードはウルザードファイヤーにより倒れ、爆散される。
そして、ココに戻り、ダークネスメモリがメモリブレイクされた。
ウーザフォンは壊れていなかったが・・・
そして、シンセイジャー・・・

「くっ！　おのれ！」
「「止めだ（よ）！！　スリーウェポン合体！」」」

シンセイジャーは『フレイムソード』、『スプラッシュマグナム』、『ボルテックランス』を合体させ、『トライデントライフル』を完成する。

「「「『トライデントライフル』！　チャージ完了！」」」

『トライデントライフル』の銃口をギロンガに向ける。

「「「『トライデントパニッシャー』！」」」

シンセイジャーは『トライデントパニッシャー』を放つ。

「グゥアァァァァァァァァッ！！！！」

爆散されるギロンガ。
しかしその後、ギロンガの体がヘドロとなり、巨大化した。

「まとめて溶かしてやる！」
「待て！」

ギロンガが見上げると、シンホークとシンホエールとシンユニコーンの姿が映る。

「皆、早く俺達に乗れ！」
「おう！」

シンセイジャーはシンビーストに乗る。

「「「新生合体！」」」

シンホークとシンホエールとシンユニコーンがチョウシンセイに合体する。

「「「「チョウシンセイ！　推参！」」」」

ギロンガはチョウシンセイの元に走り出す。
チョウシンセイも『チョウシンセイバー』を構え、歩みだす。
ギロンガは鋏で攻撃する。
しかし、チョウシンセイは『チョウシンセイバー』で受け止め、押し返す。

「「「「『チョウシンセイバー』！　『ライトニングブレイク』！」」」」

チョウシンセイは『ライトニングブレイク』でギロンガを斬りつける。

「グオッ！？　この野郎！」

ギロンガは泡攻撃でチョウシンセイを襲う。

「「「ウワァッ！」」」

「キャアァッ！」

怯むチョウシンセイ。
しかし、チョウシンセイは再び『チョウシンセイバー』でギロンガを斬り倒す。

「ガァッ！？」

怯むギロンガ。

「「「『チョウシンセイバー』、新生奥義！　『シンセイクリーンヒット』！」」」

チョウシンセイは『シンセイクリーンヒット』でギロンガを斬りつける。

「グワアァァァァァァァァァァッ！！！！」

ギロンガは倒れこみ、爆散される。

## 安田成実の過去

午後7時、成美と明子はレストランで食事を摂っていた。

「明子、真理奈ちゃん達のことが心配なのは分かるけど、もう少し待っててね。　私も一生懸命だから。」

「はい。」

成美はスパゲティ、ポテト、コーヒーを、明子はハンバーグ、オレンジジュースを召し上がった。

「ところでお母様。」

「ん？」

「お母様が妖精界の研究をしたきっかけってなんですか？」

明子は気になることを成美に聞いて見た。

「それはね・・・」

～～～～～～～～

3年前、私の他に石堀彰人君、五島幹久（ごとうみきひさ）君、寒川霧也（かんがわきりや）君がいて、私達4人は仮面ライダー、スーパー戦隊、プリキュアの研究をしている月影博士の知り合い、泉龍三郎（いずみりゅうざぶろう）先生の助手として研究をしているの。

その時の私達はパラレルワールドの研究しかやっていなかったけど、それから3年後、地球に新たな危険がさらされている事を悟った先生はついに、私達も仮面ライダー、スーパー戦隊、プリキュアの研

究を許可してくれたの。

～～～～～～～～

「これがその時の写真。」

成美は明子に写真を見せる。
左から2番目に映っているのは成美である。

「左端のモノクルがかけている男が五島君、右端の若い男が石堀君、右から2番目のメガネを掛けている茶髪の男が寒川君、そして真ん中に立っている身長の高い人が泉先生よ。」

成美は写真に載っている人達を紹介した。

「お母様は泉博士の助手とは仲がいいんですか?」
「えぇ、時にはライバル視する時があったけど、何より親友意識が多いのよ。　でも、最近になって寒川君、私達の前に姿を消したから、どうなっているのか分からないのよね・・・」

成美はコーヒーを飲みながら会話をする。
その会話を聞いていたのは、成美が話していた助手の1人、寒川霧也である。

（違うぞ、成美。　俺はお前達に対する親友意識などない。　お前達には分かるまい、悔しさに涙したあの日々を。）

～～～～～～～～

それは邪悪の神・ブラックホールがプリキュアに倒された後、俺は仮面ライダー、スーパー戦隊、プリキュアの研究を積み重ね、あらゆる悪の勢力に対抗できる力を開発し始めた。
しかし、泉先生は私の発明より3人の発明を採用しておった。
俺の方が優れているというのに、何故あいつらが！

「おのれ！　俺をコケにしおって！　あんな小道具なんかより俺の方が優れてるというのに！　うおおぉぉっ！　成美の大馬鹿野郎！　幹久のヘタレ！　彰人のマヌケ！」

俺は悔しくて怒りがいっぱいだった。
だが・・・

「そうだ、お前の方が才能が優れている。」
「？　だ、誰だ？」

俺は声が聞こえたので辺りを見回した。
その時、突然俺の前から姿を現したのだ。
ネオプラネットの首領・プルト・ハデス様が。

「お前のその才能を存分に使ってみる気はないか？」
「お、俺の才能を？」
「そうだ。　フッフッフッフッフッフッ・・・」

～～～～～～～～～～～～

（あの時から俺は・・・）

その時、霧也の携帯電話から音が鳴る。
霧也は連絡を取る。

「アースロンか？」
『どう、博士。　久々に地球に来た気分は。』
「いつもと変わらん。　それよりこの時間にどうしたのかね？」
『僕はちょっと野暮用ができたから、プルト・ハデス様に遅くなるって伝えてくれないかな？』

アースロンは用事を話す。

「お前が野暮用？　なんだか知らんが、面倒を持ちかけるようなことをするなよ？」
『分かってる。』

～～～～～～～～

連絡を切った。
アースロンは今、宇治原司の姿になっている。
彼は今、ビルの屋上にいる。
宇治原は屋上からダブルフォースプリキュアの戦いを見届けた。
今、彼女達が相手しているのは、ルナドーパントである。

「いった～い！　私ほどじゃないけど、可愛くて強い・・・嫌いじゃないわ！」

ルナドーパントは触手を伸ばし、テンペストたちを襲う。

「ちょっ！　こっち来ないでよ！（汗）」

「絞めてあげるわ！」

ルナドーパントの触手は3人を追いかける。

「ハッ！」

ルナドーパントの触手を斬るブレイズ。

「あぁ！　斬れちゃった！」

「テンペスト！」

ガイアはテンペストに能力強化弾を撃つ。

「よし！　『プリキュア・テンペストドライバー』！」

テンペストは『プリキュア・テンペストドライバー』を放つ。

「いってきま～す！！」

倒れこむルナドーパント。

「ブレイズ！　ガイア！」

「えぇ！」

「うん！」

必殺技の体勢に入るダブルフォース組。

「「「『プリキュア・トライブレスター』！」」」

ダブルフォース組は『プリキュア・トライブレスター』を放つ。

「嫌いじゃないわぁぁぁ

## ネプトユーヌとサタンギラス

次の日の朝、アースロン、ネプトユーヌ、サタンギラスは大空の樹にいた。

「この樹、なかなかいい物ね。　後で別荘を建てようかしら？」
「それができたら俺と同居したいぜ。」
「何でアンタと同居しなきゃいけないのよ？」

ネプトユーヌとサタンギラスは揉めていた。

「やれやれ・・・仲がいいんだか、悪いんだか・・・」

アースロンは2人の揉め事を見て呆れる。

「アースロン様、アースロン様！」

チーズがアースロン達に駆けつけた。

「お、チーズ。　様子はどうだったの？」
「キュアブルームとキュアイーグレットが『ＲＥＢＩＲＴＨ』っていう研究所に行って、何かを開発し始めましたチズよ。」
「やっぱりウラヌシオンに操られたことが気にして手伝いに来たか。よし、ならこっちから行かせて貰おうかな。」

アースロンは宇治原司の姿になって、ガイアドライバーを腰に巻き、デストピアのガイアメモリを取り出した。

【デストピア！】

宇治原はデストピアドーパントに変身した。

～～～～～～～～～

「あ、咲ちゃん、舞ちゃん、おはよう。」
「「おはよう御座います。」」

挨拶し合う成美と咲と舞。

「早速だけど、2人は・・・」

成美は咲と舞に仕事の内容を言おうとした時、警報がなった。

「えっ！？」
「なに！？」
「スナッキー、モニタースイッチオン！」
「キーッ！」

スナッキーは成美の指示でモニターの映像を流した。
映像に映っていたのはデストピアドーパント、ネプトユーヌ、サタンギラス、ラビットホムンクルス、ホークホムンクルスである。
成美は明子に連絡を取る。

「明子、怪人達が現れたわ！」

～～～～～～～～～

「分かりました！」

成美との連絡を切る明子。

「皆さん、怪人がこっちに向かってるみたいです！」

「怪人が！？」

「まだ真理奈さん達が回復しきれてないのに・・・」

うろたえる夏海と静香。

「夏海、静香ちゃん。　まだウチらがおる。」

「そうよ、真理奈ちゃん達は戦えないけど、まだ私達がいるもの！」

友子と愛は夏海と静香に勇気付けた。

「私たちもね。」

遥、麗華、千鶴が入ってきた。

皆は決心する。

「スプロン、フルップ、ニポルン、真理奈さん達をお願い。」

「任せるスプ！」

「はいフル！」

「ニポ！」

ジュエルマスター組とダブルフォース組は出て行った。

～～～～～～～～～～～～

その頃、デストピアドーパントは東宝市の離れた場所にいた。
しかし、ネプトユーヌとサタンギラスがいない。

「ロップ君、エアロンちゃん用心しなよ？　これからは強いのが来るからね。」

デストピアドーパントの言葉に頷くラビットホムンクルスとホークホムンクルス。
その時・・・

「「「「チェインジ・プリキュア・ビートアップ！」」」」

デストピアドーパントが振り向くと、そこにはキュアピーチ、キュアベリー、キュアパイン、キュアパッションがいた。

「ピンクのハートは愛あるしるし！　もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」
「ブルーのハートは希望のしるし！　つみたてフレッシュ、キュアベリー！」
「イエローハートは祈りのしるし！　とれたてフレッシュ、キュアパイン！」
「真っ赤なハートは幸せの証！　熟れたてフレッシュ、キュアパッション！」
「レッツ、「「「プリキュア！」」」」

決め台詞を言うピーチ達。

「また君達か・・・昨日、僕に負けたのに、往生際が悪いよ？　それに用があるのは君たちじゃないんだ。　帰ってよ。」

デストピアドーパントは呆れ気味に言い放つ。

「そうはいかない！」

「そうよ！　ここから先は行かせないわ！」

デストピアドーパントは振り向くと、キュアブラックとキュアホワイト、シャイニールミナスがいた。

「光の使者、キュアブラック！」

「光の使者、キュアホワイト！」

「「ふたりはプリキュア！」」

「闇の力の僕たちよ！」

「とっととお家に帰りなさい！」

決め台詞を言うブラックとホワイト。

「輝く命、シャイニールミナス！　光の心と光の意思、全てを一つにするために！」

決め台詞を言うルミナス。

「うるさいな、君たちにかまっていられるほど暇じゃないんだ。」

デストピアドーパントは再び呆れ気味に言い出す。

「用があるのは私たちのこと？」

デストピアドーパントたちは振り向く。

そこにはジュエルマスター組とダブルフォース組がいた。

「あんたらの好きにはさせへんで！」
「麗華、千鶴！」
「皆！」
「うん（はい）！」

変身する一同。

「母なる月と海の恵み、キュアパール！」
「永久に続く愛の調べ、キュアダイヤモンド！」
「友と提携する絆の証、キュアペリドット！」
「成功に導く旅人の心境、キュアターコイズ！」
「解放する水難の命運、キュアアクアマリン！」
「希望司る風と雷の戦士、キュアテンペスト！」
「勇気司る炎と氷の戦士、キュアブレイズ！」
「慈愛司る地と水の戦士、キュアガイア！」
「「二つの力の戦士！　ダブルフォースプリキュア！」」
「悪しき力に操られ、力に溺れる者よ！」
「私達がいる限り、好きにはさせない！」
「そして、邪悪なる者に狙われし、力無き存在は！」
「「私達が守ってみせる！」」

決め台詞を言うジュエルマスタープリキュアとダブルフォースプリキュア。
その時、上空から水玉が降ってきて、爆発した。

「きゃあ！」
「何なの！？」

プリキュアは上に向く。
そこにはネプトユーヌの姿が。

「初めましてね？　私はネオプラネット・暗黒八惑星の１人、海王星のネプトユーヌ。」

自己紹介するネプトユーヌ。

「いきなり上空から撃って来るなんて卑怯でしょ！？」

ブラックが怒り出す。

「なら下から行かせて貰うぜ？」

声がしたと思うと、突然地面が振動する。
すると、ブラックとホワイトが浮かび上がった。
いや、下からサタンギラスが現れ、ブラックとホワイトを持ち上げたのだ。
サタンギラスはブラックとホワイトを引っ張るように降ろすと、ブラックとホワイトの肩を組み始める。

「アースロンの言ったとおり、地球には可愛い女の子が数え切れないほどいるぜ。」
「いきなりなにすんのよ！？」

ブラックが殴りだす。
しかし、サタンギラスは軽々と回避する。

「ヘッヘヘ・・・怒り出してもますます可愛いな？　ふはは・・・あぁ、俺はネオプラネット・暗黒八惑星の１人、土星のサタンギラスだ。　こんなにいると目移りしちまうぜ。」

プリキュアを囲むデストピアドーパントたち。

## VS　サタンギラス&ネプトユーヌ

ダブルフォースプリキュアとルミナスはデストピアドーパントを、ピーチ、ベリー、パイン、パッションはサタンギラスを、ブラック、ホワイトはネプトユーヌを、ジュエルマスタープリキュアはラビットホムンクルスとホークホムンクルスを対峙した。

「ヤアァッ！！」

パインはサタンギラスに力強いパンチを喰らわせた。
しかし、サタンギラスはそれを受け止め、パインの腹に蹴りを喰らわす。

「キャアァッ！」

吹き飛ばされるパイン。
同時に変身が解除される。

「やっぱすぐに終わっちまったらつまんねぇな。　ハンデをくれてやるぜ。」

サタンギラスが横になる。

「バカにして！」
「あ、ピーチ！」

ピーチはサタンギラスの態度を見て、飛び掛る。
しかし・・・

「フン。」

サタンギラスは尻尾をピーチの足元に出す。

「ウワッ!?」

ピーチはサタンギラスを飛び越えて転んでしまう。

「油断したな?」

サタンギラスは嘲笑う。

「このぉっ（怒）！」

ピーチは怒ってとび蹴りをする。

「そらよ!」

サタンギラスは尻尾でピーチを吹き飛ばす。

「ウワアァッ!!」

ピーチは倒れる。
それと同時に変身が解除される。

「よくも!」

ベリーは蹴り技でサタンギラスに格闘する。
しかし、サタンギラスは軽く避け、ベリーの背後に回り、抱きつき始めた。

「ほ～ぉ、なかなかいい体してるじゃねぇか。」
「や～め～て～よ～！！」
ベリーは強引にサタンギラスから離し、回し蹴りする。
・・・が、サタンギラスはベリーの足を掴み、地面についた片方の足を払う。
「キャッ！」
倒れこむベリー。
サタンギラスはベリーを踏みつける。
「グゥッ！！」
踏みつけられたベリーは変身が解かれてしまう。
「俺達、暗黒八惑星は戦闘のプロの集まりよ。」
「ハッ！」
パッションの蹴りを避けるサタンギラス。
パッションは『パッションハープ』を出す。
「『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』！」
パッションは『プリキュア・ハピネス・ハリケーン』を放つ。
しかし、サタンギラスに何の効果もなかった。
「効かねぇな。」
「そんな・・・！」

「今度はこっちの番だ！」

サタンギラスはメットの下から目を光らせる。
すると、パッションの足元に地割れが発生し、割れた地面がパッションを挟む。

「うっ！？　うぅっ！」

苦しむパッション。

「こいつ・・・まさか大地を操れるの！？」
「そうよ、俺は地形を操るエイリアンだ。」

サタンギラスは地面に手を置く。

「ハッ！」

サタンギラスの手に力を入れると、パッションのいる位置に地面が勢いよく盛り上げる。
パッションはそれで吹き飛ばされ、地面に落ちてしまう。
その後、パッションの変身が解かれてしまう。

「さて、俺はネプトユーヌと合流するか。」

サタンギラスはラブたちを後回しにし、ネプトユーヌの所に向かった。

「ダダダダダダダッ！！」
「ハアァァァァァッ！！」

ブラックとホワイトはネプトユーヌに攻め込むが、ネプトユーヌは簡単に避けてしまう。

「どうしたの？　1回も当たってないわ。」
「はぁ、はぁ・・・ホワイト！」
「うん！」

2人は手を繋ぐ。

「ブラックサンダー！」
「ホワイトサンダー！」

2人の手に黒い雷と白い雷が落ちていく。

「プリキュアの美しき魂が！」
「邪悪な心を打ち砕く！」
「「『プリキュア・マーブル・スクリュー・マックス』！」」

ブラックとホワイトは『プリキュア・マーブル・スクリュー・マックス』を放つ。
しかし、ネプトユーヌは全く効果がなかった。

「えっ！？」
「マーブル・スクリューが効かない！？」

驚きを隠せないブラックとホワイト。

「ウフフフ・・・実を言うと、私は電気に強いのよ。　（まぁ、効かないのはこのスペースアーマーのおかげでもあるけどね。）　さて、私も決めさせてあげようかしら。」

ネプトユーヌが水のシャチになり、ブラックとホワイトを襲う。

「「キャアアアアアアアアッ！！！！」」

ネプトユーヌの水のシャチによる尻尾攻撃に吹き飛ばされるブラックとホワイト。

その後、2人の変身が解かれる。

そしてネプトユーヌは元に戻る。

「サタンギラス、もう終わったの？」

「見ての通りだぜ。」

ネプトユーヌとサタンギラスはアースロンの所に向かった。

## VS　ホムンクルス

一方、ダブルフォースプリキュアとルミナスはデストピアドーパントと対峙するが、苦戦している。

「つ、強い・・・」
「でも、諦めない！」
「うん！」

ダブルフォースプリキュアは立ち上がる。

「そうこなくっちゃ。」

デストピアドーパントはゆっくりと歩み寄る。

「「「「「キャアアアアアアアアッ！！！」」」」」

ジュエルマスタープリキュアはラビットホムンクルスとホークホムンクルスに苦戦された。
デストピアドーパントはその状況を見た。
そして・・・

「ふん！」

デストピアドーパントは矛を地面に叩き、衝撃波を出す。

「「「「「キャアァッ！！」」」」」

テンペストたちはその衝撃波に吹き飛ばされ、倒れこんでしまう。

デストピアドーパントは矛の矢先を突き出し、赤黒い光をテンペストたちを囲む。
すると、テンペストたちが捕縛されてしまう。

「そこで大人しく見物しておくんだね？　ロップ君とエアロンちゃんの実力を。」
「怪人に名前あんの！？」
「僕が考えたのさ。」

テンペスト達とデストピアドーパントはジュエルマスタープリキュアとホムンクルスとの戦いを見届ける。
サタンギラスとネプトユーヌはデストピアドーパントと合流する。

「もう来ちゃったの？　もう少し待っててもいいのに。」
「あっさりやられちゃったから、合流しに来たの。」
「お、こっちにも可愛い女の子がいるじゃねぇか。　エスコートのし甲斐があるぜ。」

サタンギラスはダブルフォース組とルミナスに近寄る。
しかし、デストピアドーパントに止められる。

「ダメだよ、ルミナスはともかく、そこの3人はこの世界のお客さんだ。　この3人にデスリードに伝えて欲しいのさ。『ネオプラネットに勝ち目はない』とね。」

デストピアドーパントはダブルフォース組を見て言う。
その後、デストピアドーパントはジュエルマスター組とホムンクルスに振り向く。

「ハッ！」

「ヤァッ！」

ペリドットとダイヤモンドは2体のホムンクルスに殴りかかる。
ラビットホムンクルスはペリドットのパンチを受け止め、ホークホムンクルスはダイヤモンドのパンチを避ける。
パールとターコイズとアクアマリンはキックで2体のホムンクルスを喰らわす。

「オイオイ、やられてんじゃねぇか？」
「手を貸してもいいわよ？」

サタンギラスとネプトユーヌはデストピアドーパントに振り向く。

「いや、必要ないよ。」

デストピアドーパントは顔を振る。
ラビットホムンクルスとホークホムンクルスは互いの手を繋ぎ、ラビットホムンクルスは手を前にかざし、ホークホムンクルスは手を上にかざした。
すると、周りに光が現れ、ホムンクルスの手に集約する。

「あれは！？」

パール達はホムンクルスの行動を見て、見覚えがあるような表情を見せる。
ホムンクルスは腕を回し、ホムンクルスたちの前に光を作った後、両腕を後ろに下げ、一気に前に出す。
すると、液状のエネルギーが放ち、ジュエルマスター組を襲う。

「危ない！」

ペリドットはバリアを作って、エネルギーを防ぐ。
防ぎ切った後、バリアを解除する。

「はぁ、はぁ・・・皆、今の・・・」
「はい、ブルームとイーグレットのツイン・ストリームです！」

ジュエルマスター組はラビットホムンクルスとホークホムンクルスの技を見て、ブルームとイーグレットの技、『プリキュア・ツイン・ストリーム・スプラッシュ』だと気付く。

「その通り。」

ジュエルマスター組はデストピアドーパントに振り向く。

「ロップ君とエアロンちゃんはキュアブルームとキュアイーグレットの力を錬金術でホムンクルスにしたのさ。」

デストピアドーパントの言葉に驚きを隠せないプリキュア達。

「その力はオーガから渡した物。　僕はその力をこうやって利用したのさ。」

デストピアドーパントは説明した。

## 海王星のネプトユーヌ

デストピアドーパントはガイアドライバーからデストピアのガイアメモリを引き抜き、宇治原の姿に戻る。

「さて、ロップ君、エアロンちゃん。　止めだよ。」

ラビットホムンクルスとホークホムンクルスはジュエルマスタープリキュアに近寄る。

「プリキュア・スターブレイザー！」

突然、ラビットホムンクルスとホークホムンクルスの前に光の炎が襲う。
2体のホムンクルスは後ろに後退する。

「？」

宇治原は上を見上げる。
そこには昨日、アメジストたちと協力し、オーガを倒したキュアコズミックの姿が現れた。

「そこまでよ！」

キュアコズミックは地上に降りる。

「やれやれ、別の世界に行ったかと思ったよ。」
「ほほう？　これはまたいい女じゃねぇか。」
「サタンギラス、ちょっかい出さないの。」

宇治原は呆れ気味に言い出し、サタンギラスは見惚れた表情で言い出し、ネプトユーヌはサタンギラスの頭をコツンと叩きながら言う。

「コズミック、どうして？」
「ちょっと忘れ物をね。　それより、話は聞かせてもらったわ。」

コズミックは宇治原に振り向く。

「なら、ロップ君とエアロンちゃんを倒すことだね。　ロップ君、エアロンちゃん。　相手にしてあげて！」

ラビットホムンクルスはジャンプで、ホークホムンクルスは空を飛んでコズミックを襲う。
コズミックはまず、ホークホムンクルスをとび蹴りで地上に蹴り落とす。
ホークホムンクルスは地上に落とされる。
次にコズミックはラビットホムンクルスが着地する所を狙い、ラビットホムンクルスの足を払う。
ラビットホムンクルスは後ろに倒れこむ。

「ほ～ぉ、やるじゃねぇか。」
「相当経験積んでるわね。」

サタンギラスとネプトユーヌは感想を述べる。
ラビットホムンクルスとホークホムンクルスは立ち上がり、互いの手を繋ぐ。

「こっちも！」

コズミックの胸のタリスマンが光り始める。
ラビットホムンクルスとホークホムンクルスはツイン・ストリームを放つ。

「『プリキュア・コズモブラスター』！」

コズミックは『プリキュア・コズモブラスター』を放つ。
相殺し始めるが、だんだん『プリキュア・コズモブラスター』に押され、ラビットホムンクルスとホークホムンクルスが消えてしまう。
それと同時にプリキュアの力がパールの元に転がる。

「取り戻せた！」
「これで伝説の戦士が全員揃ったね。」

ジュエルマスタープリキュアが喜ぶ。
しかし、コズミックは喜ばず、宇治原に振り向く。

「私が相手にするわ。」

ネプトユーヌが宇治原の前に立ち、コズミックを見つめる。

「人の事言えた義理じゃないけど、いきなり上空から炎を放ってくるなんて。　お仕置きしてあげようかしら。」

ネプトユーヌの『スペースアーマー』からエネルギーを放出して、そのエネルギーを圧縮し始めた。

「これ以上の勝手はさせない！」

コズミックの胸のタリスマンが光り出す。

「『シーパワー・クイーンズ・アロー』！」
ネプトユーヌは水の巨大な槍を放つ。
「『プリキュア・コズモブラスター』！」
コズミックは『プリキュア・コズモブラスター』を放つ。
しかし、コズミックがネプトユーヌの技に押され、『シーパワー・クイーンズ・アロー』に喰らわされる。
「キャアァァァァァァァァァァッ！！！！！」
コズミックは倒れ、変身が解かれてしまう。
「まさか！？」
「キュアコズミックを一撃で！？」
「そんなアホな！？」
驚きを隠せないジュエルマスタープリキュア。
驚いたのはジュエルマスター組だけではなく、ダブルフォース組も驚きを隠せなかった。
「オーガと互角に渡り合ったコズミックを簡単に倒されるなんて・・・一体誰があんな鎧を・・・」
ターコイズは冷や汗を掻きながら言い出す。
『俺だよ。』
「えっ！？」

プリキュア達は見上げると小型の飛行船があった。
その飛行船に乗っているのは寒川霧也だ。

「あの人は写真の！」
「俺が作ったんだよ、この『スペースアーマー』は。　仮面ライダー、スーパー戦隊、プリキュアを対抗できる無敵の鎧をな。」

寒川は『スペースアーマー』を作ったのは自分だと言う。

「どうしてそんなことを!?」
「まだ分からんのか？　俺はネオプラネットの仲間なんだよ。」

寒川の言葉に驚きを隠せないプリキュア達。

「泉博士の下で研究した科学者がネオプラネットと!?」
「だから、デストピアのメモリやパラレルメモリがアースロンの手にあるんやな。」
「明子君、成美には世話になったね。　おかげで成美の発明を見ることができたよ。　そして俺は確信した。　成美や幹久、そして彰人よりも俺の頭脳が遥かに優れているとね。　今ここで証明されるだろう。　プリキュアの最期という形でな。」

寒川はプリキュアに言い放つ。
その時・・・

「博士、最期だなんて人聞き悪いぜ?」
「そうよ、こんな簡単に倒されちゃつまらないわよ?」
「それに僕が倒したいのは彼女達じゃないからね。　帰らせてもらうよ。」

3人は呆れた表情で言い出す。

「ふん、『スペースアーマー』に守られているからと言っていい気になりやがって。　まぁいい。　そこまで言うなら俺は何も言わん。」

寒川が乗っている飛行船でどこかに去って行った。

「ダブルフォースプリキュア、念のためもう一度言うよ。　ダークエンジェルスに伝えなよ。　『ネオプラネットに勝ち目はない』とね。」

宇治原は指で切るような動作をすると、赤黒い光が消える。
そして、キュアガイアに近づく。

「じゃ、また会おうね。」

宇治原はガイアの唇を交わした。

「〜〜〜〜／／／／／／／／!?」
「「エェェェェェ!?」」

宇治原はすぐに離し、アースロンとなって飛び去っていく。

「じゃあな、プリキュア。」

サタンギラスも背中からプテラノドンの翼を出し、飛び去っていく。

「せっかくだからこれだけは伝えてあげるわ。　ネオプラネットは

今、ネオショッカー、暗黒騎士団、獣忍、時空鬼と手を組んだわよ。」

「そんなに！？」

「地獄衆やエンドレスだけじゃなく！？」

驚くジュエルマスター組。

「確かに伝えたわよ。　じゃあね。」

ネプトユーヌは水のシャチとなり、どこかに去って行った。

## 2つの新形態

2日後、アースロンは寒川の呼び出しで研究室にいた。

「アースロン、新しく作った物だ。」

寒川はルーレット状のドライバーを渡した。

「これは？」

「『トリプルドライバー』。　3つのガイアメモリを装填すればダブル以上の力を発揮できる。　一本だけでも変身することができる。」

寒川はアースロンに渡したドライバーを『トリプルドライバー』と名付ける。

「成る程ね。　でもダークネスメモリとデストピアメモリは取っておきたいからパラレルが基準だね。」

その時、モニターからプルト・ハデスが映像に出る。

「アースロン。」

「プルト・ハデス様。」

「地球の方はどうなっている？」

「はい、別の世界から来たダブルフォースプリキュアとキュアコズミックがジュエルマスタープリキュアと協力しておられます。」

アースロンはダブルフォース組とキュアコズミックの事を伝えた。

「キュアコズミックか。　確か奴の世界はダークエンジェルスにリセットされたと聞いたが？」
「はい、彼女は今、各世界にイレースキャンセラーを配り始めているとか。」
アースロンとプルト・ハデスはキュアコズミックについて話した。
「まあいい、どの道全世界の者共はすべてネオプラネットの奴隷になる。　それに奴は今頃イレースキャンセラーを渡している頃のはずだ。」
プルト・ハデスは気が済んだように言い出す。
「アースロン！　明日の朝、暗黒黒騎士団の所へ行け！　奴らは例の物を手に入れたようだ。」
「はっ！」
アースロンはプルト・ハデスの命令を聞く。
その後、アースロンは『生命の間』に戻る。
扉の先にはネプトユーヌがいた。
「なんだ、もうお邪魔したのか。」
「聞きたいことがあってね。　あの時、なんでキュアガイアにキスしたの？」
ネプトユーヌはアースロンに聞く。
「それを聞いてどうするんだい？」
「よかったら、あなたと結婚してあの子を養子として迎え入れてあげようと思ってね。」

アースロンはネプトユーヌの言葉を聞いて、当然呆れた表情になる。

「僕は昔、ヴィンラスに口付けされたことがあってね。　真似してやったのさ。　それに僕は気に入った子にしか相手にしない。　ただ気を遣っただけだよ。」

アースロンは言いたいことを言い出す。

「あら、そうなの？　私はてっきり、地球は陸と海しかないから、大地と水と重なっていたため、キュアガイアと付き合おうと考えたのかと思ったわ。　気になって損しちゃった。」

「僕がそんな変な趣味持つわけないだろ？」

アースロンはネプトユーヌの言葉に呆れる。

「兎に角、僕は明日、暗黒黒騎士団の所に向かうから、この世界の面倒を見といてね。」

アースロンは玉座の裏に向かう。

「アースロンが地球人に気を遣うなんて。　変な男。」

～～～～～～～～～～

一方、『ＲＥＢＩＲＴＨ』の方は・・・

「４人とも、気分はどう？」

真理奈、忍美、安美、勇奈は『ＲＥＢＩＲＴＨ』の医療ベッドで完治していた。

「はい、すっきりしました！」

「もう動けます。」

「でも驚いたよ。　勇奈さんがまたこの世界に来るなんて。」

「渡す物を渡し損ねたからね。」

勇奈は真理奈に何かを渡した。

「なんですか、これ？」

「イレースキャンセラー。　これを世界に埋め込めばラグナロクストーンの闇の力を無力化することができるわ。」

「つまり、ダークエンジェルスの企みが最小限に食い止めることができるんですね。」

勇奈はイレースキャンセラーについて説明した。

「夏海から聞いたんやけど、ダークエンジェルスが世界のリセットを考えとるやなんて。」

「そんなこと絶対させないよ！」

「頑張りましょう。」

意気投合する友子と愛と静香。

「ところでお母様、研究室で何を開発していたんですか？」

明子は成美に質問する。

「あ、そうだ。　教えてあげないと。　スナッキー！」

「キーッ！」

スナッキーは成美の合図でボタンを押す。
すると、机の真ん中にゲートのように開き、そこからケースのようなアイテムが出てきた。

「真理奈ちゃんと忍美ちゃんと安美ちゃんのために作った変身アイテム、『キュアピュータ』よ。」

成美はそのアイテムを『キュアピュータ』と名付ける。

「変身した時の姿は前と同じだけど、トパーズ、ガーネット、オパールの進化形態を付け加えているわ。」
「「「進化形態？」」」
「スナッキー！」
「キーッ！」

スナッキーは成美の合図で映像を映す。
その映像はキュアトパーズとキュアガーネットとキュアオパールの新たな姿で、２つの形態がある。
右図の方はスーパーシルエットとキュアブライトとキュアウインディの容姿とトパーズ、ガーネット、オパールの姿が合体した姿。
左図の方は両肩、胸の部分に宝石が取り付けられ、キュアブラック・スープリキュアの姿とトパーズ、ガーネット、オパールの姿が合体した姿である。

「右の方はミラクルプリキュア、左の方はスペシャルプリキュア。
両方とも『スペースアーマー』の能力では無効にできなくなる力を発揮できるわ。」

成美は右図の新形態をミラクルプリキュア、左図の新形態をスペシャルプリキュアと名付ける。

「ミラクルプリキュアはエネルギー消耗が激しいけど、その力はシャイニングドリームやキュアエンジェルを凌ぐほどよ。　スペシャルプリキュアは1人につき3つのパワーストーンの力を持ち合わせていて、宇宙空間でも移動できるようになってるわ。」

成美は2つの新形態について説明した。

「凄い！」

「流石は『ＲＥＢＩＲＴＨ』の代表！」

「これならウラヌシオンたちと互角に渡り合えますね。」

ダブルフォース組は素晴らしいと思ったのか驚きを隠せなかった。

「えぇ。　でも問題があるの。」

「「「「「「「「「「「「「「え？」」」」」」」」」」」」」」

真理奈達は成美の言葉に反応する。

「この2つの形態に変身するには鍵が必要なの。」

「鍵？」

夏海は成美の意味深な発言を聞く。

「ミラクルプリキュアは6組のプリキュアチームの内2組の最強形態に変身した姿を描いたカードがないと変身できないの。　そしてスペシャルプリキュアに変身できる鍵は和夢ちゃんを含めて6人、あなたたちなの。」

「「「「「えっ？」」」」」

夏海と友子と愛と明子と静香は成美の言葉を聞いて、ハテナになる。

成美は詳しく説明した。

「キュアトパーズとキュアガーネットとキュアオパールがスペシャルプリキュアになるには、あなた達6人が息を合わさないと変身できないの。　左図を見て分かるでしょ？　両肩と胸に宝石があることを。」

成美はスペシャルプリキュアの図を見て言う。

「そこで私は今からあなた達の息を合わせるために特訓システムを作ることにしたの。　勿論和夢ちゃんも参加させるから。　明後日もう一度ここに来て。」

「「「「「・・・はい。」」」」」

5人はキョトンとしながら返事した。

～～～～～～～～～～

「ミラクルプリキュアになるには、シャイニングドリームやスーパーシルエットのような最強形態のカードが必要か・・・」

「なんだか難しそうね・・・」

真理奈と忍美と安美、遥と麗華と千鶴はブルームとイーグレットの力を咲と舞に渡す為、海原市に向かった。

その時、爆発音が鳴り響く。

「なに！？」
「行ってみよう！」
真理奈達は爆発音がした所に駆けつけた。
～～～～～～～～～～
「うっ！」
駅前で倒れこんでいたのはキュアアメジストである。
アメジストの相手は白い翼と黒い翼を持つ鳥のような怪人・ウイングドーパントと長い爪を持つ怪人・クロードーパントとユートピアドーパントである。
「この！　『プリキュア・アメジストマジック』！」
アメジストはユートピアドーパントに『プリキュア・アメジストマジック』を放つ。
しかし、ユートピアドーパントは『理想郷の杖』で『プリキュア・アメジストマジック』を弾き返し、アメジストにダメージを与える。
「ウアアアァッ！！」
アメジストは自らの技に倒れてしまう。
「やめなさい！」
ドーパント達は振り向く。
そこには真理奈達が駆けつけてきた。

「「「ジュエルスパークハリケーン！」」」
「「「プリキュア！　フォース・イクイップ！」」」
真理奈達はプリキュアに変身する。
「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」
「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」
「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」
「「「ジュエルマスタープリキュア！」」」
「私達がここにいる限り！」
「あなた達の年貢は納め時よ！」
「そして、これまでの自然の怒り、全てを倍にして返してあげるわ！」
「希望司る風と雷の戦士、キュアテンペスト！」
「勇気司る炎と氷の戦士、キュアブレイズ！」
「慈愛司る地と水の戦士、キュアガイア！」
「「「二つの力の戦士、ダブルフォースプリキュア！」」」
「悪しき力に操られ、力に溺れる者よ！」
「私達がいる限り、好きにはさせない！」
「そして、邪悪なる者に狙われし、力無き存在は！」
「「「私達が守ってみせる！」」」
決め台詞を言うジュエルマスター組とダブルフォース組。
「アメジスト！」
トパーズ達がアメジストの元に駆けつける。
「大丈夫？」

「何があったの？」
「知らない、パラレルシップでこの世界に来る途中襲ってきたの。」
事情を話すアメジスト。
「アメジスト。」
「え？」
アメジストはガイアを見る。
「アーッ！　キュアガイア！　何でここに！？　ってそんなこと言ってる場合じゃない。　今はこいつらを！」
アメジストは話を戻し、ドーパントの方に振り向いた。
そして7人のプリキュアはドーパントと対峙する。
～～～～～～～～～～
その頃、ソラはアカツキに変身して、ウェザードーパントとナスカドーパントと対峙する。
「埒が明かないわね！」
その時、ウェザードーパントの後ろから誰かに蹴り飛ばされる。
それをやったのは来斗である。
「ソラちゃん、大丈夫かい？」
「来斗！」

来斗はロストドライバーを腰に巻き、ファングのガイアメモリのスイッチを押す。

【ファング！】

「変身！」

来斗はガイアメモリをロストドライバーにセットする。
そして、来斗は仮面ライダーファングに変身する。

「お前達は、もう僕の牙からは逃げられない！」

決め台詞を言うファング。

「行くよ、ソラちゃん！」
「えぇ！」

ファングとアカツキはウェザードーパントとナスカドーパントと対峙する。

# 敵は仮面ライダー！？

ガーネットとブレイズはウイングドーパントを、オパールとテンペストはクロードーパントを、トパーズとアメジストとガイアはユートピアドーパントと対峙した。

「ヤッ！」
「フッ！」

ガーネットはブーメラン、ブレイズはブレイズソードでウイングドーパントを斬り付ける。
しかし、ウイングドーパントの翼が硬く、ダメージを受けなかった。

「こいつ、あのバカ将軍程じゃないけど、かなり硬いわね。」
「えぇ。」

ガーネットとブレイズはウイングドーパントを倒すのに苦労している。
一方・・・

「おりゃーっ！」
「ヤアァッ！」

オパールとテンペストはクロードーパントに殴りかかる。
しかし、クロードーパントの軽快なステップで避け続ける。

「あぁもう！　ちょこまかと！」
「思ったより速いね！」

こちらも苦労している。
しかし、トパーズ達はそれ以上に苦労している。

「「「キャアァッ！」」」

トパーズとアメジストとガイアはユートピアドーパントの『理想郷の杖』で倒れこむ。

「くっ、ならこれはどう！？」

しかし、アメジストは立ち上がり、サポートカードを『ジュエルコミューン』に読み込ませる。
よってダークプリキュア５が現れる。

「えっ！？」
「ダークプリキュア５！？」

トパーズとガイアは今の光景を見て驚く。

「みんな！」

アメジストの言葉に頷くダークプリキュア５。
そしてアメジストは『アメジストバトン』を真上に上げる。
ダークプリキュア５も手を『アメジストバトン』に掲げる。

「光と闇が１つになる時！」
「「「「「正しき力が悪を討つ！」」」」」
「「「「「『プリキュア・シャイニングダークネス・マジカルフォース』！」」」」」

アメジストとダークプリキュア5は『プリキュア・シャイニングダークネス・マジカルフォース』を放つ。
そして、ユートピアドーパントに命中。
その後、ダークプリキュア5が消えていく。

「凄い。」
（ダークドリームにこの事を聞いたら驚くだろうな・・・）

トパーズとガイアは感激する。

「どう?」

アメジストは様子を見る。
しかし、ユートピアドーパントはまだ立っている。

「「えっ!?」」
「アレを喰らって立てるの!?」

トパーズとガイアとアメジストは驚きを隠せなかった。
その様子を伺っている者がいた。

「ユートピアも凄いけど、他の2体のドーパントもやるじゃん。」

その者は赤いショートヘアーで2本の角を持つ女性である。

「でも、やっぱり強いのはライダーかな?」

2本角の女性はメモリを取り出す。
しかし、財団Xが作ったメモリとは違い、仮面ライダーの絵が描かれていた。

【龍騎！】

２本角の女性はメモリを胸に差し込む。
すると、その女性が仮面ライダー龍騎となる。
龍騎はアドベントカードをドラグバイザーに装填する。

【アドベント！】

すると、どこからかドラグレッダーが現れる。

「えっ！？」
「ミラーモンスター！？」

驚きを隠せないプリキュア達。
ドラグレッダーは火炎弾を放つ。

「ウワッ！」
「危ない！」

【ソードベント！】

「えっ！？」

ブレイズは電子音を聞いて振り向く。
その先には龍騎が『ドラグセイバー』を持って、ブレイズを襲い掛かる。

「龍騎！？」

ブレイズはブレイズソードで対抗する。
その様子を羊のような角の男性が見届けていた。

「やってるね。　僕もやろうかな？」

【カブト！】

羊角の男性がメモリを額に差し込む。
すると、その男性が仮面ライダーカブトとなる。

「クロックアップ！」

【クロックアップ！】

カブトはクロックアップで高速移動し、テンペストを襲う。

「キャッ！？　うぅっ！？」
「テンペスト！？」

【クロックオーバー！】

テンペストが倒れこむと、近くにカブトの姿が現す。

「グッモーニ～ン♪」
「今度はカブト！？」

テンペストはカブトを見て驚く。

「どういうこと！？」

トパーズ達も驚きを隠せなかった。

「ネオプラネットに気を取られすぎたということだよ。」

トパーズ達の前に牛のような角を持つ男性が現れる。

【響鬼！】

その男は首にメモリを差し込み、仮面ライダー響鬼となる。

「響鬼！？」

「ネプトユーヌからの忠告聞いてなかったの？　ダブルフォースプリキュア。」

ジュエルマスタープリキュアとダブルフォースプリキュアの周りにはユートピアドーパント、ウイングドーパント、クロードーパント、ドラグレッダー、龍騎、カブト、響鬼に囲まれている。

～～～～～～～～

その頃、ファングとアカツキはウェザードーパントとナスカドーパントを追い詰める。

「来斗、こいつらを片付けた後、東宝市に行くわよ！」

「なら、さっさと決めようかな。」

ファングはガイアメモリをマキシマムスロットに差し込む。

【ファング！　マキシマムドライブ！】

アカツキは『ゴールドキー』を『シャイニングサーベル』を差し込む。

「『ファングストライザー』！」
「『イリュージョン・シュート』！」

ファングはナスカドーパントに『ファングストライザー』を使う。
アカツキはウェザードーパントに『イリュージョン・シュート』を放つ。
2人の必殺技を受けた2体のドーパントは爆散された。

「行くわよ。」
「うん。」

アカツキとファングは『ゴルドマッシャー』に乗り、東宝市に向かった。

**時空鬼について**

【ストライクベント！】

龍騎は『ドラグクロー』を召喚する。

「ハッ！」

そして、龍騎は『ドラグクローファイヤー』を放つ。

「キャアァッ！！」

ブレイズは『ドラグクローファイヤー』を受け、吹き飛ばされる。

【1、2、3！】

「『ライダーキック』！」

【ライダーキック！】

カブトは『ライダーキック』でテンペストを蹴り飛ばす。

「アアアァッ！！」

テンペストはカブトの『ライダーキック』により倒れる。

「燃えちゃいなよ。　フッ！」

響鬼は『鬼法術　鬼火』を放つ。

「危ない！」

トパーズはバリアを張ってアメジストとガイアを守る。
しかし・・・

「「「キャァッ！？」」」

横から吹き飛ばされる。
その正体はユートピアドーパントだ。

「強力な敵ばっかり！」
「厄介だね。」

ガーネットはウイングドーパントに肩を掴まされ、地面に引きずり始めた。

「アァッ！　グゥッ！」

オパールはクロードーパントの爪に切り裂かれてしまう。

「キャアァッ！！」

ガーネットとオパールを追い詰めるウイングドーパントとクロードーパント。
その時・・・

「『ファングストライザー』！」
「『メガ・スラッシュ』！」

オパールの前にファングが、ガーネットの前にアカツキが現れ、クロードーパントに『ファングストライザー』を、ウイングドーパントに『メガ・スラッシュ』を使い、爆散させる。

「来斗さん！」
「ソラさん！」

ガーネットとオパールはファングとアカツキが来たことに歓喜する。

「2人とも、危ないトコだったね。」
「ライダー擬きは私たちに任せて。　あなた達はあのドーパントを。」

ガーネットとオパールとテンペストとブレイズはアカツキの言う通りにしてトパーズ達と合流する。

「俺達が擬きだとよ？」
「酷い言い方。」
「切り裂いてあげるわ。」

ファングとアカツキは龍騎、カブト、響鬼と対峙する。
ガーネットたちもトパーズ達と合流し、ユートピアドーパントと対峙する。

「咲と舞にプリキュアの力を贈らないといけないのに。」
「何か方法ないの？」

プリキュアは話し合う。

「こうなったら、一か八か。　至近距離でのアメジストマジックで

奴の気を逸らしている間に、トパーズ達が必殺技を決める。」

アメジストはトパーズ達に大胆な戦法を伝える。

「そんなことしたら！」

「大丈夫だよ、私は何者だと思ってるの？　幻想サーカス団のマジシャンだよ？　簡単に脱出してやるさ。」

アメジストの本気の顔でトパーズ達を見る。

「・・・わかった、任せるよ。」

「トパーズ、本当に！？」

「うん、賭けてみよう。」

プリキュアはユートピアドーパントを見る。

そして、アメジストはユートピアドーパントに向けて走り出す。

「『プリキュア・アメジストマジック！』」

アメジストは『プリキュア・アメジストマジック』を使う。

しかし、ユートピアドーパントの『理想郷の杖』に止められる。

「いまだよ！」

アメジストの合図に構えを取るトパーズ達とテンペスト達。

「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！」

「『プリキュア・トライブレスター』！」

ジュエルマスタープリキュアは『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』を、ダブルフォースプリキュアは『プリキュア・トライブレスター』を放つ。
よってユートピアドーパントは消滅される。

「アメジスト！」

ガイアは走り出す。

「ここだよ。」

ガイア達は振り向くと、看板の裏からアメジストが出てきた。

「いつの間に！？」
「流石は手品師。」

何はともあれ、アメジストが無事だと知り、安心するプリキュア達。

「やられたみたいだな。」
「仕方ないわね、ひとまず退きましょうか。」
「だね。」

響鬼たちはユートピアドーパントが倒されたことを確認する。
そして、響鬼たちはメモリを体内から引き抜く。

「俺は土鬼（どき）だ。」
「私は炎鬼（えんき）よ。」
「ハ～イ、僕は風鬼（ふうき）だよ。」

2本角の女は炎鬼、羊角の男は風鬼、牛角の男は土鬼と名乗る。

「覚えておけ。」

土鬼の横から次元のオーロラが現れる。
そして、そのオーロラは土鬼たちを包み、消えていく。

～～～～～～～～～

「へぇ～、千鶴と和夢ってそんなことがあったんだ。」
「最近会ってなかったから、少しは成長したかなと思ったんだけどね。　あの時は自分の能力を制御できなかった頃の素人だったから。」
（素人って・・・）
和夢と千鶴は2人が初めて会った時の事を話した。

「でも和夢、私が見ない内に友達出来てよかったね。」
「べ、別に友達ってわけじゃ・・・」

和夢は少し照れていた。
安美は和夢の肩に軽く押す。

「何すんのさ!?」

和夢は安美の頬をつねる。

「みんな、ちょっといい?」

ソラは7人のプリキュアの話に割り込む。

「和夢、あのライダー擬き、恐らく時空鬼よ。」

ダブルフォース組は時空鬼という言葉を聞いて反応する。

何しろ、ネプトユーヌから時空鬼と手を組んだと聞いていたから。

「何者なんですか？」

「時空鬼は５０を超える世界を駆け巡って、人々から金や食べ物を強奪し、苦しめている鬼集団よ。　鬼達は１０人いて、ライダーメモリを使って仮面ライダーまで苦しめたみたいよ。」

「そんなことが・・・」

ソラは時空鬼について話した。

「ライダーの姿を借りていろんな人を苦しめるなんて許せない！」

テンペストは今の話を聞いて怒り出す。

## 輝く金の花と煌めく銀の翼

海原市ではハートキャッチ組、５ｇｏｇｏ組が天王星のウラヌシオンと対峙している。

「愚かな小娘共だ。『パーフェクトな強さを誇る偉大なるネオプラネットの幹部、暗黒八惑星の１人、ビューティーにかっこいい天王星のウラヌシオン様』に歯向かうとはな。」

「呼び名が長すぎるわよ！」

ウラヌシオンの呼び名にツッこむルージュ。

「咲さんや舞さんを操って悪行を行うなんて！　私、堪忍袋の緒が切れました！」

ブロッサムはウラヌシオンに怒りを見せる。

「フン、口だけは達者だな。　根性だけは褒めてやろう。　だが、この俺を身に纏った『スペースアーマー』の恐ろしさ、咲と舞から聞いて分かったろう？」

「どんなに恐ろしい武器を持ってしても、絶対に諦めない！　みんな、いくよ！」

「「「「「ＹＥＳ！」」」」」

ドリーム達はウラヌシオンに攻撃する。

「遅い、遅すぎる！　スピードとはこういうことを言うのだ！」

ウラヌシオンは猛スピードでドリーム達を反撃する。

「「「「「「「キャアアアアアアアアアアアッ！！！！！」」」」」」」

ドリーム達はウラヌシオンの攻撃によって倒れこみ、変身が解かれる。

「のぞみ、りん、うらら！」
「こまちさん、かれんさん、ミルク！」

のぞみ達のところに駆けつける咲と舞。

「フフフフ、我が『スペースアーマー』に敵なし！」

嘲笑うウラヌシオン。

「大丈夫、みんな？」
「う、うん・・・」
「よくものぞみ達を！」

怒りを露わにする咲。

「ほざけほざけ。　お前達はそこでブロッサム達がやられる所を見届けるがいい。」
「やめて、ウラヌシオン！」
「違う、違う。　俺の事は『パーフェクトの強さを誇る偉大なるネオプラネットの幹部、暗黒八惑星の1人、ビューティーにかっこいい天王星のウラヌシオン様』と呼べ。」

ウラヌシオンはブロッサム達のところに向かう。

「さぁ、今度はお前達だ。」

身構えるハートキャッチ組。

「「「待ちなさい！」」」

ウラヌシオンとハートキャッチ組は声がした方に振り向く。

そこには真理奈と忍美と安美がいる。

「咲、舞！　あなた達の力よ！」

忍美は2つのプリキュアの力を咲と舞に向けて投げる。

2人はそれを受け取る。

「「ありがとう！」」

礼を言う咲と舞。

「ふん、くたばり底ないの小娘が。　わざわざやられに来たのか？」

「違う！　私達は負けに来たんじゃないわ！」

「それに私達はもう、あの時の私たちじゃない！」

「絶対に負けないんだから！」

真理奈と忍美と安美は『キュアピュータ』を取り出す。

「「「ジュエルスパークハリケーン！」」」

3人はジュエルマスタープリキュアに変身する。

「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」
「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」
「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」
「「「ジュエルマスタープリキュア！」」」
「私達がここにいる限り！」
「あなたの年貢は納め時よ！」
「そしてこれまでの自然の怒り、全てを倍にして返してあげるわ！」

決め台詞を言うトパーズ達。

「舞、私達も！」
「うん！」

咲と舞はプリキュアの力を体の中に入れる。
すると懐かしい声が・・・

「咲、会いたかったラピ！」
「舞！」
「やっと会えたね、フラッピ！」
「お帰りなさい、チョッピ。」

その声の正体はフラッピとチョッピである。

「よ～し、２人とも！」
「変身するチョピ！」

フラッピとチョッピは『クリスタルコミューン』となる。
そして・・・

「「デュアル・スピリチュアル・パワー！」」

「花開け大地に！」
「羽ばたけ空に！」

咲と舞はキュアブルームとキュアイーグレットに変身する。

「輝く金の花、キュアブルーム！」
「煌めく銀の翼、キュアイーグレット！」
「「ふたりはプリキュア！」」
「聖なる泉を汚す者よ！」
「アコギな真似はおやめなさい！」

決め台詞を言うブルームとイーグレット。

「何人集まろうと同じことだ。　ダブルフォースはどうした？　敵わないと思って尻尾巻いて逃げ出したか？」
「逃げたんじゃないわ！　あなたに構っていられないだけよ！」
（なんて、あの3人はソラさんと和夢と一緒にパラレルシップの修理で遅くなるなんて言えるわけないわよね・・・）
「まぁいい、もう一度あの時のように痛い目に合わせてくれるわ。」

ウラヌシオンは余裕を持って言い出す。

「いくよ、ガーネット、オパール！」
「「うん！」」
「イーグレット！」
「うん！」
「ブロッサム、マリン、サンシャイン！」
「「はい！」」
「やるっしゅ！」

ジュエルマスター組、スプラッシュスター組、ハートキャッチ組は身構える。

## 新たな力、ミラクルプリキュア

プリキュア達はウラヌシオンと対峙するが、ウラヌシオンのスピード戦法の前では手も足も出ない。
避けるだけで精一杯だった。

「ふん、逃げてばかりだな。　だが、お前達の粘りもそこまでだ！」

ウラヌシオンはエネルギーを放出し始める。

「『エアエナジーショット！』」

ウラヌシオンは『エアエナジーショット』を放つ。

「「「ハッ！」」」

トパーズはバリアを張り、ガーネットとオパールは超能力でバリアを強化する。

「「「ハァッ！」」」

ブルームとイーグレットもバリアを作り、トパーズのバリアを重ねる。

「『サンフラワー・イージス』！」
「『ムーンライト・リフレクション』！」

サンシャインとムーンライトも『サンフラワーイージス』と『ムーンライト・リフレクション』でバリアを重ねる。

『エアエナジーショット』は7人が作ったバリアにより防がれる。

「ムムッ？」
「あんたには絶対負けない！」
「咲と舞を操って、戦わせるなんて・・・」
「絶対に許さないんだから！！」

『エアエナジーショット』が跳ね返され、ウラヌシオンに向かう。

「チッ！」

ウラヌシオンはそれを避ける。
その時、トパーズとガーネットとオパールの前にカードが現れる。
そのカードはスーパーシルエットが描かれていたカードとブライティブルームとウィンディイーグレットが描かれていたカード、そして虹色の風を纏った黄金の宝石が描かれていたカードである。

「スーパーシルエットにブライティブルームとウィンディイーグレット！」
「そのカードはもしかして！」

3人は宝石のカードを見て気付く。
このカードはミラクルプリキュアに変身するのに必要なカードだと。

「これで鍵が揃った！　いくよ、ガーネット、オパール！」
「「オッケー！」」

トパーズとガーネットとオパールは黄金の宝石のカードを『キュアピューター』に読み込ませる。

「「「ジュエルミラクルハリケーン！」」」

トパーズとガーネットとオパールの周りに黄金の粒を纏った虹色の風を纏う。

すると、3人はミラクルプリキュアに変身した。

「未来を作る自らの意思、ミラクルキュアトパーズ！」

「奇跡を呼び起こす心の力、ミラクルキュアガーネット！」

「透き通る眩き希望、ミラクルキュアオパール！」

「「「ジュエルマスター・ミラクルプリキュア！」」」

「私達がここにいる限り！」

「あなた達の年貢は納め時よ！」

「そしてこれまでの自然の怒り、全てを倍にして返してあげるわ！」

トパーズとガーネットとオパールはその姿をジュエルマスター・ミラクルプリキュアと名づける。

「更に！」

ガーネットはスーパーシルエットのカードを、オパールはブライティブルームとウィンディイーグレットのカードを『キュアピュータ』に読み込ませる。

すると、ハートキャッチ組はスーパーシルエットに変身し、ブルームはブライティブルーム、イーグレットはウィンディイーグレットに変身する。

「オォ～！！」

「凄いです！」

「絶好調ナリ！」

「凄い！」

「これもパワーストーンの力なのかな？」

5人は今の姿を見て興奮する。

「今はあいつを倒すことを考えなさい！」

「「「「「は、はい！」」」」」

ムーンライトは5人を叱咤する。

「覚悟しなさい、ウラヌシオン！」

「違うな。　いいか、小娘共？　俺を呼ぶときは『パーフェクトな強さを誇る偉大なる』・・・ん？」

ウラヌシオンは自分の呼び名を伝えるが、プリキュアはすでに必殺技の構えに入っている。

「精霊の光よ！　命の輝きよ！」

「希望へ導け！　二つの心！」

「「『プリキュア・スパイラル・ハート・スプラッシュ』！」」

ブライティブルームとウィンディイーグレットは『プリキュア・スパイラル・ハート・スプラッシュ』を放つ。

「「「「花よ咲き誇れ！　『プリキュア・ハートキャッチ・オーケストラ』！」」」」

スーパーシルエットは『プリキュア・ハートキャッチ・オーケストラ』を放つ。

トパーズとガーネットとオパールは手を上に掲げ、光を収束する。

「地球（ほし）を脅かし、傷つくものよ！」
「「聖なる力が悪を討つ！」」

トパーズは両腕を、ガーネットは右腕を、オパールは左腕を下げる。

「「「「『プリキュア・ミラクルパワー・ジュエルフォース！』」」」」

3人は下げた腕を前に突き出す。
すると、収束した光が金と虹色のエネルギーを放つ。

「何！？」

3組の技がウラヌシオンを襲う。
3組の技を同時に受け、ダメージを受けるウラヌシオン。
しかし、煙が晴れてくると、ウラヌシオンはまだ立っていた。

「えっ！？」
「何で平気でいられんの！？」

ウラヌシオンの無事を驚くプリキュア。

「フフフフ、まさかこの俺にダメージを与えるとはな。　正直驚いた。　だが、暗黒八惑星の実力はこの程度ではない！　今の俺はまだ３０％の力しか出していない。　プリキュア、今日のショーは面白かったぞ。　次に会うときを楽しみにしているぞ！　ハーッハッハッハッハッハッ・・・」

ウラヌシオンは空高く飛んでいき、去って行った。

～～～～～～～～

その頃・・・

「やれやれ、ウラヌシオンのあの癖がなかったら、少しはマシな幹部なのにな・・・」

宇治原は今の戦いを見てため息を吐く。

「しかし、地球人もよく考えたものだね。『スペースアーマー』を対策していたなんて。　けど、それでも僕達との差は埋まらないよ。」

宇治原はどこかへ去って行った。

## アースロンの過去

「ヌゥアァッ！」
「フッ！」

セイバーはメタルドーパントと対峙している。

「ヤッ！　ハッ！」
「ウゥッ！」

セイバーはメタルドーパントの鉄棒を止め、メタルドーパントの腹に蹴りを入れる。

「ディアッ！」
「ガァッ！」

セイバーは一蹴りでメタルドーパントを蹴り飛ばす。

「止めだ！」

セイバーは必殺技の構えに入る。

「『サンシャイン・ノア』！」

セイバーはメタルドーパントに『サンシャイン・ノア』を喰らわせる。
メタルドーパントはそれにより爆散される。
セイバーは変身を解き、星守に戻る。

「セイバー、最近ネオプラネットの幹部も姿を現したね。」
『彼らにとっては地球人でいう息抜きに過ぎない。　彼らも本気じゃないということだ。』
「面倒なことになったね・・・ん？」

星守が見たのはシャイニールミナスと同じ髪型をした少女である。
違うのは衣装が黒と黄色とピンクが混ざっているというところ。

「誰？」

星守はその少女の後を追う。
少女は路地に入る。
星守もそこに入る。

「ねぇ、君は誰なの？」

少女は立ち止まる。

「僕は星守健一。　君の名前は？」

星守は自分の名前を名乗り、少女の名前を聞く。
少女は沈黙するが・・・

「ヴィンラス。」
「ヴィンラスっていうのか。　よろしくね。」

星守は握手しようとするが、透きぬけていて握手するどころか触れることが出来なかった。

「えっ？」

『健一、今君の目の前にいるのは彼女の精神体だ。　そうだろう？』

セイバーは健一の横から現れ、ヴィンラスに聞く。

「えぇ、私はすでに死んでいた。　あなたの言う通り、精神体として存在してるわ。」

「何があったの？」

健一はヴィンラスに何があったのか聞く。

「実は・・・」

～～～～～～～～～

「アースロンったら空しい者ね。　彼の恋人であるヴィンラスとはイチャつく程、仲がよかったのに、アースロンの手下を倒した彼女を殺してしまうほど冷酷になって。」

ネプトユーヌは『深海の間』でアースロンの事を呟いた。

～～～～～～～～～

数年前、ヴィンラスはアースロンの手下、トカゲのような姿をした宇宙人、カモフラ星人・ミエズを倒した後、アースロンが駆けつけた。

アースロンはヴィンラスがミエズを倒したと考え、ヴィンラスに言った。

「これはどういうつもりなんだ!?」
「聞いて、アースロン！　私達はプルト・ハデスに利用されているのよ！」
「何を言っている?」
アースロンはヴィンラスの言葉が理解できず、詳しいことを聞かせた。
「プルト・ハデスは世界征服した後、私達を消すつもりなの！　役目が終わったその時に！　だから逃げましょう！」
ヴィンラスは必死にアースロンを弁解する。
しかし、アースロンはミエズを見て、不敵に笑みを浮かべる。
「フフフフフ・・・どうやら手遅れのようだね?」
「えっ?」
「ネオプラネットに入った以上、逆らう権利は失ったんだ。　僕としたことが迂闊だったよ。　もう後戻りは出来なくなった。」
アースロンは手に地面をつく。
すると、錬成陣が現れ、中心から槍が現れる。
「アースロン！　目を覚まして！　私達はプルト・ハデスに騙されたのよ！」
「今更言っても、もう止められないよ。」
アースロンは槍を構え、ヴィンラスを刺した。
「さよならだよ、ヴィンラス。」
「アー・・・スロン・・・」

アースロンの槍によって倒れるヴィンラス。

～～～～～～～～～

「その後でヴィーナシエルとマーキュリアが加わって、暗黒八惑星に結成した。　最近のアースロンは気に入った女にしか興味がなくなったけど、ヴィンラスの存在を忘れさせるためかしらね。」

ネプトユーヌは自分の勘で言い出す。

～～～～～～～～～～

『アースロンの過去にそんなことがあったとは・・・』

「何がアースロンを変えてしまったのか、私にも分からない・・・」

ヴィンラスの言葉を聞いた星守は・・・

（悲しいことだな・・・アースロン、どうやら君は僕と決着をつけるべきかもしれないね。）

～～～～～～～～～～

「イーッ！」

ネオショッカーの戦闘員が４人の少女を追いかけている。

その少女は、別の世界から逃げ出した、泉智恵とエレナとカガリと

ミドリである。

「エレナ、下がって！」
「はい！」

エレナは智恵の後ろに下がる。

「カガリ、ミドリ！」
「モチ！」
「承りました！」

智恵は『キュアピュータ』をカガリとミドリは『ジュエルコミューン』を取り出し、カードを読み込ませた。

「「「ジュエルスパークハリケーン！」」」

虹色の風に纏う智恵とカガリとミドリ。
智恵はキュアブライトとキュアウィンディの衣装を加わった衣装になり、髪型はポニーテールで青色に染めていく。
カガリはチャイナドレスのような衣装になり、髪は赤く染め、薔薇の飾りで留めている。
ミドリはウェディングドレスのスカート部分を短くした衣装になり、髪が緑色に染め、チョーカーを嵌めている。

「全てを尽くす慈愛の水、キュアサファイア！」
「勇気を授けし情熱の炎、キュアルビー！」
「緑溢れる幸せの大地、キュアエメラルド！」

智恵はキュアサファイア、カガリはキュアルビー、ミドリはキュアエメラルドと名乗る。

## サファイアとルビーとエメラルド

サファイアとルビーとエメラルドは戦闘員を薙ぎ払う。

「『プリキュア・サファイアブラスト』！」

サファイアは6つの水玉を出し、その水玉から水の弾丸を放つ。
戦闘員は『プリキュア・サファイアブラスト』により、爆散される。

「『ルビートンファー』！」
「『エメラルドボウガン』！」

ルビーは『ジュエルコミューン』から炎の模様が描かれていたトンファー・『ルビートンファー』に変え、エメラルドは『ジュエルコミューン』をシーイックボウガンをモチーフにしたボウガン・『エメラルドボウガン』に変える。

「ホラホラ、そんな程度？」
「撃ちます！」

ルビーとエメラルドはそれぞれの武器で戦闘員を軽くあしらう。

「『プリキュア・ルビーファイヤー』！」
「『プリキュア・エメラルドバスター』！」

ルビーは『ルビートンファー』に炎を溜め、その炎をパンチで火炎弾として放つ。
エメラルドは『エメラルドボウガン』に緑色のエネルギーを集約して、引き金を引くとエネルギー弾を放つ。

戦闘員は『プリキュア・ルビーファイヤー』と『プリキュア・エメラルドバスター』を受け、爆散される。

「イーッ！」

しかし、倒しても戦闘員がまだ残っている。

「キリがないね、こいつら。」
「けど、ワタクシ達は負けません！」
「ルビー、エメラルド。」
「分かってる。」
「はい。」

ルビーとエメラルドはカードを取り出す。
その時・・・

「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」
「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」
「『プリキュア・オパールメテオ』！」

突然、トパーズとガーネットとオパールが現れ、それぞれの必殺技で戦闘員を一掃する。

～～～～～～～～

その頃、和夢達はソラと一緒にパラレルシップの修理を行なった。

「ごめんね皆、面倒なことを巻き込んで。」
「あ、いえ、大丈夫ですよ。」

ソラは遥から工具を受け取る。

「ねぇ、怪人たちも用心してもいいけど、来斗は健一と違って女好きだから、下手したら花嫁候補に入れられないようにね。」

「酷い言い方だね、ソラちゃん。」

来斗は今の会話を聞いて苦笑いする。

「来斗さんに誘われたら、あんなことやこんなことが起きそうな・・・」

「遥、危ない妄想やめなさいよ。」

麗華は遥の妄想癖を止める。

「やれやれ、素人プリキュアがまた1人増えたような気がして大変だよ。」

ため息を吐く和夢。

「ところで、千鶴は？」

「真理奈達を迎えに行ってたよ。」

「そうか。」

和夢は遥に千鶴の事を聞き、納得する。

～～～～～～～～～～

（そろそろ、戻ってくる頃かな。　後で夏海達がパラレルシップの

所に来るらしいけど・・・）

千鶴は真理奈達を迎えに行った。

その時・・・

「キャッ！」

「オォッ！」

千鶴は誰かにぶつかり後ろに下がる。

「すいません、大丈夫で・・・」

千鶴はぶつけられた人に謝ろうとした時、よく見ると、宇治原がいた。

「あれ？　千鶴ちゃんじゃないか。　偶然って恐ろしいね。」

「どうしてここに！？」

「別に。　明日用事が出来たんで準備終わったから、暇つぶしに散歩してきただけさ。」

宇治原は千鶴の質問に答える。

「あ、そうだ。　あの時の君の唇、かなり柔らかかったよ。」

「そ、そんなことを思い出さないでよ／／／！」

「冗談だよ。　それより君、真理奈ちゃん達を探してるみたいだけど？　真理奈ちゃん達は広場でネオショッカーの戦闘員と交戦してるよ。　行くなら急いだ方がいいかもね。」

千鶴は宇治原の言葉を聞いて真理奈達の所に駆けつける。

「フフフ、あんなに照れちゃって。　そんなにキスされたことが恥ずかしかったのかな？」

宇治原は笑いながら千鶴とは違う方向に歩いて行った。

～～～～～～～～～

「身と心を1つに希望と勇気の力を今解き放つ！　『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』！」

トパーズ達は『プリキュア・ジュエルフォースファンタジア』で戦闘員を一掃した。

「トパーズとガーネットとオパール・・・あの子達がパワーストーンの・・・」

エレナはトパーズ達を見て感心する。

「ちょっと、いきなり何割り込んでんのよ！」

ルビーはトパーズ達に文句を言う。

「何よ、私たちに助けられておいて！」

「オパール。」

オパールはルビーの言葉にカチンときた。

ガーネットはオパールを制止する。

（何でだろう、あの人を見ると・・・何故懐かしい感じが・・・）

トパーズはサファイアを見て懐かしさを感じた。

（どういうこと？　この子を見ると自然と懐かしい・・・）

サファイアもトパーズを見て懐かしさを感じた。

「ねぇ、あなた達もパワーストーンを持つプリキュアなの？」

「はい、そうですが・・・」

エメラルドはトパーズの質問に答える。

「それじゃあ、これで１２人揃ったってことね。」

「３人とも、急なことで悪いけど、一緒に来てくれない？　あなた達のこと紹介したいから。」

トパーズとガーネットは１０人目から１２人目のプリキュアだと知った時、パラレルシップに連れて行こうとする。

しかし・・・

「お断りよ。　あなた達が何を言おうと、決して一緒には行かないわ。」

サファイアはトパーズの誘いを断る。

トパーズは黙り込むが、しばらくすると・・・

「だったら・・・」

サファイアと格闘を始める。

「！　力づくでってことね。　ルビー、エメラルド。他の2人は任せるわ。」
「任せて！」
「はい！」

ルビーとエメラルドはサファイアの指示に従って、ガーネットとオパールに殴りかかる。
オパールはルビーを、ガーネットはエメラルドを、トパーズはサファイアを対峙する。

## プリキュアVSプリキュア!?

「あなた達には何の恨みもありませんが、守りたいものを守る使命があります!」
「こっちも同じよ!」

エメラルドは『エメラルドボウガン』で撃つ。
ガーネットはブーメランでボウガンの矢を弾き落とす。

「赤の他人のクセに横取りしてんじゃないわよ!」
「数で追い詰められたくせに生意気なこと言わないでよ!」

ルビーは『ルビートンファー』で格闘する。
オパールも負けずにルビーと格闘する。

「私達はただ、あなた達の力を貸してほしいだけなの!」
「必要ないわ! 私たちだけで十分よ!」

サファイアは蹴り技でトパーズを襲う。
トパーズは蹴り技を避け、カウンターを仕掛ける。

「こいつ! 『プリキュア・オパールメテオ』!」

オパールは『プリキュア・オパールメテオ』を放つ。

「なんのこれしき!」

しかし、ルビーは『ルビートンファー』で『プリキュア・オパールメテオ』を弾き落とす。

「『プリキュア・ルビーファイヤー』！」
「まだまだ！　『プリキュア・オパールメテオ・砲弾サイズ』！」
ルビーは『プリキュア・ルビーファイヤー』を放つ。
オパールも『プリキュア・オパールメテオ・砲弾サイズ』を放ち、相打ちする。

「『プリキュア・ガーネットクロウ』！」
ガーネットは『プリキュア・ガーネットクロウ』を使う。

「ヤァッ！　ハイッ！」
エメラルドは『エメラルドボウガン』でブーメランを撃ち落す。

「『プリキュア・エメラルドバスター』！」
エメラルドは『プリキュア・エメラルドバスター』でガーネットを狙い打つ。
ガーネットは超能力でエネルギー弾を止める。

「『プリキュア・サファイアブラスト』！」
サファイアは『プリキュア・サファイアブラスト』を放つ。

「フッ！」
トパーズはバリアを作って『プリキュア・サファイアブラスト』を防ぐ。

「『プリキュア・トパーズビッグバン』！」

トパーズはバリアを解除して、『プリキュア・トパーズビッグバン』を使う。
サファイアは足に水を集約してジャンプし、跳び蹴りをする。
よって相打ちとなる。

「やるわね。」
「あなたこそ。」

トパーズとサファイアは互いに見つめる。

（けど、この懐かしさは何？）
（またこの感じ・・・なんなの、この感じは・・・）

サファイアは相手に集中し、もう一度『プリキュア・サファイアブラスト』を放つ。
トパーズは次々と避ける。
エレナは見ていられず・・・

「やめて皆！」
「「「！」」」

エレナの言葉にすぐに戦いをやめるサファイアとルビーとエメラルド。
トパーズとガーネットとオパールもすぐにやめた。

「姫様、何故止めるんですか！？」
「ワタクシ達は姫様を守る使命があります。　今、姫様に万が一の

ことがあったら・・・」
「わかってる、でも・・・」
制止されたルビーとエメラルドはエレナに説得する。
「大丈夫。　正直な所、私達は戦いに来たわけじゃないから。」
「それに、3人が守りたい人があなただって分かったら尚更ね。」
トパーズとガーネットは互いの顔を見合わせて頷く。
トパーズ達は変身を解く。
「私は新真理奈。」
「宝塚忍美よ。　で、この子が妹の安美。」
「よろしく。」
真理奈達はエレナたちに名前を伝える。
「私はエレナ・アルバトロス。　別の世界から来ました。」
「泉智恵よ。　この2人はカガリとミドリ。」
「よろしく。」
「よろしくお願いします。」
エレナたちも真理奈達に名前を伝える。
「ねぇ、さっきネオショッカーの戦闘員に襲われたってことは・・・」
「えぇ、私の世界もネオプラネットと結託した者達に襲われたの。
私の世界にいる伝説の戦士達も、お母様もお父様ももういない。」
エレナは落ち込んだ表情で言い出す。

「あの、失礼かもしれないけど、詳しく説明してくれない？」
真理奈達はエレナたちの世界の状況を知るため、パラレルシップに向かった。

～～～～～～～～～～

その頃、ネプトユーヌは『天空の間』でウラヌシオンと会話していた。
『天空の間』ではマルジスとジュピタールがいる。
その時、警報が響き渡る。

「！？」
「なんだ！？」

ウラヌシオン達は今の警報を聞いて周りを見渡す。
扉からサウザンダーが入ってくる。

「大変です！　何者かが『天空の間』の前でトループ星人を薙ぎ払っております！」

サウザンダーの報告を聞いたウラヌシオン達。
その時、扉からアリのような宇宙人・トループ星人が吹き飛び、倒れこむ。
そしてその扉から別の宇宙人が入ってきた。
ウラヌシオン達はその宇宙人を見て少し驚く。
その宇宙人の正体は甲冑のような外観で、グレイのような宇宙人、カーシュ星人・ゼイビアックスである。

「お前はゼイビアックス！」
「あら、今更『アルカトラーズ』に来るなんて、どういう都合なの？」

暗黒八惑星はゼイビアックスとは面識があるようだ。

「プルト・ハデス様の命令で地球に攻め込むよう来てやったのだ。」

ゼイビアックスは『アルカトラーズ』に来た理由を言い出す。

「ほう、ならば俺達の手伝いをするというのだな？」
「そうだ。」
「サウザンダー。　私の幹部、ディーパーとポセイドスを呼んできなさい。」
「はっ！」

サウザンダーは『天空の間』から出て行った。

## 仮面ライダーパラレルとデストピアドーパントの設定

仮面ライダーパラレル

宇治原司が変身する仮面ライダー。
パラレルメモリによって変身する。
その姿は仮面ライダーエターナルに似ている。
武器はメタルシャフトをモチーフにしたパラレルシャフト、トリガーマグナムをモチーフにしたパラレルマグナム、エターナルエッジをモチーフにしたパラレルエッジである。
決め台詞は「さあ、奴隷の世界に案内しよう。」

『パラレル・ゴッドスピードラッシュ』　マキシマムスロットに差し込むことで発動できる。
自分の姿を消したり現れたりして相手にパンチやキックを連続で決める。

『パラレル・テレポートシューティング』　パラレルマグナムに差し込むことで発動できる。
引き金を引いた瞬時に敵の近くに瞬間移動させ、狙撃する。

ちなみにパラレルシャフトとパラレルエッジの必殺技はまだ決めていない。

デストピアドーパント

デストピアのガイアメモリによって変身したドーパント。
その姿は黒い鎧を纏い、黒い翼を持ち、刀と三叉の矛を装備している。
宇治原司曰く『お気に入りのメモリ』、『ユートピアに対を成すもう一つの最強メモリ』。
矛に地面を強く叩くことで強い衝撃波を出す。
鎧はジュエルドーパントの硬度より硬い。
矛にエネルギーを集めた後、光線を放つ。
空中に浮いてその場所で足にエネルギーを集約した後、ライダーキックのように蹴り技で決める。
刀にエネルギーを集め、斬ることも出来る。
矛の矢先を突き出すと、赤黒い光が出て、それで相手を捕縛する。

## 仮面ライダーパラレルとデストピアドーパントの設定（後書き）

パラレルシャフトとパラレルエッジでの必殺技名や動作が思いつきません。
活動報告で募集していますので覗いて見てください。

## アルバトロス王国

宇治原はパラレルシップから離れた岩陰から様子を見ていた。

「新しいプリキュアか。　これでパワーストーンの戦士は12人揃ったね。　けど、彼女達程度のドブネズミは置いといて・・・問題はあそこのお嬢ちゃんかな。」

宇治原はジュエルマスタープリキュアが12人揃ったことを確認した後、エレナを見つめる。
今、彼女達はエレナからアルバトロス王国の映像を見ている。
勿論、友子達も来ている。

「酷い・・・」
「国中大炎上や・・・」
「倒されているのは・・・プリキュア？」

彼女たちが目の当たりにしているのはアルバトロス王国が火の海にさらされているところとプリキュア達が黒い騎士軍団に斬り倒されていくところである。

「私の世界にあるアルバトロス王国は伝説の戦士・プリキュアによって何度も守られました。　しかし、別の世界から邪悪なる存在・暗黒黒騎士団が姿を現しました。　伝説の戦士・プリキュアは総力を結集して立ち向かいましたが、全滅してしまいました。　お父様は私達を逃がした後、1人で立ち向かいました。　その後の事は私にも分かりません。　でも・・・」

エレナはアルバトロス王国の状況を説明した。

「お姫様、弱音を吐くのは早過ぎるよ。」
愛はエレナを励ます。
「まだ私達がいます。」
夏海もエレナを励ます。
「そうだよ。　僕達、ジュエルマスターの中には素人も含まれているけど、一生懸命戦ってるんだから。」
和夢が言うその素人は静香の事である。
「何度も素人って呼ばないでよ、変なお姉ちゃん。」
「そ、変なお姉ちゃ・・・変なお姉ちゃん!?」
和夢は静香の言葉を聞いて激昂する。
「言ったね、静香!?　君、先輩に向かってその口の聞き方は何!?」
「まぁまぁ、2人とも。」
明子は和夢と静香を仲介する。
「この世界もそうやけど、他の世界にもプリキュアがおるさかい。」
「遥ちゃん達みたいにね。」
友子と愛は遥と麗華と千鶴を見て言う。
3人は頷く。

「でも、暗黒黒騎士団はどうしてアルバトロス王国を？」

麗華はエレナに質問する。

「アルバトロス城には私達アルバトロス家に伝わる宝剣・『プリズムカリバー』を奪おうとしたからよ。」

「なにそれ？」

遥は『プリズムカリバー』について聞く。

「『プリズムカリバー』、太古のアルバトロス王が使われていた宝剣。　その力は世界を一つにするほどの巨大な力を持つと噂されているわ。」

「世界を一つに！？」

『プリズムカリバー』について聞いた人達は驚く。

「その宝剣を使った太古のアルバトロス王はその力を恐れ、城の地下深く封印していたの。」

「世界を一つにさせることが暗黒黒騎士団の狙いってこと？」

真理奈は暗黒黒騎士団の目的を予想する。

「残念だが、違うな。」

プリキュア達は声がした方に振り向く。

そこにはスカルナイトがいる。

「いつの間に！？」

「こいつが暗黒黒騎士団の！？」
「そう、私の名はスカルナイト。　以後、お見知りおきを。」
スカルナイトは自分の名前を伝える。
「スカルナイト、違うとはどういうことなの！？」
エレナはスカルナイトに質問する。
「私達の狙いは別にあるということだよ。　姫の宝剣など全世界制服を目論んでいるネオプラネットにくれてやる。」
少女達はスカルナイトの言葉を聞いて驚く。
「これは挨拶代わりだ。　クライナー！」
スカルナイトは指パッチンすると、木の影から盾と剣のエンブレムがついている巨大な木の怪物が現れた。
その怪物の事をクライナーと呼んでいる
「クライナー！」
クライナーは真理奈達を見下ろす。
「みんな！」
「「「「「「うん！」」」」」」
「「「「「はい！」」」」」
ジュエルマスター組とダブルフォース組は変身アイテムを取り出す。
そして・・・

「「「「「「「「「「ジュエルスパークハリケーン！」」」」」」」」」」

「「「プリキュア！　フォース・イクイップ！」」」

プリキュアに変身する。

「新たなる自らの意思、キュアトパーズ！」
「耐え抜く心の力、キュアガーネット！」
「濁らぬ透明の希望、キュアオパール！」
「母なる月と海の恵み、キュアパール！」
「永久に続く愛の調べ、キュアダイヤモンド！」
「友と提携する絆の証、キュアペリドット！」
「成功に導く旅人の心境、キュアターコイズ！」
「平和を望む大いなる夢、キュアアメジスト！」
「解放する水難の命運、キュアアクアマリン！」
「「「「「「「「「「ジュエルマスタープリキュア！」」」」」」」」」」

「私達がここにいる限り！」
「あなたの年貢は納め時よ！」
「そしてこれまでの自然の怒り、全てを倍にして返してあげるわ！」
「希望司る風と雷の戦士、キュアテンペスト！」
「勇気司る炎と氷の戦士、キュアブレイズ！」
「慈愛司る地と水の戦士、キュアガイア！」
「悪しき力に操られ、力に溺れる者よ！」
「私達がいる限り、好きにはさせない！」
「そして、邪悪なる者に狙われし、力なき存在は！」
「「「私達が守ってみせる！」」」

決め台詞を言うプリキュア。

「智恵、ワタクシ達も・・・」
「いいえ、ここはお手並み拝見させておくわよ。」
「言うと思った。」

智恵とカガリとミドリは戦いに参加せず、トパーズ達の戦いを見届ける。

## VS　クライナー

ジュエルフォース組とダブルフォース組はクライナーを殴りかかる。
しかし・・・

「クライナー。」

12人のプリキュアは木のクライナーの体を透きぬけていく。
テンペストとブレイズとガイアは武器で対抗するが、全く効果がなかった。

「効いてない！？」

プリキュア達は驚きを隠せない。

「クライナー！」

木のクライナーは木の葉を飛ばす。
プリキュア達は木の葉を避ける。

「どうしたのかね？　クライナーは傷一つついてないぞ？」

スカルナイトは笑みを浮かびながら言い出す。

「こいつ！」
「ウチに任しとき！」

ペリドットはアメジストを退かし、『ジュエルコミューン』から『ペリドットトランス』に変える。

「『プリキュア・ペリドットサイクロン』！」

ペリドットは『プリキュア・ペリドットサイクロン』を放つ。
しかし、ダメージを受けたような素振りを見せなかった。

「なんやて！？」
「退いて！　君じゃ無理だよ！」

アメジストはペリドットを退かす。
そして、『ジュエルコミューン』から『アメジストバトン』に変える。

「『プリキュア・アメジストマジック』！」

アメジストは『プリキュア・アメジストマジック』を放つ。
しかし、クライナーは何の効果もなかった。

「効かない！？」
「だったら、これはどう！？」

ダイヤモンドはアメジストを退かした後、『ジュエルコミューン』から『ダイヤモンドマイク』に変える。

「『プリキュア・ダイヤモンドソング』！」

ダイヤモンドは『プリキュア・ダイヤモンドソング』を放つ。
しかし、やはり効き目がなかった。

「全然効いてない！？」

「あたしに任せて！」

アクアマリンは『ジュエルコミューン』を『アクアマリンダガー』に変え、木のクライナーに斬りかかる。
しかし、また透き抜けられてしまう。
更に木のクライナーは木の枝を矢のように撃ち出す。

「ウッ！　キャアァッ！」

アクアマリンは吹き飛ばされる。
その上、ペリドット、ダイヤモンド、アメジストにぶつかり、同時に倒れこむ。

「痛いな、もう！」
「なにすんのよ！？」
「避けれるでしょ、どう見ても！」
「やかましいわ！」

ペリドットとダイヤモンドとアメジストとアクアマリンは喧嘩し始める。

「み、皆さん！　喧嘩してる場合じゃ！」
「やめてください！」

ターコイズとパールは４人の喧嘩を止めようと必死になる。

「フフフフ、そこの４人は相手にするまでもないな？」

スカルナイトは笑い出す。

「ガーネット、オパール！」
「私達だけでも倒しましょう！」
「うん！」

トパーズとガーネットとオパールはカードを取り出し、『キュアピュータ』で読み込ませる。

「「「ジュエルミラクル ハリケーン！」」」

トパーズとガーネットとオパールはミラクルプリキュアに変身する。

「未来を作る自らの意思、ミラクルキュアトパーズ！」
「奇跡を呼び起こす心の力、ミラクルキュアガーネット！」
「透き通る眩き希望、ミラクルキュアオパール！」
「「「ジュエルマスター・ミラクルプリキュア！」」」
「私達がここにいる限り！」
「あなたの年貢は納め時よ！」
「そしてこれまでの自然の怒り、全てを倍にして返してあげるわ！」

決め台詞を言うトパーズ達。

「あれが、ミラクルプリキュア！」

ダブルフォース組はトパーズ達を見て驚く。

「ハアァッ！」

トパーズ達は木のクライナーにキックを浴びせる。

「クライナー！？」

今度は効いたようだ。

「『プリキュア・ガーネットカッター』！」

ガーネットの手から赤い三日月上のブーメランを出し、木のクライナーに向けて投げ出す。

「クライナー！？」

『プリキュア・ガーネットカッター』を受けた木のクライナーは後退りする。

「『プリキュア・オパールコメット』！」

オパールの胸の水晶から虹色のエネルギー体を出し、パンチでそのエネルギー体を殴り飛ばす。

「クライナー！？」

『プリキュア・オパールコメット』を受けた木のクライナーは倒れこむ。

「『プリキュア・トパーズエクスプロード』！」

トパーズの体に黄金のオーラを身に纏い、木のクライナーにキックを浴びせる。

よって木のクライナーの体からダイヤの紋章が浮かび、爆発する。

それに伴って、浄化されて消滅された。

「ふぅ、やっと倒した・・・」
「残るはあんたよ！」
トパーズ達はスカルナイトに振り向く。
「言ったはずだ、これは挨拶代わりだと。　また今度相手をしてやる。　フッハッハッハッハッ！」
スカルナイトの足元から黒い穴が現れ、スカルナイトはそこに入り、トパーズ達の前から姿を消した。
～～～～～～～～～
その後、プリキュア達は元の姿に戻った。
「暗黒黒騎士団、思ったより厄介だね。」
「えぇ、ミラクルプリキュアに変身しないと倒せないくらい。」
「けど、スペシャルプリキュアに変身できれば、何とかなるよ！」
真理奈達はクライナーと戦った感想とスペシャルプリキュアを口に出す。
「本当に何とかなるの？」
智恵が言い出す。
「え？」
「気付いてないの？　スペシャルプリキュアになるには和夢達の息を合わさないといけない。　けど、今は息を合っていない。　これ

じゃ、スペシャルプリキュアになれないわ。」

智恵はどこかへ去ろうとする。

「智恵、どこへいくの？」

「今の私達に帰る宛もないわ。私達は一足先に『ＲＥＢＩＲＴＨ』に向かう。」

智恵とエレナとカガリとミドリは『ＲＥＢＩＲＴＨ』に向かった。

～～～～～～～～～～

次の日、アースロンは暗黒黒騎士団のアジトに到着し、スカルナイトに会った。

「お待たせ、スカルナイト。」

「待たせたね。　アースロン。　これが、例の奴だよ。」

スカルナイトは『プリズムカリバー』をアースロンに献上する。

「これがお姫様が言ってた『プリズムカリバー』か・・・そんな凄い物を献上するなんて、もったいないことだね。」

「その剣は危険だと聞いたからね。　ネオプラネットが持たせた方が得だと思ったのだよ。」

スカルナイトは『プリズムカリバー』を献上した理由を述べた。

「それは仕方ないね。　ところで、スカルナイトの目的はなんなの？」

アースロンはスカルナイトに目的を聞く。

「プリキュアの大いなる力だ。」

# 番外編　怪獣現出大事件！（前書き）

長い番外編ですが、お願いします。

# 番外編　怪獣現出大事件！

朝、午前８時、東宝市付近に怪獣が現れた。
その怪獣の名は凶暴怪獣アーストロン。
かつてウルトラマンジャックに倒された怪獣である。
戦闘飛行機がアーストロンに立ち向かうが、アーストロンの火炎放射により撃墜されてしまう。
その時、シンホークとシンホエール、そしてシンユニコーンが駆けつけた。

「天馬、なんだあいつは！？」
「わからない！　見たこともない！」
「とにかく、早いトコ倒すわよ！」
「「「新生合体！」」」

シンホークとシンホエールとシンユニコーンがチョウシンセイに合体した。

「チョウシンセイ！　推参！」

チョウシンセイはアーストロンと対峙する。

「てめぇ！　どこから来た！？」

シンホークはアーストロンに声をかけるが、当然聞く耳持たない。
アーストロンは火炎放射を放つ。

「グワッ！」
「キャァッ！」

「ウワアァッ！」

アーストロンの火炎放射により倒れるチョウシンセイ。

「翔一、大丈夫か！？」

「平気だぜ！」

シンセイレッドに心配をかけるシンホーク。

「もう！　レディーに向かって炎を吐くなんて！」

「そうよ！」

シンセイブルーとシンホエールはアーストロンに怒る。

「瑞穂、自分が言えることなの？」

「来るぞ、シンセイジャー！」

シンセイブルーの言葉に呆れるシンセイイエローとアーストロンの接近に警戒するシンユニコーン。

アーストロンはもう一度火炎放射を放とうとした。

「緊急回避だ！」

アーストロンが火炎放射を放つ前に飛行して回避する。

「いまだ！」

「「「『チョウシンセイバー』、新生奥義！　『シンセイクリーンヒット』！」」」

チョウシンセイはアーストロンに『シンセイクリーンヒット』で御

見舞いする。
よってアーストロンは爆発する。

～～～～～～～

アーストロンとの戦いの後、翔一と瑞穂と天馬は『ＲＥＢＩＲＴＨ』に立ち入り、研究室にいる成美にアーストロンの事を報告した。

「成る程、この怪獣はこの世界のものじゃないわ。」
「「えぇっ！？」」
「あの怪獣はウルトラマンっていう巨人がいる世界から来たの。」

成美はアーストロンについて解説した。
アーストロンは翔一達がいる世界とは別の世界の怪獣だったということを。

「でも不思議ね、この怪獣を分析したんだけど、ウルトラマンが倒した怪獣とは違うわ。　それにこの世界に現れたとなると誰かが転送したのかもね・・・」

成美はアーストロンの映像を見て不思議に感じた。

「調べる必要があるわね・・・そうだ！　３人共、和夢ちゃんに頼んでみて。　あの子のプリキュアの力は時空移動できるから。」
「私達が別の世界に行って原因を突き止めるわけですね？」

成美の提案を聞いた翔一達。
翔一達はすぐに和夢の所に向かう。

「・・・と言う事なの。　協力してくれない？」
「それは大変だね。」

瑞穂から事情を聞いた和夢。
そして・・・

「分かった、僕もその世界でミニマジックショーを始める予定だし。」
「君ね、そんな暢気なことを・・・（呆）」

和夢の予定を聞いた天馬は呆れた表情になる。

「大丈夫、せいぜい１０分程のショーに過ぎないよ。」
（そうじゃなくてショーをやるのに金取るのはちょっと・・・）

天馬は思っていることを呟く。

「兎に角、また怪獣がこっちに転送される前にウルトラマンの世界に行く準備するよ。　なるべく早めにね。」

翔一達は別の世界に向かうため、準備を整えた。

～～～～～～～～～

「怪獣を召喚してあいつらの世界に送り込むとは・・・流石で御座いますよ、霧也様。」

ここはある世界の無人の倉庫。
その倉庫には伊智頭まさきと寒川霧也がいた。

「ふん。　こんなもの、我が世紀の大発明、『凶悪怪獣召喚装置』の実験に過ぎん。　それより、誰も気付かれていないな、チーズ。」
「勿論ですよ。　カモフラ星人・カモフレオン様の力でこの倉庫の周り森の幻を張り巡らされていたんですからね。」

霧也は伊智頭に誰も入ってこないか聞いてみた。
伊智頭は大丈夫だと答える。
その時、伊智頭の後ろから槍を持ったカメレオンのような宇宙人、カモフラ星人・カモフレオンが現れる。

「そりゃそうザンス！」
「ゲゲーッ！？」

いきなり後ろから現れたので驚く伊智頭。

「我輩のカモフラージュ能力は自分の姿を変えることや身を隠すだけじゃなく、半径１００ｍの範囲で幻影を見せることが出来るザンスから！」

カモフレオンは自信満々に言い出す。

（こんな人気のない倉庫の周りに森の幻を作ることはないと思うよ・・・）
「「何か言った（ザンス）か！？」」
「あ、いえ！　何も言っておりませんよ、御二方！」

うまく誤魔化す伊智頭。

「とにかく、カモフレオン。　この催眠スプレーを持ってアンナと

いう女を眠らせてここに連れて来い！　ネオプラネットの方が一番強いということを照明するためにな！」
「分かったザンス！」
「あ、でも、もし彼女がプリキュアになった時はどうするんですか？」

カモフレオンが去った後、伊智頭は霧也に質問する。

「変身できるものか。　カモフレオンの槍にはプリキュアの変身を封じる力がある。半径３０m以内に入れば、プリキュアに変身することが出来なくなるのだ。　カモフラ星人の頭脳は奴らが思ってるほど未熟ではないわ。」
「流石で御座いますよ！　あ、ところで、どうやって怪獣を呼び出すんですか。」
「これだ！」

霧也が出したのは怪獣の絵が描かれていたカードである。
アーストロン、ヤナカーギー、キングオブモンスなどの怪獣が描かれている。

「そのカードに描かれている怪獣をその装置で実体化するということですね？　流石で御座いますよ！」
「見ていろ、ダーク！　ネオプラネットの恐ろしさを！　そして、我が世紀の大発明『凶悪怪獣召喚装置』の恐ろしさを！　いいか、チーズ！　召喚装置のことは私達だけの秘密だ！　決して言うんじゃないぞ！」
「はーい！」

霧也の命令を聞いて了解するチーズ。

## 番外編　怪獣現出大事件！（後書き）

『ウルトラマンティガ＆ハートキャッチプリキュア！　～光と闇の超決戦～』に続きます。

## シンビーストの紹介

シンホーク
シンビーストの一体。
巨大な赤い鷹。
シンセイレッドのパートナー。
一人称は『俺』。

シンホエール
シンビーストの一体。
巨大な青いシャチ。
シンセイブルーのパートナー。
一人称は『私』。

シンユニコーン
シンビーストの一体。
巨大な黄色のユニコーン。
シンセイイエローのパートナー。
一人称は『私』。

チョウシンセイ
シンホーク、シンホエール、シンユニコーンが合体した姿。
シンユニコーンが足に、シンホエールがボディに、シンホークの体とシンホエールの尾が腕となる。
鉤爪から手が出し、シンホークの翼がシンホエールのボディの背中に付き、シンホークの頭が頭部になって嘴から顔を出す。
シンユニコーンの頭部が『チョウシンセイバー』という刀になる。
空中戦も可能。

水中戦も可能。
技は『チョウシンセイバー』を雷に纏って斬りつける『ライトニングブレイク』。
必殺技は火、水、雷の刃を一回ずつ斬りつける『シンセイクリーンヒット』。

スプロン／ジュエルスワン
白鳥のような姿をした光の園の妖精。
キュアトパーズのパートナー。
語尾に『～スプ』と付ける。
サポートカードを読み込ませることでシンビースト・ジュエルスワンになる。

フルップ／ジュエルバタフライ
蝶のような姿をした光の園の妖精。
キュアガーネットのパートナー。
語尾に『～フル』と付ける。
サポートカードを読み込ませることでシンビースト・ジュエルバタフライになる。

ニポルン／ジュエルキャット
猫のような姿をした光の園の妖精。
キュアオパールのパートナー。
語尾に『～ニポ』と付ける。
サポートカードを読み込ませることでシンビースト・ジュエルキャットになる。

ミラクルチョウシンセイ
ジュエルキャットの頭部がチョウシンセイの肩当てとなり、ジュエルスワンの翼が折り畳んでジュエルキャットのボディと合体し、チ

ョウシンセイの背中に合体する。
ジュエルバタフライが『チョウシンセイバー』と合体し、『ミラクルチョウシンセイバー』となる。
技は『ミラクルチョウシンセイバー』に光を込めて斬りつける『精霊剣・一閃』、銀色の雷を纏うことで相手を斬りつける『フェアリースパーク』。
必殺技はジャンプした後、『ミラクルチョウシンセイバー』に光を集約し、急降下して相手を貫く『シンセイミラクルエアストライク』。

## 息を合わせて特訓！

時空鬼と暗黒黒騎士団と一戦を交えてから2日後、来斗は時空鬼について検索を始めた。
星守とソラ、遥と麗華と千鶴も一緒である。

「分かったぞ！　時空鬼は『ＮＥＶＥＲ』や『クオークス』と同じ実験兵器だ。　名前は『ミュータント』。　地球上の生物の細胞を人間の体内に注入することで獣人になることが出来る。『ミュータント』第1号は園崎克己（そのざきかつみ）。　時空鬼では神鬼（しんき）と呼ばれている。」

来斗は時空鬼について解説した。

「財団Ｘの投資対象の座になるはずだったんだけど、投資対象の座は『クオークス』に選ばれた。　『ミュータント』も投資対象になれるほどの技術だけど、暴走の恐れがあるため、打ち切りにされたんだ。　その後も『ミュータント』が増えたんだけどね。」
「異世界での動向は私が話すわ。」

ソラは来斗の後を続くように話を進めた。

「神鬼は別の世界で金や食べ物を奪う悪行を働き始めた頃、暗黒八惑星の1人と遭遇し、手を結んだわ。　その兆しとして、その1人からライダーメモリを9つ差し出したの。」
「それが、龍騎や響鬼、カブトのメモリ・・・」

千鶴はドーパントとの戦いの最中に見た3人のライダーの事を言い出す。
その時・・・

「チュッ♪」
「ヘッ！？／／／」

千鶴の頬に誰かにキスされた。
遥と麗華達は千鶴の方を向くと、千鶴の後ろに宇治原が立っていた。

「そういうこと。」

宇治原は来斗とソラの話を聞いたのか、返答した。

「アースロン！」
「ちょっちょっと、いきなり何を！？／／／」

千鶴は宇治原に聞いた。

「声をかけるだけでは物足りないから、挨拶代わりにしてやったのさ。（フフ、千鶴ちゃんをからかうのって面白いね♪）」

宇治原は理由を問う。

「君は？」
「あれ？『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』のバイトのお兄さんじゃないか。久しぶりだね。」

来斗と宇治原は面識があるようだ。
何故なら宇治原は以前、『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』で腹ごしらえに行った時、たこ焼きを作ってあげたのは来斗なのだから。

「健一君から聞いたけど、まさか君がネオプラネットの幹部だった

なんてね。」
「別に騙そうと思って立ち寄ったわけじゃないよ？　ただお腹が空いたから食べに来ただけだよ。」
宇治原は本当の事を言う。
「それより、そろそろ彼女達が特訓を始めるよ。　見に行った方がいいみたいだね。」
宇治原は星守達の前から去ろうとした。
「待って。」
星守は宇治原を呼び止める。
「しばらくの間、話させてもらえないかな？　場所を変えて。」
「君と僕だけの内緒話かい？　いいよ。」
星守と宇治原は来斗達を後にする。
そして、彼らは成美達の所に向かった。

～～～～～～～～～

成美達と合流した来斗達。
よく見ると、クイズ番組に出てきそうなテーブルと、聴力検査に使われるボタンが６つずつある。
夏海と友子と愛と和夢と明子と静香はそれぞれの席に座っている。
「皆、これは？」

遥は夏海達に質問する。

「分かりません。」

「説明してあげる。」

成美が現れて、説明を行なう。

「これはスペシャルプリキュア合体特訓マシーン！」

「？？」

「一昨日話した通り、トパーズとガーネットとオパールがスペシャルプリキュアに変身するには６人の息を合わせないといけないの。」

成美はどこからかホワイトボードを出した。

「やり方はまず、『ジュエルコミューン』にその専用のサポートカードをセット。　そして、６人全員同時にプッシュボタンを押せば３人はスペシャルプリキュアに変身できるの。」

成美はホワイトボードに描かれている絵を見せる。

「つまり、このボタンを６人同時に押せばいいんですか？」

明子は成美に質問する。

「その通り。　じゃ、サポートカードが完成するまで特訓しといて。

遥ちゃん、麗華ちゃん、千鶴ちゃん。　手伝って。」

「「「はい。」」」

「皆、頑張ってね。」

遥は夏海達にエールを贈ってから成美の後をついていく。

「僕、そろそろバイトだから行かないと。」
「私もパラレルシップの修理を急がないと。」

来斗はアルバイトに行くため、『ＴＡＫＯ　ＣＡＦＥ』に、ソラはパラレルシップの修理に行った。

「皆、いくよ。」

愛は５人に言い出す。
そして・・・

「せーのっ！」

愛の合図で全員ボタンを押す。
結果、夏海と愛と明子と静香の椅子が上に上がり、友子と和夢の椅子からシャワーヘッドが出てきてそこから水がでて、２人を浴びせる。
ただし・・・

「「ギャアアアアアアアッ！！？」」

湯である。

「あっつぅ・・・」
「なにこれ？」
「ごめんね、言い忘れちゃった。　ほんの０，１秒でも遅れたら、遅れた者の頭上に５０度以上のお湯のシャワーをかける仕組みになってるの。　ということで♪」

成美は言い忘れた説明を言った後、即座に去って行った。

「ちょ、待ちぃや（怒）！」

当然怒り出す友子。

「友子さん、和夢さん、やりましょう。」

明子が言い出す。

「せやけど・・・！」

「このままじゃ、ネオプラネットに勝てないよ。」

静香が言い出す。

「仕方ないね・・・」

「やるしかあらへんな・・・」

～～～～～～～～～～～～

「あの博士、どうして私達にお手伝いを？」

麗華は成美に質問する。

「この図を見て。」

成美は映像を見せる。

「一昨日話したように、スペシャルプリキュアは3つのパワーストーンの力を持ち合わせているの。　胸の方は『キュアピュータ』が持っているトパーズ達のパワーストーンだけど、問題なのは両肩の方。」

成美は詳しく説明する。

「つまり、トパーズ、ガーネット、オパールに6人の内2人と組まないといけないの。　とは言っても、6人の息を合わさないと変身できないけどね。」

「真理奈達のパートナーを2人選んでほしいということですか?」

「そう、それがあなた達が手伝ってほしいことなの。　じゃ、よろしくね。」

成美は遥と麗華と千鶴に仕事を与え、自分の持ち場に入る。

## プリキュア・サポートカード集

プリキュア・サポートカード
・チェンジ・プリキュア
宝石を描いたカード。
ジュエルマスタープリキュアに変身する時に必要なカード。

・エンジェルウイング
天使の羽を描いたカード。
背中に天使の羽が現れ、飛行することが出来る。

・パワーアップ
赤い光の玉を描いたカード。
通常技の威力を倍加する。

・ヒーリングパワープラス
緑色の光の玉を描いたカード。
技に浄化能力を加える。

・プリキュア・パーフェクトハーモニー
金色のハートのト音記号を描いたカード。
メロディ、リズムがいる時に発動でき、合体技が使える。

・サモン・プリキュア５
『５ＧＯＧＯ』以前の姿をしたプリキュア５を描いたカード。
ドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、アクアがいるときに発動でき、初期のプリキュア５を召喚する。

・ジュエルタクト

フォルティシモ記号を描いたカード。
『ジュエルタクト』を出せる。

・プリキュア・ハピネスボール
クローバーが描かれたボールを描いたカード。
ポジションはカクレンシュート。

・サモン・ダークプリキュア５
ダークプリキュア５を描いたカード。
ダークプリキュア５を召喚できる。

・レインボーブレス
『レインボーブレス』を描いたカード。
ブラックとホワイトがいる時に発動でき、ブラックとホワイトに『レインボーブレス』を、ガーネットとオパールに『スパークルブレス』を装備する。

・チェンジ・ジュエルスワン
白鳥を描いたカード。
スプロンをジュエルスワンに変身する。

・チェンジ・ジュエルバタフライ
蝶を描いたカード。
フルップをジュエルバタフライに変身する。

・チェンジ・ジュエルキャット
猫を描いたカード。
ニポルンをジュエルキャットに変身する。

・クレヤボヤンスプラス

メガネを描いたカード。
透視能力を加える。

・チェンジ・ミラクルプリキュア
虹色の風を纏った黄金の宝石を描いたカード。
ジュエルマスター・ミラクルプリキュアに変身できる。

・チェンジ・スーパーシルエット
ハートキャッチプリキュア・スーパーシルエットを描いたカード。
ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトがいる時に発動でき、スーパーシルエットに変身できる。

・チェンジ・ブライティブルーム&ウィンディイーグレット
ブライティブルームとウィンディイーグレットを描いたカード。
ブルーム（ブライト）とイーグレット（ウィンディ）がいる時に発動でき、ブライティブルームとウィンディイーグレットに変身できる。

・ファイヤーアタック
炎を描いたカード。
火の玉を出したり、火の刃を出したりすることが出来る。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1547t/

仮面ライダーxスーパー戦隊xプリキュア

2011年11月24日23時07分発行